斎宮跡発掘調査報告Ⅱ

柳原区画の調査

遺構・遺構総括編

2014

斎宮歴史博物館

斎宮跡発掘調査報告Ⅱ

柳原区画の調査

遺構・遺構総括編

2014

斎宮歴史博物館

第 152 次調査航空写真

SB9800 検出状況（第 152 次調査）

古代伊勢道検出状況（第 158 次調査）

はじめに

昭和45年度にはじまった史跡斎宮跡の発掘調査も44年目となり、また、昭和54年に国の史跡に指定されてから35年の月日がたちました。

この間、斎宮歴史博物館の開館、いつきのみや歴史体験館や斎宮跡歴史ロマン広場の整備といった三重県の整備事業や、地元明和町による国史跡斎宮跡無料休憩所の整備など、我が国唯一の価値を持つ史跡斎宮跡に県民の皆さんが学び、親しんでいただけるよう施設や環境の整備が進められてきました。

さらに、平成24年6月には、明和町において「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律」、いわゆる「歴史まちづくり法」に基づく「明和町歴史的風致維持向上計画」が国から認定され、斎宮跡というかけがえのない文化遺産を地域のまちづくりの核として活用していくという、次のステップに移ろうとしています。

こうしたなか三重県は、史跡斎宮跡のこれまでの整備事業を踏まえ、より高い相乗効果があげられるよう、史跡東部の方格地割内で「史跡斎宮跡東部整備事業」の中心事業として、柳原区画一体における発掘調査で明らかとなった建物の実物大復元も含めた史跡公園整備事業に平成22年度から着手しています。

今回刊行します『斎宮跡発掘調査報告Ⅱ』は、この史跡整備事業にあたり実施してきました柳原区画内の発掘調査成果をまとめたものです。柳原区画の発掘調査では、斎宮跡のこれまでの発掘調査では見られなかった四面庇付建物が、幾度もの建替えを経ながら存続し続け、この一画が「寮庁」と推定されるなど、平安時代の斎宮跡を理解する上で極めて大きな成果をあげることができました。今後はこの成果を活かした史跡整備事業が進展し、ひいては県民のみなさまの史跡斎宮跡への理解と関心が一層高まることを切に願っております。

最後になりましたが、本報告書の刊行にあたりましては、斎宮跡の調査研究にご指導を賜りました斎宮跡調査研究指導委員の諸先生方をはじめ、文化庁、明和町などの関係機関や、日ごろ斎宮跡の発掘調査にご理解とご協力をいただいております地元関係者のみなさま方に厚く御礼申し上げます。

平成26年3月

斎宮歴史博物館
館長　池　山　マ　チ

凡　　例

1　本書は、三重県教育委員会が昭和43年度から平成19年度まで、三重県が平成20年度から平成24年度まで文化庁からの国庫補助等を受けて実施した史跡斎宮跡の発掘調査のうち、平成22年度から実施している史跡斎宮跡東部整備事業の主たる事業地であり方格地割方形区画のひとつである柳原区画の調査成果のうち、検出した遺構とその考察をまとめたものである。

2　斎宮跡の方格地割における各区画の名称については、現在の小字名に基づく名称を採用している。

3　遺構の位置表示については、過去の調査との整合性をとるため、国土調査法に基づく日本測地系（旧国土座標）の第Ⅵ座標系を基準とし、方位は旧国土座標による座標北で示している。

4　遺構の時期区分の指標となる出土土器の分類と時期については、「斎宮跡の土器」（『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ』斎宮歴史博物館 2001）を基本とし、一部最新の編年研究の成果を用いている。

5　遺構表示記号は次のとおりである。

SA：塀・柵列　SB：掘立柱建物　SD：溝　SE：井戸　SF：道路
SH：竪穴住居・建物　SK：土坑　SX：墓・埋納遺構

6　遺物の漢字表記については、材質の違いによる漢字の偏に必ずしも従うことなく、「わん」は「椀」、「つき」は「杯」を用いている。ただし参考文献からの引用の場合にはこの限りではない。

7　遺構図は1/200を基本とし、詳細図には1/40や1/80を、区画全体を示す場合は1/500の縮尺図を用いた。

目　次

第１章　序　言
　第１節　柳原区画の概要 ………… 1
　第２節　調査体制 ………… 5
　第３節　報告書の刊行 ………… 8
第２章　柳原区画と周辺の地形
　第１節　斎宮における方格地割の概要 ………… 10
　第２節　柳原区画の概要 ………… 12
第３章　柳原区画の遺構
　第１節　はじめに ………… 15
　第２節　区画道路と区画の形成 ………… 15
　第３節　古代伊勢道 ………… 23
　第４節　第10次調査区の遺構 ………… 28
　第５節　第20次・第55次調査区の遺構 ………… 34
　第６節　第28次調査区の遺構 ………… 45
　第７節　第8－9次・第8－10次・第143次・第153次・第165－1次調査区の遺構 ………… 51
　第８節　第152次調査区の遺構 ………… 71
　第９節　第157次調査区の遺構 ………… 88
　第10節　第159次調査区の遺構 ………… 94
　第11節　第167次調査区の遺構 ………… 101
第４章　柳原区画の検討
　第１節　斎宮跡の方格地割と柳原区画の変遷 ………… 126
　第２節　四面庇付建物の検討 ………… 145
　第３節　四面庇付建物を中心とした建物配置の成立背景 ………… 149
　第４節　平安時代斎宮における柳原区画の意義～まとめにかえて～ ………… 155
附編　牛葉東区画の土塁状遺構について ………… 261

表目次

第1表　斎宮跡発掘調査組織一覧表 ………… 5
第2表　斎宮跡調査研究指導委員会委員一覧 ………… 7
第3表　斎宮跡の土器編年 ………… 16
第4表　柳原区画内の古代伊勢道の計測値 ………… 26
第5表　柳原区画内掘立柱建物一覧 ………… 106
第6表　柳原区画内柵列・塀一覧 ………… 114
第7表　柳原区画内検出遺構（井戸・溝・土坑）一覧 ………… 115
第8表　斎宮跡の多面庇付建物一覧 ………… 145
第9表　文献に現れる斎宮の建物名称 ………… 146
第10表　国司館の四面庇付建物 ………… 148
第11表　第174－11次調査遺物観察表 ………… 261

挿　図　目　次

第1図　史跡斎宮跡の全体像と柳原区画の位置 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
第2図　斎宮跡位置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
第3図　柳原区画及び周辺の調査区位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
第4図　斎宮跡方格地割プラン復元案・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
第5図　斎宮跡方格地割と微地形 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
第6図　柳原区画の微地形と標準土層・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
第7図　区画道路(北辺道路・南辺道路)遺構図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18
第8図　区画道路(西辺道路・東辺道路)遺構図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
第9図　区画道路の埋土断面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21
第10図　柳原区画の区画道路の計画 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
第11図　古代伊勢道遺構図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
第12図　SB1050遺構平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35
第13図　SB1080柱穴断面図・平面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35
第14図　SB1080遺構平面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37
第15図　第20次・第153次調査区のⅢ－1期建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 40
第16図　第20次・第153次調査区のⅢ－2期建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 41
第17図　第20次・第153次調査区のⅢ－3～4期建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 43
第18図　SB0263遺構平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 52
第19図　SB9003遺構平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 55
第20図　第143次～第153次調査区のⅢ－1期建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 61
第21図　第143次～第153次調査区のⅢ－2期建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 63
第22図　第143次～第153次調査区のⅢ－3～4期建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 65
第23図　SK9026遺構平面図・立面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 67
第24図　SK9028遺構平面図・立面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 68
第25図　SB9800遺構平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 76
第26図　SK9785・9786遺構平面図・土層図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 79
第27図　SB9766遺構平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 81
第28図　SB9750・9751・9752・9753遺構平面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 84
第29図　SB9900遺構平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 89
第30図　SK9941遺構平面図・断面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 89
第31図　第10次～第159次調査区のⅢ―1期建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 97
第32図　第10次～第159次調査区のⅢ―2期建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 97
第33図　第10次～第159次調査区のⅢ―3～4期建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 100
第34図　柳原区画の建物相互関係図(A期～C期)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 128
第35図　柳原区画の建物相互関係図(D期～G期)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 129
第36図　柳原区画B期の時期決定 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 130
第37図　柳原区画の建物変遷(A－1期)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 131
第38図　柳原区画の建物変遷(A－2期)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 132
第39図　柳原区画の建物変遷(B期)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 134

第40図　柳原区画の建物変遷(C 期)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 135
第41図　柳原区画の建物変遷(D 期)　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 136
第42図　柳原区画の建物変遷(E －1期)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 138
第43図　柳原区画の建物変遷(E －2期)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 139
第44図　平安末期の勅使ルート(試案)　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 140
第45図　柳原区画の建物変遷(F 期)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 141
第46図　柳原区画の建物変遷(G 期)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 142
第47図　遺構図版索引図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 159
第48図　柳原区画遺構図１(第157次・第166次)　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 160
第49図　柳原区画遺構図２(第157次・第166次)　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 161
第50図　柳原区画遺構図３(第8－10次・第152次・第157次・第166次)・・・・・・・・・・・・ 162
第51図　柳原区画遺構図４(第10次・第152次・第156次・第166次・第168次)・・・・・・・・ 163
第52図　柳原区画遺構図５(第10次・第25－6次)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 164
第53図　柳原区画遺構図６(第28次・第157次・第158次)　・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 165
第54図　柳原区画遺構図７(第28次・第152次・第157次)　・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 166
第55図　柳原区画遺構図８(第152次・第157次)　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 167
第56図　柳原区画遺構図９(第10次・第152次・第167次)　・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 168
第57図　柳原区画遺構図10（第10次・第162－3次）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 169
第58図　柳原区画遺構図11（第20次・第28次・第55次・第158次）・・・・・・・・・・・・・・・ 170
第59図　柳原区画遺構図12（第20次・第28次・第152次・第153次）　・・・・・・・・・・・・・ 171
第60図　柳原区画遺構図13
（第8－9次・第143次・第152次・第153次・第165－1次）　・・・・・・・・・・・・・・・ 172
第61図　柳原区画遺構図14
（第8－9次・第10次・第143次・第152次・第159次・第165－1次）・・・・・・・・・・ 173
第62図　柳原区画遺構図15（第10次・第13－8・9次）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 174
第63図　柳原区画遺構図16（第20次・第55次・第103次・第164次）　・・・・・・・・・・・・・ 175
第64図　柳原区画遺構図17（第20次・第103次・第108次・第153次）・・・・・・・・・・・・・・ 176
第65図　柳原区画遺構図18（第8－9次・第108次・第153次・第170－1次・第174－11次）・・ 177
第66図　柳原区画遺構図19（第8－9次・第10次・第143次・第153次・第159次）　・・・・・・ 178
第67図　柳原区画遺構図20（第10次・第106－2次）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 179
第68図　第174－11次調査区位置図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 261
第69図　第174－11次調査遺物実測図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 261
第70図　第174－11次調査遺構平面図・土層断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 262
第71図　土塁周辺部地形測量図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 262
第72図　土塁状遺構土層断面図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 264
第73図　牛葉東区画主要遺構図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 264

巻頭写真

PL 1　第152次調査航空写真
PL 2　上：SB9800検出状況(第152次調査)
下：古代伊勢道検出状況(第158次調査)

写真図版目次

PL 1　上：第8－9次調査区全景（東から）　下：第8－9次調査区全景（西から）
PL 2　上：第8－9・10次調査　SB0260（東から）　下：第8－9次調査　SB0263（東から）
PL 3　上：第8－9次調査　SB0263（北から）　下：第8－10次調査区全景（北から）
PL 4　上：第10次調査区全景（北から）　下：第10次調査　SB0560付近（南から）
PL 5　上：第10次調査　SD0530・0535（北から）　下：第10次調査　SB0540（南から）
PL 6　上：第10次調査　SK0541付近（北から）
　　下：第10次調査　SB0543（北から）
PL 7　上：第10次調査　SB0544付近（北から）　下：第10次調査　SB0545（北から）
PL 8　上：第10次調査　SK0555・0556・0559（北から）
　　下：第10次調査　SK0556・0557・SB0558（北から）
PL 9　上：第10次調査　SK0563以北（南から）　下：第10次調査　SK0563以南（北から）
PL10　上：第10次調査　SB10563（北から）　下：第10次調査　SB0566・0567（北から）
PL11　上：第10次調査　SE0570以南（北から）　下：第10次調査 SK0573以北（南から）
PL12　上：第20次調査区全景（北から）
　　下：第20次調査　調査区南西部掘立柱建物群（西から）
PL13　上：第20次調査　SB0321・1075（西から）　下：第20次調査　SB0321（西から）
PL14　上：第20次調査　SB1040（南から）　下：第20次調査　SB1046・SK1045（南から）
PL15　上：第20次調査　SB1051（西から）　下：第20次調査　SB1075（南から）
PL16　上：第20次調査　SB1080（西から）
　　下：第20次調査　SB1050・1080・1086（北から）
PL17　上：第28次調査区全景（西から）　下：第28次調査区全景（北から）
PL18　上：第28次調査　調査区西半（南から）
　　下：第28次調査　調査区東半（南から）
PL19　上：第28次調査　調査区西部（北から）
　　下：第28次調査　SB1306・1307（北から）
PL20　上：第28次調査　SE1295付近（南東から）
　　下：第28次調査　SE1295（南から）
PL21　上：第28次調査　SB1315・1320ほか（西から）
　　下：第28次調査　SB1315・1320（西から）
PL22　上：第28次調査　SB1315・1318・1322（東から）
　　下：第28次調査　SB1326・1327（東から）
PL23　上：第28次調査　SB1340（東から）　下：第28次調査　SB1330（東から）
PL24　上：第28次調査　SB1333・1334・SK1345（東から）
　　下：第28次調査　SD1332・SB1393（東から）
PL25　上：第28次調査　SB1360（北から）　下：第28次調査　SB1077・1390（北から）
PL26　上：第55次調査東調査区全景（南から）　下：第55次調査　SB1059（東から）
PL27　上：第55次調査　東調査区北半（南東から）
　　下：第55次調査　東調査区南半（北東から）
PL28　上：第103次調査　柳原区画南西隅交差点（西から）

下：第103次調査　SD7003（南から）
PL29　上：第143次調査区全景(南から)　下：第143次調査区全景(西から)
PL30　上：第143次調査　古代伊勢道および調査区北半(東から)
下：第143次調査　SB9003（北から）
PL31　上：第143次調査　調査区西半(南から)　下：第143次調査　SH9001（北から）
PL32　上：第143次調査　SH9001（南から）　下：第143次調査　SK9026（南東から）
PL33　上：第143次調査　SE9014（東から）　下：第152次調査区全景(北から)
PL34　上：第152次調査区全景(西から)　下：第152次調査 調査区北半(東から)
PL35　上：第152次調査　調査区南半(北から)
下：第152次調査　調査区南半(北から)
PL36　上：第152次調査　調査区南半(西から)
下：第152次調査　SB9750・9800（北から）
PL37　上：第152次調査　SB9672（西から）　下：第152次調査　SB9702（東から）
PL38　上：第152次調査　SB9687・9688（東から）
下：第152次調査　SB9706・9707（東から）
PL39　上：第152次調査　SB9706・9707（北から）
下：第152次調査　SB9709・9710（北から）
PL40　上：第152次調査　SB9735（西から）　下：第152次調査　SB9739・9740（北から）
PL41　上：第152次調査　SB9779（西から）
下：第152次調査　SB9764・9765（北から）
PL42　上：第152次調査　SB9750付近(西から)
下：第152次調査　SB9745・9774 ～ 9776（北から）
PL43　上：第152次調査　SB9782・9783（北から）
下：第152次調査　SB9007（北から）
PL44　上：第152次調査　SB9800（西から）　下：第152次調査　SB9800（西から）
PL45　上：第152次調査　SB9800（北から）　下：第152次調査　SD1326（西から）
PL46　上：第152次調査　SE0276（西から）　下：第152次調査　SK9785（北から）
PL47　上：第153次調査区全景(北から)　下：第153次調査区全景(東から)
PL48　上：第153次調査　西調査区全景(北東から)
下：第153次調査　西調査区全景(北から)
PL49　上：第153次調査　SD1395・6802（西から）
下：第153次調査　西調査区中央部(東から)
PL50　上：第153次調査　SB1080（北から）
下：第153次調査　SB1080 第20次調査発掘の身舎柱穴(東から)
PL51　上：第153次調査　SB9817（北から）
下：第153次調査　SK0323・9827（北から）
PL52　上：第153次調査 SE9835（北から）　下：第153次調査　東調査区全景(東から)
PL53　上：第153次調査　東調査区中央部(北から)
下：第153次調査　SB0260（西から）
PL54　上：第153次調査　SD9044（北から）　下：第153次調査　SK9852（東から）
PL55　上：第156次調査区全景(南から)　下：第156次調査　SD9871（西から）
PL56　上：第157次調査区全景(南から)　下：第157次調査区全景(西から)

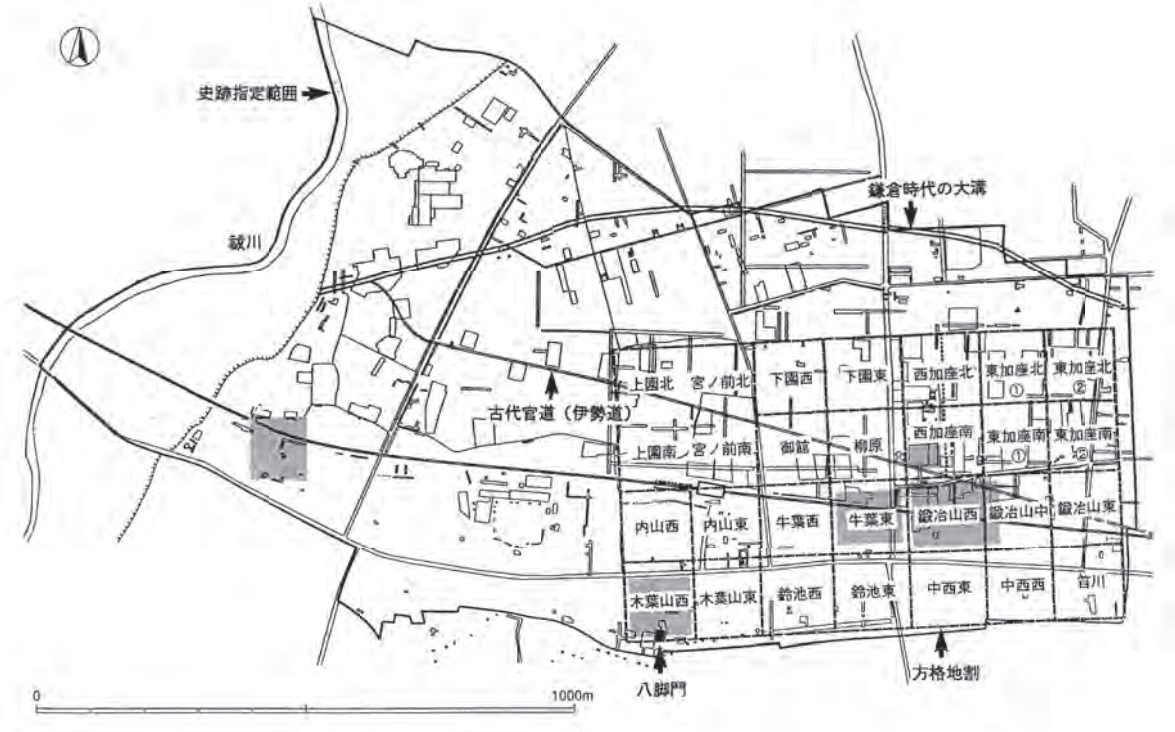
PL57　上：第157次調査　調査区西端（南から）
　　下：第157次調査　SB9890（東から）
PL58　上：第157次調査　SB9900（北から）　　下：第157次調査　SB9920（西から）
PL59　上：第157次調査　SB9873・9882・9920（東から）
　　下：第157次調査　SK9941検出状況（西から）
PL60　上：第157次調査　SB9910（東から）　　下：第157次調査　SB9880（東から）
PL61　上：第158次調査　古代伊勢道（東から）
　　下：第158・159次調査区遠景（東南東から）
PL62　上：第159次調査区北半全景（北から）
　　下：第159次調査　SB10060・10061（東から）
PL63　上：第159次調査　SB10062付近（南西から）
　　下：第159次調査　古代伊勢道・SB9005（北西から）
PL64　上：第159次調査　SB9005・10064・10065（東から）
　　下：第159次調査区南半全景（北から）
PL65　上：第159次調査　SD10094・10095（北から）
　　下：第159次調査　調査区南端部（南から）
PL66　上：第159次調査　SB10083付近（南から）
　　下：第159次調査　SD6802付近（西から）
PL67　上：第164次調査区全景（南から）　　下：第164次調査　SD2844（東から）
PL68　上：第165-1次調査区全景（西から）　　下：第165-1次調査　調査区東部（東から）
PL69　上：第165-2次調査区全景（南から）　　下：第166次調査　SD10141（北西から）
PL70　上：第167次調査区全景（北から）　　下：第167次調査区全景（南南西から）
PL71　上：第167次調査　SB10154（西から）　　下：第167次調査　SB9709（東から）
PL72　上：第167次調査　SB10157（北から）　　下：第167次調査　SB10165付近（南から）
PL73　上：第167次調査　SB10164・10165付近（西から）
　　下：第167次調査　SB10175付近（南から）
PL74　上：第167次調査　SB10175（東から）　　下：第167次調査　SE10210（南から）
PL75　上：第168次調査　SD0529（西から）　　下：第168次調査　SD10253（東から）
PL76　上：第170-1次調査区全景（北から）　　下：第170-1次調査　SD7252（南西から）
附編
PL77　上：第174-11次調査土塁遠景（西から）　　下：第174-11次調査区全景（北東から）
PL78　上左：第174-11次調査区全景（北から）　　上右：第174-11次調査区全景（南から）
　　下：第174-11次調査　土塁部分（東から）

第1章　序　　言

第１節　柳原区画の概要

史跡斎宮跡の発掘調査は、調査が開始された昭和45年度から数えて平成25年度には45周年を迎える。その間に蓄積された調査成果は多々あげられるが、なかでも特筆される成果は、史跡中央部から東部にかけて、整然とした都市計画とも呼ぶべき碁盤目状の方格地割が確認されたことである。このことについては、既に発掘調査報告書や研究紀要等のなかで折にふれ報告されているが、この方格地割の及ぶ範囲や最盛期の斎宮寮の全体イメージが計画発掘調査を開始してから早い段階で予見できたことは、その後の発掘調査の進展に大きく寄与してきた[(1)]。光仁朝から桓武朝にかけて整備されたこの方格地割は、一辺約120m（400尺）四方の方形区画の集積と区画間を走る幅約12m～14mの道路により構成された地割で、桓武朝のある時期、最大で東西7列、南北4列の区画から成っていた。柳原区画は、この内、東から4列目、北から2列目の区画に相当する。なお、柳原という区画の呼称は、当該地を代表する小字名から取ったもので、平成6年度以降、方格地割内の各区画の呼称については、便宜的に小字名を充てることとしてきた。従って方形区画と小字界とは完全に一致していないので、厳密には、柳原区画は字柳原ほか字西加座及び御館の一部を含んでいる。

さて、柳原区画における調査は、昭和48年度から3ヵ年計画で始まった斎宮跡範囲確認調査の一環として、昭和49年度に幅4mの試掘トレンチを東西方向（第8－9次調査：Ｎトレンチ）と南北方向（第8－10次調査：Ｏトレンチ）に設定し実施したのが最初である。その結果、比較的大型の柱掘形を有する平安時代の掘立柱建物をはじめ、土坑、道路遺構、墨書土器、緑釉陶器、石帯、



第１図　史跡斎宮跡の全体像と柳原区画の位置（網目：堀立柱塀が巡る区画）

第２図　斎宮跡位置図（1：50,000）国土地理院発行 1/25,000「松阪」（H20）、明野（H19）より

円面硯などが確認され、確実に斎宮跡の範囲内であることが判明した。また、翌年から始まった柳原区画の東縁部を南北に縦断する広域市町村圏道路整備に伴う事前調査(第10次調査)では、平安時代前期の溝・道路跡、平安後期～末期の掘立柱建物、平安時代各期の土坑などを確認したほか、平安時代後期～末期の溝からは、廃棄された多量の土師器皿のなかに、ひらがなや人面を墨書したものが認められ、斎宮跡の中でも重要な場所に近いことが想定された。

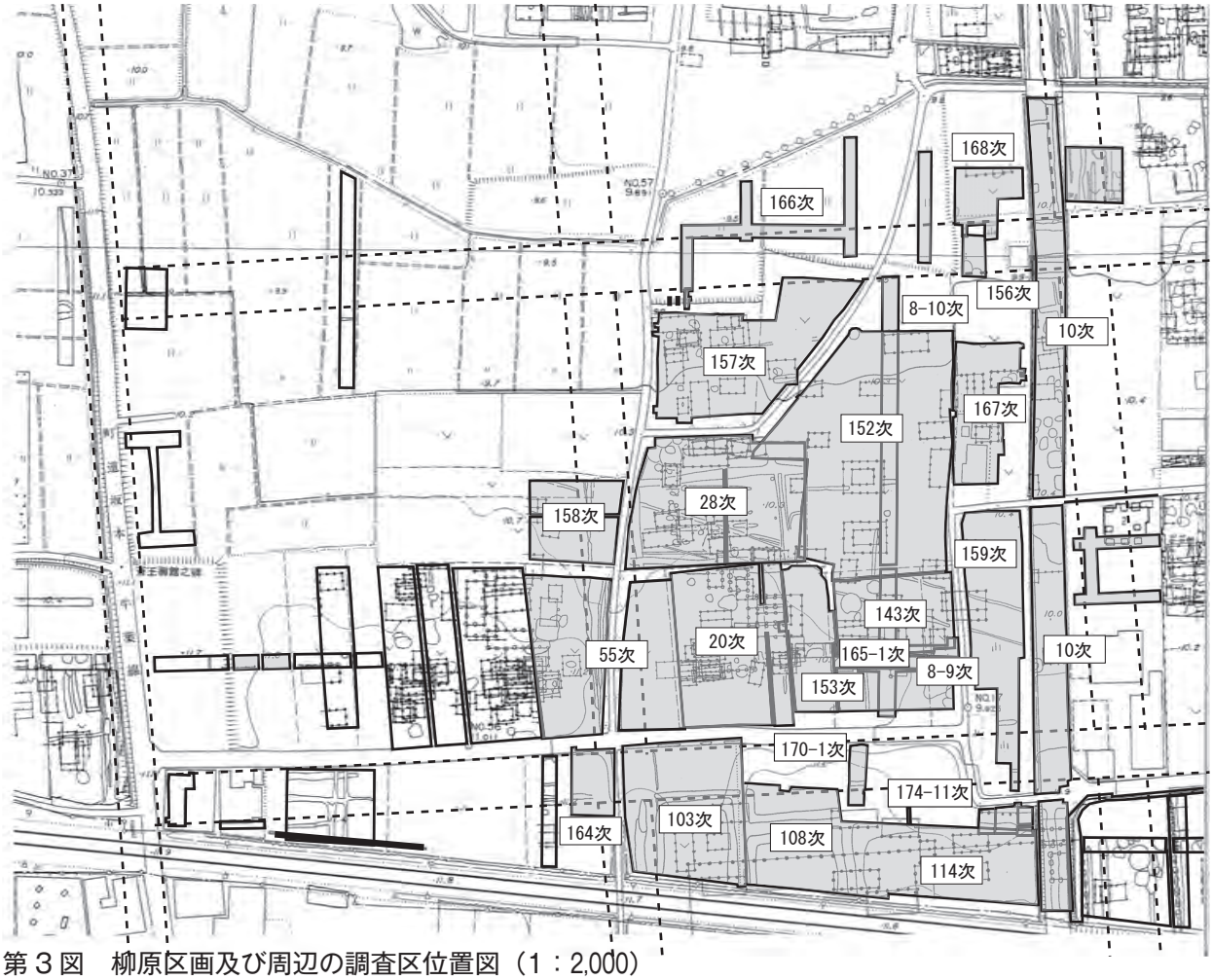
昭和53年度からは計画的な面的発掘調査が始まり、最初にメスが入ったのも範囲確認調査で遺構密度の高かったこの柳原区画とその西隣の御館地区であった。柳原区画南西部で実施した第20次調査では、平安時代前期の掘立柱建物8棟･土坑14基と平安時代後期の掘立柱建物24棟･土坑8基･溝2条などが確認され、なかでも平安時代前期に属する掘立柱建物は、柱掘形が0.8m～1.4mほどもある大型の方形掘形を呈し、北と南に庇をもつSB1080は、当該区の中心的建物と考えられた。出土遺物では、多量の緑釉陶器のほか、灰釉陶器風字硯や墨書土器「泉」などが注目された。翌年度は第20次調査区の北側で第28次調査を、昭和59年度には第19次調査区と第20次調査区の間隙をうめる調査として第55次調査を実施し、遺構状況を確認した。その結果、第28次調査では、平安時代の掘立柱建物29棟のうち、ほぼ同一場所で同規模程度のものが重複する建物群が複数箇所で認められたことにより、区画内ではある一定の規則的な建物配置計画があったことを窺うことができた。また、E15°Sの方向で直線的に並走する2条の溝は、平成2年度に至り、都と伊勢神宮･志摩国とを結ぶ主要幹線道であった古代伊勢道の痕跡と判明した[(2)]。一方、第55次調査では、柳原区画南西部が近世以降の土取りにより、遺構がほとんど残っていないことが判明したほか、想定された御館区画と柳原区画の間を走る南北道路及び側溝は、中世以降、何度も同一箇所で掘削されているため、明確な区画溝を確認するまでには至らなかった。

平成5年度、6年度、8年度は、柳原区画の南に隣接する牛葉東区画北部における遺構確認を主目的として、第103次、108次、114次調査が実施された。当該区は明治44年に史跡西部の旧竹神社地から合祀された式内社竹神社が鎮座する敷地であり、地元では長らく神聖な空閑地として特別視されてきたエリアでもある。調査の結果、竹神社地を取り囲むように設置された平安時代初期の大型掘立柱塀(柱間10尺)や区画道路の交差点の状況が明らかとなったほか、平安時代後期には、方形区画内が幅3mほどの溝で区画される複数の小区画で構成されていることなどが判明し、牛葉東区画における遺構変遷や性格が明らかとなった。即ち、当該区画は、東側に隣接する鍛冶山西区画で斎王の居住空間とされる内院が斎宮Ⅰ－4期(8世紀後葉)に造営されてまもなく、Ⅱ－1期(8世紀末～9世紀初頭)には、掘立柱塀による外柵が設置されていることから、両区画が一体的に内院機能を果たしていたものとみられている。その後、鍛冶山西区画ではⅡ－4期(10世紀前半)以降、外周の掘立柱塀が消失するとともに、内院機能が急速に衰退し、Ⅲ－1期(10世紀後半)には内院の諸施設が廃絶するなか、牛葉東区画では、方形区画内が溝による複数の小区画に細分され、敷地の利用形態が大きく再構成されるものの、少なくとも斎宮Ⅲ－2期(11世紀前半)までは依然として建物群が存続していたことが確認されていることから、Ⅲ－1期以降は当該区に内院機能が集約され、斎宮が廃絶するまで内院地区として中枢機能を果たし続けていたとみられている。このように牛葉東区画の性格が明らかとなるにつれ、その北側に隣接する柳原区画の性格や歴史的位置づけに関しても、これまで以上にその重要性が高まった。

その後、柳原区画における調査は、史跡中央部での史跡整備と相俟って鍛冶山西区画・西加座

区画の実態解明や史跡西部において平成14年度から5ヵ年計画で始まった初期斎宮跡の範囲確認調査に重点が置かれたためしばらく中断したが、平成16年度に柳原区画中央やや南寄りで第143次調査が実施された。この調査では、方格地割造営にかかる工房跡とみられる竪穴建物が確認されたことが注目され、当該遺構から出土した斎宮Ⅱ－1期相当の多量の土師器杯・皿・椀のほか、土錘、鉄釘、フィゴ羽口、炉壁塊などの出土遺物は、方格地割造営直後に一括廃棄されたものとみられている。また、この竪穴遺構は古代伊勢道上に位置していることから、古道を廃止して方格地割の造営が始まった年代の一端も明らかにすることができた。このほか、掘立柱建物のうち、当該区画の主要な建物の一つとみられる東に庇をもつ5間×3間の南北棟建物 SB9003もこの調査で確認されている。

このように史跡東部地域における遺構状況が明らかになるにつれて、地元ではかねてから念願であった史跡の活用の核となる往時の建物の実大復元を望む声が高まる一方、県では、平成18年度に史跡整備の在り方検討会を立ち上げ、平成19年3月に『史跡斎宮跡　史跡整備の在り方検討報告』をまとめた。そのなかで『史跡斎宮跡整備基本構想』の「遺構の学術的復元･整備ゾーン」に位置する柳原区画を中心とした史跡東部の整備を、平成25年の伊勢神宮式年遷宮頃までに完成させることが望ましいとの当面の整備方針が示された。これを受けて県は、平成19年度から3ヵ年計画で柳原区画の実態解明調査を重点的に進めることとなった。平成19年度は、柳原区画のほぼ中央部で第152次調査を、その南側で第153次調査を、北東部で第156次調査を実施した。



第３図　柳原区画及び周辺の調査区位置図（1：2,000）

調査結果の詳細は、次章以下で述べることとするが、区画中央部で確認された5間×4間の四面庇付建物は、9世紀初頭から約200年以上の間に少なくとも5回にわたって建替え続けられた建物で、当該区画の性格を位置づける上で重要な中心建物と推察されるに至った。また、第20次調査で確認されていた大型掘立柱建物 SB1080は、特異な三面庇付建物であることも確定した。平成20年度は、柳原区画の北西部と南東部で第157次調査、第159次(北)を実施したほか、区画間南北道路と側溝を確認する目的で第158次調査を実施した。引き続き平成21年度は、第159次(南)調査を実施したほか、区画内及び周縁部で第163次～ 166次調査を実施し、区画道路の確認や遺構状況の補足的な確認を行った。この内、柳原区画北側に隣接する現水田部における遺構の残存状況の確認を目的とした第166次調査トレンチ調査では、かろうじて区画北側の東西区画道の南側溝の痕跡を確認できたが、遺構面がほぼ全面にわたり、近世以降の瓦粘土採掘により削平されていることが判明した。平成22年度は、第167次・168次調査を実施し、柳原区画内で唯一未掘であった中央東縁部の遺構状況を確認するとともに、隣接する下園東区画南東部の状況を確認した。

以上のように、柳原区画では昭和49年度以来断続的ではあったが、延べ10数次におよぶ発掘調査により、区画全体の約77％の発掘調査が完了した。このように斎宮寮の一区画の実態がほぼ全面的に明らかにされたのは初めてのことであり、今後の斎宮寮研究の進展に期待が持たれる。

第２節　調査体制

柳原区画及び整備事業地に含まれる周辺部の発掘調査は、前項でも触れたように昭和49年の史跡範囲確認調査以来現在に至るまで40年以上が経過。この間、調査組織・体制は節目を迎えるたびに変わってきた。当初は三重県教育委員会が調査主体となり、同事務局文化課職員が調査を担当していたが、昭和54年度に史跡斎宮跡の調査・研究・保存・普及の基地として現地に三重県斎宮跡調査事務所が設置されたことに伴い、調査組織が整備され、所長以下5名の斎宮跡調査専任の担当職員が配置された。また平成元年度には斎宮歴史博物館が設置され、館長以下、総務課、調査課、学芸課から成る本格的な組織が整備された。これにより、これまでの発掘調査主体の業務に加えて、展示・教育普及部門や文献史学からのアプローチ研究が強化され、発掘調査の分析は多様な分野から検討されることとなった。その後、行政機構の見直しに伴う組織の改編等により、課の統廃合や名称変更等、紆余曲折のうえ、現在の総務課、調査研究課、学芸普及課の3課体制となった。なお、斎宮歴史博物館は平成20年度に共管という形で教育委員会から知事部局へと所管替えとなり、生活・文化部、平成24年度からは環境生活部に属することとなった。

柳原区画及び周辺区の発掘調査に関わった主たる職員は、以下のとおりである。

年度	調査次数	組　　織	職　　員
昭和 49	8 － 9 次	三重県教育委員会 事務局文化課	課長：井上武弘　文化財係長：片岡良昭 小玉道明・下村登良男・伊藤久嗣・○山澤義貴・伊藤克幸・○谷本鋭次・藤原　寛・吉村利男・吉水康夫
	8 － 10 次	〃	課長：井上武弘　文化財係長：片岡良昭 小玉道明・下村登良男・伊藤久嗣・ ○山澤義貴・伊藤克幸・○谷本鋭次・藤原　寛・吉村利男・吉水康夫
50	10 次	〃	課長：井上武弘　文化財係長：片岡良昭 小玉道明・下村登良男・伊藤久嗣・○山澤義貴・伊藤克幸・○谷本鋭次・藤原　寛・吉村利男・吉水康夫

年度	調査次数	組　　織	職　　員
51	10 次	三重県教育委員会 事務局文化課	課長：井上武弘　文化財係長：片岡良昭 小玉道明・伊藤久嗣・○山澤義貴・伊藤克幸・○谷本鋭次・藤原　寛・ 吉村利男・吉水康夫
53	20 次	〃	課長：長井　学　文化財係長：小久保秀和 小玉道明・山澤義貴・○大西素行・吉水康夫・田中喜久雄・倉田直純
54	28 次	三重県斎宮跡調査 事務所	所長：竹林日出夫 山澤義貴・○大西素行・吉水康夫・倉田直純
57	47 次	〃	所長：佐々木宣明 山澤義貴・谷本鋭次・吉水康夫・○倉田直純
59	55 次	〃	所長：佐々木宣明 山澤義貴・○谷本鋭次・福村直人・倉田直純
平成 5	103 次	斎宮歴史博物館	館長：久保富子 調査研究課：吉水康夫・野原宏司・○大川勝宏
6	108 次	〃	館長：川村政敬 調査研究課：吉水康夫・野原宏司・○大川勝宏・赤岩　操
8	114 次	〃	館長：奥村敏夫 調査研究課：駒田利治・野原宏司・○上村安生・赤岩　操
11	128 － 5 次	〃	館長：大井輿生 調査研究担当：○駒田利治・上村安生・大川勝宏・西村美幸
16	143 次	〃	館長：吉村裕之 調査研究Ｇ：新田　洋・○竹内英昭・小濵　学・柴山圭子
19	152 次	〃	館長：花井　勝 調査研究課：倉田直純・泉　雄二・○大川勝宏・水橋公恵
	153 次	〃	館長：花井　勝 調査研究課：倉田直純・泉　雄二・○大川勝宏・○水橋公恵
	156 次	〃	館長：花井　勝 調査研究課：倉田直純・泉　雄二・○大川勝宏・水橋公恵
20	157 次	〃	館長：瀧上昭憲 調査研究課：倉田直純・大川勝宏・○新名　強・角正芳浩
	158 次	〃	館長：瀧上昭憲 調査研究課：倉田直純・大川勝宏・○新名　強・角正芳浩
	159 次（北）	〃	館長：瀧上昭憲 調査研究課：倉田直純・大川勝宏・新名　強・○角正芳浩
21	159 次（南）	〃	館長：瀧上昭憲 調査研究課：倉田直純・大川勝宏・新名　強・○角正芳浩
	163 次	〃	館長：瀧上昭憲 調査研究課：倉田直純・大川勝宏・新名　強・○角正芳浩
	164 次	〃	館長：瀧上昭憲 調査研究課：倉田直純・大川勝宏・新名　強・○角正芳浩
	165 － 1・2 次	〃	館長：瀧上昭憲 調査研究課：倉田直純・大川勝宏・新名　強・○角正芳浩
	166 次	〃	館長：瀧上昭憲 調査研究課：倉田直純・大川勝宏・新名　強・○角正芳浩
22	167 次	〃	館長：小田秀雄 調査研究課：倉田直純・大川勝宏・○新名　強・角正芳浩
	168 次	〃	館長：小田秀雄 調査研究課：倉田直純・大川勝宏・新名　強・○角正芳浩
	170-1 次	明和町 斎宮歴史博物館	館長：小田秀雄 調査研究課：倉田直純・大川勝宏・○新名　強・角正芳浩

第１表　柳原区画及び周辺関連区画発掘調査組織一覧表　（○印は発掘調査主担当者）

なお、発掘調査組織・体制の万全を期すため、斎宮跡の発掘調査・保存・整備全般にわたって指導・助言を得る「斎宮跡調査指導委員設置要綱」が昭和54年10月19日付けで制定され、7名の学識経験者で構成される斎宮跡調査指導委員会が発足した。その後、平成7年4月1日付けで「斎宮跡調査研究指導委員会」に名称が改められ、組織としての位置付けが明確となったが、平成12年4月1日付けで「斎宮跡調査研究指導委員」に名称が改定され、再び委員個別の設置による会議という位置づけがなされた。さらに平成19年7月25日付けの「三重県の附属機関等の設置・運営等に関する基本的な取扱いについて(通知)」を受けて、当該委員による会議を懇談会・懇話会等に位置づける設置要綱の改正が行われ、委員長、副委員長の選任規定をなくすとともに、会議の招集を館長、会議の進行を委員の互選による座長が行うものとするなど若干の修正が行われ、現在の「斎宮跡調査研究指導委員会」に至っている。しかし、委員会の設置目的や本質、その運営については、設置当初から大きく変わってはいない。

氏　　名	分　　野	職（就任時）	在任期間
服部　貞蔵	考古学	三重大学名誉教授	S54年度～S63年度
福山　敏男	建築史	元京都大学教授	S54年度～H6年度
久徳　高文	国文学	椙山女学園大学教授	S54年度～H6年度
◎坪井　清足	考古学	奈良国立文化財研究所所長	S54年度～H10年度
門脇　禎二	古代史	京都府立大学教授	S54年度～H10年度
楢崎　彰一	考古学	名古屋大学教授	S54年度～H10年度
渡辺　　寛	古代史	皇學館大学助教授	S54年度～H10年度、H13年度～
早川　庄八	古代史	名古屋大学教授	S59年度～H6年度
北原　理雄	都市工学	三重大学助教授	S61年度～H19年度
◎八賀　　晋	考古学	三重大学教授	H2年度～
鈴木　嘉吉	建築史	奈良国立文化財研究所所長	H5年度～
所　　京子	国文学	聖徳学園女子短期大学教授	H7年度～
佐々木恵介	古代史	聖心女子大学助教授	H7年度～
狩野　　久	古代史	京都橘女子大学教授	H11年度～H17年度
町田　　章	考古学	奈良国立文化財研究所所長	H11年度～H23年度
上村喜久子	中世史	名古屋短期大学教授	H11年度～H21年度
金田　章裕	歴史地理学	京都大学教授	H16年度～
増渕　　徹	古代史	京都橘女子大学教授	H18年度～
浅野　　聡	都市工学	三重大学准教授	H20年度～
綿貫　友子	中世史	大阪教育大学教授	H22年度～
稲葉　信子	文化遺産	つくば大学大学院教授	H24年度～
松村　恵司	考古学	独）奈良文化財研究所所長	H24年度～

第２表　斎宮跡調査研究指導委員会委員一覧　（在任年順、◎は委員長、座長経験者を表す）

第３節　報告書の刊行

今回の報告は、史跡東部の柳原区画を中心とする史跡整備を前提として、平成19年度から平成22年度にかけて柳原区画及びその周辺で実施した計画的発掘調査（第152次、153次、156 ～ 159次、163 ～ 168次）と、昭和49年度から平成16年度までの間に断続的ではあるが実施した当該区画及び周辺隣接区での発掘調査（第8－9・10次、10次、19次、20次、28次、47次、55次、103次、108次、114次、143次調査など）の結果を総合的に再検討し、まとめたものである。これまでにも、年次ごとに継続的に実施してきた発掘調査の概要については、翌年度に『史跡斎宮跡発掘調査概報』という形で報告してきたが、調査区がある程度面的にまとまり、そのエリアの歴史的な位置づけが明らかとなった箇所については、逐一、正報告書を刊行していくこととしており、その第１号として、平成13年（2001）に、鍛冶山西・中区画、牛葉東区画に及ぶ内院地区の実態解明調査が進んだことを受けて、『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ　内院地区の調査』を刊行したところである[(3)]。今回は、史跡整備の前提となる柳原区画を中心としたエリアの面的な学術発掘調査が進み、斎宮における当該区画の歴史的な位置づけや性格がほぼ明らかとなったことから第２刊目となる正報告書を刊行し、世に問うこととなった。なお、今回報告する範囲は、柳原区画周辺の遺構状況を勘案しつつも、柳原区画内及びその周囲を取り囲む区画道路までとし、区画内における遺構の変遷とその性格を明らかにすることを主目的としており、遺構及びその検討を中心とした第１分冊と遺物及びその検討を中心とした第２分冊に分けて刊行することとした。

報告書作成にあたっては、平成21年度に調査研究課、学芸普及課職員から成る課内研究連絡会議で、刊行に向けたスケジュール、構成案、執筆分担等について協議を行い、これに従って平成22年度に各執筆担当者が原稿を分担した。また、草稿は調査研究課職員を中心に関係職員全員で検討したもので、遺構・遺物の解釈が概要報告と異なる点もあるが、本報告をもって正式の見解といたしたい。なお、遺構・遺物の時代判定の根拠となる斎宮跡土器編年は、平成13年度に『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ』で示した斎宮跡土器編年（2001年編年）に準拠しているが、第Ⅲ期以降の編年については、新たな資料が蓄積され、斎宮第Ⅲ期第３段階の細分や第Ⅳ期の設定の可能性など、新たな課題が浮上してきたため、外部の研究者を招聘して斎宮跡土器編年検討会を2回開催し、再整理を行ったものを用いている。

最後に、本報告の刊行にあたり、調査研究指導委員を始め、多くの関係者に有意義な御助言・御教示を賜ったことは言うまでもなく、この場を借りて謝意を申し上げたい。

以下、本報告書作成に関わったメンバー及び執筆担当者は下記のとおりである（所属・職は開催時のもの）。

○斎宮跡土器編年検討会

愛知学院大学教授　　藤澤良祐

斎宮歴史博物館（調査研究課）　倉田直純　大川勝宏　新名　強　角正芳浩

三重県埋蔵文化財センター　　竹内英昭

三重県生活・文化部（文化振興室）　泉　雄二

○資料整理補助

斎宮歴史博物館業務補助職員　大橋由紀　杉原泰子　水木夏美　八木光代
西村秋子（～Ｈ21年度）　山本達也（Ｈ20～22年度）

○報告書執筆者

第１章　倉田直純・大川勝宏

第２章　大川勝宏

第３章　大川勝宏

第４章　第１～３・５節　大川勝宏
第４節　榎村寛之

附　編　新名　強

註

(1)田阪仁・泉雄二「国史跡斎宮跡調査の最新成果から－史跡東部の区画造営プランをめぐって－」（『古代文化43－4』1991年）
井上和人「斎宮方格地割研究への提言－再検討への第一歩－」（『斎宮歴史博物館　研究紀要　十二』斎宮歴史博物館　2003年）
伊藤裕偉「条里と方格地割」（『明和町史　斎宮編』明和町2005年）
大川勝宏「斎宮跡方格地割に関する二・三の試論」（『斎宮歴史博物館　研究紀要　十七』斎宮歴史博物館　2008年）など

(2)倉田直純「Ⅳ　第88次調査」（『史跡斎宮跡平成2年度発掘調査概報』斎宮歴史博物館　1991年）で初めて古代伊勢道が、史跡内を総延長1ｋｍ以上にわたり走っていたことが明らかにされたほか、その後、古代伊勢道に関して以下のような論考が公表されている。
杉谷政樹「古代官道と斎宮跡について」（『研究紀要　第6号』三重県埋蔵文化財センター　1997年）
倉田直純「古代伊勢道（奈良古道）の復元に関する覚書」（『斎宮歴史博物館　研究紀要　十九』斎宮歴史博物館　2010年）

(3)『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ　内院地区の調査　本文編』斎宮歴史博物館　2001

第２章　柳原区画と周辺の地形

第１節　斎宮における方格地割の概要

斎宮跡の全般的な位置と歴史的環境については、『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ』にも掲載されているのでそちらに譲るとし、本章では柳原区画と方格地割および周辺地形との関係について整理・記述する。

（１）方格地割の成立と展開

今回の報告対象である柳原区画を含む平安時代の斎宮の成立過程については、現在、奈良時代末期の光仁朝に酒人内親王の卜定に先立ち、宝亀二(771)年に鍛冶正気太王が斎宮造営のために派遣されたのを契機に、斎宮全体が史跡内の西部から東部に移され、整備が開始されたと考えられている。そしてこれに引き続き、桓武朝の延暦四(785)年に紀作良が造斎宮長官として派遣された段階で本格的に方格地割の造営が開始されたと考えられている[1]。

方格地割の造営過程や設計については、依然として検討を要する課題が残されているが、現段階の発掘調査に基づく知見では概ね次のような画期を経て推移したと考えられている。以下第４図を踏まえて概要を記述する。

１）光仁朝（宝亀二（771）年～延暦四（785）年）・・・「原方格地割期」

鍛冶山西区画としている450尺四方の区画が史跡東部に成立する。他の区画が並立していたかどうかは不明瞭である。酒人内親王、浄庭女王の斎王在位の段階とみられる。鍛冶山西区画には区画全体を囲む二重構造の大規模な掘立柱塀が造られる[2]。

２）桓武朝の方格地割整備（延暦四（785）年～延暦二十二（803）年頃）・・・「方格地割成立期」

光仁朝の鍛冶山西区画を中心に、東西５区画、南北４区画相当の方格地割の形が整えられる。その整備の過程で、「内院」は鍛冶山西区画と牛葉東区画の２区画に拡大する。この２区画も大型掘立柱塀で囲まれるが、前段階にみられた鍛冶山西区画の二重構造はなくなる[3]。

３）桓武朝～平城朝頃の方格地割の拡大（延暦二十二（803）年頃～大同三（808）年頃）・・・「方格地割拡充期」

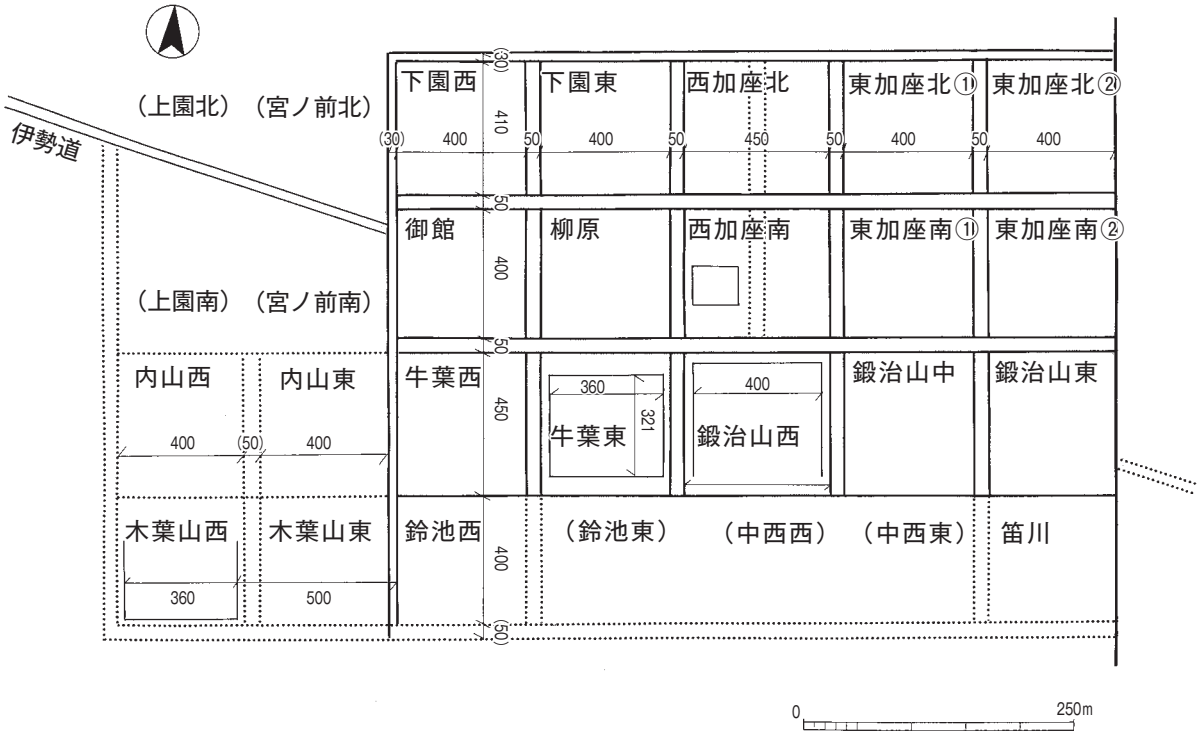
前段階の方格地割の南西部分で、さらに４区画分の方形区画が増設されたと考えられている。最も南西隅に位置する木葉山西区画には、南辺中央部に八脚門を持つ大型掘立柱塀が造られる。

延暦二十二(803)年には斎宮寮に史生四員の増員の記録があり[4]、また大同三(808)年には、太政官符で炊部司の長官と主典の官位を舎人司等の官位に合わせる通達が出されるなど[5]、この段階での斎宮の機構整備や拡充がうかがわれる記録があり、これに合わせた方格地割の拡張であったと考えられる。

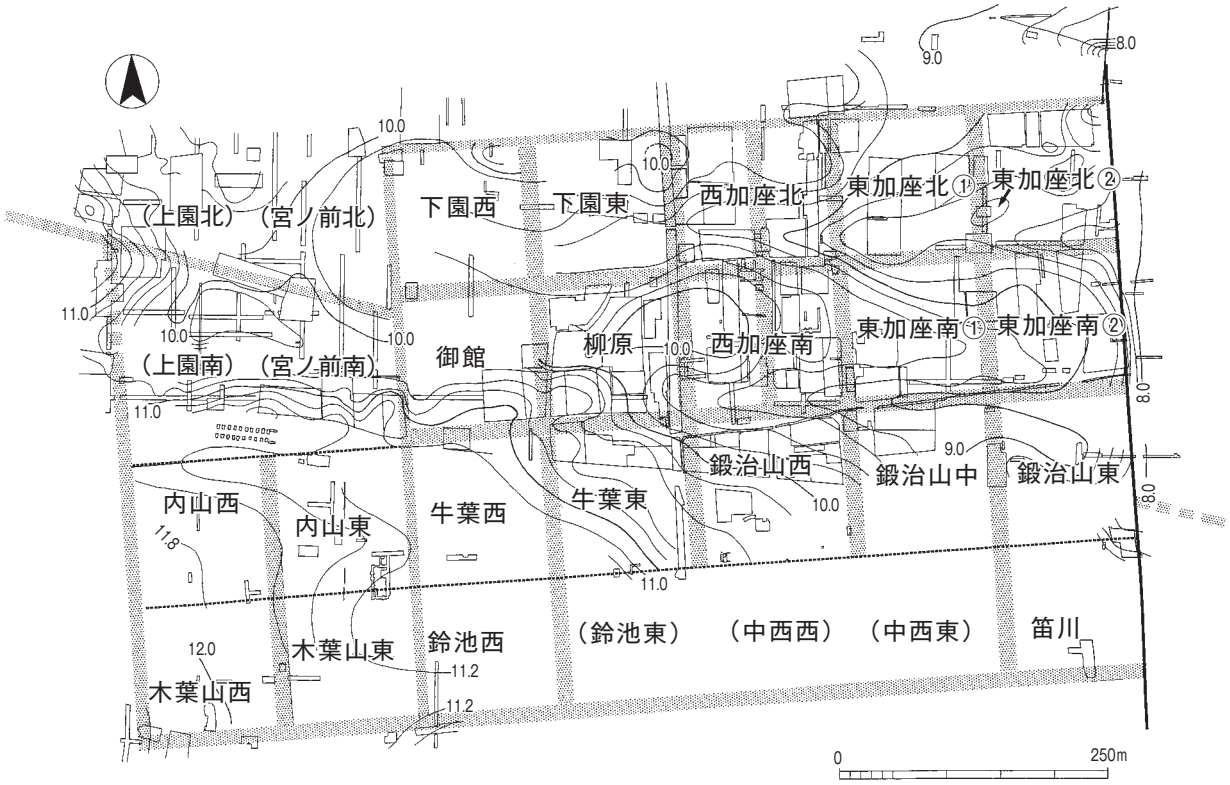
４）斎宮跡Ⅱ－２期の変革期（天長元（824）年～承和六（839）年）・・・「方格地割の放棄と再編」

多気郡より度会郡の離宮院（現伊勢市小俣町）に斎宮が移転された段階である。方格地割の区画道路上に斎宮跡土器編年Ⅱ－2期（実年代観で820年～ 850年頃）の廃棄土坑が掘削され、移転にあたり、方格地割の都市的機能が一時的に放棄された段階である[6]。

その後、承和六(839)年に度会斎宮は100以上の官舎が焼ける火災に遭い、多気郡の旧地に斎宮は復される[7]。その際にはかつての方格地割をある程度再利用しており、「内院」や柳原区画周



第４図　斎宮跡方格地割プラン復元案（１：7,000）図中の数字の単位は尺（小尺）



第５図　斎宮跡方格地割と微地形（１：7,000）

辺など中心的な区画は以前とほぼ同様の形で再編成されるものの、方格地割東部２列分の区画や北西部の下園地区などでは、この段階から斎宮跡Ⅱ－３～４期にかけて遺構の密度が低下し、区画道路も道路幅が狭まったり屈曲するなど区画道路が当初の形態を失っているとみられる箇所もあり、方格地割の形骸化が進行する段階と考えられる。

（２）自然地形と方格地割の設計

この方格地割が立地する標高およそ15m～８mの洪積台地は概ね東ないし東北東に向いて傾斜しており、発掘調査時の遺構検出面上の標高データから標高20cmごとのコンターマップを作成すると、微地形的な谷や起伏が浮かび上がる。方格地割は東西方向に長く造成されており、区画道路の側溝も東西方向のものが南北方向に比して幅・深さの面で大きい場合が多い。また、発掘調査で確認している区画道路の交差点は全ての事例で東西方向の側溝が交差点を貫通しているのに対して、南北方向の側溝は交差点内にまで伸びず、東西側溝と「Ｔ」状に接続するものが大半で、例外的に交差点内まで南北方向の側溝が延長してくる場合でも方格地割造営期に近い時期のものは形状や規模のうえで排水機能を十分に持ったものとは考えにくい（例として第103次調査のSD7003があげられる）。こうした事から、方格地割の造営にあたって道路側溝に対し全体として西から東へ向けての配水機能を考慮して計画され、流末は方格地割の東辺となっている現エンマ川に合流し、域外に排水されるよう考えられていたとみられる[(8)]。さらに北から二条目と三条目の東西区画道路は微地形の東西方向の谷に沿うように造成されており、谷の傾斜に沿って南北方向の排水も効果的に東西道路側溝に接続するように計画されていたものと考えられる。

方格地割を構成する方形区画は、鍛冶山西区画を含む東西列・南北列と北辺の１列以外は400尺（118.4m、１尺≒0.296m）四方を基本にしており、計画幅50尺（14.9m）の内側に設定される区画道路を挟んで方形区画を集積した形を基本としている。今回の対象である柳原区画は方格地割の中央部にあり、「内院」に推定される牛葉東区画の北に接し、この基本的な400尺四方の区画となっている。

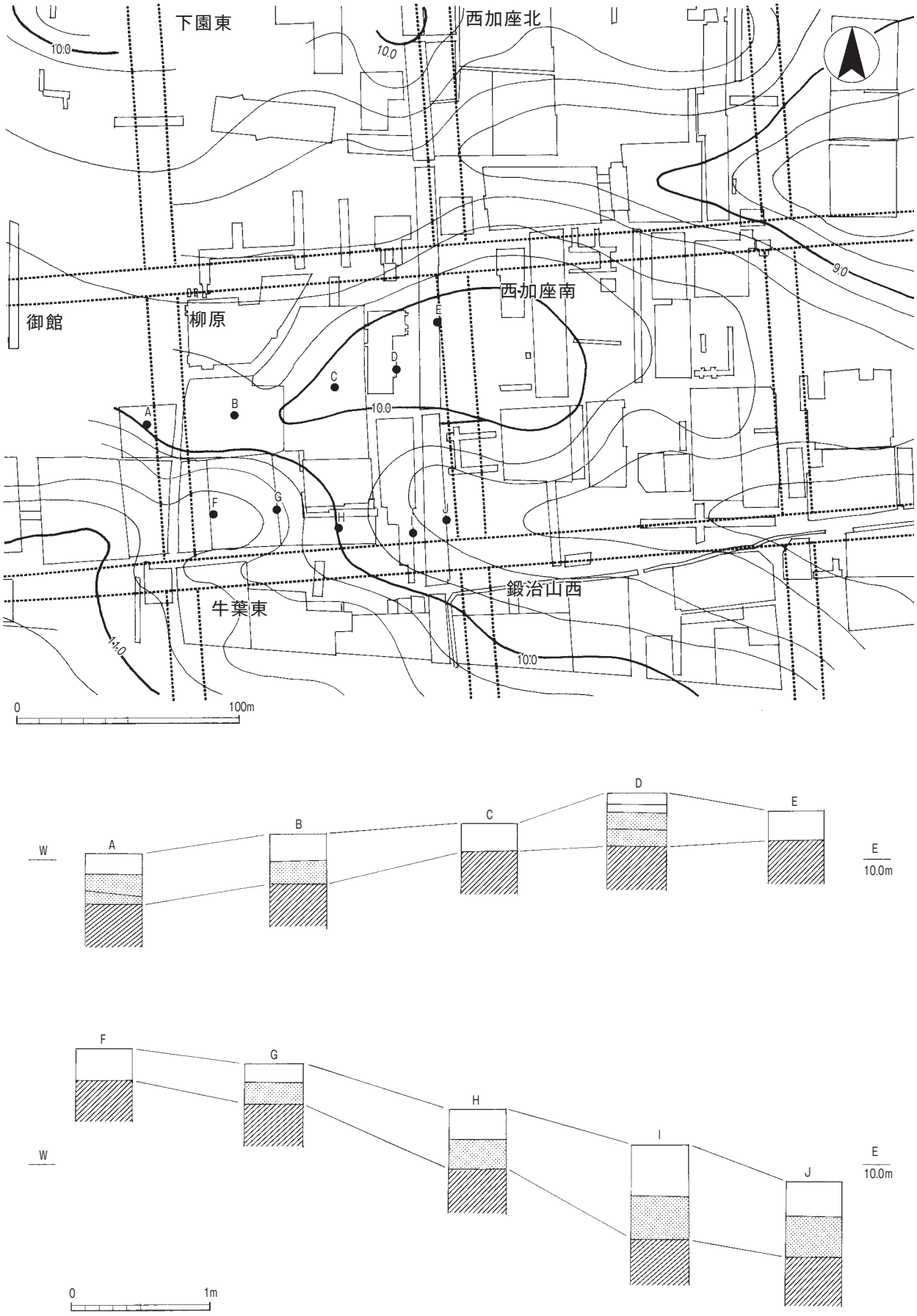
第２節　柳原区画の概要

次に本書で報告の対象とする柳原区画の沿革と地理的環境について整理を行う。

柳原区画は、方格地割の中でも東西５区画・南北４区画の造営当初からの方格地割の中で、北から２区画目、西から２区画目に位置し、南には「内院」推定地の牛葉東区画、東には平安時代初期の神殿と想定される西加座南区画がある、方格地割の中枢部の一画に位置する区画である。

南に接する「内院」と推定される牛葉東区画や鍛冶山西区画は標高11～12mほどの低い尾根状地形の上にあり、柳原区画とこの「内院」との間と、北側の下園東区画との間には、前節で触れた方格地割のほぼ全体を東西に貫く二条の浅い谷がある。第６図では、柳原区画にはこの区画の北と南の浅い谷に挟まれて、区画中央から東接する西加座南区画にかけて標高約10mの小さな島状の高まりがみられる。この高まりの南側には東南東に流下する浅い谷頭部があり、北側には谷に向かって北～北西に傾斜する地形となっている。区画内の現地表面の最高点は約10.8m、最低点は約9.8mで、区画内の比高差はおよそ１mである。

柳原区画内の基本層序をみると第６図のように、地表面から厚さ10cm～30cmの耕作土の下に厚さ10cm～20cmの褐色～黒褐色系壌土の遺物包含層があり、部分的にはこの層内からも遺構の



第６図　柳原区画の微地形と標準土層（1：2,500・１：40）

掘り込みがみられる。その下部に基本的な遺構検出面で洪積層上面である黄褐色～灰白色粘質土が現れるが、区画内でもエリアによって色調や土質の差異(粘土質～礫質)がある。また、第153・159次調査区内の区画南東の谷頭部や、第156次調査区など谷に向かって傾斜する部分では、部分的にこの洪積層の上に黒色シルト質壌土層が堆積する場合があり、こうした場所では下部の洪積層も白色シルト質の強い粘質土となる。

一方、区画北東部と南西部の島状・尾根状になる部分では、近年までの耕作のためか、遺物包含層である褐色～黒褐色壌土層がみられないかわずかにしか残存せず、耕作土直下で遺構検出面である洪積層が露頭する場合が多い。こうした部分では概して柱穴などの遺構も浅く、旧来の地形から10cm～ 30cm 程度は削平されている可能性が高い。

柳原区画は、微地形的には複雑な形状になるが、区画北西部で若干排水環境が劣るものの、北側の下園西・東区画や西加座北区画、西側の御館区画の北半部に比べても地理的に比較的安定した場所であるといえる。

註

(1)大川勝宏「斎宮跡方格地割に関する二・三の試論」(『斎宮歴史博物館　研究紀要　十七』斎宮歴史博物館　2008年

(2)『続日本紀』宝亀二年十一月十八日条

(3)『続日本紀』延暦四年四月二十三日条

(4)『日本紀略』延暦二十二年正月五日条

(5)『類聚三代格』大同三年八月三日条
『日本後紀』大同三年八月三日条

(6)『類聚国史』天長元年九月十日条

(7)『続日本後紀』承和六年十一月五日条

(8)前掲(1)
山中章「斎宮方格地割の設計」『条里制・古代都市研究十七』2001年

第３章　柳原区画の遺構

第１節　はじめに

（１）遺構の時期設定と時期の表記

柳原区画の遺構について記述するにあたっては、斎宮跡土器編年に基づく出土遺物の年代観に基づき、遺構相互の重複関係から推定される遺構の所属時期別に、場所の特定のため各調査次数ごとに記載する。

斎宮跡の土器編年及びその実年代観は『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ』収書の「斎宮跡の土器」で整理された段階区分を基本とするが、刊行後の発掘調査の進展により第Ⅲ期については従来の三段階区分から四段階区分が提唱されており[(1)]、その年代観も陶磁器年代観との齟齬による調整案も提示されている[(2)]。本書ではこれらの新知見と第１章でも記載した本書刊行のための斎宮跡土器編年検討会の成果と踏まえて、第３表のように斎宮跡土器編年区分と年代観を修正して用いる。編年の検討の詳細については、別途刊行予定の『斎宮跡発掘調査報告Ⅱ 遺物編』で報告する。また、遺構の時期表現は記述の煩雑を割けるため、この土器編年区分から「Ⅱ－1期」や「Ⅲ－3期」といった略称を用いる。

また、区画全体の土地利用や建物群の変遷の画期等については、第４章で別途記述する。

（２）本書における遺構の記述

柳原区画の発掘調査では、平成19年度以降の史跡整備のデータを集めることを目的としたものを除き、調査した年代が大きく離れており、またそれぞれの調査の目的も異なっているため、他の区画の調査と比べても調査区が細かく重なっている箇所がある。そのため、複数の調査区にまたがって検出した事例が多い。本書では混乱のないよう原則として遺構番号が確定した段階の調査区の報告の中で記述することとする。

また、本書を作成するのにあたり、概報の段階と遺構の形状・規模・時期が異なる場合があるが、こうした変更についてその都度説明する。

本章の構成については、まず柳原区画の沿革を明らかにするため、方格地割造成期の形状を示す区画道路遺構と区画の形成に触れたのち、各調査次での各時期区分ごとの遺構の記述を行う。

第２節　区画道路と区画の形成

柳原区画を規定する方格地割形成期、あるいはそれに近い時期の区画道路側溝の遺構を抽出し、区画および方格地割の造営との関係について整理する。柳原区画を形作る区画道路については、断続的ながらも東西南北の四辺すべての道路遺構を確認している。

（１）北辺道路

区画道路の中では最も検出状況がよくないものの、北・南両側の側溝を確認している。

北側溝としては、第10次・168次調査のSD0529、第168次調査のSD10253がこれにあたる。柳原区画にかかる側溝の延長としては約27m分を確認している。これらの西側の第166次調査区では、近現代の粘土取りなどにより攪乱されているため遺構の確認はできていない。また、この部分は第２章でも示したように基盤となる地形が浅い谷地となっており、柳原区画にあっては地理的条

第３表　斎宮跡の土器編年

段階区分	実年代	標識遺構・参考資料
斎宮跡第Ⅰ期 第１段階		SB1615（第 30 次） SK1255（第 27 次）
	710	
斎宮跡第Ⅰ期 第２段階		SK5102（第 70-1 次）
	730	
斎宮跡第Ⅰ期 第３段階		SK1098（第 21-1 次） SK6210（第 88 次）
	770	
斎宮跡第Ⅰ期 第４段階		SE4580（第 69 次）
	785	
斎宮跡第Ⅱ期 第１段階		SK6030（第 86 次） SK1445（第 34 次）
	820	
斎宮跡第Ⅱ期 第２段階		SK5200（第 77 次） SK1045（第 20 次）
	850	
斎宮跡第Ⅱ期 第３段階		SK7430（第 109 次） SK2650（第 44 次）
	900	
斎宮跡第Ⅱ期 第４段階		SK7030（第 103 次） SX6666（第 95 次） SD6750（第 124 次）
斎宮跡第Ⅲ期 第１段階	1000	SE4050 上層（第 61 次） SE2000（第 31-4 次） SK7770（第 116-2 次）
斎宮跡第Ⅲ期 第２段階	1100	SE8391（第 133 次） SK1730（第 32 次） SE7600（第 113 次）
斎宮跡第Ⅲ期 第３段階		SK2480（第 37-4 次） SK9028（第 143 次）
斎宮跡第Ⅲ期 第４段階	1200	SK8110（第 125-1 次） SK9027（第 143 次） SK7873（第 118 次）
斎宮跡第Ⅳ期		SE9014（第 143 次） SE4751（第 71 次） SK7668（第 114 次） SX7420（第 107 次）

件も良好ではない。

Ⅱ－1期に埋没したとみられるSD0529とⅡ期に比定されるSD10253は新旧の関係にあり、検出幅で2m強、断面形が幅広のカマボコ形ないしは台形のSD0529の黒褐色埋土上面から、断面「Ｖ」字形で幅1mほどのSD10253が新たに掘られたかたちになっている（第9図4断面図参照）。SD10253もⅡ期のうちには埋没したものとみられる。

南側溝は、区画東辺部で第10次調査のSD0530、その西約14mで第156次調査のSD9871を、区画西辺近くで第166次調査のSD10141を確認している。SD0530は北側溝のSD0529同様、幅1m強で、断面形が幅広の逆台形となっている。出土時の状況は明らかでないが、口径約22cmの鉄鉢形の須恵器（瓦鉢）がほぼ完形の状態で出土している。他に出土遺物は少なく、区画道路造営時の何らかの祭祀に伴うものである可能性がある[3]。Ⅰ－4期からⅡ－1期にかけてこの溝が掘削されたものと考えられる。

SD9871とSD10141は調査区の制限や遺存状態からそれぞれ北肩と南肩のみを確認しているが、SD9871では断面「Ｕ」字ないしは「Ｖ」字形、SD10141は断面「Ｕ」字形ないしは逆台形の形状がうかがえる（第9図5断面図参照）。

検出しているそれぞれの側溝は断続的な検出のため、連続性については推定するしかないが、第168次調査区のSD0529とSD10243以外、道路の維持存続のための再掘削の痕跡は残っていない。第156次調査区北端の東西溝群は斎宮跡第Ⅲ期以降のもので、道路としての連続性は明確ではないものの、路面上に平安時代を通じて建物や土坑などの遺構はみられず、形状・規模はともかく、道路機能自体はⅢ期まで連続していたものと考えたい。区画北東の交差点ではこの北辺道路側溝は南北いずれも交差点を横断していることが確認される。

（２）南辺道路

中央部分で未検出の箇所があるが、比較的良好に道路遺構を確認している。

北側溝では、第103次調査のSD6991、第159次調査のSD10094がある。SD6991は調査区の検出面が後世の削平を受け、遺構の上部が削り取られているためか、調査区内でも断続的に検出されている。Ⅱ－2期頃に埋没したとみられる。約1.5m南にⅢ期に埋没したとみられるSD6993が平行してみられる。第159次調査のSD10094は、断面形が幅約1mの浅い逆台形状を呈する（第9図9断面図参照）。Ⅱ－1期頃のSD10094の埋土に重複してⅡ期のSD10095が再掘削されていることがわかる。東接する第10次調査区ではさらに大規模な掘り込みにより側溝は確認できていない。

南側溝は北側溝より良好に確認できている。第103次調査のSD6992は北側溝SD6991同様、Ⅱ－2期頃に埋没したとみられ、それに重複してⅡ－4期のＳＤ6995が掘削されているほか、北へ約1mのところにSD6993に対応するSD6994がある。第108次調査のSD7251は、西側の第103次調査SD6992とやや延長方向を違えるが、Ⅱ－1～2期に埋没しており、両者は同時期のものと考えられる。第108次調査区内では断続的となっているが、東の第170－1次調査では良好な状態で検出している（第9図7断面図参照）。第170－1次調査区内では幅約1.1m、断面形が「Ｕ」字形を呈し、調査段階では明確に時期区分できなかったが、埋土の状態から少なくとも一回の再掘削があったとみられる。第159次調査のSD10096は、遺構検出面からさらに0.4m～0.6m掘り下げられた下部から底部のみ検出している（第9図8断面図参照）ことから、かつては少なくとも0.5m程度の深さがあったと推定される。第159次調査区の北側溝SD10094と同様、幅１mほどの断面逆台形の溝だったと推定される。区画外になるが、区画南西の交差点の遺構の確認を目的に実施した第164次調査でもこの溝の延長にあたるSD2844を確認しており、これも埋土断面から少なくとも2回の掘削が観察できる（第9図6断面図参照）。

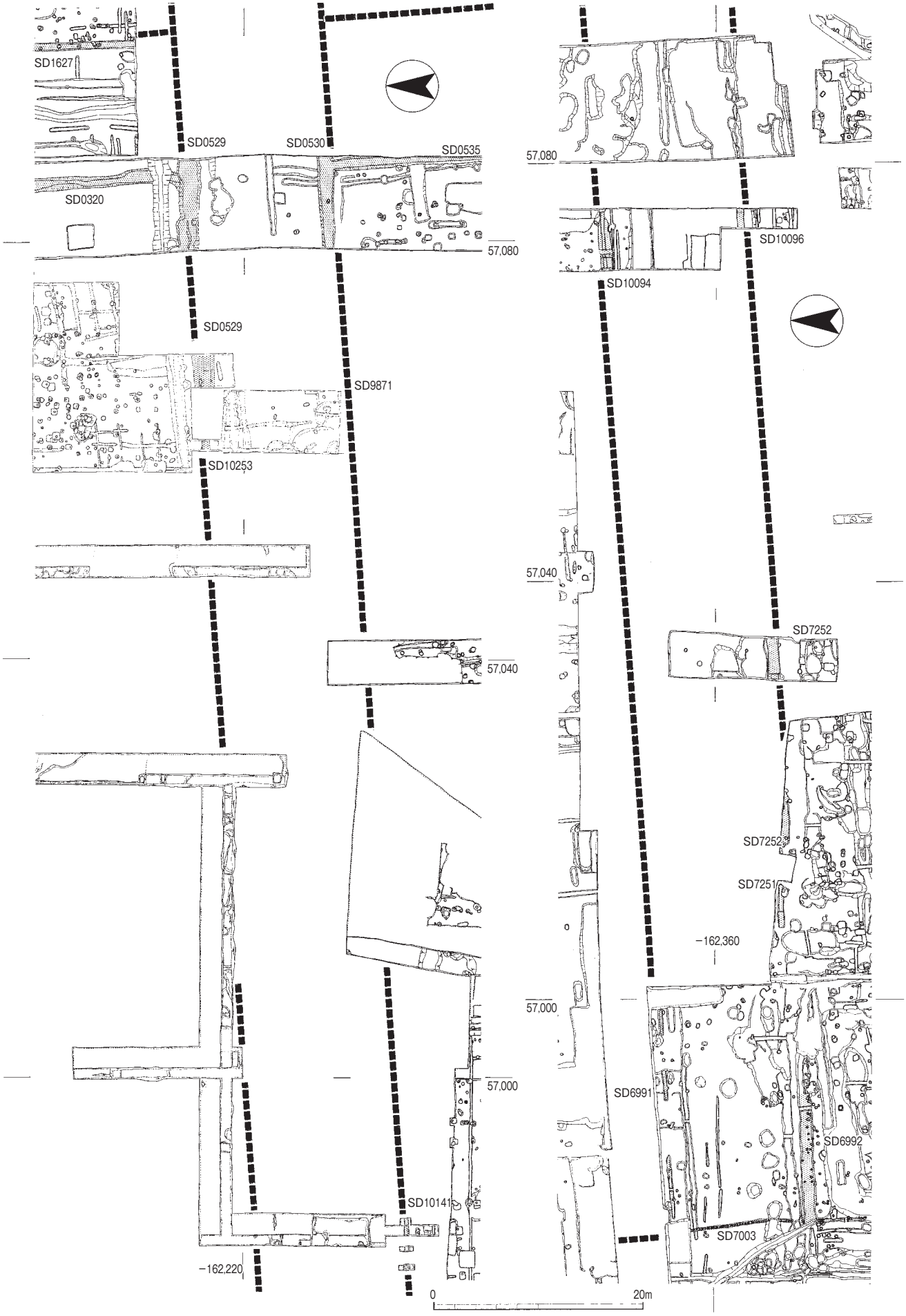
この南辺道路は、現代まで農道規模の道路が残っており、他の道路と比べて、Ⅱ－1～2期頃に方格地割の当初形に近いとみられる側溝が埋没した後も、Ⅱ～Ⅲ期にかけても道路幅員を狭めながらも道路が存続していた様子がよくわかる。また南辺道路のみ、路面上を直径2㎝～4㎝程度の円礫・亜円礫を含む粘質土が5㎝～10㎝の厚さで覆っていた様子が観察されている。

（３）西辺道路

西辺道路は、北西の交差点部分が確認できていないが、区画南西の交差点から延長74m分までを確認している。

西側溝は、方格地割造営当初期に相当するものとしては、第158次調査のSD9999を確認しているのみである。検出面で幅0.4m～0.5m、深さ0.2m、断面形は「Ｕ」字形で（第9図1断面図参照）、約4.5mの検出長ながらやや彎曲しており、他の地点で確認している側溝遺構に比べ貧弱な印象を受ける。しかしⅡ－1期にはこの溝が埋まったあと、3m～4m東に作られⅢ期に埋没するＳＤ9961やⅣ期に埋没するSD3358は直線的な形状である（第55次調査区では屈曲した形状となる）。埋土断面図（第9図1断面図）をみると、SD3558も同一箇所で2回は掘削されたことがうかがわれる。区画南西交差点部にあたる第164次調査区内では後世の大規模な攪乱を受けており、南北道路の遺構は確認できていない。

東側溝では、区画南西部の第55次調査区内が大規模な削平を受けているためこの部分は不明だが、第28次調査でSD1328、第103次調査ではSD7003を検出している。SD1328は幅1.2m～1.5m、



第７図　区画道路（北辺道路・南辺道路）遺構図（１：500）

第８図　区画道路（西辺道路・東辺道路）遺構図（１：500）

深さ約0.4mの断面が浅い「U」字形を呈する。斎宮跡Ⅱ期の中で西側のSD1329に続く。第103次調査のSD7003は幅約0.3mの断面「U」字形の小規模な溝で、南北道路の側溝が交差点を貫通する斎宮跡の方格地割の交差点では数少ない事例である。しかしながら交差点内で確認した延長9.7m分の溝底部には掘削時の鋤先痕とみられる凹凸が残っているが(写真図版PL.28下)、交差点の南側で検出した延長4.5m分にはそうした痕跡は認めらない。そのため、交差点内の溝は鋤先痕が流水・滞水により消失する以前に、掘削後まもなく埋没したものと考えられる。交差点外の溝にはそうした痕跡が見られないということから、掘削後意図的に埋められた可能性も高い。この点からも、斎宮跡の方格地割にあっては交差点での南北道路の側溝の在り方は、東西道路のそれとは異なるものであったと解釈できる。一方、時期不明ながらこのSD7003を踏襲した可能性のあるSD6998もこの交差点部分を貫通している。

西辺道路は遺構の連続性は不明瞭ながら、現代まで農道として道路機能が残っており、規模・形状は縮小しながらも、平安時代を通して存続したものと考えられる。

(4)東辺道路

区画南東の交差点を検出していないが、第10次調査～第44次調査の検出遺構をつないで、区画道路の存在が確認できる。

西側溝として第10次調査・第162－3次調査・第13－8・9次調査のSD0535、第106－2次～第44次調査のSD2660がある。SD0535は第10次調査区内で、東西道路南側溝SD0530に「T」字形に接続し、幅約1mの断面形が浅い逆台形状を呈する。Ⅱ－1期頃の埋没と考えられる。東辺中央部の第162－3次調査では、史跡現状変更に伴う狭隘な調査区ではあったが、東辺道路側溝を明瞭に検出している。第9図3の断面図をみると、底辺0.7～0.8m、深さ約0.5mの逆台形で、調査時には分別していないが、ほぼ同規模の溝が引き続き東肩に接して掘削されていたこと分かる。柳原区画からは離れるが、SD2660も第44次調査区では幅2m弱で検出されているが、並走して溝が掘られている様子が遺構図からもうかがえ、第162－3次調査区と同様の時期幅を持った遺構の重複があった可能性がある。

東側溝は、区画北東の交差点部分は検出していないが、第162－3次調査・第13－8・9次調査のSD1627、第106－2次～第44次調査区のSD2670は西側溝とよく似た検出状況である。第162－3次調査区でのSD1627の断面をみると、上辺1.6m、底辺1.1m、深さ約0.5mの逆台形の溝と、それが埋没した後に掘削された上辺0.8m、深さ約0.7mの断面「U」字形の溝が観察できる(第9図2断面図)。後者は第106－2次～第44次調査区で検出しているSD2670に規模的に近い。

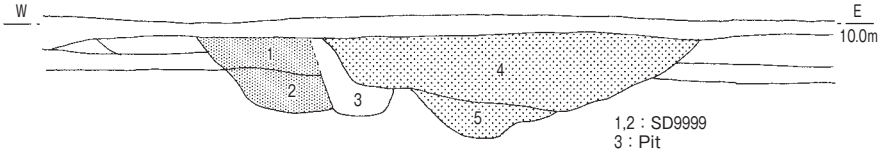
東辺道路は、方格地割造営当初以降の道路機能の連続性について、柳原区画に接している部分のみでは不明な点が多いが、後代にも側溝遺構の間に掘立柱建物はみられないこと、柳原区画北の下園東区画に東接する第25－6次調査では、道路内にも側溝に並走するⅡ期～Ⅲ期の溝が複数見つかっていることから、平安時代を通して東辺道路は機能していたものと考えたい。

(5)柳原区画の区画道路の計画

次にこれら区画道路の法線の計画性について検討する。

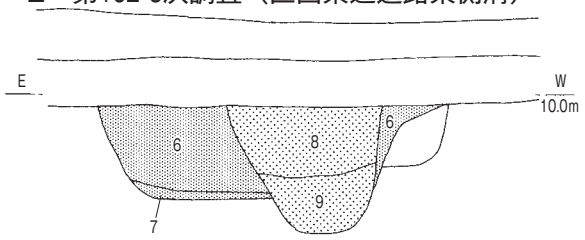
方格地割の区画道路は、幅50尺(14.8m)の計画幅の中に、地形等の条件に合わせ計画線の内側に道路側溝を掘削しているというのが現在の基本的な認識だが、側溝は造営後も最終埋没するまでに繰り返し浚えられ、溝幅などが造営当初の形態・規模を残していない事例が多いため、各道

1　第158次調査（区画西辺道路西側溝）



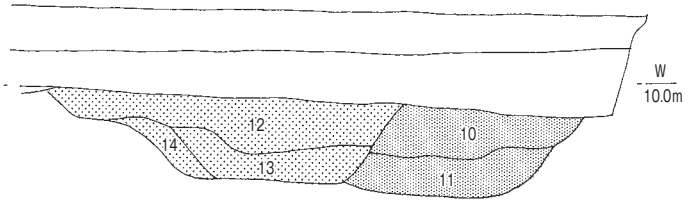
1,2：SD9999
3：Pit
4,5：SD3558

2　第162-3次調査（区画東辺道路東側溝）



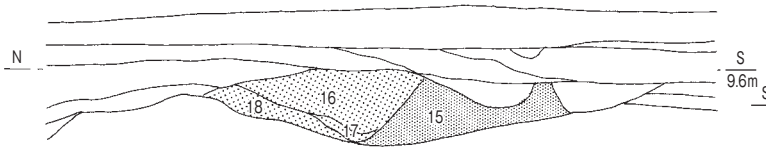
6,7：SD1627a
8,9：SD1627b

3　第162-3次調査（区画東辺道路西側溝）



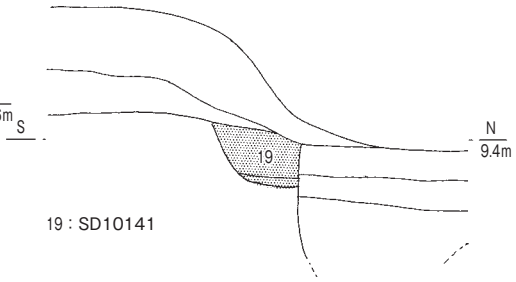
10,11：SD0535a
12～14：SD0535b

4　第168次調査（区画北辺道路北側溝）



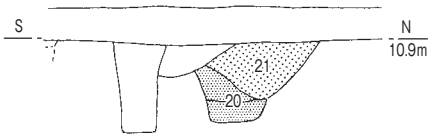
15：SD0529
16～18：SD10253

5　第166次調査（区画北辺道路南側溝）



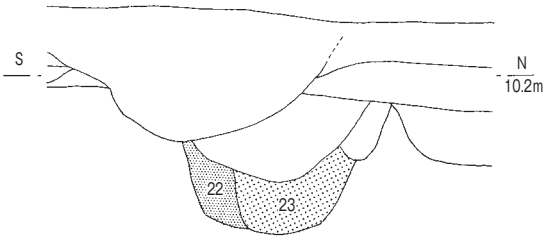
19：SD10141

6　第164次調査（区画南辺道路南側溝）



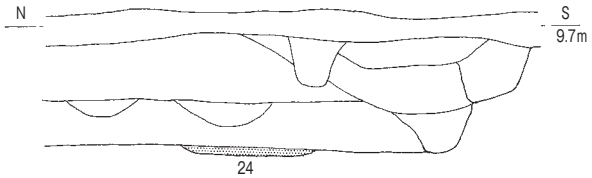
20：SD2844a
21：SD2844b

7　第170-1次調査（区画南辺道路南側溝）



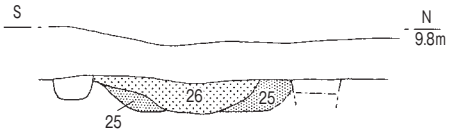
22：SD7252a
23：SD7252b

8　第159次調査（区画南辺道路南側溝）



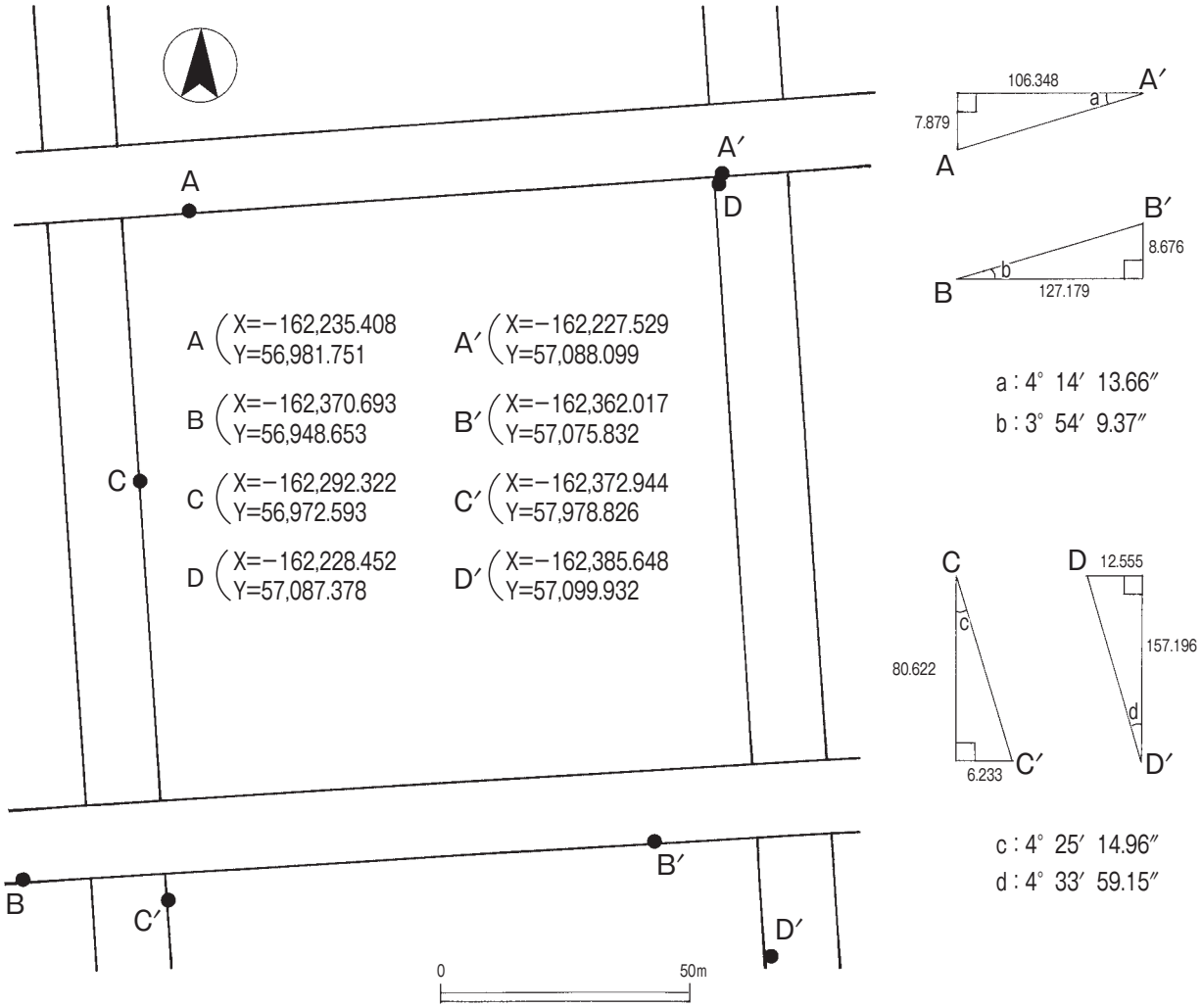
24：SD10096

9　第159次調査（区画南辺道路北側溝）



25：SD10094
26：SD10095

第９図　区画道路の埋土断面図（１：40）



第 10 図　柳原区画の区画道路の計画（1 ：1,500）

路側溝の遺存状態が比較的良好と考えられる箇所の溝底中央の座標データを、斎宮歴史博物館が管理する遺構の地図情報データから抽出し、側溝の法線について検討した。座標を抽出した箇所を第10図に「Ａ～Ａ′」のように示している。それぞれの側溝の座標軸に対する傾きは、測定した二点間の距離が不均等ではあるものの、北辺道路南側溝でおよそ E4° 14′ N、南辺道路南側溝でおよそ E3° 54′ N、西辺道路東側溝でおよそ N4° 25′ W、東辺道路西側溝でおよそ N4° 34′ W という値を得た。北・東・西側溝がほぼ同じ値であるのに対し、南側溝がやや異なる値を示している。溝遺構の底部というやや恣意的なデータによるという事も考えられるが、比較参考として南辺道路に接する牛葉東区画のⅡ－1期には成立したとみられている、区画全体を囲む大型の掘立柱塀北辺両端の柱心とみられる二点間での計測でもおよそ E3° 34′ N という値が得られる。一方、鍛冶山西区画Ⅰ－4期の外郭掘立柱塀北辺ではおよそ E4° 25′ N、内郭で E4° 18′ N という値を得ており、北・東・西辺道路側溝に近い値となっている。また参考として、方格地割内部でより長い距離で２点間の側溝データを得られる箇所を探し、東西道路で第64－7次調査（東加座北②区画）から第168次調査（下園西区画）南辺道路の北側溝でおよそ E4° 14′ N、南北道路では第160次（東加座北①）から第106－5次調査（鍛冶山中区画）の東辺道路西側溝でおよそ N4° 19′ W という値

も得ている。このように、全体として方格地割の基軸はE4° 20′ N前後であるとみられるが、こうした値に比べるとやはり柳原区画南辺道路の法線や牛葉東区画内の掘立柱塀はやや特異であるといえる。方格地割南半の発掘調査データが不足しているため、この差異の根拠について現時点では明快な解答はないが、牛葉東区画の掘立柱塀が鍛冶山西区画を中心とした所謂「原方格地割期」から平安京型に近い「方格地割形成期」に入る過程で、鍛冶山西区画の掘立柱塀に遅れて造営されたと考えられていることから[4]、東西5列、南北4列の方格地割の造営の経緯を反映したものである可能性は高いと考えられる。

註

(1)竹内英昭「Ⅱ 第143次調査」『史跡斎宮跡平成16年度発掘調査概報』斎宮歴史博物館 2006年

(2)大川勝宏「斎宮跡における平安期貿易陶磁の基礎的研究」『斎宮歴史博物館　研究紀要　十九』斎宮歴史博物館　2010年

(3)大川勝宏「研究ノート　斎宮跡で出土する瓦鉢類について―斎宮における仏教的要素への視点の形成―」(『斎宮歴史博物館　研究紀要　二十一』斎宮歴史博物館　2012年

(4)『続日本紀』宝亀二年十一月十八日条

第３節　古代伊勢道

柳原区画において、Ⅰ期まで遡る遺構として、方格地割成立以前の古代伊勢道(奈良古道)の遺構がある[1][2]。柳原区画にかかる調査区では、西から第158次・第28次・第153次・第152次・第143次・第159次調査で南北道路側溝を確認している。しかし、道路面上の施設や土木的な施工の痕跡、硬化面、轍等は確認しておらず、道路と認定できるのは並行する二条の側溝によるのみである。側溝の一部が極めて浅い痕跡的なものしか確認されていなかったり、区画内でも側溝が断続的になっていることから、道路の上面はかなり削平を受けているものとみられる。

(１)北側溝

SD10001（第158次）

幅0.5m～1.0m、深さおよそ0.15mの浅い断面逆台形を呈し、調査区内で延長8m分を検出している。埋土は黒色シルト質壌土である。方格地割区画道路西側溝のSD9999・SD3558の手前で一旦途切れている。SD3558の東にⅢ－3期に埋没するSD9960があるが、伊勢道側溝とは別の物であろう。

SD1327（第28次）

SD10001の東延長で延長約41m分を検出しているが、SD1327の西端と、第158次調査区のSD10001の東端とはおよそ15mの間隔があるため、別の名称としている。第28次調査区内では、幅0.5m、深さ0.05m～0.3mの断面逆台形で、第28次調査区東半では同じくⅠ期のSD1379が一部重複して並走するほか、調査区中央部では、遺構番号は与えられていないが、幅が1.3mに広がる部分があり、時期を違えて側溝の再掘削が行われたものと考えられる。

SD6801（第152次・第143次・第159次）・SD9790（第152次）

第28次調査区の東端部から第152次調査区の西端部にかけて、後世の攪乱土坑があるため、側溝の連続性が確かめられないことから、第143次調査以東は、鍛冶山西区画での第98次調査で付された遺構番号に拠ってSD6801とした。第152次調査区から第143次調査区まで連続することが

確かめられており、この間で延長約35m分を検出している。この部分での幅は0.5m～0.5m、遺構検出面からの深さは0.2m～0.3m、断面形は緩やかな「U」字形で、やはり黒色シルト質壌土で埋没している。第152次調査区ではSD6801の南に平行するSD9790を延長で7m分確認している。幅約0.6m、深さ約0.3mの浅い断面「U」字形、黒褐色の埋土で、道路側溝の改修に伴い掘削されたものとみられる。重複関係は明らかにできなかったが、SD6801に後出してSD9790が掘られたものと考えられる。

第159次調査では、この北側溝をSD10001と呼称していたが、後述するように区画中央でSD10001～SD1327は掘削の工程の単位としては分かれていたとみられるため、柳原区画西端の遺構名を用いず、直接接続するSD6801に名称を変更した。第159次調査区内では延長約15.5m分を検出しているが、幅0.5m～0.7m、深さ0.1mと極めて浅い。黒褐色系の埋土を持つ。東接する第10次調査区では、道路の延長部分にⅡ－1期頃の大型土坑が複数掘削されているため、側溝の延長を確認できていない。

北側溝の方向については、方格地割の区画道路と同様に、周辺地形や掘削の状況で左右される溝肩部でなく、比較的本来の溝の位置を示すと考えられる状態の良い溝底の2点の座標値から算出を試みると、北側溝は第158次のSD10001西端の溝底中央部と、第159次のSD6801の東端の溝底中央部の2点間、距離にして延長約128mについて計算するとE14° 49′ 37″ Sとなる。従来から古代伊勢道の方向はE15° Sとされており[3]、今回の値はそれと齟齬はない。

（２）南側溝

SD10002（第158次）

幅約0.5m、深さ1.5m～2.0mの断面逆台形で、同調査区のSD10001に比べてやや深い。埋土は黒色シルト質の壌土である。北側溝SD10001に比べて直線的に掘削されているが、方格地割区画道路西側溝のSD3558より東で、幅をやや減じるようである。

SD1395（第28次・第153次）

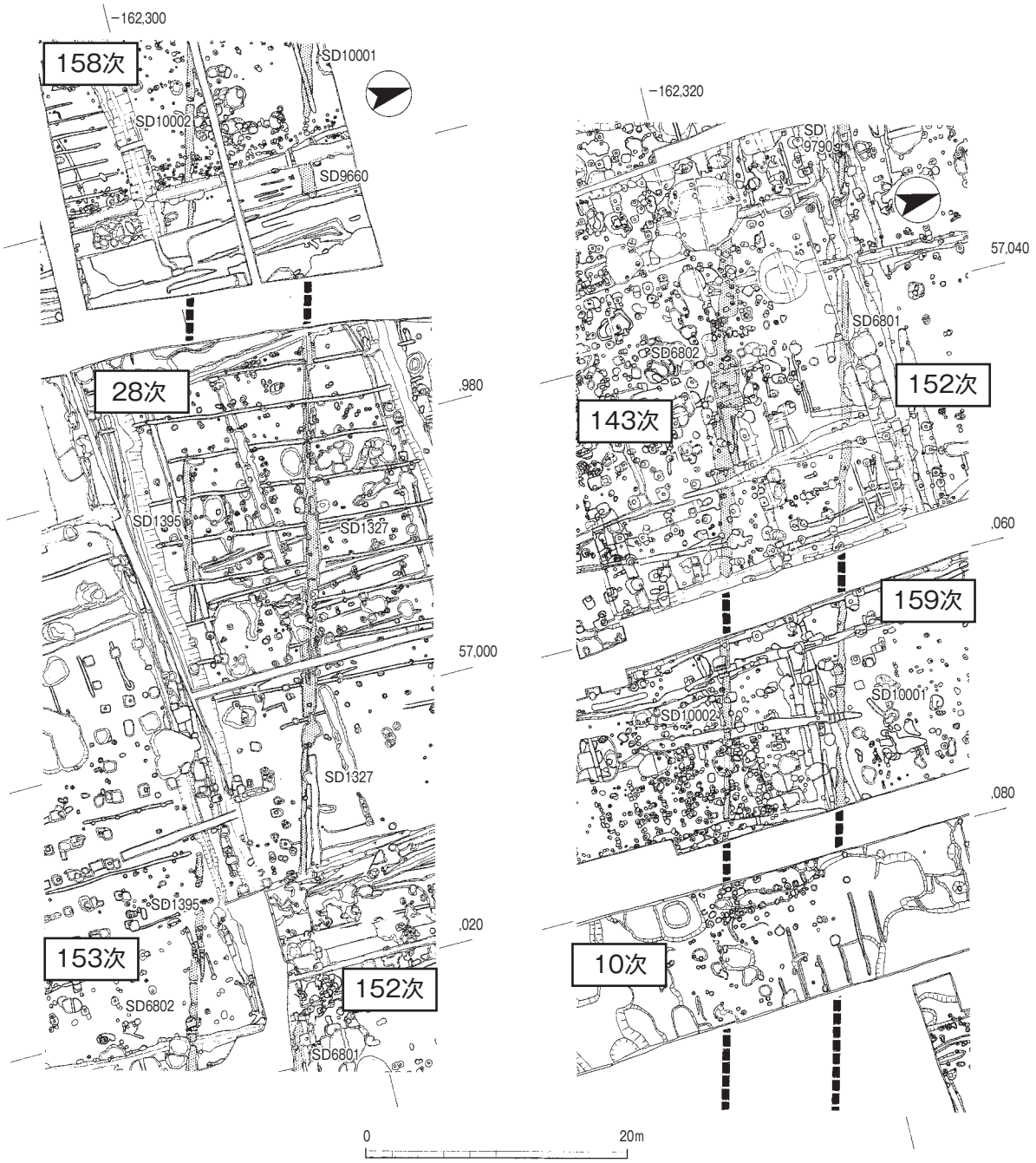
第28次調査区でおよそ12.5m分を検出している。幅0.6m～0.8m、深さ約0.1m～0.2mで、断面形は「U」字形である。溝の東西端は、第28次調査区内で途切れている。第153次調査区では、南側溝は二条の溝の底部が食い違った状況で検出しているため、施工作業単位の違いとみて西側のものをSD1395としている。第153次調査区内では最大で幅0.6m、深さは5cm程度しか残存していない。第153次では黒色の埋土が確認されている。

SD6802（第20次・第153次・第143次・第159次）

第20次調査区では未命名で、北側溝と同様に第143次調査以降は第98次調査で付された遺構番号に拠っている。また、ここでも南側溝を第159次ではSD10002と呼称していたが、北側溝同様、第143次調査区検出の遺構と直接接続するSD6802の遺構番号に変更した。

第153次調査区では南側溝の底部を、食い違う2本の溝として検出しており、先述のとおり第153次調査区の東半以東をSD6802としている。幅は最大でおよそ0.6m、東に向かって深くなり、遺構検出面から0.3mほどの深さとなっている。第143次調査区内では西端で幅約0.5mだが、調査区中央以東では約１mに広がる。再掘削によって部分的に溝が広がっているのかもしれない。また、調査区中央部のSB9008と重なるあたりで、一旦溝が途切れるようにも見える。

第159次調査区では延長約16mを検出している。幅0.4m～0.7m、深さは約0.2mで北側溝よりや



第 11 図　古代伊勢道遺構図（1 ：500）

や深い。黒褐色系の埋土である。

道路側溝の方向を、北側溝と同様に算出を試みると、第158次のSD10002西端の溝底中央部と、第159 次のSD6802の東端の溝底中央部の2点間、距離にして延長約133mについて計算するとE14°50′ 9″ Sで、北側溝と極めて近似した値となる。

(3)伊勢道の遺構の時期

古代伊勢道の遺構の所属時期についてみると、柳原区画内では、溝埋土からの出土遺物が微細な土師器片や土錘しかなく、決定はできないものの、道路の敷設については、史跡西部では側溝がⅠ－2～3期の遺物を含んで埋没している状況が確認されていることから8世紀前葉、奈良時代前期を遡る可能性が指摘されている。一方、その廃絶については、史跡東部では方格地割の敷行にあわせて、その範囲の道路は廃絶するが、史跡内のそれ以外の地域では平安時代を通して道路機能は存続していたものと考えられ、また、史跡斎宮跡南東方向約600mの地点で実施し、古代伊勢道の延長を確認した丁長遺跡でも同様に考えられている[(4)]。

このように伊勢道の成立はⅠ－2期以前の8世紀の前葉から7世紀まで遡る可能性もあるが、一方柳原区画内では、第28次調査区でⅠ－4期のSK1291に道路面の中央を壊されている。これにより道路機能も失われたと考えると、柳原区画内では方格地割の敷行により伊勢道が廃止されていたことが改めて確認できる。

(4)古代伊勢道の設計規格

古代伊勢道は、都と伊勢を結ぶ幹線道路であり、その施工にあたっての設計規格については、すでに一定研究もある[(5)]。これによると、伊勢道の施工は奈良時代前期以前まで遡ると考えられることにより、造営測地のための基準尺は大宝令に定める大尺(1尺＝35.6cm)を用いたとみられている。そして南北の側溝の心々間で25大尺、側溝肩の内々の路面幅で22大尺、側溝幅が3大尺を基準としたとされている。これと比較するための柳原区画内での計測値をまとめると第４表のようになった。

多少の計測誤差はあるとみられるが、側溝心々間で24大尺4寸～25大尺6寸で4つの計測値の平均で25大尺1～2寸、側溝内肩幅(路面幅)で22大尺8寸～23大尺9寸で平均23大尺4寸となった。ちなみに道路側溝の外肩間で26大尺1寸～28大尺1寸の幅があり、この平均は27大尺ほどであった。こうしてみると、柳原区画の計測値から完好な数値を得られたのは側溝心々間の25大尺という基準のみであることが分かる。第４表からは、側溝の上端がかなり削平されている可能性はあるものの、側溝の幅に一定の基準尺が貫徹されていたとは窺いにくい。また、これらの幅は、第４表の道路遺構面の標高の変化と共通性を示しており、標高の高い地点(例えばB地点)では側溝心々間や側溝内肩間、外肩間は広くなり、逆に標高の低い地点(例えばD地点)では狭くなっている。側溝心々間の数値は、再掘削などにより溝の位置がずれない限り、大きな変化はないとみてよいが、溝の幅は削平度合いによって変わるため、路面幅や側溝外側幅は変化することになる。発掘成果から標高の低い地点ほどより多くの削平を受けているとは単純に説明できないため、史跡内外の広範囲のデータとの比較も必要だが、柳原区画で認められる古代伊勢道の設計規格は、現時点では道路心々間は25大尺を基準とする、ということのみとみられる。

測定値＼地点		A．第158次西端 SD10001 – SD10002	B．第28次中央 SD1327 – SD1395	C．第143次東端 SD6801 – SD6802	D．第159次東端 SD6801 – SD6802
側溝心々間距離		9.0m（25.3）	9.1m（25.6）	9.0m（25.3）	8.7m（24.4）
路面幅（内肩間）		8.4m（23.6）	8.5m（23.9）	8.3m（23.3）	8.1m（22.8）
側溝外側幅（外肩間）		9.5m（26.7）	10.0m（28.1）	9.6m（27.0）	9.3m（26.1）
側溝幅	北側溝	0.5m（1.4）	1.0m（2.8）	0.4m（1.1）	0.8m（2.2）
	南側溝	0.6m（1.7）	0.5m（1.4）	0.9m（2.5）	0.4m（1.1）
遺構面道路中央標高		9.8m	9.9m	9.8m	9.6m

※表内（　）内数字は計測値を令大尺（1尺=35.6cm）に換算したもの

第４表　柳原区画内の古代伊勢道の計測値

註

(1)足利健亮「大和から伊勢神宮への古代の道」上田正昭編『探訪古代の道』法蔵館　1988

(2)倉田直純「第88次調査」『史跡斎宮跡平成2年度発掘調査概報』斎宮歴史博物館　1991

杉谷政樹「古代の伊勢道」『明和町史　斎宮編』明和町　2005

(3)倉田直純「古代伊勢道(奈良古道)の復元に関する覚書」『斎宮歴史博物館研究紀要十九』斎宮歴史博物館　2010

(4)大川勝宏「第六章 内院地区の遺構変遷」『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ』斎宮歴史博物館 2001

大川勝宏「斎宮跡方格地割に関する二・三の試論」(『斎宮歴史博物館　研究紀要　十七』斎宮歴史博物館　2008年

小山憲一『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ 丁長遺跡(第1次)・大谷遺跡(第1・2次)発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 2009

(5)前掲(3)

第４節　第10次調査区の遺構

斎宮跡の史跡指定以前に昭和50年度から51年度にかけて、松阪広域市町村圏道路を建設するのにさきがけて行った調査で、柳原区画の東辺付近を南北に縦貫する調査である。今回の報告の対象となるのは南北約150m分の範囲である。柳原区画内の他の発掘調査とは調査区を接していないが、区画の北半では調査区の西に第167次調査区が、南半では第159次調査区が近接した位置にあり、建物等の一部の遺構が連続している。区画北半に相当する調査区内では、比較的良好な状態で遺構が残っているが、南半では斎宮跡土器編年でⅠ－4期からⅡ－1期に相当する大規模な土坑が掘られている。遺構は建物が密集する箇所と、土坑等が密集する箇所が比較的明瞭に分かれている。

（１）斎宮跡第Ⅰ期の遺構

方格地割区画道路の側溝のほか、土坑が確認されている。

SD0529　柳原区画北辺道路北側溝にあたる。幅1.9m～2.3m、深さ0.2mの浅い断面カマボコ形の溝である。Ⅰ－4期以降の土師器杯・高杯、須恵器片が少量出土あるのみで、詳細は分からないが溝の形状は複数回掘削されているようにも見えるため、初現はⅠ－4期まで遡るものと考えた。

SD0530　柳原区画北辺道路南側溝にあたる溝である。幅1.2m～1.7m、深さ約0.4m～0.5mの断面逆台形の溝である。Ⅰ－4期～Ⅱ－1期の土師器杯・甕・高杯、須恵器片が遺物整理箱で0.5箱分出土している。第１節でも触れているように、詳細な出土状況は分からないが、口径約22cmの須恵器鉢(瓦鉢)がほぼ完形の状態で出土している。こうした仏器である鉄鉢や仏餉鉢を写した器形は、史跡内の各所で見つかっており、方格地割の区画道路関係では第64－2次調査でも、側溝内から土師器の鉢が出土している。在俗僧である優婆塞が斎宮の造営にあたっても何らかの関与があった可能性も指摘されている[1]。

SD0535　柳原区画東辺道路西側溝にあたる溝である。北端はSD0530に「Ｔ」字形に接続し、柳原区画北東交差点内まで続かない。幅1.3m、深さ約0.4mの断面逆台形の溝である。Ⅰ－4期～Ⅱ－1期の土師器杯・皿・蓋・高杯・甕・竈、黒色土器Ａ類椀、須恵器杯・蓋・甕・壺が整理箱で1.5箱分出土している。調査時の詳細は不明だが、調査写真等からは何度も再掘削を受けたような痕跡は看取できない。

SK0541　区画北東隅の4.2m×3.0m、深さ約0.15mの方形の土坑である。土師器杯・蓋・高杯・鍋・甕、須恵器盤・甕などが少量出土している。わずかにⅡ－1期とみられる遺物を含むが混入と考えられ、Ⅰ－4期の遺構とみられる。

SK0552　区画東辺中央やや北よりの土坑である。直径約2.5mの略円形で深さ約0.3mある。土師器杯・皿・高杯・甕、須恵器壺や炭化材が少量出土している。出土遺物からⅠ－4期のものとみられる。

SK0553　SK0522の南に接するおよそ3m×2mの楕円形、深さ約0.35mの土坑である。土師器杯・皿・高杯・甕・鍋、須恵器杯・蓋が少量出土している。土師器杯にはｂ手法が顕著である。出土遺物からⅠ－4期のものとみられる。

（２）斎宮跡第Ⅱ期の遺構

SB0540　区画北東隅部で検出した東西棟で、梁間2間分のみ確認した。大部分は調査区の西側

に伸びている。梁間の寸法は2.5m、一辺約0.6mの方形の柱掘形を持つ。柱痕跡は不明。N3° Wの棟方向で、出土遺物はないが、柱穴の規模形状からⅡ期頃のものと推定される。

SB0544　区画北東隅部で検出した3間×2間の東西棟で、桁行寸法で1.75m、梁間で2.0m、柱掘形は直径0.3m～0.4mの円形になる。柱痕跡は不明。N5° Wの棟方向で、出土遺物からⅡ－4期以降のものとみられる。

SB0560　区画東辺中央部で検出した桁行３間の南北棟とみられる建物である。桁行寸法は2.1m、柱掘形は直径0.4m～0.5mの円形で、N5° Wの棟方向である。出土遺物からⅡ－4期頃のものとみられる。SB10559とは建替えの関係にあるとみられるが、前後関係は不明である。

SB0565　区画東辺南寄りで検出した5間×2間の東西棟である。第159次調査区で西側梁間筋を確認した。柱間寸法は桁行・梁間とも1.75mである。柱掘形は一辺0.4m～0.5mの略方形ないしは不整円形、柱痕跡は直径15cmほどで、棟方向はN0°である。Ⅱ－3期からⅢ－1期にかけてのものとみられる。

SB10552　区画北東部で検出した3間×2間の東西棟である。柱間は桁行1.75m、梁間2.1mで、北東隅の柱穴を欠く。柱穴は直径0.3m～0.5mの略円形で、N2° Eの棟方向を取る。出土遺物からはⅡ－3期以降としか判断できず、Ⅲ期にまで下る可能性もある。

SB10559　3間×2間の南北棟と考えられる建物で、同規模のSB0560とは桁行柱筋が重なる。柱間は桁行・梁間とも2.1mで、柱穴は一辺0.4m～0.5mの隅丸方形ないしは略円形である。N5° Wの棟方向を取る。出土遺物からⅡ－4期のものと推定され、SB0560に先行するものとみられる。

SB10560　区画東辺中央で検出した梁間2間の東西棟と考えられる建物である。桁行寸法2.3m、梁間2.0m、柱穴は直径0.3mの円形で、柱痕跡は不明である。棟方向はN2° Wである出土遺物はⅡ期に属すが、Ⅲ期に下る可能性はある。

SA0564　区画の南東部で検出した東西方向の柵列である。西側の第159次調査区でもその延長を確認しているが、第143次調査区では検出していない。第10次調査区内で5間分、第159次調査区内で7間分、両調査区あわせて26.6m分を確認している。柱間はやや不揃いながら平均で1.9m、柱穴は直径0.2m～0.3mの略円形である。N3° Wの方向を取る。出土遺物からⅡ－3期頃のものと推定される。

SK0557　区画東辺中央付近で検出した南北4.3m、東西長もほぼ同規模とみられる深さ約0.2mの方形の土坑である。調査時には竪穴建物と認識していたようだが、柱穴や周溝がないこと、調査時写真によると立ち上がりの弱い丸い肩部を持っていること、床の硬化面などが無いとみられることから、本報告では土坑に分類する。

土師器杯Ａ・ⅢＡ・椀ＡＢ・高杯・鉢・甕、須恵器蓋・盤・甕・壺などが整理箱1.5箱分出土している。出土遺物はⅡ－1期のものが多いが、今回は混入と判断したⅢ期の遺物も出土していること、2m南に形状が似たⅢ－3～4期のSK0561があることや、平面形からみて複数の遺構が重複していた可能性もあるため、時期は下る可能性もある。

SK0563　区画東辺中央部の南北11m、東西は9m以上で調査区の東に続く大型の土坑である。土師器杯Ａ・ⅢＡ・高杯・鉢・甕・鍋・甑・薬壺、須恵器杯ＡＢ・蓋・ⅢＡＢ・盤・壺類など遺物整理箱４箱分の遺物が出土している。土師器杯類はb手法によるものとe手法によるものがある。僅かにⅡ－1期以降の遺物もあるが、埋土上面からの混入とみてよいだろう。その他に焼土塊や

炭化材も出土している。Ⅱ－1期に位置づけられ、遺構の性格は不明だが、あるいは方格地割の造営に関わる土取りや整地の痕跡の可能性もある。

SD10572　区画東辺中央付近で検出した、検出長約10m、幅約1m、深さ約0.1mの断面形が緩い「U」字形の溝である。およそN5° W前後の方向を持つ。出土遺物は土師器片・須恵器片が少量出土しているのみなので、詳細は不明だが、おおむねⅡ期に属するものとみられる。

SK10579　区画南東隅付近で検出した楕円形の土坑で、南北1.8m、東西は東端が調査区外に伸びるが2.3m分を検出している。深さは0.5mである。土師器杯A・ⅢA・椀A・甕・甑、須恵器杯A・Ⅲ・短頸壺が出土している。土師器杯の形式からⅡ－1期のものとみられる。

SK10580　区画南東隅の大規模な土坑である。調査期のグリッドでE84・W85・E85・W86・E86・W87・E87・W88・E88の範囲にまたがる。発掘調査時点でもいくつかに区分して出土遺物の取り上げを行っているが、検出時の範囲が分からないため遺構の区別ができない。遺構図や調査時の写真を見ると、掘削の深さはそれほど凹凸はなく、全体で大きな浅い土坑のようにも見える。出土遺物は土師器杯A・ⅢA・椀A・高杯・甕・竈、須恵器杯A・甕・壺類があり、e手法主体の土師器杯類などからⅡ－1期頃のものとみられる。僅かながら灰釉陶器片や無釉陶器椀（山茶椀）などがみられるが量的には微小で、埋土上面からの混入品と考えられる。土師器の中にはほぼ完形で口径7㎝～8㎝の小椀が5個以上みられ、意図的な埋納の可能性もある。柳原区画南東隅の微地形的には浅い谷になる部分で、第153次調査でも同様の大きな土坑を検出している（SK9855・9856）。

区画内の他の場所では見られない遺構であることから、方格地割の施工に関わる土取りや整地の痕跡である可能性もある。

（3）斎宮跡第Ⅲ期の遺構

1）Ⅲ－1期の遺構

SB10550　区画の北東隅部で検出した梁間2間の東西棟とみられる建物である。建物の西半は調査区外に続く。桁行寸法2.2m、梁間1.8mで、柱穴は直径0.4m前後の不整円形で柱痕跡は不明。N7° 30′ Wと、方格地割内の多くの建物とは大きく棟方向を違える。出土遺物からⅢ－1期頃のものとみられる。

SD0533　区画北東隅部の幅約1.5m、深さ約0.3m、検出長約5.5mの断面逆台形の浅い溝である。おおむねE7° Nの方向をとる。土師器杯・甕、ロクロ土師器、須恵器片が少量出土している。出土遺物からⅢ－1～2期頃のものとみられる。

2）Ⅲ－2期の遺構

SB0545　区画北東部で検出した3間×2間の東西棟である。柱穴は直径0.4m～0.5mの円形で、柱痕跡は不明。柱間は桁行・梁間とも2.0mである。N4° Wの棟方向で、出土遺物からⅢ－2期頃のものとみられる。

SB10551　区画北東部で検出した梁間2間の東西棟とみられる建物である。建物の東半は調査区の外へ続く。柱間は桁行・梁間とも1.85mで、柱穴は直径0.3m～0.5mの円形である。N4° Wの棟方向で、出土遺物からⅢ－2期頃のものとみられる。

SB10553　区画北東部で検出した梁間2間の東西棟とみられる建物である。建物の東半は調査区の外へ続く。梁間で2.25mを測る。柱穴は直径0.3mの円形で、N2° Wの棟方向を取る。出土遺物

からⅢ－2期以降のものとみられる。

SB10556　区画北東部で検出した3間×2間の東西棟である。柱間は桁行1.8m、梁間2.0mで、柱穴は直径0.4m～0.5m、柱痕跡は15cm程度とみられる。N2°Wの棟方向を取り、出土遺物からⅢ－2期頃のものとみられる。

SB10561　区画東辺中央付近で検出した、梁間2間の東西棟とみられる建物である。柱間は梁間で2.15mを測り、柱掘形は一辺0.6m～0.7mの隅丸方形ないし略円形でやや大型である。N5°Wの棟方向で、出土遺物からⅢ－2～3期頃のものとみられる。

SB10562　区画東辺中央付近で検出した桁行3間の南北棟とみられる建物である。近接して桁行3間の南北棟SB0560やSB10559があり、関連するものかもしれない。桁行寸法2.2mを測り、直径0.5～0.6mの略円形の柱掘形で、直径20cmほどの柱痕跡がみられる。棟方向はN1°Eである。出土遺物からⅢ－2～3期頃のものとみられる。

SB10563　区画南東隅部で検出した3間×2間の東西棟とみられる建物である。柱間は桁行2.2m、梁間2.0mを測り、柱穴は直径0.4m～0.6mの略円形で、柱痕跡は明らかではない。棟方向はN0°で、出土遺物からⅢ－2期頃のものとみられる。

SB10564　区画南東隅部で検出した梁間2間の東西棟とみられる建物である。建物の東半は調査区外へ続く。柱間は桁行2.0m、梁間1.85mで、柱穴は0.3m～0.5mの略円形である。N4°Wの棟方向で、Ⅲ－2期以降のものとみられる。

3）Ⅲ－3期以降の遺構

SB10555　区画北東部で検出した梁間2間の東西棟と考えられる建物である。柱間は桁行・梁間とも2.1mを測る。建物の東半は調査区外に続く。柱穴は直径およそ0.5m～0.6mの不整円形で、柱痕跡は直径20cm程とみられる。N4°Wの棟方向で、出土遺物からⅢ－3期頃のものとみられる。

SB10557　区画東辺中央付近で検出した梁間2間の東西棟とみられる建物である。柱間は桁行1.8m、梁間2.2mで、柱掘形は直径0.4m～0.5mの不整円形である。N4°Wの棟方向で、出土遺物からⅢ－3～4期のものとみられる。SB10558とは重複関係にあるが、新旧は判断できない。

SB10558　区画東辺中央付近で検出した梁間2間の東西棟とみられる建物である。SB10557とはほぼ同規模で、相互に建替えの関係にあるとみられる。柱間は桁行2.1m、梁間2.0mで、柱穴は直径およそ0.5mの略円形である。N3°Wの棟方向で、Ⅲ－3～4期のものとみられる。

SB10566　区画南東隅部で検出した3間×2間の東西棟である。柱間は桁行2.1m、梁間1.95mで、柱穴は直径0.3m～0.4mの略円形である。直径約10cmの柱痕跡がみられる。N4°Wの棟方向で、Ⅲ－3～4期のものとみられる。

SB10567　SB10566と重なる位置で検出した3間×2間の東西棟である。柱間は桁行2.0m、梁間1.8m、柱穴は直径0.2m～0.3mの略円形と極めて小さい。N5°Wの棟方向で、Ⅲ－3～4期のものとみられる。SB10566とは建替えの関係にあるとみられるが、新旧は判断できない。

SK0546　区画北端から4分の1ほど南で検出した2.4m×1.8m、深さ約0.4mの楕円形の土坑である。土師器杯、ロクロ土師器小皿、無釉陶器椀（山茶椀）のほか、少量だが丸瓦と平瓦の破片が出土した。Ⅲ－4期頃に相当するものと考えられる。

SK0547　SK0546の東約2mの調査区東壁に沿って検出した長さ約5.6mの土坑である。遺構平面図から見ると2～3基の土坑が重複している可能性がある。土師器杯・小皿・甕、ロクロ土師器杯・

小皿・台付小皿や白色土器系の椀、無釉陶器椀(山茶椀)が出土している。Ⅲ－4期以降のものとみられる。

SK0548　SK0546とSK0547の間で検出した2.3m×2.0m、深さ約0.25mの略三角形の土坑である。土師器皿・小皿、ロクロ土師器杯・小皿・台付小皿、無釉陶器椀(山茶椀)やチャート片が出土している。Ⅲ－4期頃のものとみられる。

SK0549　SK0548の南0.8mで検出した3.3m×2.0m、深さ約0.25mの隅丸長方形の土坑である。出土遺物は整理箱で約1.5箱分とやや多い。土師器皿・小皿・台付小皿・高杯、ロクロ土師器小杯・小皿、無釉陶器椀(山茶椀)などが出土している。Ⅲ－4期以降のものとみられる。

SK0550　区画東辺中央やや北よりの建物遺構の空白地に集中して掘られた土坑群のひとつである。南北1.4mで東端は調査区外へ続く楕円形の土坑で、深さは約0.1mである。土師器皿・小皿・甕、ロクロ土師器小皿、須恵器片が出土している。Ⅲ－4期以降のものとみられる。

SK0551　区画東辺中央北よりの土坑群のひとつである。2.7m×2.4m、深さ約0.25mの略円形の土坑である。土師器杯・小皿・甕、ロクロ土師器小皿・台付小皿、白色土器系の椀、無釉陶器椀(山茶椀)などが出土している。Ⅲ－3～4期頃のものである。

SK0554　区画東辺中央北よりの土坑群のひとつである。南北3.4mの円形の土坑とみられ、西半は調査区外へ続く。調査時は井戸と推定し、底部は未掘である。土師器杯・皿・高杯・甕、ロクロ土師器台付杯・小皿、瓦器椀、無釉陶器椀(山茶椀)・皿(山皿)が出土しており、Ⅲ－3～4期にかけてのものとみられる。

SK0555　区画東辺中央北よりの土坑群のひとつである。東西2.6m、南北2.4m、深さ約0.3mの略円形土坑である。出土遺物は整理箱で15箱と極めて多く、土師器杯・小皿・甕、ロクロ土師器杯・小皿、無釉陶器椀(山茶椀)、白磁片や三足羽釜を模した瓦器質の小型模造品の他、坩堝やフイゴ羽口、鉄製品も出土しており、金属器の生産や加工に関わる性格もうかがわれる。

SK0559　区画東辺中央北よりの土坑群のひとつである。南北3.2m、深さ約0.3mの東西方向に長い長楕円形とみられる土坑で、土師器皿・小皿・高杯、ロクロ土師器皿・小杯・小皿、白色土器系の椀、無釉陶器椀(山茶椀)や常滑産の擂鉢などの陶器類が整理箱0.5箱分出土した。Ⅲ－4期からⅣ期にかけてのものとみられる。

SK0561　区画東辺中央北よりの土坑群のひとつである。南北3.8m、深さ約0.2mの方形の土坑とみられ、調査区の東に続く。土師器皿・甕・鍋、ロクロ土師器椀、無釉陶器椀(山茶椀)などが出土している。Ⅲ－3～4期のものとみられる。

SE0570　区画南東隅部で検出した井戸である。一辺3.4mの方形に0.6mほど一段掘り下げそこから直径約2mの井戸を掘り下げている。井戸屋形は確認できていない。完掘していないためか、出土遺物は少なく、土師器杯・甕、ロクロ土師器杯・台付杯・小皿、須恵器片、灰釉陶器片が出土している。周辺の建物との位置関係から、掘削から埋没まであまり時期差がなかった可能性がある。Ⅲ－3期を中心とした時期のものとみられる。

SK10568　区画北東隅部やや南寄りで検出した直径約1.8m、深さ約0.2mの円形の土坑である。土師器杯・小皿・高杯・甕、ロクロ土師器小皿・台付小皿・台付杯・椀などが出土している。Ⅲ－3～4期のものとみられる。

SK10569　区画北東隅部やや南寄りで検出した南北2.5m×東西2.2m、深さ約0.2mの方形の土坑

である。土師器杯・小皿・盤、ロクロ土師器椀・小皿などが出土している。Ⅲ－3～4期のものとみられる。

SK10570　区画北東隅部やや南寄りで検出した1.5m×1.2m、深さ約0.2mの小規模な楕円形土坑である。土師器杯・小皿・高杯・甕、ロクロ土師器小皿、無釉陶器椀(山茶椀)や軽石が出土している。Ⅲ－4期以降のものとみられる。

SK10571　区画東辺中央部付近で検出した1.9m×1.3m、深さ約0.1mの不整な楕円形の土坑である。土師器小皿、ロクロ土師器片、白磁片が少量出土している。Ⅲ－3～4期のものとみられる。

SK10573　区画東辺中央部付近で検出した直径1.5m、深さ約0.25mの小規模な不整円形の土坑である。土師器小片、ロクロ土師器台付小皿、無釉陶器椀(山茶椀)が出土しており、Ⅲ－3期以降のものとみられる。

SD10577　区画南東隅部で検出した延長約6m、幅1.3mの浅い溝である。N5°～6°Eの方向で、西の第159次調査区のSD10091やSD10093と方向や規模の上で関連性が考えられる。土師器片、須恵器片、無釉陶器椀(山茶椀)が出土しており、Ⅲ期の中でも新しい段階のものとみられる。

SK10578　区画南東隅部で検出した長径1.8m、深さ約0.2mの小規模な不整形土坑である。土師器杯・小皿、無釉陶器椀(山茶椀)・皿(山皿)が出土しており、Ⅲ－3期以降のものとみられる。

4)その他のⅢ期の遺構

SB0543　区画北東隅部で検出した3間×2間の東西棟とみられる建物である。柱穴は直径0.3～0.4mの円形で、柱痕跡は不明。柱間は桁行1.85m、梁間1.9mでN6°Wの棟方向を取る。出土遺物からⅢ期のものと推定するが、Ⅱ－4期のSB0544とは建替えの関係である可能性がある。

SB10554　区画北東部で検出した梁間2間の東西棟と考えられる建物である。柱間は桁行2.1m、梁間2.0mで柱穴は直径およそ0.3mの円形である。N3°Wの棟方向で、所属時期はⅢ期の中に納まるものとみられる。

SB10565　区画南東隅部で検出した梁間2間の東西棟と考えられる建物である。建物の東半は調査区外へ続く。柱間は桁行・梁間とも1.8mを測り、柱穴は直径およそ0.3m前後の略円形である。N3°Wの棟方向で、出土遺物からⅢ期に属すると考えられる。

SD0532　区画北東隅部で検出した延長で約20m、幅0.4m～0.5m、深さ約0.1mの細い溝である。土師器やロクロ土師器の小片が出土している。方格地割の南北区画道路にほぼ平行するため、これも道路側溝とみるべきかもしれない。

SK0573　柳原区画南辺道路上の大規模な落ち込みである。この西の延長は第159次調査でも確認している。下層部ではSK0563同様Ⅱ期まで遡る可能性もあるが、出土遺物はⅢ期のものが相当量あり、現時点ではⅢ期以降のものとしか判断できない。SK0573の南端には帯状の落ち込みが東西に走り、区画道路南側溝の痕跡である可能性もある。

(4)時期不明の遺構

SD0542　区画北東隅部で検出した延長約7m、幅1.1mの浅い断面「U」字形の溝である。おおむねE5°Nの方向を取る。土師器片、須恵器片が少量出土している。

SD10574　区画東辺中央部付近で検出した幅約0.8mの「L」字状に折れる溝である。土師器片が少量出土しているのみである。

SE10575　区画東辺中央部付近で検出した遺構で、井戸とされるが詳細は不明である。土師器

片・須恵器片が少量出土したのみである。

SD10576　区画南東隅やや北よりで検出した検出長約6m、幅約0.8mの溝である。西接する第159次調査では延長を確認していない。おおむねE1°Sの向きを取る。

註

(1)大川勝宏「研究ノート　斎宮跡で出土する瓦鉢類について―斎宮における仏教的要素への視点の形成―」(『斎宮歴史博物館　研究紀要　二十一』斎宮歴史博物館　2012年

第４節　第20次・第55次調査区の遺構

柳原区画の南西部での調査である。第20次調査は調査面積1,280㎡である。北に第28次調査区、東に第153次調査区と接している。第20次調査に西接する第55次調査は柳原区画の西側の御館区画にまたがるが、柳原区画に含まれる東調査区は後世の耕作などのために遺構面がほぼ全面的に攪乱されており、検出できた遺構はわずかであるため、第20次と一括でふれる。第55次調査の東調査区は調査面積約570㎡である。第20次調査は昭和53年度、第55次調査は昭和59年度の調査である。先述のとおり第55次調査区にはほとんど遺構が残っていないが、第20次調査区では、大型の柱掘形の建物がみられる北東部と、小型の柱掘形の建物が密集してみられる南部と、遺構の検出状況が明瞭に分かれる。

(１)斎宮跡第Ⅰ期の遺構

SB0321　第20次調査区の中央南寄りで検出した4間×2間の大型の東西棟である。史跡の範囲確認調査である第8－9次調査で一部を検出しており第20次調査で全体を確認している。柱間は桁行・梁間とも2.35mであり、柱掘形は一辺0.8m～1.2mの方形で、直径20㎝強の柱痕跡がある。棟方向はN4°Wである。方格地割造営期に近いⅠ－4期～Ⅱ－1期のものとみられる。

SB1040　第20次調査区の北西で検出した南北棟で、北側の第28次調査区で柱穴の延長を確認していないため4間×2間の規模になると推定される。柱間は桁行・梁間とも2.0mで、柱掘形は一辺0.8mの方形、直径20㎝程の柱痕跡がある。N4°Wの棟方向で、出土遺物からもⅠ－4期頃のものと考えられる。

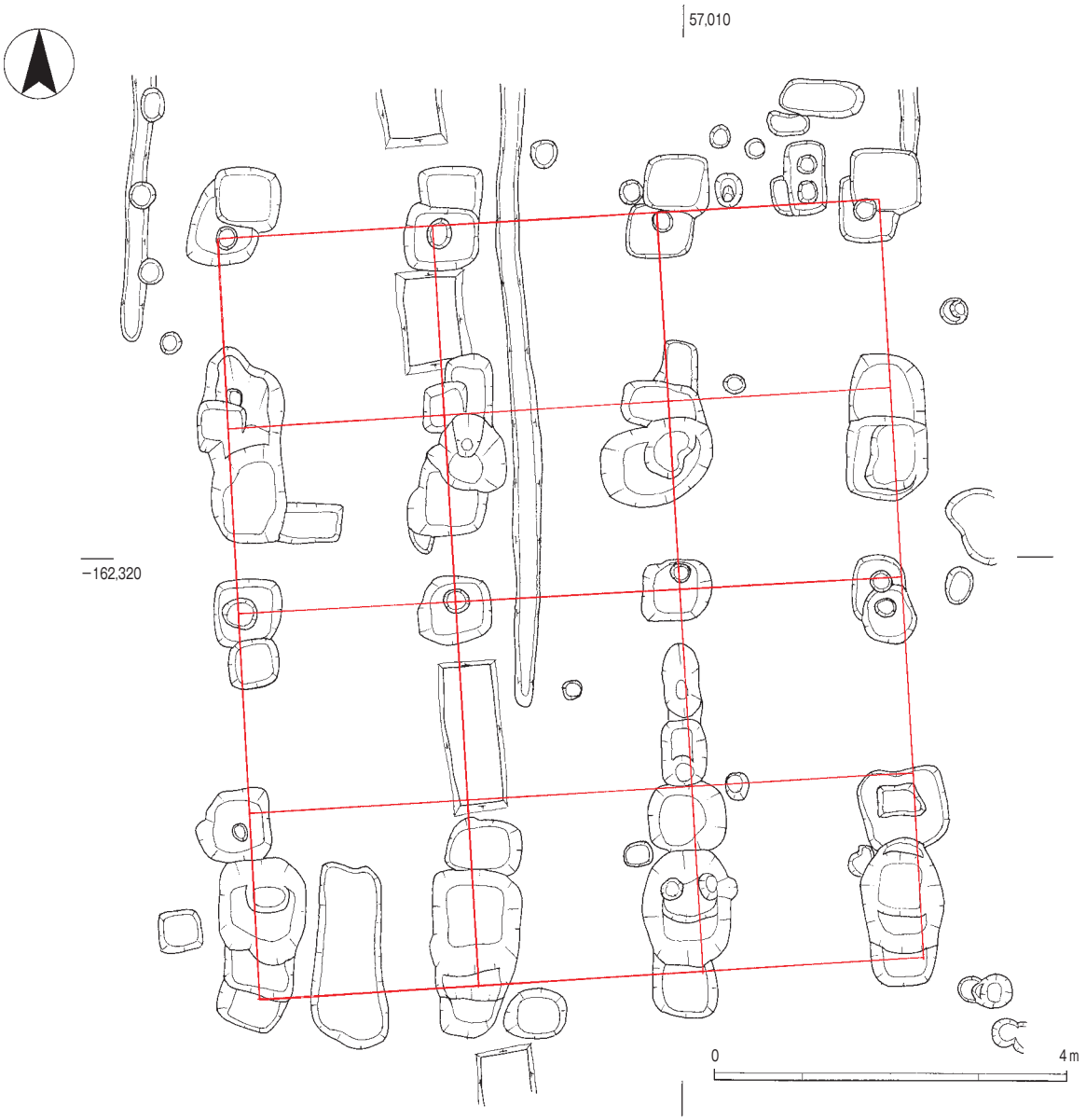
SB1050　第20次調査区北東で検出した南北4間×東西3間の総柱建物である。柱穴のいくつかはⅡ－1～2期のSB1080と重なる。柱間は桁行2.15m、梁間2.5mで、柱掘形は一辺0.7m～0.8mの方形だが、解体時の柱の抜き取りのせいか、一部に歪んだ柱穴がみられる。柱痕跡は20㎝～30㎝である。N4°Wの棟方向で、出土遺物や建物の重複関係、棟方向からⅠ－4期のものと推定する。区画南東部にも同時期の総柱建物SB0263があり、対称的な関係にあるとみられる。

SK1076　第20次調査区南東部で検出した長径3.0m、短径1.2m、深さ約0.3mの細長い土坑である。出土遺物は少ないが、土師器皿A・高杯・甕、須恵器杯A・甕が出土しており、土師器皿はb手法により調整される。同時期のSB0321の東妻側に方向を揃えるような位置関係であり、両者は関連するものとみられる。

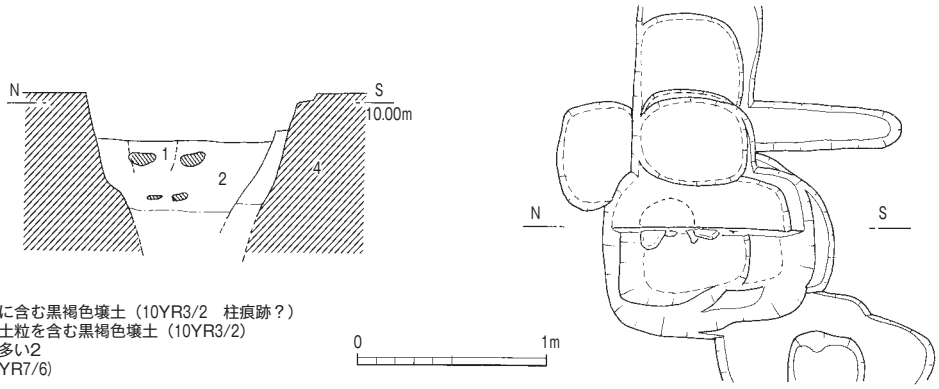
(２)斎宮跡第Ⅱ期の遺構

１)Ⅱ－１～２期の遺構

SB1042　第20次調査区の北端で検出した4間×2間の東西棟で全体の3分の2は北接する第28次調



第 12 図　SB1050 遺構平面図（1 ：80）



1　地山粘土粒を多量に含む黒褐色壌土（10YR3/2　柱痕跡？）
2　地山粘土粒・黒色土粒を含む黒褐色壌土（10YR3/2）
3　黒色土粒の割合の多い2
4　明黄褐色粘土（10YR7/6）

第 13 図　SB1080 柱穴断面図・平面図（1 ：40）

査区に入る。柱間は桁行2.35m、梁間2.6mで、柱掘形は一辺約0.7mの方形である。N3° Wの棟方向を取る。出土遺物と棟方向からⅡ－1～2期頃のものとみられる。

SB1046　第20次調査区北端で検出した3間×2間の南北棟である。柱間は桁行2.2m、梁間2.4mで、柱掘形は最大で1.4m四方の、斎宮跡で検出する掘立柱建物の中でもかなり大型の部類に入る。N0°の正方位を取る。重複関係で斎宮跡Ⅱ－2期の編年基準資料の土器群が出土したSK1045より古いため、Ⅱ－1期頃のものとみられる。

SB1077　第20次調査区北東隅で検出した3間×2間の東西棟で、北側桁行柱筋は南の第28次調査区内へ続く。柱間は桁行2.4m、梁間2.2mで、柱掘形は一辺0.6m～0.7mの方形で、柱穴の底部に直径約20cmの柱痕跡の可能性があるくぼみを持つ。N2° Wの棟方向で、Ⅱ－1～2期のものとみられ、SB1389に先行するものとみられる。

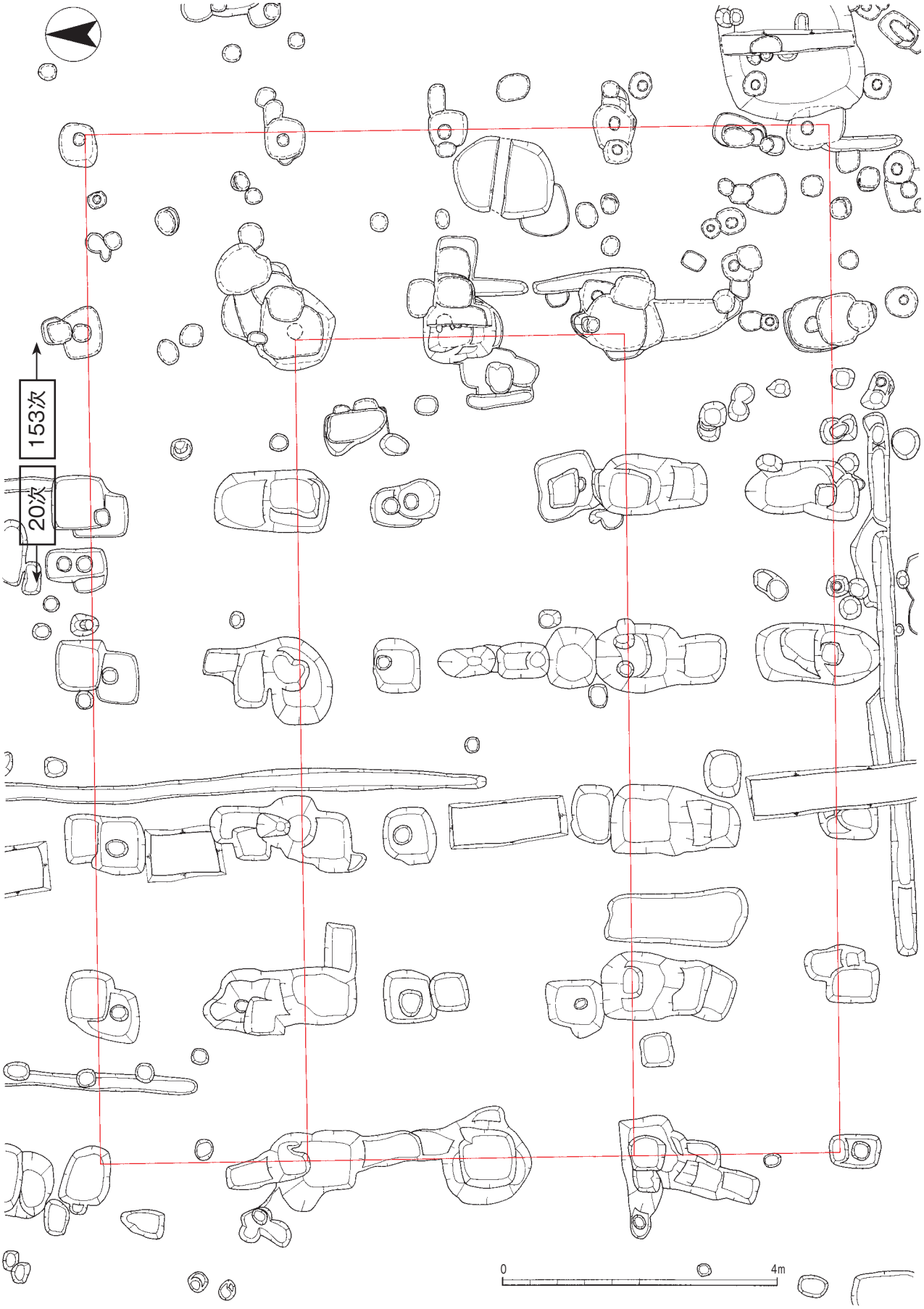
SB1080　第20次調査区の北東部のSB1050と重なる位置で検出した6間×4間の大型の東西棟である。南北東にそれぞれ1間ずつ庇出を持つ三面庇付建物で、この形式は斎宮跡では現在他に類例がない。東庇部分は第153次調査で確認している。なお、第165－2次調査として西側庇の有無について平成21年度に再調査を行ったが、西側庇の痕跡は確認していない(写真図版PL.69上)

柱間は身舎で桁行・梁間とも2.4m(8尺)、庇出は三方とも3.0m(10尺)である。柱掘形は身舎で一辺1.0m～1.2mの隅丸方形、庇で一辺0.5m～0.8mの略方形で、身舎の柱痕跡は明瞭ではないが第153次調査での柱穴の断割りで直径30cm程度の柱痕跡の可能性があるものを確認している。庇の柱は東辺で直径15cm～20cmの柱痕跡を確認している。

第153次調査の検討では、庇柱穴は黒色の埋土を持ち、身舎の柱穴は遺構検出面でも輪郭が不明瞭で埋土も茶色がかった黒褐色土と、庇の柱掘形埋土とは異なることを確認した。この埋土を2cm～3cmずつ慎重に掘り下げたが、方形や円形の明瞭な柱掘形の輪郭を判別しがたく、第20次調査で完掘した柱穴の一個を再発掘して底部までの形状を確認した上で、身舎の３個の東梁行の柱穴のうち中央の１個の掘形埋土を途中まで半裁して遺構の状況を確認した。その結果、身舎の部分では、ほぼ同位置で少なくとも２回以上の掘り直しがあったことが確認された(第13図参照)。さらに、庇と身舎で掘形埋土が異なることもあわせ考えると、SB1080は最低でも、①５間×２間の身舎に、南北東の３方向に１間ずつ庇がつく6間×4間の段階(SB1080a)、②庇がなくなり、身舎の部分の柱穴を前段階とほぼ同じ場所でより大きく掘削したため、前段階の柱穴の痕跡が失われ、5間×2間の建物に変化した段階(SB1080b)、③ほぼ同じ位置で５間×２間の建物が再度建て直された段階(SB1080c)の３段階以上の変遷があったと推定されることとなった。この３段階を通じて、棟方向は東西正方位からＮ１°Ｗ前後におさまるとみている。

SB1080の存続時期については、柱穴埋土の出土遺物と棟方向から、初現をⅡ－1期の中に想定し、建て替えを経たのち、Ⅱ－2～3期とみられるSB9819・9820が重複してくることから、遅くともⅡ－3期頃には廃絶するものと判断した。

SK1045　第20次調査区の北端中央で検出した東西4.0m、南北3.2m、深さ0.8mの大型の土坑である。調査時の詳細な状況は分からないが、遺構図の平面形や調査時の写真から複数の遺構が重複しているようにみえる。土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器が遺物整理箱で30箱以上出土しており、斎宮跡土器編年の第Ⅱ期第2段階(Ⅱ－2期)の基準資料となっている。出土土器の形式幅は大きくないとみられるが、遺構の状況から慎重な取り扱いが必要であろう。位置的に



第 14 図　SB1080 遺構平面図（1：80）

大型の三面庇付建物 SB1080a に伴う廃棄土坑の可能性がある。

SK1056　第20次調査区中央部で検出した南北1.2m、東西0.4mの小さな溝状の土坑である。土師器杯・皿・甕・甑・フイゴや製塩土器片が出土した。Ⅱ－2期に位置づけられる。

SK1079　第20次調査区北半中央付近で検出した東西5.3m、南北4.1m、深さ約0.4mの大型の土坑である。これも複数の土坑が重複している可能性がある。土師器杯・皿・高杯・甕・鍋や須恵器蓋・ 鉢の他炭化材が出土している。遺物の年代観からⅡ－1期のものと考えられる。これも時期や位置関係の上から SB1080a に関係する可能性がある。

2)Ⅱ－3 ～ 4期の遺構

SB10590　第20次調査区南西隅で検出した南北2間の東西棟とみられる建物である。西接する第55次調査区では、遺構面の攪乱のためにこの延長を確認していない。柱間は梁間で1.9mを測り、柱掘形は一辺0.5m～ 0.7mの略方形、N4° 30′ W の棟方向となる。柱穴の遺物からⅡ－3 ～ 4期頃のものと考えた。

SB10592　第20次調査区の南端で確認した東西2間の南北棟とみられる建物である。柱間は桁行・ 梁間とも2.0mとみられ、柱掘形は一辺0.4m～ 0.7mの方形である。棟方向が N10° W と、他の区画内の建物とは大きく異なるが、出土遺物や柱穴の形状からⅡ－3期頃のものと推定した。

SD1044　第20次調査区の北端を東西に横断する溝で、延長で約31m検出している。幅0.8m～ 1.4m、深さ約0.2mの、断面形が緩い「U」字状ないしは逆台形状の溝である。出土遺物は少ないが、土師器の形式からⅡ期でも後半のものと推定した。第152次調査で検出したⅡ期の溝 SD9792と連続するとみられ、60m近い長さが確認でき、柳原区画の南部を大きく区切る施設だった可能性が考えられる。

Ⅱ期には柳原区画東半では第152次調査区の SA9796や第10・159次調査区の SA0564などⅡ－2 ～ 3期頃の東西方向の柵列がみられ、時期的にも近接するため、Ⅱ－2 ～ 3期頃には、柳原区画の南部は大きく区切られる状況に変わったものと考えられる。

SK1073　第20次調査区南半中央付近で検出した南北3.8m、東西3.0m、深さ約0.2mの大型の土坑である。出土遺物は遺物整理箱1箱分ほどの量があるが、Ⅱ－3期に属するものとⅢ－3期とみられるものがそれぞれほぼ等量あり、2時期の土坑が重複していたものと考えられる。Ⅱ－3期の遺物には土師器杯Ａ・皿Ａ・甕・高杯、須恵器杯Ｂ・甕、黒笹90号窯式の灰釉陶器椀・皿などがある。

3)Ⅱ－4期以降の遺構

SB1070　第20次調査区の南西で検出した5間×2間の東西棟である。柱間は桁行2.1m、梁間2.0mで、柱掘形は多数の柱穴の重複によりいびつになっているが、一辺0.6m前後の略方形とみられる。柱痕跡は不明である。N9° W とやや大きく振れた棟方向である。柱穴の遺物からⅡ－4期～Ⅲ－1期頃のものとみられる。

SB1075　第20次調査区南東部で検出した3間×2間の南北棟である。柱間は桁行2.0m、梁間1.85mで、柱掘形は一辺0.3m～ 0.5mの略方形である。Ⅱ－4期～Ⅲ－1期のものとみられ、Ⅲ期の SB10593は SB1075を建替えたものである。

SB10591　第20次調査区南端で検出した東西2間の南北棟とみられる建物である。柱間は桁行1.9m、梁間2.1mで、柱穴は一辺0.3m前後の略方形である。N0°と正方位になる。Ⅱ－4期～Ⅲ－1期頃のものとみられ、位置や規模からⅡ－3 ～ 4期の SB10592を建替えたものとみられる。

4)その他のⅡ期の遺構

SB1041　第20次調査区の北端で検出した4間×2間の東西棟である。大部分は第28次調査区で確認されている。柱間は桁行2.3m、梁間2.0m、柱掘形が0.6m～0.8mの略方形で、N6°Wの棟方向を取る。Ⅱ期の範疇に入るが、出土遺物も僅少で、詳細な時期は分からないが、Ⅱ－1～2期のSB1042とは位置・規模の面から建替えの関係にあると判断できる。

(3)斎宮跡第Ⅲ期の遺構

1)Ⅲ－1期の遺構

SB10595　第20次調査区の西端で検出した南北2間の東西棟とみられる建物である。大部分は西接する第55次調査区に続くが、遺構面の攪乱のためにこの延長は確認できていない。柱間は桁行2.1m、梁間2.5mとみられ、柱穴は直径0.4m前後の円形、柱痕跡は直径10cm～15cm程度とみられる。N5°Wの棟方向を取る。柱穴出土遺物からⅢ－1～2期頃のものとみられる。

SK1048　第20次調査区の北西で検出した東西2.3m、南北2.3m、深さ約0.3mの不整円形土坑である。土師器杯・皿・椀・甕、ロクロ土師器皿・小皿、黒色土器杯、灰釉陶器片、緑釉陶器片、製塩土器片や炭化材が遺物整理箱で2箱分出土している。遺物からⅢ－1期と判断した。

2)Ⅲ－2期の遺構

SB1051　第20次調査区の北西部で検出した4間×3間の東西棟で、北に1間分の庇が付く。柱間は桁行・梁間2.15m、庇出2.1mで、柱穴は身舎も庇も直径0.4m～0.5mで差はない。身舎柱に柱痕跡とみられる直径20cm弱のへこみがある。N2°Wの棟方向を取る。柱穴出土遺物からⅢ－2期以降のものとみられる。

SB1053　第20次調査区西半中央付近で検出した3間×2間の東西棟である。柱間は桁行1.95m、梁間2.1m、柱穴は棟柱を除き一辺0.4m～0.5mの略方形である。N6°30′Wの棟方向で、Ⅲ－2期頃のものとみられる。遺構の重複関係は無いが、規模･形状からSB1054に先行するものとみられる。

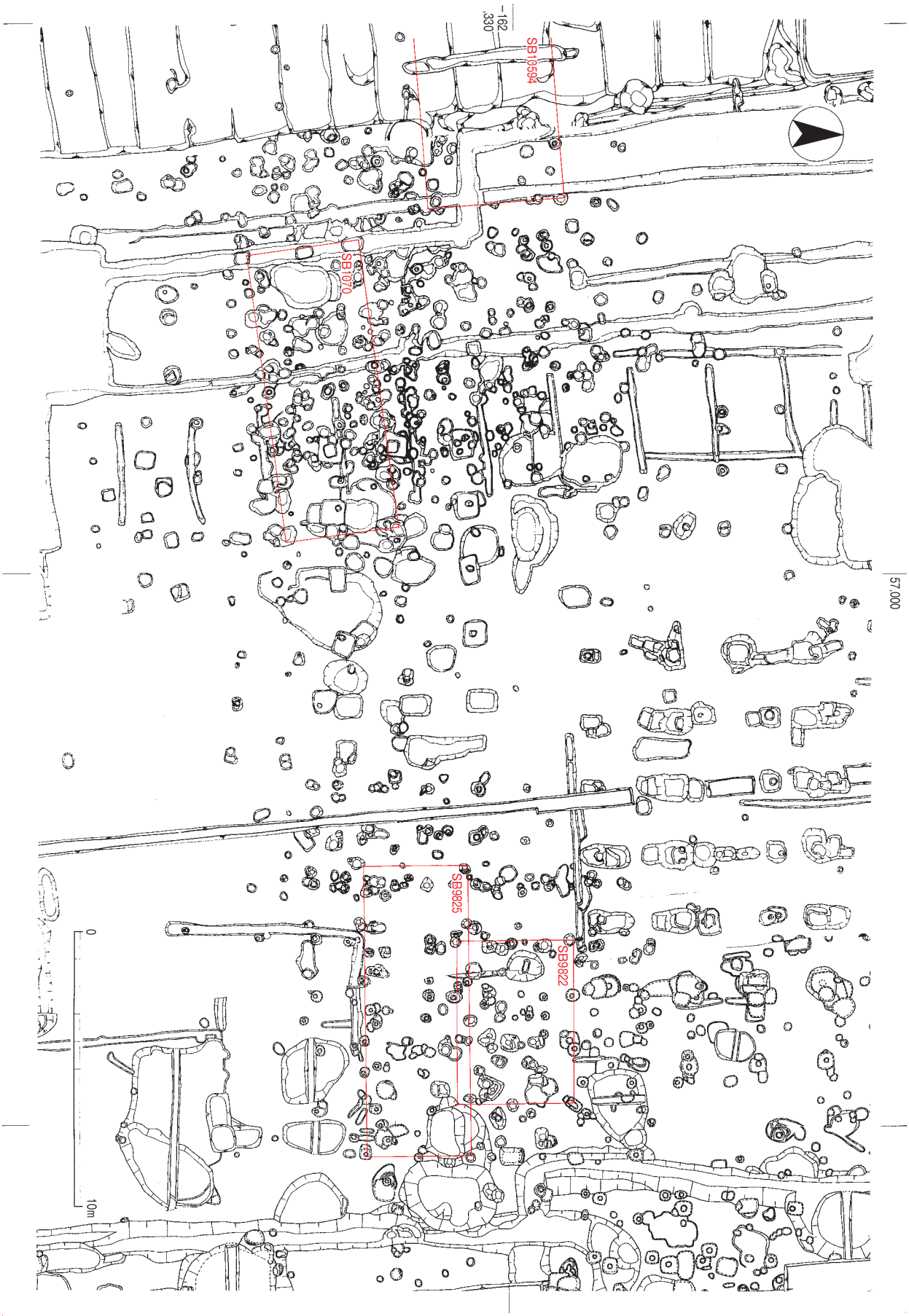
SB1054　SB1053と建替えの関係にあるとみられる3間×2間の東西棟である。柱間は桁行1.9m、梁間1.75mで、柱穴は直径0.3m～0.4m程の略円形である。棟方向もSB1053と同じくN6°30′Wとなる。Ⅲ－2～3期頃のものとみられる。

SB1055　第20次調査区西半中央付近で検出した3間×2間の東西棟である。柱間は桁行2.2m、梁間2.05m、柱穴は直径0.4mの円形である。N3°Wの棟方向を取り、柱穴の遺物からⅢ－2期頃のものと考えられる。先述のSB1053・1054とも連続する関係にあるとみられる。

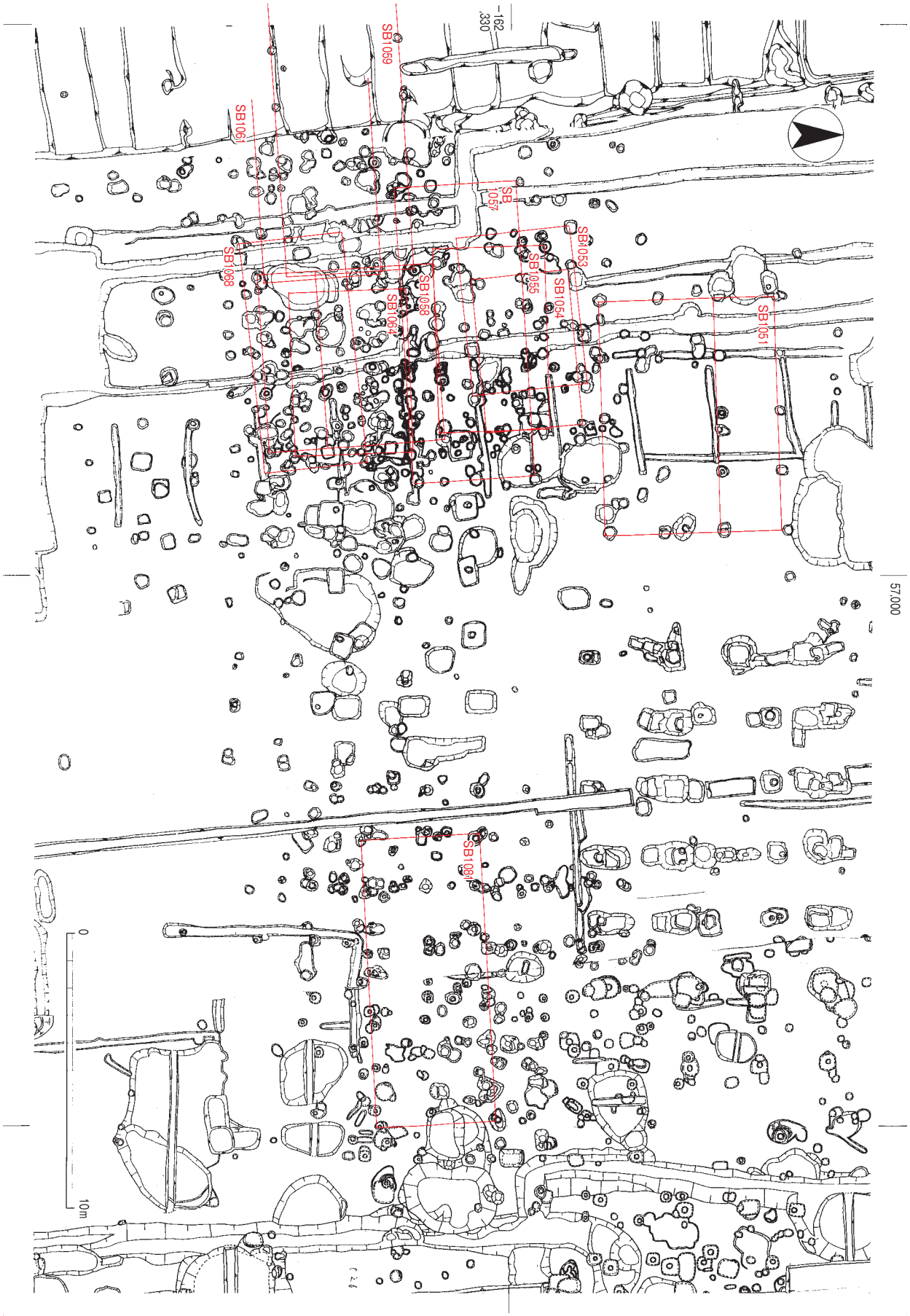
SB1057　第20次調査区南西部で検出した5間×2間の東西棟である。柱間は桁行2.15m、梁間2.2mで、柱穴は直径0.4m～0.5mの円形である。N4°30′Wの棟方向を取る。柱穴出土遺物からⅢ－2～3期頃のものとみられる。

SB1058　第20次調査区南西部で検出した3間×3間の東西棟で、南面に1間分の庇が付く。柱間は桁行・梁間とも2.15m、庇出が2.1mを測る。柱穴は身舎で一辺約0.5mの略方形、庇で直径0.4mの円形になる。柱痕跡は身舎で20cm弱、庇で10cm強である。N4°Wの棟方向で、出土遺物からⅢ－2期以降のものと考えられる。

SB1059　第20次調査区の南西部から、西接する第55次調査区に続く5間×2間の東西棟である。柱間は桁行2.15m、梁間2.3mで、柱穴は直径0.3m～0.4mの円形である。N3°Wの棟方向を取る。柱穴の出土遺物からⅢ－2～3期頃のものとみられる。



第 15 図　第 20 次・第 153 次調査区のⅢ－１期建物　（1：200）



第 16 図　第 20 次・第 153 次調査区のⅢ－２期建物　（1：200）

SB1061　第20次調査区の南西部から、西接する第55次調査区に続く南北2間の東西棟とみられ、東西の規模は不明である。柱間は桁行2.0m、梁間2.15mで、柱穴は直径0.3m～0.4mの円形ないし不整円形である。N3°Wの棟方向を取る。Ⅲ－2期以降のものとみられる。

SB1064　第20次調査区南西部で検出した3間×2間の東西棟である。柱間は桁行2.0m、梁間2.1mで、柱穴は直径0.4m前後の不整円形である。N2°Wの棟方向を取る。出土遺物からⅢ－2期以降のものとみられる。

SB1068　第20次調査区南西部で検出した4間×2間の東西棟である。柱間は桁行2.1m、梁間1.9m、柱穴は直径0.25m～0.4mの円形である。N6°Wの棟方向を取る。出土遺物からⅢ－2期以降のものとみられる。

SB1081　第20次調査区の南東部で検出した5間×2間の東西棟で東半部は第153次調査区で検出している。柱間は桁行2.1m、梁間2.2m、柱穴は0.3m～0.4mの円形で、直径約10cmの柱痕跡がある。棟方向はN3°Wである。出土遺物からⅢ－2期以降のものとみられる。

SK1074　第20次調査区南半中央部で検出した南北1.6m、東西1.4m、深さ約0.3mの楕円形の土坑である。斎宮跡土器編年第Ⅲ期第2段階（Ⅲ－2期）の基準資料で、土器類が遺物整理箱5箱分出土している。土師器杯・小皿・鉢・甕、ロクロ土師器杯・台付杯・台付皿・小皿・台付小皿・椀、須恵器片、灰釉陶器椀・鉢・瓶類が出土し、特に灰釉陶器が多く、出土量の60％を占めている。Ⅲ－2期でも新相のものとみられ、Ⅲ－3期相当のものも混在している可能性がある。

3）Ⅲ－3期以降の遺構

SB0322　第20次調査区の南東部で検出した5間×2間の東西棟である。史跡範囲確認調査の第8－9次で検出され、第153次調査で東の部分を確認している。柱間は桁行1.7m、梁間1.8m、柱穴は直径0.3m～0.4mの円形で、直径約10cmの柱痕跡がある。棟方向はN2°Eと周辺の建物と大きく異なる。柱穴の重複関係からSB1081より新しく、出土遺物は乏しいがⅢ－3期以降のものと推定した。

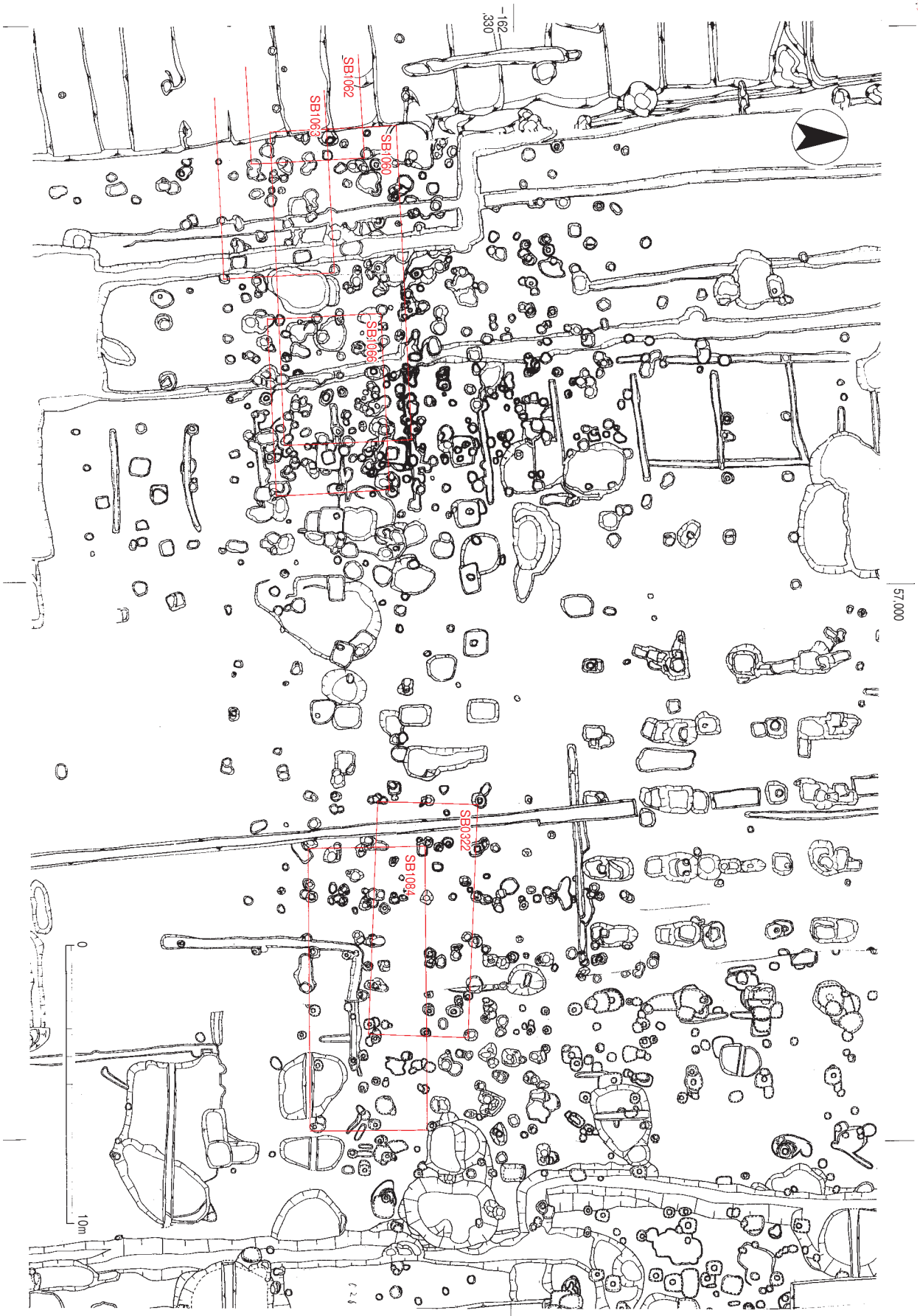
SB1060　第20次調査区南西部で検出した5間×2間の東西棟とみられる。西側梁間筋は第55次調査区に伸びているが、遺構面攪乱のため確認できていない。柱間は桁行2.25m、梁間2.3m、柱穴は直径0.3m～0.4mの不整円形である。N3°Wの棟方向を取る。出土遺物からⅢ－3期以降のものとみられる。

SB1062　第20次調査区の南西端で検出した南北2間の東西棟になるとみられる建物である。東側梁間筋のみ検出し、大部分は第55次調査区へ延びていて、遺構面攪乱により確認できていない。柱間は梁間で2.0mを測る。N6°Wの棟方向とみられる。出土遺物等からⅢ－3期以降のものとみられる。

SB1063　第20次調査区南西部で検出した南北2間の東西棟とみられる建物である。柱間は桁行2.1m、梁間2.0mで、西側梁間柱筋は第55次調査区まで延びており確認できていない。柱穴は直径0.3mの円形である。N3°Wの棟方向を取る。出土遺物等からⅢ－3～4期頃のものとみられる。

SB1066　第20次調査区南西部で検出した3間×2間の東西棟である。柱間は桁行・梁間とも2.1mを測る。柱穴は一辺0.3m～0.5mの略方形ないしは不整円形である。N5°Wの棟方向を取る。出土遺物からⅢ－3期頃のものとみられる。

SB1084　第20次調査区の南東部で検出した5間×2間の東西棟である。東半部は第153次調査区で



第 17 図　第 20 次・第 153 次調査区のⅢ－３～４期建物　（1：200）

検出している。柱間は桁行2.05m、梁間2.1mで、柱穴は直径0.3m～0.4mの円形で、直径約10cmの柱痕跡がある。N1°Wの棟方向を取る。出土遺物は乏しいが、Ⅲ－3期以降のものとしたい。

SD1043　第20次調査区北端で検出した、幅約1.2mの断面形が緩い「U」字状の溝である。調査区内での検出長は14.5mだが、北接する第28次調査区で西への延長を確認しており、全体で約42mの長さになる。また、東の第152次調査区のSD9791とも一体のものとみると68mもの延長を持ち、Ⅱ期後半のSD1044と同様、柳原区画の南部を区切る施設であったと考えられる。

SK1049　第20次調査区北西部で検出した南北2.2m、東西2.1m、深さ約0.25mの不整形土坑である。土師器杯・小皿、ロクロ土師器杯・台付杯・小皿・台付小皿、白色土器系の椀が出土している。Ⅲ－3期のものとみられる。

SK1069　第20次調査区中央やや南寄りで検出した直径1.3m、深さ約0.25mの不整円形の土坑である。土師器杯・小皿、ロクロ土師器台付杯・小皿、白色土器系の椀、須恵器片、灰釉陶器片、白磁片や土錘が出土している。Ⅲ－3期のものとみられる。

SK1071　第20次調査区中央やや南寄りで検出した南北1.6m、東西1.4m、深さ約0.25mの楕円形土坑である。土師器皿・小皿、黒色土器A類の椀、ロクロ土師器杯・台付杯、須恵器片、白磁片が出土している。Ⅲ－3期のものとみられる。

SK1072　第20次調査区中央やや南寄りで検出した直径0.7m、深さ約0.1mの小規模な土坑である。土師器杯・皿・小皿・台付小皿、ロクロ土師器台付小皿などが出土している。Ⅲ－3～4期にかけてのものとみられる。

SK1073　Ⅱ期でも報告したが、調査区南半中央付近で検出した南北3.8m、東西3.0m、深さ約0.2mの大型の土坑で、出土遺物からⅡ－3期とⅢ－3期の2時期の土坑が重複していたものと考えられる。Ⅲ－3期の遺物には「て」の字口縁の土師器皿、ロクロ土師器杯・小皿・台付小皿、黒色土器B類の椀などがある。

SK3571　第55次調査東調査区南西隅で検出した南北約1.5m、東西約1.0m、深さ約0.4mの楕円形の土坑である。土師器杯・小皿、無釉陶器椀(山茶椀)が出土している。Ⅲ－3期のものとみられる。

4)その他のⅢ期の遺構

SB1047　第20次調査区北部で検出した3間×2間の南北棟である。桁行1.9m、梁間2.3m、柱穴はおおむね直径0.3m～0.4mの略円形である。N2°Wの棟方向を取る。出土遺物が僅少なため、詳細な時期決定ができないが、Ⅲ期に属すと考えられる。

SB1078　第20次調査区東端中央で検出した3間×2間の東西棟で、桁行2.1m、梁間1.85m、柱穴は直径0.3m～0.5mの円形である。N1°Wの棟方向を取る。規模や柱穴の遺物からⅢ期の建物とみられるが、詳細な時期は分からない。

SB10593　第20次調査区南東部で検出した3間×2間の南北棟である。柱間は桁行2.0m、梁間1.85mで、柱穴は直径0.3mの円形である。N7°Eの棟方向を取る。出土遺物からⅢ期のものとみられる。SB1075とは建替えの関係にある。

(4)時期不明の遺構

SK1052　第20次調査区中央部で検出した南北2.2m、東西1.8m、深さ約0.25mの楕円形の土坑である。出土遺物はなく、時期決定できない。

SD1085　第20次調査区南東隅で検出した溝で「L」字に折れて第153次調査区に続く。幅約0.5m、

延長は東西に4.5m、南北に7.2mである。出土遺物がなく、時期決定できない。

第５節　第28次調査区の遺構

柳原区画の西中央部での昭和54年度の調査である。調査面積は1,420㎡である。南に第20・55次調査区、東に第152次調査区と接している。また、未舗装の里道をへだてて北に第157次調査区がある。調査区の全面に後世の耕作溝が縦横にみられる他、調査区北を東西に中世から近世の溝が横断している。調査区の北端付近に比較的大規模な掘立柱建物が密集しているほか、調査区南東部にはほとんど遺構が空白な箇所がある。

（１）斎宮跡第Ⅰ期の遺構

SB1301　調査区北端で検出した桁行4間の東西棟である。現道を隔てた第157次調査区で建物の延長を確認していないので梁間2間になるとみられる。柱間は桁行2.35mで、柱掘形は一辺0.4m～0.5mの略方形で規模は小さい。N3°Wの棟方向を取り、出土遺物からⅠ－4期頃のものとみられる。

SB1302　SB1301とほぼ同じ位置・規模の桁行4間の東西棟である。やはり北半は調査区外へ続いているが、梁間は2間とみられる。柱間は桁行で2.4m、柱掘形は一辺およそ0.4mの略方形である。N4°Wの棟方向を取り、これもⅠ－4期頃のものとみられる。

SK1291　概要報告の段階では、SK1370と誤認されていたため、遺構番号の訂正を行った。調査区南端中央付近で検出し、調査区中央の南北セクションベルトにさえぎられるため、全容は確認できないが、東西約6m、南北5.7m、深さ0.25mの不整円形の土坑である。遺構の平面形や底部の状況から複数の掘り込みが重複している可能性がある。遺物整理箱で2箱分の土器類が出土しており、土師器杯Ａ・杯Ｂ・杯Ｇ・高杯・甕、須恵器杯・蓋・高杯・甕や製塩土器片など、若干他の時期の混入もあるが概ねⅠ－4期の廃棄土坑とみられる。古代伊勢道の中央に位置するため、この部分での伊勢道の廃絶と、方格地割造営期に関わる遺構とみられる。

SK1292　調査区北西隅で検出した土坑で、北と西が調査区外へ続くため規模は不明である。深さは約0.4mである。土師器杯・皿・甕、須恵器杯Ｂ・蓋・壺などが整理箱１箱分出土している。出土土器の中には形式的にⅡ－3期のものもあり、一部埋土上面から掘り込まれた遺構が混在しているとみられる。

SK1296　調査区の北西隅で検出した東西5.8m、南北7.5m、深さ0.5mの略円形の土坑である。調査時の写真を見ると底部は平坦であり、SK1296内北寄りに井戸SE1295があるため、これらは一体のものかもしれない。土師器杯・皿・甕、須恵器片が出土しており、Ⅰ－4期とみられる。

SK1299　SK1296の東に接する南北約2m、深さ約0.2mの土坑である。土師器片が出土している。

SD1327　調査区の南半を斜めに通り抜ける溝で、古代伊勢道の北側溝である。幅0.5m～0.6m、深さ約0.05m～0.3mの断面「Ｕ」字形である。遺構番号はひとつだが、調査区中央で一旦途切れている可能性がある。おおむねE15°Sの方向を取る。Ⅰ期の遺物は少なく、調査時の混入とみられる灰釉陶器片が出土している。

SD1332　調査区南半を東西に走る溝で、柳原区画西辺道路東側溝であるSD1328から東に約32mの延長を持つ。途中調査区の中央で一旦途切れるが、本来の溝の姿なのか遺構面の削平により途切れるのかは判断できない。幅約1m、深さ約0.2mの断面形が浅い「Ｕ」字状の溝である。溝の

方向はほぼE4°Nであり、方格地割に関連する遺構と考えられるため、Ⅰ－4期頃の遺構と考えられる。Ⅲ期の遺物が出土するが、調査時の混入とみられる。

SK1348　調査区の北西部でSD1326と重複する南北1.5m、深さ約0.2mの土坑である。出土遺物からⅠ－4期のものと分類した。溝との前後関係は分からない。

SK1353　調査区の北西部でSD1326と重複する直径約0.8m、深さ約0.2mの円形土坑である。出土遺物からⅠ－4期のものと分類した。溝との前後関係は分からない。

SK1370　調査区北西隅で検出した南北約5m、深さ約0.4mの大型土坑で、概要報告の段階ではSK1291と誤認されていたものを改めた。土師器杯・皿・椀・高杯・甕、須恵器杯B・蓋・鉢・壺Eなどが遺物整理箱で2箱分出土している。Ⅰ－4期のものと考えられる。

SK1372　調査区中央部やや東寄りで検出した直径0.7m、深さ約0.1mの小規模な円形土坑である。出土した土師器片からⅠ－4期と分類したが、詳細は不明である。

SK1383　調査区北東部でSD1384に接して検出した一辺約0.8m、深さ約0.5mの略方形の土坑である。螺旋暗文を持ち、b手法により調整される土師器皿が1点出土しているため、Ⅰ－4期と判断した。

SD1395　調査区の南西隅を斜めに走る溝で、古代伊勢道の南側溝である。幅0.5m～0.6m、深さ約0.1m～0.2mの断面「U」字形で、第28次調査区内では延長12.3mを検出しているが、第20次～第153次調査区でもさらに10.2m分を確認している。第153次調査区では深さ5cmしか残っておらず、東のSD6802と食い違うように途切れて合流しない様子が確認されている。おおむねE15°Sの方向を取る。出土遺物はほとんどないが、黒色シルト質の埋土からⅠ期のものと考えられる。

SE1295　調査区北西隅で検出した井戸である。東西2.5m×南北2.2mの略円形の素掘りの井戸で、安全のため深さ約1mまでしか調査していない。井戸掘形周辺に屋形の痕跡はない。断面形は深さ約0.7mまで緩傾斜ですぼまり、以下ほぼ垂直の掘形になる。深さ1.5m前後で壁面に礫層が現れ、崩落により広くなる。調査時には土師器杯・皿類や須恵器杯Bなどの他、ロクロ土師器や灰釉陶器椀なども出土しており、最終的な埋没がⅡ－4期～Ⅲ－1期頃と想定されるが、井戸掘形周辺のSK1296は一体のものと考えられ、また柳原区画内の井戸の分布の面からも井戸の掘削はⅠ－4期頃まで遡りえると考える。

（2）斎宮跡第Ⅱ期の遺構

1）Ⅱ－1～2期の遺構

ここでは、Ⅱ－1～2期頃に成立していた可能性のある建物について記載する。存続期間も含めてⅡ－3期頃まで及ぶ可能性のあるものも含めて記述する。

SB1306　調査区北西隅で検出した3間×2間の南北棟である。柱間は桁行1.9m、梁間2.0mで、柱掘形は一辺0.7mの方形ないしは略方形で、掘形底部には直径25cmほどの柱痕跡とみられるくぼみがある。N0°の棟方向で、出土遺物からⅡ－1期以降のものと考えられる。柱穴の重複関係からSB1307に先行する。

SB1307　SB1306を建替えたものである。3間×2間の南北棟で、柱間は桁行・梁間とも2.0m、柱掘形は一辺0.5m前後の略方形である。棟方向はN1°30′Wほどになる。これもⅡ－1期頃のものとみられる。

SB1310　調査区北端で検出した5間×2間の東西棟である。柱間は桁行2.45m、梁間2.5m、柱掘

形は一辺0.8m～1.0mの方形で、柱穴底部に直径20cm～25cmの柱痕跡とみられるくぼみがある。N2°30′Wの棟方向で出土遺物からⅡ－1～2期頃のものと推定した。

SB1315　前後関係は分からないが、位置・形状からSB1310と建替えの関係にあるとみられる5間×2間の東西棟である。柱間は桁行2.35m、梁間2.2mで、柱掘形は一辺0.8m～1.0mの方形で、腹穴底部に直径約25cmの柱痕跡とみられるくぼみがある。N1°Wの棟方向を取り、これもⅡ－1～2期のものとみられる。

SB1321　調査区の北端で検出した3間×2間の東西棟である。柱間は桁行1.85m、梁間1.8mで、柱掘形は一辺0.4m～0.5mの略方形である。N1°Wの棟方向を取る。出土遺物からⅡ－2期頃のものと推定した。

SB1325　調査区の北端で検出した5間×2間の東西棟である。北東隅柱が調査区外にある。柱間は桁行2.1m、梁間2.5mで、柱掘形は一辺0.7m～1.0mの方形である。N5°Wの棟方向を持つ。Ⅱ－1～2期のものとみられ、位置関係からみてⅡ－3期にはSB1318に建替えられるものとみられる。

SB1360　調査区のほぼ中央で検出した3間×2間の東西棟である。柱間は桁行・梁間とも1.8mで、柱掘形は一辺0.5m～0.6mの略方形である。N9°Wと、周辺の他の建物と大きく異なる棟方向を持つ。柱穴出土遺物からⅡ－2期以降のものと推定する。

SB1389　調査区南東隅で検出した3間×2間の東西棟で、南側桁行柱筋は南の第20次調査区に続く。柱間は桁行1.8m、梁間1.95mで、柱掘形は直径0.4m～0.5mの不整円形である。N5°Wの棟方向を持つ。出土遺物からⅡ－2～3期頃のものとしたが、規模等から位置的に重なるSB1077やSB1390に後続し、Ⅱ－3期まで下るかもしれない。

SB1390　第20次調査区の北端で検出した3間×2間の東西棟で、大部分は第28次調査区に含まれる。柱間は桁行2.0m、梁間1.75m、柱掘形も直径約0.6mの不整円形と小規模な建物である。N2°Wの棟方向で、Ⅱ－1～2期頃のものと考えられ、第28次調査で検出した3間×2間のSB1390と重なるが、前後関係は明確でない。

SB1391　調査区の南東隅で検出した3間×2間の東西棟とみられる建物で、東半は第152次調査区に続くが、南側桁行柱筋は未調査である。柱間は桁行1.9m、梁間1.8mで、柱掘形は一辺約0.5mの略方形で、直径10cm強の柱痕跡がある。N1°Eの棟方向を取り、柱穴が重複するほぼ同時期のSB1392より新しいことから、Ⅱ－2期まで下る可能性がある。

SB1392　調査区南東隅で検出した3間×2間の東西棟とみられる建物で、これも第152次調査区まで続いている。南側桁行柱筋は未調査である。柱間は桁行2.5m、梁間2.4mで、柱掘形は最大の北東隅柱のもので一辺1mを超え、柱痕跡は直径約20cmである。棟方向はN0°である。柱穴の重複関係からSB1391に先行し、Ⅱ－1期のものとみられる。

SB10596　調査区北東部で検出した3間×2間の東西棟である。柱間は桁行2.0m、梁間1.95mで、柱穴は一辺約0.4mの略方形ないしは不整円形である。N2°Wの棟方向を取る。出土遺物等からⅡ－2～3期のものと推定する。

SK1322　調査区北端で検出した南北3.1m、東西2.2m、深さ約0.3mの楕円形土坑である。土師器杯・皿・椀・甕、黒色土器A類椀、須恵器片、製塩土器片が出土しており、Ⅱ－2期のものとみられる。

SD1326　調査区北半部を東西に走る溝で、幅1m前後、深さが第28次調査区検出の西端で約0.05

m～0.2m、第152調査区で0.1m～0.15mの、断面形が浅い「U」字形ないし逆台形の溝である。西から中央にかけての延長約24.5m分と、そこから東に約9mの間いったん途切れ、そこから東接する第152次調査区までの延長約17.5m分に分かれるため、西半をSD1326A、東半をSD1326Bとする。溝の方向はいずれも東西正方位である。

SD1326Aの西端からは南に彎曲して区画道路東側溝に続く幅約0.5m、延長約7.5mの細い溝が続き、調査時には一体のものとして把握していたようである。

SD1326B東端では溝底部から若干上のレベルで土師器鍋Bが破砕した状態で出土しており、先行する時期の遺物も出土したが、Ⅱ－1～2期頃のものとみられる。形状が似た同時期の溝2条が方向を揃えており、それぞれ末端部が角ばっているため、排水ではなく区画を意識した溝と考えられる。SD1326AとSD1326Bの間隙は区画内の通路であった可能性が高い。

SD1328　調査区西端で検出した検出長約22m、幅約1m、深さ約0.2m～0.25mの南北溝で、柳原区画西辺道路東側溝に位置する。溝の方向は概ねN4°Wである。ほぼ同時期ながらSD1329に西肩を掘削されており、側溝の掘り返しがあったとみられる。出土遺物は少量で、土師器杯・皿、須恵器片が出土している。Ⅱ－1～2期のものとみられる。

SD1329　SD1328の西側に平行して掘削された幅約1.3m、深さ約0.3m、検出長10m以上の溝である。埋土の重複関係からSD1328より新しいものである。土師器杯・皿・椀・高杯・甕、須恵器片が出土しておりⅡ－1～2期のものとみられる。

SK1354　調査区の中央やや南西寄りで、伊勢道北側溝SD1327に重複して検出した、南北およそ1.8m、深さ約0.25mの楕円形土坑である。土師器杯・皿・椀・甕や灰釉陶器皿が出土しており、Ⅱ－2～3期のものとみられる。

SK1366　調査区の中央やや南寄りで検出した東西2.3m、南北1.5m、深さ約0.25mの楕円形の土坑である。調査図面からみられる底部形状から、2基の土坑が重なったものである可能性がある。土師器杯・皿・椀・甕、須恵器杯B、灰釉陶器椀などが出土しており、Ⅱ－2期のものとみられる。

SK1377　調査区南端中央で検出した南北2.6m、東西1.8m、深さ約0.3mの不整形の土坑で、土師器杯・皿・椀・甕、須恵器杯・蓋のほか土錘、刀子が整理箱で1箱分出土している。Ⅱ－1期に分類される。

2）Ⅱ－3期の遺構

SB1318　調査区北端で検出した4間×2間の東西棟である。柱間は桁行・梁間とも2.35m、柱掘形は一辺0.6m～0.8mの方形で、柱穴底部に直径20㎝～25㎝の柱痕跡とみられるくぼみを持つ。N5°Wの棟方向で、ほぼ同規模のSB1325に後続するものと考えられる。

SB1320　調査区北端で検出した5間×2間の東西棟である。柱間は桁行2.1m、梁間2.2mで、柱掘形は一辺約0.8mの方形である。直径20㎝弱の柱痕跡とみられるくぼみがある。N4°Wの棟方向で、出土遺物等からⅡ－3期以降のものと推定されるが、SB1310・1315といったⅡ－1～2期の5間×2間の建物に後続するものとみられる。

SB1340　調査区中央やや南西寄りで検出した5間×2間の東西棟である。柱間は桁行2.1m、梁間2.2mで、柱掘形は直径0.4m～0.5mの不整円形である。N3°30′Wの棟方向を取る。出土遺物等からⅡ－3期～Ⅲ－1期にかけてのものとみられる。

SB1380　調査区南端中央で検出した3間×2間の東西棟である。柱間は桁行1.9m、梁間2.0mで、

柱掘形は一辺0.5m～0.6mの略方形である。柱穴底部に直径20cm弱の柱痕跡とみられるくぼみがある。N6°Wの棟方向を取る。Ⅱ－3期頃と推定され、Ⅱ－2期以降のSB1360に後続するものとみられる。

SB1394　SB1380の北側で検出した3間×2間の東西棟である。柱間は桁行1.85m、梁間1.75mで、柱掘形は一辺0.5m～0.6mの略方形である。N7°Wの棟方向で、前後関係は不明だがSB1380とともにⅡ－2期以降のSB1360に後続するものと考えられる。

SK1294　調査区の北西隅で検出した東西2.5m、南北1.8m、深さ約0.4mの不整形土坑である。土師器杯・皿・甕、須恵器蓋・甕、灰釉陶器椀・皿が整理箱でおよそ1箱分出土しており、Ⅱ－3～4期にかけてのものとみられる。

SK1303　調査区北西隅で検出した南北2.7m、東西1.4m、深さ約0.25mの楕円形土坑である。土師器杯・皿・甕、灰釉陶器椀が出土しており、Ⅱ－3期のものとみられる。

SK1337～1339　調査区の西部中央付近で検出した不整形の小土坑群である。相互の前後関係は不明である。出土遺物は少ないが土師器類などからⅡ－3期のものと推定した。

SK1356　区画中央南西寄りで検出した直径約1.2m、深さ約0.1mの小規模な土坑である。土師器片・須恵器片が少量出土しており、Ⅱ－3期に分類した。

SK1364　調査区中央で検出した南北2.0m、東西1.3m、深さ約0.15mの略楕円形の土坑である。土師器片・須恵器片・灰釉陶器片が少量出土しており、Ⅱ－3期に分類した。

SK1374　調査区中央で検出した長径約1.2mの小規模土坑である。土師器皿・灰釉陶器椀が出土しており、Ⅱ－3期に分類した。

SK1381　調査区の北東部で検出した一辺約1.1m、深さ約0.1mの略方形の土坑である。土師器皿、灰釉陶器片が出土しており、Ⅱ－3期に分類した。

SK1387　調査区東部中ほどで検出した直径約0.5mの小規模土坑である。土師器杯片が出土しており、Ⅱ－3期に分類した。

3）Ⅱ－4期の遺構

SB10598　調査区中央南西寄りで検出した5間×2間の南北棟である。柱間は桁行1.7m、梁間2.1mで、柱穴は直径約0.3mの円形である。棟方向はN5°Wである。第28次調査区内では数少ない南北棟で、柱穴の遺物等からⅡ－4期～Ⅲ－1期にかけてのものと推定した。

SK1347　調査区南西部で検出した東西2.2m、南北1.6m、深さ約0.3mの楕円形の土坑である。土師器杯・皿や緑釉陶器片が出土しており、Ⅱ－4期に分類した。

SK1352　調査区南西部のSK1347の東で検出した、東西約2.0m、南北1.3m、深さ約0.25mの三角形の土坑である。出土した土師器杯からⅡ－4～Ⅲ－1期のものと推定した。

（3）斎宮跡第Ⅲ期の遺構

1）Ⅲ－1期の遺構

SB1330　調査区の南西隅で検出した5間×2間の東西棟である。柱間は桁行1.95m、梁間2.0mで、柱穴は直径約0.5mの円形である。棟方向はN7°Wで、柱穴出土遺物からⅢ－1～2期のものと推定した。

SB1350　調査区南西部で検出した3間×2間の南北棟である。柱間は桁行2.0m、梁間2.2mで、柱穴は直径約0.4mの不整円形である。N7°Wの棟方向を取る。出土遺物からⅢ－1期以降のものと

判断した。

SB1373　調査区中央で検出した3間×2間の東西棟である。柱間は桁行1.8m、梁間1.95mで、柱穴は直径約0.4mの円形である。棟方向はN5°Eと周辺の他の建物と大きく異なる。出土遺物からⅢ－1期頃のものと推定した。

SB1393　調査区中央南寄りで検出した5間×2間の東西棟である。柱間は桁行1.95m、梁間2.1mで、柱穴は直径0.4m～0.5mの円形である。棟方向はN4°Wである。出土遺物からⅢ－1期頃のものと推定した。

SK1297　調査区北西隅部で検出した南北2.2m、東西1.8m、深さ約0.4mの不整円形の土坑である。土師器杯・小皿・台付皿、ロクロ土師器小皿や東山72号窯式相当の灰釉陶器椀などが遺物整理箱でおよそ1箱分出土しており、Ⅲ－1期のものとみられる。

SK1345　調査区西部中央で検出した東西2.2m、南北1.6m、深さ約0.3mの楕円形土坑である。土師器杯、美濃産とみられる灰釉陶器片が出土しており、Ⅲ－1～2期頃のものと推定した。

SK1349　調査区中央西寄りで検出した長径約1mの小規模土坑である。土師器台付皿・小皿が少量出土しており、Ⅲ－1期と推定した。

SK1351　調査区中央西寄りのSK1345の東側で検出した長径1.3mの小規模土坑である。土師器片、ロクロ土師器小皿が出土しており、Ⅲ－1～2期頃のものと推定した。

2）Ⅲ－2期の遺構

SB10597　調査区南西部で検出した5間×2間の南北棟である。柱間は桁行1.8m、梁間2.1mで、柱穴は直径約0.3mの円形である。N1°30′Wの棟方向となる。出土遺物や他の建物との関係からⅢ－2期頃のものと推定した。

SK1336　調査区の南西隅部で検出した長径約1.3mの小規模土坑である。土師器台付皿・小皿が出土しており、Ⅲ－2期に分類した。

SK1341～1344　調査区西部中央付近で検出した小規模土坑群で、相互の前後関係は不明である。土師器杯・皿、ロクロ土師器、無釉陶器椀（山茶椀）などが出土しており、Ⅲ－2～3期のものと推定される。

3）Ⅲ－3期以降の遺構

SD1335　調査区の南端を東西に走る溝である。幅0.5m～0.7m、深さ約0.1m～0.15mで、断面形が逆台形になる。土師器台付皿、ロクロ土師器皿、灰釉陶器椀、無釉陶器椀（山茶椀）が出土しており、Ⅲ－3期以降のものとみられる。

SD1388　調査区東端中央付近で検出した幅約0.5mの「L」字状に折れる溝である。東の第152次調査区までは延長しない。土師器片や瓦器片、無釉陶器椀（山茶椀）が出土しており、Ⅲ－3期以降のものと推定した。

4）その他のⅢ期の遺構

SB1333　調査区南西で検出した3間×2間の東西棟である。柱間は桁行・梁間とも2.0mである。柱穴は直径約0.3mの円形である。N7°Wの棟方向を取る。出土遺物等からⅢ期と判断した。

SB1334　SB1333と重複する3間×2間の東西棟である。柱間は桁行2.0m、梁間1.95mで、柱穴は直径約0.3mの円形である。N7°Wの棟方向で、前後関係は分からないがSB1333とは建替えの関係にある。

SB1386　調査区の北東で検出した3間×2間の東西棟で、第152次調査区へ続く。柱間は桁行1.7m、梁間1.9mで、柱穴は直径0.3m～0.4mの不整円形である。棟方向はN1°Wで、出土遺物がないため、時期決定は困難だが、東のSB9751と棟方向を揃えることからⅢ－1期頃のものである可能性がある。

SB1396　調査区の北端で検出した3間×2間の東西棟である。柱間は桁行1.9m、梁間1.95mで、柱穴は直径約0.3mの円形である。N7°30′Wと、調査区内でも大きく振れる建物だが、Ⅲ－1期のSB1373と規模や棟方向が近似しており、あるいは同時に建てられていた可能性がある。

（４）時期不明の遺構

SB10599　調査区南西隅で検出した梁間2間の南北棟と考えられる建物である。柱間は桁行1.8m、梁間1.75mで、柱穴は直径約0.3mの不整円形である。Ⅲ期頃のものであろうか。

SA10600　調査区北半を東西に横切る柵列である。9間分、延長28.5mを検出した。柱間は2.6m～3.9mとバラつきがあり、N11°30′Wという、他の建物にみられない方向を取り、出土遺物もないため時期決定できないが、斎宮とは時期の異なるものである可能性がある。

また、以下の遺構については、概要報告の段階で遺構番号が付されているものの、形状や出土遺物の状況から考えて、近世以降の攪乱や耕作の痕跡と判断されるため、本報告の記載から除外した。

SD1293・SD1300・SK1304・SK1305・SD1308・SK1309・SK1311・SD1312・SD1313・SK1314・SD1316・SD1317・SD1319・SD1324・SK1331・SK1346・SK1357・SD1358・SD1359・SD1361・SK1362・SK1363・SK1365・SK1367・SK1368・SK1369・SD1375・SD1376・SK1378・SD1384・SD1397・SD1398・SD1399

第６節　第8－9・8－10・143・153・165－1次調査区の遺構

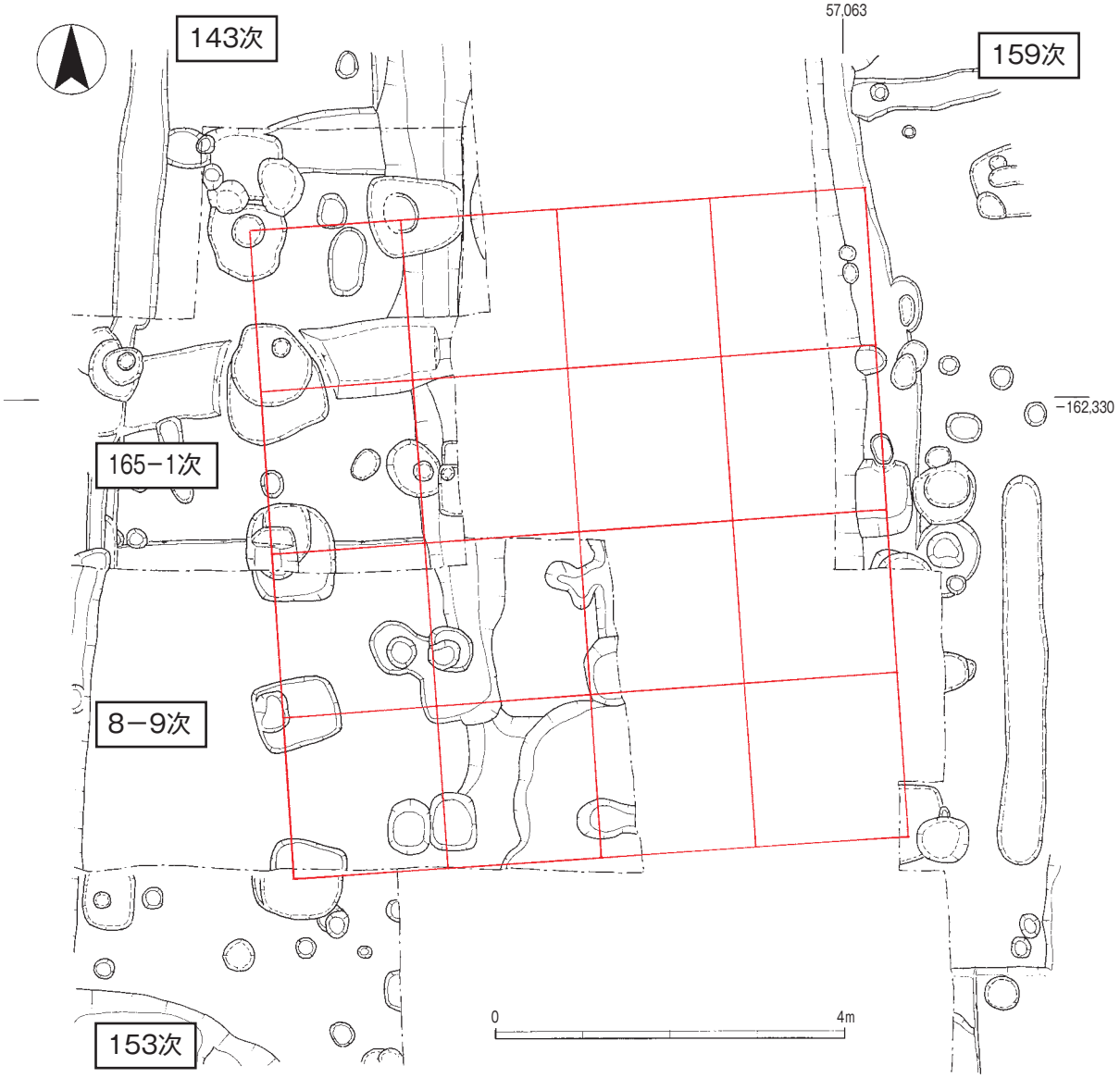
柳原区画の南東部で行った調査を一括して記述する。第8－9・10次調査は史跡指定に先立ち、昭和49年度に範囲確認のために行ったトレンチ調査で、本節では他の調査区と重複しない東西トレンチの面積にして138㎡分が該当する。第143次調査は、平成16年度に実施しており、調査面積は650㎡である。第153次調査は平成19年度に「Ｌ」字状の調査区を設定して実施しており、調査面積は744㎡である。第165－1次調査は、密集した建物群の解明のために、第143次調査区と第8－9次調査区の間の幅2m強の未調査部分で行った98㎡の調査である。これらの調査区は、柳原区画でも遺構の密集度の高いエリアにあたるため、煩雑さを避けるために一括して記述する。

（１）斎宮跡第Ⅰ期の遺構

【掘立柱建物】

SB0263　第8－9次・第143次・第153次・第159次・第165－1次調査区にかけて検出した4間×4間の総柱建物とみられるものである。柱間は桁行1.85m、梁間1.75mで、柱掘形は一辺1.0m～1.2mの方形ないし略方形で、直径約30㎝の柱痕跡を持つ。N4°Wの棟方向である。柱掘形の埋土は黒色シルト質で、遺物をほとんど含まない。柱間に対して大規模な柱穴を持ち、第20次調査のSB1050に対応する倉庫建物と考えられる。

SB9007　第143次調査区の北東隅で検出され、第152次調査でも続きを確認している。南北で3間、東西で4間分以上ある。西から2間目のところに間仕切り状の柱穴が2個確認された。柱間寸法も



第 18 図　SB0263 遺構平面図（1：80）

1.7m～1.8mと短く、斎宮跡では特殊な形状の建物になる。柱掘形の埋土は黒色シルト質混土で、直径約20cmの柱痕跡がある。出土遺物はほとんどなく、Ⅱ－1期までくだるかもしれない。棟方向はN0°である。

【竪穴建物】

SH9001　第143次調査区の北西部で検出した竪穴建物で、直径5.5m～6.0mを測る。建物内は西側を中心に内側が一段低くなり、東側に向かうに従い、その段差面が解消されてくるところから、２棟の建物の重複とも考えられたが、断面等の観察からは不分明であり、後述する焼土塊等の広がり等から考えて１棟の建物と考えた。

主柱穴は認められず、床面は硬化していた。明確な竈遺構は認めらなかった。建物の北西部に焼土や白色粘土、炭化物などを含む土塊が集中しており、精査に努めたが、とくに明瞭な遺構の検出には至らなかった。SH9001はⅠ－4期～Ⅱ－1期に比定されるが、古代伊勢道の南側溝SD6802および路面と重複しており、第28次調査のSK1291同様、道路が機能停止してのちに構築されたものという判断ができる。

埋土中から多量の土師器・須恵器等の土器類が出土した。特殊な遺物として、管状土錘が計158点と多量に出土したほか、製塩土器、フイゴ羽口、炉壁塊、鉄釘などがあり、多量の炭化物や焼土の存在とともに工房的な性格を表す可能性がある。

【溝・土坑】

SK9002　第143次調査区の北西隅で一部を確認したもので、一部は第152次調査区でも確認している。埋土にSH9001同様の白色粘土や焼土を含むことから、SH9001と同様の性格が想定されていたが、西接する第153次調査区では確認しておらず、南北約3.5m、東西約2.5m、深さ約0.35mの略方形の土坑と判断した。出土遺物は、土師器・須恵器を中心とする土器類で、ほぼSH9001と同じ時期であることから、両者の関連性が想定される。

SK9030　第143次調査区北西隅で検出した長径1.6mの楕円形に近い土坑で、奈良時代末期の土器が若干出土した。

SK9031　第143次調査区の北西部で検出した、長径約1.5mの楕円形に近い土坑で、奈良時代と思われる土器片がわずかに出土したが、土坑の時期を示すものかどうかは不明である。

SD9044　第8－9次・第143次・第153次・第165－1次調査区で検出した南北溝である。幅0.8m～1.0m、残存する深さは0.1m～0.2mの浅い溝で、南に傾斜した溝である。検出した延長は27.6mになる。およそN4°Wの方向と黒色シルト質の埋土を持ち、遺構の重複がない箇所では遺物がほとんど出土しないことなどから、Ⅰ－4期のものと判断した。後述するように、柳原区画を分割する区画溝と考えられる。建物との重複関係から少なくともⅡ－1期には埋没していると判断される。

SD9046　第143次調査区の北端から第152次調査区南半まで延びる幅0.8m～1.0m、深さ0.3mの断面形が緩い逆台形になる溝である。検出延長は約15mで、N3°Eと方格地割とも異なる方向を取る。第143次調査段階ではⅢ－3期とみられていたが、延長を確認した第152次調査では黒色シルト質の埋土を持つこと、重複関係からⅡ－1～2期のSB9800より古いことからⅠ－4期～Ⅱ－1期のものと判断した。

SK10135　第165－1調査区の西端から第143次調査へ続く南北約1.2m×東西1.2m、深さ約0.5mの

土坑である。第143次調査区で土師器杯・椀・皿や、須恵器杯の小片が出土している。

SD6801　古代伊勢道北側溝で、第152次～第143次～第159次まで続く。第143次調査で遺構番号を与えているのでこの節で記述する。第28次調査区の東端から第152次調査区西端にかけて後世の攪乱を受けており、第28次調査区のSD1327との連続性については確認できないが、第153次調査区の南側溝SD1395・SD6802と同様、第152次調査区内で北側溝の底部にあたる部分の遺構検出面が浅くなっており、南側溝に対応するように、第152次調査区内で西のSD1327と東のSD6801を分けて掘削していた可能性はある。幅は約0.5m～1.0m、深さは第152次で0.25m～0.3m、第143次で0.15m、第159次で0.1mと東へ行くほど浅くなる。断面形は浅い「U」字形、埋土は黒色のシルト質壌土で遺物はほとんど出土しない。第159次調査ではSD10001としていたが、記述の混乱を防ぐためにSD6801に統一する。

SD6802　古代伊勢道南側溝で、第153次～第143次～第159次まで続く。区画西半の第20次調査区で確認しているSD1395とは、第153次調査区で底部が合流せず食い違う状況を確認している。道路側溝掘削時の施工単位を示す可能性があり、今後のデータの蓄積が必要である。

SD6802は幅0.5m～1mほど、深さは第153次で約0.3m、第143次で約0.25m、第159次で約0.2mと浅く、上面の削平が進んでいるものとみられる。埋土は黒色のシルト質を多く含んだ壌土で、出土遺物はほとんどない。第159次調査ではSD10002としていたが、記述の混乱を防ぐためにSD6802に統一する。

SD10140　第165－1次調査区の東端付近で検出した東西方向の溝である。幅約0.8m、検出延長約8.3mあるが、東に位置する第159次調査区ではその延長を確認していない。断面「U」字形で遺構検出面からの深さは約0.5mである。埋土は黒色シルト質壌土で、出土遺物には土師器杯片や須恵器甕片があり、Ⅰ－4期においても最古相に位置づけられるとみられる。Ⅰ－4期のSB0263、Ⅱ－1期以降のSB9003・9004の柱穴が、この溝の埋土を掘り込んで作られている。

（2）斎宮跡第Ⅱ期の遺構

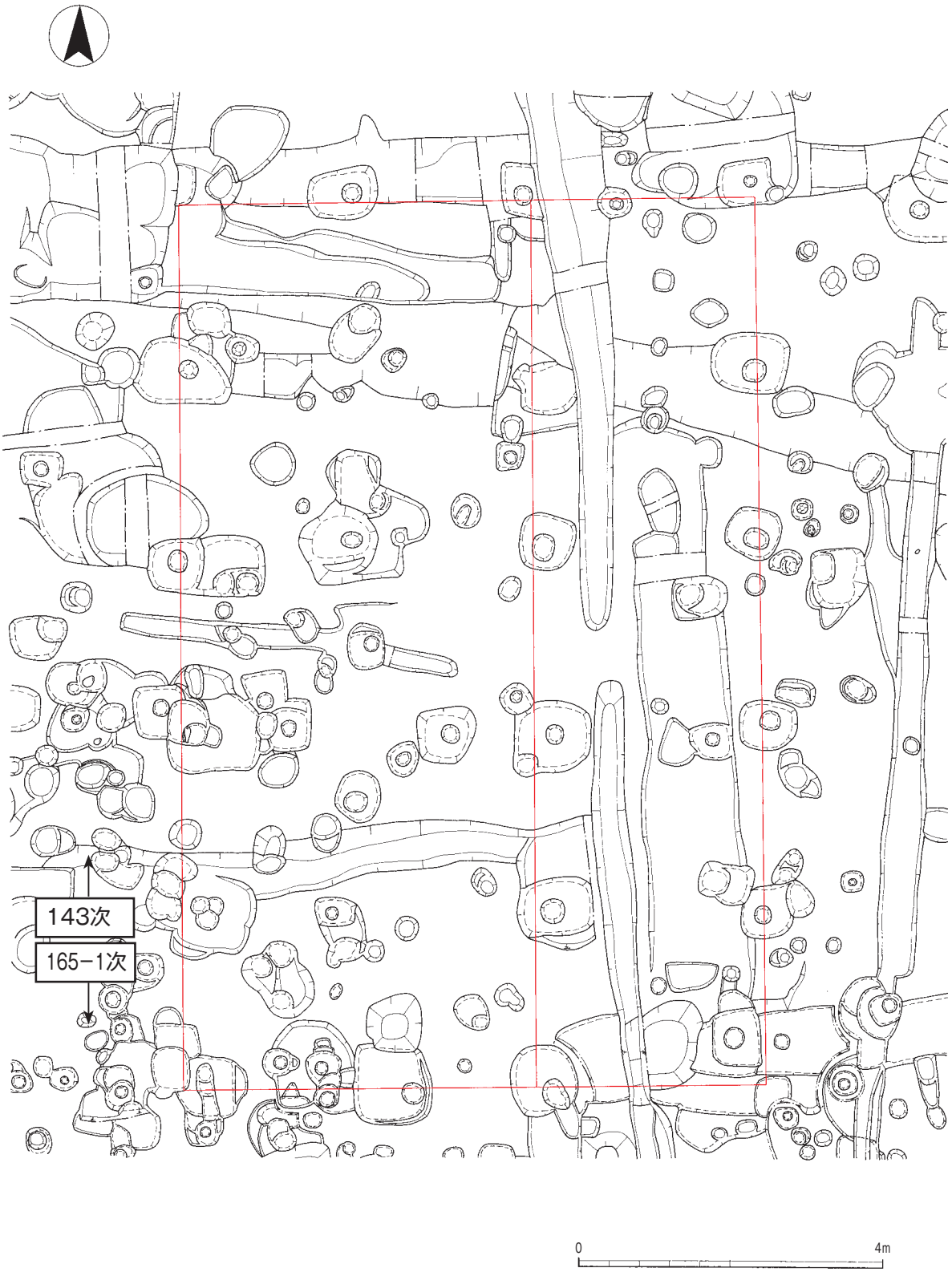
1）Ⅱ－1～2期の遺構

【掘立柱建物】

SB9003　第143次調査区から第165－1次調査区にかけて検出した5間×2間の身舎の東面に1間分の庇出をもつ南北棟の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行で2.45m、梁間2.3m、庇出は3.0mある。身舎の柱掘形は大きいもので一辺が約1.0m、小さいものでも約0.7mの略方形である。柱痕跡は直径がおよそ20cm～25cmである。棟方向はN1°Wで、柱掘形からの出土遺物は僅少だが、遺構埋土は一般に方格地割造営期に近いものと推定される黒色シルト質土で、第152次調査区の四面庇付建物ＳＢ9800や第20・153次調査区の三面庇付建物ＳＢ1080等と同時期のものと考えられる。

SB9005　第143次調査区の東端で西側柱筋を検出し、現道を超えて東の第159次調査区で建物の東半を検出した。4間×3間の東西棟で、南に1間分の庇出がある。柱間は桁行2.15m、梁間2.4m、庇出2.8mである。柱掘形は0.7m～1.0mの方形で、柱痕跡は直径約20cmである。N0°の棟方向を取る。出土遺物等からⅡ－1～2期の建物で、西のSB9003とは直行する位置関係であり、同時併存の可能性がある。

SB9006　SB9005と重複する5間×2間の東西棟である。柱間は桁行・梁間とも2.4mである。柱掘形は0.8m～1.0mの方形で、直径20cm強の柱痕跡がある。柱穴の重複関係からSB9005に後出する



第 19 図　SB9003 遺構平面図（1：80）

ものである。N0°の棟方向である。出土遺物等からⅡ－2期以降のものとみられる。

SB9010　第143次調査区の北西隅近くで確認した3間×2間の南北棟で、第152次調査区へ続く。柱間は桁行2.0m、梁間1.9mで、柱掘形は一辺0.7m～0.9mの略方形、直径20cm弱の柱痕跡がある。N0°の棟方向を取る。SB9794はSB9010を建替えたものである。

SB9011　第143次調査区から第153次調査区で検出した5間×2間の東西棟である。柱間は桁行2.0m、梁間2.2mで、柱掘形は一辺約0.5m～0.6mの略方形、直径約15cmの柱掘形がある。棟方向はN1°Wである。柱穴出土遺物からⅡ－2～3期のものとみられる。柱穴の重複関係からSB9821より古い。

SB9012　第143次調査区から第153次調査区で検出した5間×2間の東西棟である。柱間は桁行1.8m、梁間2.3mで、柱掘形は0.5m～0.9mの略方形ないしは円形、直径15cm前後の柱痕跡がある。棟方向はN3°30′Wである。柱穴の重複関係や出土遺物からは同規模のSB9011との前後関係は明らかでないが、棟方向の状況から後出のものである可能性がある。

SB9819　第153次西調査区のほぼ中央で検出した3間×2間の東西棟である。柱間は桁行1.8m、梁間1.95m、柱穴は直径0.3m～0.4mの円形で、直径約10cmの柱痕跡を持つ。棟方向はN1°Wである。細片ながら柱穴の出土遺物からⅡ－2～3期のものと推定した。SB1080より後出のものとみられる。

SB10124　第165－1調査区の西部から第143次調査区にかけて検出した3間×2間の南北棟である。この南北の梁間の柱掘形は直径0.5m前後の略円形で、柱痕跡は直径約15cmで柱筋は柱間2.3mでよく揃うが、桁方向の柱は確認できていないという問題がある。しかし桁行も柱間2.3mで復元できるため、建物となると判断した。棟方向はN3°Wである。出土遺物等からⅡ－1～2期と推定した。

SB10611　第143次調査区の西部で検出した3間×2間の南北棟である。柱間は桁行2.1m、梁間2.1mで、柱掘形は一辺0.6m～0.7mの方形ないし略方形である。直径約15cmの柱痕跡を持つ。N1°30′Wの棟方向を持つ。出土遺物からⅡ－2期頃のものとみられる。

【井戸・溝・土坑】

SK9034　第143次調査区の南西隅から第165－1次調査区で検出した直径約1.2m、深さ約0.5mの円形土坑である。第143次調査では土師器杯・皿・椀・高杯・甕、須恵器杯、黒色土器A類杯や土錘などが出土している。Ⅱ－1～2期のものとみられる。

SK9818　第153次西調査区のほぼ中央で検出した2.6m×2.0m、深さ約0.3mの土坑である。土師器杯A・椀A・椀B・皿A・高杯・片口鉢・甕・鍋B、須恵器杯A・杯B・蓋・双耳壺・甕・円面硯や少量の灰釉陶器片、緑釉陶器片が整理箱で1.5箱分出土した。土器の形式からⅡ－2～3期に位置づける。

SK9828　第153次西調査区の南端のSD9837の調査中に確認したピットで、土師器皿が出土している。Ⅱ－1期とみられる。

SK9829　第153次西調査区の南部で検出した、2.4m×2.3m、深さ約0.35mの不整形の土坑である。土師器杯A・椀A・皿A・鉢・甕・長胴甕・竈、黒色土器A類の椀、須恵器片、灰釉陶器椀、緑釉陶器椀が整理箱2箱分出土した。土器の形式からⅡ－2～3期に位置づける。

SK9834　第153次西調査区の南端付近で検出した、4.0m×2.3m、深さ約0.3mの略楕円形の土坑

である。土師器杯Ａ・椀Ａ・椀Ｂ・皿Ａ・甕、須恵器蓋・壺・甕、灰釉陶器椀・皿・段皿・壺が整理箱2箱分出土している。Ⅱ－2～3期に位置づけられる。

SE9835　第153次調査区の南部で、東・西両調査区にまたがって検出された、直径約3.8mの井戸である。石組み等はなく、素掘りの井戸である。肩部で不規則にピットが認められ、井戸屋形の柱穴ないしは井戸掘削の際の足場等の性格が考えられたが、ピット同士の組み合わせなどを明らかにできなかった。

埋土上層の出土遺物から最終的な埋没はⅢ期と考えられ、また、今回の調査では崩落の危険性から遺構検出面から深さ約1.5mまでで調査を止めているので、具体的な掘削時期は不明だが、柳原区画内にあって平安時代を通して重複する遺構がなく、また南にのびるSD9837もⅡ－1期まで遡るとみられるため、SE9835も区画造営当初から掘削されたものであったと想定した。埋土の上部からは、Ⅲ－1～2期の土師器、ロクロ土師器、灰釉陶器、白磁のほか、火打鎌とみられる鉄片や長石塊も出土している。

SD9837　第153次西調査区の南東隅で検出した幅0.7m～0.8m、深さ0.2m～0.3mの溝である。Ⅱ－2期の土師器、須恵器が出土しているが、検出段階でSK9853より古いとされているため、Ⅱ－1期まで遡るものとした。SE9835との関連性が考えられる。

SK9838　第153次調査区南端で東・西両調査区にまたがって検出した、東西2.8m、深さ約0.5mの土坑で、壁はほぼ垂直に立ち上がるものである。埋土は黒色シルト質の壌土で、整理箱2箱分の土器類が出土している。土師器杯・椀・皿・甕類、須恵器杯・蓋、土錘がある。土師器類の形式から、Ⅱ－1期と判断される。

SK9847　第153次東調査区のほぼ中央で検出した、南北2.5m、東西1.0m、深さ約0.4mの船底状の土坑で、黒色シルト質の埋土に少量の土師器杯Ａ・椀Ａ・皿Ａ・甕、須恵器片が出土している。Ⅱ－2期に位置づけられる。

SK9852　第153次東調査区の東端近くで検出した黒色の埋土の、6.7m×6.8m、深さ0.75mの大形の土坑である。南3分の2を撹乱土坑に壊されているが、底部は残存していた。出土遺物は整理箱１箱以下と少ない。土師器杯Ａ・椀Ａ・皿Ａ・高杯・鉢・甕、須恵器甕の破片に混じって、弥生土器の朱彩の器台部や甕が出土した。Ⅱ－2期ころのものと推定した。

SK9853　第153次西調査区南の直径約1.0mの不整円形土坑である。SD9837の埋土に重複して掘られており、須恵器杯Ｂと盤の大形の破片が出土している。Ⅱ－1期に位置づけられる。

SK9855　第153次東調査区の東部の近世以降の大きな撹乱土坑の底部に深さ約0.15m残存していた土坑で、褐灰色の埋土を持つ。第10次調査区等にも広がるⅡ－1期の土坑の一部とみられ、この時期の土師器杯・椀・皿・甕、須恵器片、炭化材が出土している。

SK9856　第153次東調査区東端でSK9855の南に接して、底部のみ検出した土坑である。黒褐色土の埋土が厚さ0.2m～0.3m分残っている。土師器椀・皿・高杯・甕、須恵器杯・壺・甕の破片が出土しており、Ⅱ－1期に位置づけた。調査区東端の土層断面からSK9855より新しいと判断できる。

2）Ⅱ－3期の遺構

【掘立柱建物】

SB0260　第153次東調査区の北端中央から第8－9・10次・第165－1次。第143次調査区にまたがっ

て検出した5間×2間の南北棟である。柱間は桁行2.4m、梁間2.2mで、柱掘形は一辺約0.9m～1.0mの隅丸方形、直径30cm弱の柱痕跡がある。棟方向はN3°30′Wである。柱穴の遺物などからⅡ－3期頃に位置づけられる。

SB9004　第143次調査区の南東隅から第165－1次調査区にかけて検出した3間×2間の南北棟である。柱間は桁行1.95m、梁間1.8mで、柱掘形は一辺1.0m～0.7mの方形ないし略方形で、直径約15cm～20cmの柱痕跡がある。棟方向はN5°Wである。重複関係からSB9003より新しい。

SB9817　第153次西調査区のほぼ中央で検出した3間×2間の南北棟である。北側棟柱と、東側柱の1個を欠失する。柱間は桁行1.7m、梁間2.0mで、柱穴は直径約0.4mの円形ないしは略方形、直径10cm強の柱痕跡がある。棟方向はN1°Wで、Ⅱ－3～4期のものとみられる。

SB9820　第153次西調査区のほぼ中央で検出した3間×2間の南北棟である。柱間は桁行2.2m、梁間2.1m、柱掘形は0.6m～0.7mの隅丸方形で、直径20cm弱の柱痕跡が残る。棟方向はN4°Wである。柱穴の出土遺物からⅡ－3期に位置づけられる。

SB9821　第153次西調査区の東端中央付近から第143次調査区で検出した5間×2間の東西棟である。柱間は桁行2.05m、梁間1.9mで、柱穴は一辺約0.5mの隅丸方形で、直径約20cmの柱痕跡がある。棟方向はN3°30′Wである。他の建物との関係からⅡ－3期に位置づけられようか。柱穴の埋土の重複関係からSB9011・9814より新しい。

SB9823　第153次西調査区の中央で検出した3間×2間の南北棟である。柱間は桁行・梁間とも1.9m、柱穴は一辺0.5m～0.6mの略方形で、直径10cm前後の柱痕跡がある。棟方向はN2°Wである。柱穴の出土遺物などから、Ⅱ－3～4期頃のものとみられる。なお、第8－10次調査で柱穴底まで完掘してしまっているため、判断に苦しむが、ほぼ同位置・同規模での建て替えがあった可能性がある。

SB9839　第153次東調査区の北端西よりから第8－9・10次調査区・第165－1次調査区にまたがって検出した5間×2間の東西棟である。柱穴は直径約0.5mの円形で、直径15cm前後の柱痕跡がある。柱間は桁行・梁間とも2.15mで、棟方向はN3°Wである。柱穴埋土の出土遺物からはⅡ期と判断されるのみだが、Ⅱ－3期のSB0260との位置関係から、これより新しいⅡ－3期以降のものと考えられる。

SB9848　第153次東調査区の北端中央から第8－9・10次・第165－1次・第143次調査区にまたがる範囲で検出した5間×2間の南北棟である。柱間は桁行2.35m、梁間2.2mで、柱穴の重複関係からⅡ－3期のSB0260の建替えと判断できる。柱穴は直径0.6m前後の略円形で、棟方向はN3°Wである。Ⅱ－3～4期のものとみられる。

SB9849　第153次東調査区北端の東よりから第8－9次・第165－1次調査区にまたがって検出したで4間×2間の南北棟である。東桁行柱筋や北棟柱を欠失する。柱間は桁行2.2m、梁間1.8mで、柱穴は一辺約0.6mの略方形、直径約15cmの柱痕跡がある。N3°Eの棟方向を取る。

SB10130　第165－1次調査区の中央から第8－9・10次・第143次調査区にまたがって検出した5間×2間の南北棟である。第143次調査区内では、建物北西部の柱穴が不明瞭だが、柱穴埋土の重複関係からSB0260を建替えたものと判断できる。柱間は桁行2.3m、梁間2.2m、柱掘形は一辺0.5m～0.7mの略方形で、最大で直径約20cmの柱痕跡がある。棟方向はN1°Wである。柱穴埋土からはⅡ－3期のものを中心とした土器片が出土するが、時期的に若干下る可能性もある。

【土坑】

SK0261　第8－9次調査区で検出した東西2.8m、南北2.1m、深さ約0.4mの楕円形の土坑である。土師器杯Ａ・皿Ａ、須恵器高杯の他、盤とみられる灰釉陶器片が出土している。Ⅲ期の遺物の混入もあるが、Ⅱ－3期の遺構と考えられる。

SK9016　第143次調査区東辺中央付近で検出した一辺約2.3mの方形の土坑で、底面からSB9003の柱穴が検出されたことから、これよりも新しいことがわかる。埋土から土師器杯・皿・甕、須恵器、灰釉陶器皿、鉄滓が出土しておりⅡ－3～4期のものとみられる。

SK9038　第143次調査区の南東隅近くで検出した南北約2mの略方形の土坑である。黒笹90号窯式とみられる灰釉陶器皿が出土している。

SK9830　第153次西調査区南部で検出した南北2.2m、東西1.3m、深さ約0.1mの不整楕円形土坑である。土師器杯Ａ・鍋Ｂ・甕、須恵器蓋、灰釉陶器椀の破片が少量出土した。

SK9831　第153次西調査区南部で検出した南北2.6m、深さ約0.2mで、東半分をSD9832に壊される。土師器杯Ａ・椀Ａ・皿Ａ・鉢・台付鉢・甕、須恵器甕、灰釉陶器椀・皿・段皿、緑釉陶器椀・皿、志摩式製塩土器が、整理箱で約1.5箱分出土した。Ⅱ－3期に位置づけられる。

3）Ⅱ－4期の遺構

【掘立柱建物】

SB9815　第153次西調査区の東端で第143次調査区にまたがって検出した3間×2間の南北棟である。北西隅の柱穴がSK9812に壊されており、第143次調査側の検出状況も明瞭ではない。第153次調査側では、柱掘形は一辺約0.6mの隅丸方形で、直径約15cmの柱痕跡がある。柱間は、桁行で中央の１間が1.8m、あとの２間は2.1m、梁間は2.0mとなっており、棟方向はN0°で、Ⅱ－4期以降のものとみられる。

SB9851　第153次東調査区の北東端から第8－9次・第165－1次調査区にまたがって検出した3間×2間の東西棟である。柱間は桁行2.3m、梁間2.0mで、柱掘形は一辺0.7m～0.9mの隅丸方形、直径約20cmの柱痕跡がある。棟方向はN3°Wである。柱穴埋土の遺物からⅡ－4期以降のものとみられる。

【土坑】

SK0262　第8－9次調査区で検出した東西2.8m、南北約2.0m、深さ約0.4mの略方形の土坑である。土師器杯Ａ・甕、折戸53号窯式の灰釉陶器椀が出土しており、Ⅱ－4期に位置づけられる。

SK9015　第143次調査区東端中央付近で検出した長径1.3mの楕円形の土坑で、土師器杯・甕、灰釉陶器椀などが出土している。

SK9017　第143次調査区東半中ほどで検出した直径約１mの円形の土坑で、土師器皿等が出土している。

SK10137　第165－1次調査区の東部で検出した東西0.7m、南北1.0m以上、深さ0.1mの小規模な土坑である。少量の土師器片・灰釉陶器片が出土している。

4）その他のⅡ期の遺構

【掘立柱建物・柵列】

SB0265　第8－9・10次調査区から第143次調査区にかけて検出した4間×2間の南北棟で、柱間は桁行2.05m、梁間1.9mで、柱掘形は一辺約0.7mの略方形である。N1°Wの棟方向を取る。

SB9814　第153次西調査区の東端北から第143次調査区の範囲で検出した3間×2間の南北棟である。第143次調査区にかけて、南梁行柱筋と東桁行の一部だけが残存している。柱間は桁行・梁間とも2.4mで、柱穴は一辺0.5m前後の隅丸方形、直径20cm弱の柱痕跡がある。棟方向はN4°Wである。出土遺物は乏しく詳細は不明だが、柱穴の埋土の重複関係からSB9012・9821より古いため、Ⅱ－2～3期頃のものである可能性がある。

SB10610　第143次調査区と第152次調査区にまたがって検出した3間×2間の東西棟である。Ⅱ－2期とみられるSB9795（第7節(2)参照）とは重複関係にあり、SB10610が新しい。柱間は桁行・梁間とも2.3mで、柱掘形は第143次調査区では不整形だが、第152次調査区では一辺0.7mの隅丸方形で、柱痕跡は直径約15cmである。N2°Wの棟方向である。

SB10614　第143次調査区の南東で検出した4間×2間の南北棟である。柱間は桁行2.0m、梁間2.1m、柱掘形はおおむね一辺0.6mの略方形ないし不整形である。第Ⅱ期のSB0265の柱穴に重複して新しい。ほぼN0°の棟方向である。

SA10133　北から第152次・第143次・第165－1次・第8－9次調査区の東端で確認した掘立柱列で、北は第152次調査区から南は第8－9次調査区にまたがる柵列になるとみられる。柱穴は直径0.2m～0.3m程度で、10間分延長27.8mを検出している。柱間寸法は2.4m～3.2mのばらつきがあり、N2°Eの方向を持つ。出土した土器小片等からⅡ期のものと推定される。

【溝】

SD9836　第153次西調査区の南端で検出した幅約0.3m、深さ約0.05mの小規模な溝である。溝底は南から北に傾斜している。少量の土師器片が出土しているのみだが、Ⅱ期の中に位置づけられると考えられる。

（3）斎宮跡第Ⅲ期の遺構

1）Ⅲ－1期の遺構

【掘立柱建物】

SB9822　第153次西調査区のほぼ中央付近から第20次調査区にかけて検出した4間×2間の東西棟である。柱間は桁行2.0m、梁行2.1m、柱穴は直径0.5m前後の円形ないしは略方形で、直径15cm前後の柱痕跡を持つ。棟方向はN0°である。Ⅱ－3期のSB9820より新しいが、棟方向や出土遺物からⅢ期でも古いとみられ、Ⅲ－1～2期のものと推定した。

SB9825　第153次西調査区南部から第20次調査区にかけて検出した5間×2間の東西棟である。柱間は桁行2.1m、梁間1.9m、柱穴は直径0.3m～0.4mの円形ないしは略方形で、直径10cm強の柱痕跡がある。棟方向はN1°Wである。遺物と棟方向からⅢ－1期以降のものとみられる。

SB9841　第153次東調査区の北端から第8－9・10次・第165－1次調査区にまたがって検出した5間×2間の東西棟である。柱間は桁行2.15m、梁間2.1m、柱穴は直径0.3m～0.5mの円形ないしは略方形で、直径15cm前後の柱痕跡がある。棟方向はN4°Wである。出土遺物等からⅢ－1期以降のものとみられる。

SB9842　SB9841とほぼ同位置の5間×2間の東西棟で、第153次東調査区から第8－10次・第165－1次調査区にまたがって検出している。柱間は桁行・梁間とも2.1m、柱穴は直径0.4～0.5mの円形で、直径10cm強の柱痕跡があり、SB9841に比べて小振りになる。棟方向はN0°である。出土遺物等からⅢ－1期以降のものとみられる。

第 20 図　第 143 次～第 153 次調査区のⅢ－１期建物　（1：200）

【井戸】

SE9014　第143次調査区の北辺中央やや西寄りで確認した井戸で、現状では素掘りとなる。検出面ではやや広がるが、直径約1.5mの円形の掘形となる。壁面に亀裂が著しく、崩落の危険があるため、深さ2.1mまで掘削するに留めた。埋土から土師器Ⅲ･羽釜、ロクロ土師器、陶器類、青磁、白磁など平安時代末から鎌倉時代前期を中心とする遺物が出土しており、破棄・埋没の時期と考えることができる。初現については建物との重複がないⅢ－1期頃まで遡り得ると考える。

2）Ⅲ－2期の遺構

【掘立柱建物】

SB9840　第153次東調査区の西寄りで検出した5間×2間の東西棟である。柱間は桁行2.15m、梁行2.25m、柱穴は直径0.3m～0.4mの円形で、棟方向はN2°Wである。Ⅲ－2～3期のものとみられる。

SB9843　第153次東調査区中央から第8－9・10次調査区にかけて検出した5間×2間の東西棟である。柱間は桁行・梁間とも2.0m、柱穴は0.4～0.5mの円形ないし不整円形で、直径15cm前後の柱痕跡がある。棟方向はN3°Wである。柱穴出土土器などからⅢ－2期以降のものと推定されるが、柱穴の重複関係により、ほぼ同位置のSB9844より新しいと判断される。

SB9844　第153次東調査区北端から第8－9・10次調査区にかけてSB9843とほぼ同位置で検出された5間×2間の東西棟である。柱間は桁行・梁間とも2.0m、柱穴は直径0.5m～0.6mの略円形で、直径20cm弱の柱痕跡がある。棟方向はN3°Wである。Ⅲ－2期以降のものと推定される。

SB10129　第165－1次調査で確認したが、大部分が第8－9・10次・153次調査区に含まれる5間×2間の東西棟である。柱間は桁行2.15m、梁間2.3m、柱掘形は一辺0.4m～0.6mの円形ないしは略方形で、直径20cm弱の柱痕跡がある。棟方向はN1°W。柱穴埋土の出土遺物からⅢ－2～3期頃のものとみておきたい。

SB10131　第165－1調査区東部から第8－9次・第143次にまたがって検出した3間×2間の南北棟である。柱掘形は第8－10次調査区内では一辺約0.5mの方形を呈するが、第143次調査区では直径約0.4mの円形で検出されている。柱痕跡は直径10cm～20cmと幅がある。あるいは桁行方向はさらに伸びるのかもしれない。柱間は桁行2.4m、梁間は2.5mで、棟方向はN2°Eである。柱穴埋土の出土遺物からⅢ－2～3期のものと推定される。

【溝・土坑】

SK9018　第143次調査区中央やや北東寄りで確認された長辺1.5mの長方形の土坑で、土師器片、ロクロ土師器片、灰釉陶器椀、白磁椀などが出土している。

SK9024　第143次調査区南西部で検出した長径2.9m、短径2.0mの不定形の土坑で、土師器皿・台付皿、ロクロ土師器皿、灰釉陶器椀などが出土した。

SK9029　第143次調査区南西部の西端近くで検出した東西1.8m、南北1.7mのやや不整形な円形の土坑で、土師器皿・須恵器類、灰釉陶器椀、黒色土器A類片が出土している。

SK9032　第143次調査区の西端で検出した長径1.7mの略楕円形土坑で、第153次調査区までは続かない。土師器杯・皿・脚台、ロクロ土師器皿、陶器類、青磁片が出土している。

SK9033　第143次調査区の南西部で検出した長径2.2mの不定形の土坑で、土師器杯･皿･台付皿･甕、ロクロ土師器杯・皿・台付皿、白磁片などが出土している。

第 21 図　第 143 次～第 153 次調査区のⅢ－２期建物　（1：200）

SK9037　第143次調査区南端中央付近で検出した長径0.8mの楕円形の土坑で、土師器杯・ Ⅲ、ロクロ土師器Ⅲ、灰釉陶器、猿面硯片などⅢ－2期の資料が比較的まとまって出土した。

SK9039　第143次調査区のほぼ中央で検出した長径約1.4mの土坑で、土師器Ⅲ・ 甕、ロクロ土師器片が出土している。

SD9041　第152次調査区南東端から第153次東調査区の北東までの範囲で検出した幅0.5m～ 1.4mの断面が浅い「U」字形の南北溝で、全長で30m近くになる。第143次調査区南東部で一部断絶するため、通路があったのかもしれない。深さは10cm～ 55cm を測り、出土遺物は第153次調査区で土師器杯・Ⅲ・甕、ロクロ土師器Ⅲ、灰釉陶器椀、緑釉陶器片、山茶椀、白磁片が出土しており、Ⅲ－2 ～ 3期のものと推定される。第153次・第165－1次調査区では SD9047と誤っていたため訂正する。

SD9045　第143次調査区の南西隅部から第165－1次調査区にかけて検出した幅約0.6mの南北溝で、土師器杯・Ⅲ・甕、ロクロ土師器杯など、Ⅲ－2期頃の遺物が出土している。Ⅲ期の SD9043と連続する可能性もある。また、第153次調査区の近世以降の溝 SD9846とも重なる位置にあるため、Ⅲ期の溝が部分的に何度も再掘削されているか、あるいは SD9045もさらに新しい時期に属する可能性もある。

SK9833　第153次西調査区の南端近くで検出した、東西4.3m、南北3.5m、深さ約0.2mの浅い方形の大型土坑である。出土遺物は多くないが、土師器杯・Ⅲ類、須恵器片、灰釉陶器椀が出土している。Ⅲ－2 ～ 3期に位置づけられる。

SD9850　第153次東調査区の北東端から第8－9次、第165－1次・ 第143次にかけて検出した幅約0.3m、深さ0.25mの断面U字形の溝である。延長で14.5m分は確認されている。少量の土師器Ⅲ、ロクロ土師器Ⅲ、陶器片が出土しており、Ⅲ－2 ～ 3期のものと考えられる。

SK10136　第165－1次調査区中央やや東寄りから第8－9次調査区にまたがって検出した東西1.2m、南北0.8m、深さ0.2mの不整形の小土坑である。少量の土師器小Ⅲ・ 甕、ロクロ土師器小Ⅲの細片が出土しており、Ⅲ－2期以降のものとみられる。

SK10138　第165－1次調査区東部で、SD9047・10139の埋土が重複する状況で確認した南北1.1m、深さ0.4mの楕円形土坑である。東西方向の規模は SD9047の重複により不明である。Ⅲ－2期に位置づけられる土師器Ⅲ・小Ⅲ、ロクロ土師器片が出土している。

3）Ⅲ－3 ～ 4期の遺構

【掘立柱建物】

SB10121　第165－1次調査区の西端から第8－9次・ 第153次調査区にかけて検出した5間×2間の東西棟である。柱間は桁行・梁間とも2.1m、柱掘形は直径0.4m～ 0.6mの円形ないしは略方形で、直径10cm 強の柱痕跡がある。棟方向は N4° W である。柱穴埋土の出土遺物からⅢ－3期以降のものとみられる。

SB10122　第165－1次調査で確認したが、大部分は第143次調査区に入る5間×2間の東西棟である。柱間は桁行2.15m、梁間2.0m、柱穴は遺構の重複のためか、不整形のものもあるが、直径0.3mほどの円形とみられる。直径10cm ほどの柱痕跡も残る。棟方向は N4° W である。柱穴埋土の出土遺物からⅢ期の末葉以降のものとみられる。

SB10123　第165－1次調査区の西部から第143次調査区にかけて検出した5間×2間の東西棟であ

第 22 図　第 143 次～第 153 次調査区のⅢ－３～４期建物　（1：200）

る。柱間は桁行2.15m、梁間1.85m、第143次調査区内では柱穴の形状が不整形だが、おおむね直径0.5mの円形になるものとみられる。直径10cm 強の柱痕跡も残る。棟方向は N4° W である。柱穴埋土の出土遺物からⅢ期の末葉以降のものとみられる。

SB10125　第165－1次調査区の中央西寄りから第143次調査区にかけて検出した5間×2間の東西棟である。柱間は桁行・梁間とも2.1mで、柱掘形は直径0.3m～ 0.4mの円形で、直径10cm 程度の柱痕跡がある。棟方向は N4° W である。柱穴埋土の出土遺物からⅢ期の末葉以降のものとみられる。

SB10126　第165－1次調査区の中央西寄りから第8－9･10次･143次調査区にまたがって検出した、5間×2間の東西棟である。柱間は桁行･梁間ともに1.9m、柱掘形は不整形なものもあるが、直径0.4m～ 0.5mの円形で直径10cm 強の柱痕跡が残る。棟方向は N4° W である。柱穴埋土の出土遺物からⅢ－3期以降のものとみられる。

SB10127　第165－1次調査区中央西寄りから第8－9・10次・ 第153次・ 第143次調査区にまたがって検出した5間×2間の東西棟で、SB10125や SB9841を南北方向にスライドしたような位置にある。柱間は桁行・梁間とも2.15m、柱掘形は直径0.4m～ 0.6mの略円形で、柱痕跡は明らかでない。棟方向は N4° W である。柱穴埋土の出土遺物からⅢ－3期以降のものとみられる。

SB10128　第165－1次調査区のほぼ中央から第8－9・10次・ 第153次調査区にまたがって検出した3間×2間の東西棟である。遺構の重複のため柱穴が不明瞭な箇所もあるが、柱掘形はおおむね直径0.4mほどの略円形となるとみられる。柱痕跡は明らかではない。柱間は桁行2.0m、梁間2.1mで、棟方向は N3° W である。柱穴埋土の出土遺物からⅢ－3期以降のものとみられる。

【溝・土坑】

SK0323　第153次西調査区の中央で検出した南北3.2m、東西2.5m、深さ約0.5mのすり鉢状の土坑である。北半分は第8－9次調査で掘削しているが、南半分からも土師器皿･台付皿･台付小皿･甕・鍋、ロクロ土師器台付皿、灰釉陶器片、緑釉陶器片、山茶椀、白磁椀、鉄滓が整理箱１箱分出土している。Ⅲ－3期に位置づけられる。

SK9023　第143次調査区の南端から第165－1次調査区にかけて検出した2.7m×2.4m、深さ0.2mの不整形の土坑である。土師器や須恵器などが少量出土したのみだが、Ⅲ－4期頃のものとみられる。

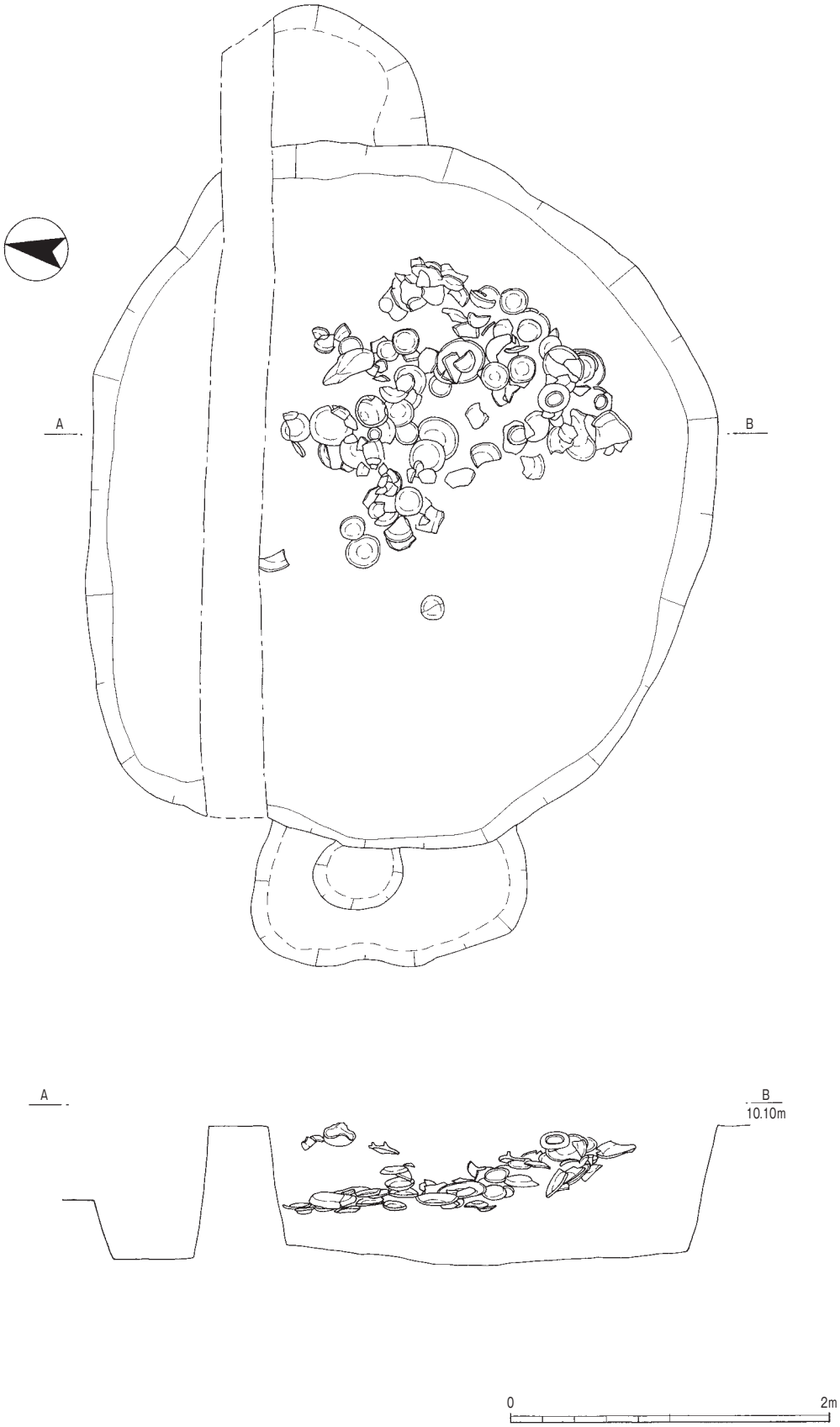
SK9025　第143次調査区中央やや西寄りで検出した長径約2.0mの楕円形土坑である。土師器杯・皿・鍋、ロクロ土師器杯、陶器椀、白磁椀などが出土し、Ⅲ－3期頃のものとみられる。

SK9026　第143次調査区中央西寄りで検出した、南北2.2m、東西2.0mほどの不整円形の土坑である。Ⅲ－3期に属する多量の土師器供膳具を中心とした土器が一括破棄された状態で出土しており、良好な編年資料と考えられる。

SK9027　第143次調査区南西部で検出した東西3.0m、南北2.8mの不定形の土坑で、土師器杯･皿･台付皿、ロクロ土師器、陶器類、白磁片、瓦器椀などⅢ－4期～Ⅳ期の遺物が出土している。

SK9028　第143次調査区北西部で検出した長径2.4m、短径1.8mの楕円形の土坑で、土師器供膳具を中心にⅢ－3期の土器が一括廃棄された状態で出土した。これも良好な編年資料と考えられる。

SD9047　第143次調査区の南東から第165－1次調査区にかけて検出した幅0.6m～ 1.2m、深さ0.1



第 23 図　SK9026 遺構平面図・立面図（1：40）

第24図　SK9028遺構平面図・立面図（1：40）

mの南北溝で、土師器杯・皿、ロクロ土師器皿、無釉陶器椀（山茶椀）が出土しており、Ⅲ－3期以降のものとみられる。なお、第165－1次調査の概要報告ではSD10139と別の遺構番号が付されているため、本報告ではSD9047で統一する。

4）その他のⅢ期の遺構

【掘立柱建物・柵列】

SB9008　第143次調査区の北部で検出した3間×2間の東西棟である。柱間は桁行2.2m、梁間2.1mで、柱穴は直径0.3m～0.5mの略円形である。N1°Eの棟方向である。前後関係は分からないが、位置的に重なるSB10612は建替えの関係にあるとみられる。

SB9824　第153次西調査区の南部から第20次調査区にかけて検出した5間×2間の東西棟である。柱間は桁行・梁間とも2.1m、柱穴は北側柱で直径0.4m、南側で0.2m～0.3mの円形である。棟方向はN1°Wである。

SB10612　第143次調査の北部で検出した3間×2間の東西棟である。柱間は桁行1.9m、梁間1.6mで、柱穴は直径0.5m前後の略方形ないしは不整円形である。N1°30′Wの棟方向を取る。

SB10613　第143次調査区の北部で検出した3間×2間の南北棟である。柱間は桁行1.45m、梁間1.7

m、柱穴は一辺約0.5mの略方形と小振りである。N0°の棟方向を取る。

SA9816　第153次西調査区の中央東寄りで検出した掘立柱列である。検出した柱穴は７個で、直径0.2m～0.3mの小型のものである。柱間は2.0mのものが一番多いが、1.5mや2.6mのものもありバラつきがある。N5°Eの方向を取り、調査区内の大半の建物とは異なる。Ⅲ期のSB0322ないし、Ⅳ期の遺物を含むSD9810が方向的に最も近似するので、Ⅲ期の後葉からⅣ期にかけてのものと推定される。

【溝・土坑】

SK9019　第143次調査区北東部で検出した長径1.5mの土坑で、埋土の重複関係からSK9018より古い。土師器、ロクロ土師器、陶器類が出土している。

SK9021　第143次調査区中央で検出した長径1.7mの楕円形の土坑で、SB9003の柱穴が底面で確認された。土師器片、須恵器片、灰釉陶器片、緑釉陶器片が出土している。

SK9040　第143次調査区の中央で検出した長径約1.2mの不整円形の土坑で、土師器Ⅲ、ロクロ土師器が出土している。

SD9042　第143次調査区中央付近で確認された東西方向の溝状の遺構で、土師器、ロクロ土師器、灰釉陶器、陶器、青磁・白磁などⅢ期以降の遺物が出土している。

SD9043　第143次調査のSH9001と一部重複する南北方向の幅約1mの溝で、第152次調査区にわずかにかかるのみで以北への延長はない。平安時代以降の遺物が出土している。

SK9811　第153次西調査区の北部で検出した長径2.5m、短径1.5m、深さ約0.45mの不整円形土坑である。検出時には１個の土坑と見ていたが、２個の土坑の複合である。ただし出土遺物に時間的な差異はない。出土遺物は少なく、少量の土師器片・須恵器片があるのみだが、Ⅲ期のものと判断される。埋土の重複関係からSB9810より新しい。

SK9813　第153次西調査区の北部で検出した南北約2.2m、深さ約0.2mの土坑である。ここからも少量の土師器片、灰釉陶器片、土錘が出土したのみだが、Ⅲ期のものとみられる。SD9810より古い。

（４）斎宮跡第Ⅳ期以降の遺構

【溝・土坑】

SK9022　第143次調査区中央付近で検出した不定形の土坑で、規模等は不明である。土師器Ⅲ、陶器類が出土している。Ⅳ期でも早い段階のものとみられる。

SK9035　第143次調査区西端から第153次西調査区東端に続く南北3.0m、東西2.0m、深さ0.15mの楕円形の土坑で、SB9012より新しい。Ⅲ期の遺物も含むが遺物全体ではⅣ期の遺構と考えられる。

SD0324　第153次西調査区の南半部東辺を南北に伸びる溝である。幅1.2m～1.5m、深さ0.2m～0.3mで、溝底のレベルはわずかに北に傾斜している。調査区内では、南端が約21m北にあがって東に直角に折れるが、その先第143次調査区で約2m東進して途切れる。土師器片、黒色土器片、ロクロ土師器椀・小皿・台付小皿、灰釉陶器椀・段皿、陶器片、鉄釘が出土している。なお、類似するSD9810との前後関係は、第8－9次調査では確認できず、また、出土遺物からは判断できなかった。

SD9696　第152次調査区東端から南へ、第143次・第165－1次・第8－9次調査区まで続く近世以

降の溝である。遺物は少ないが瓦片などを伴う。現在の柳原と西加座の字境に関連する遺構とみられる。

SD9810　第153次調査西調査区の北半部東辺を南北に伸びる溝である。幅1.0m～1.7m、深さ0.15m～0.25mで、調査区内では溝底の高低差はほとんどない。調査区北端から約21m南下して、東へ直角に曲がる。第143次調査区では、SK9826の部分で途絶している。一方北へは、第152次調査区のSD9784に接続する可能性がある。このような規模・形状から、SD9810は、SD0324ともども、溝で東西を区画する施設であったと考えられる。土師器片、ロクロ土師器杯・小皿、須恵器片、無釉陶器椀(山茶椀)、白磁皿などが出土している。

SK9812　第153次調査西調査区の北部で検出した長径2.7m、短径2.5m、深さ約0.3mの円形のすり鉢状の土坑である。出土遺物は細片が多いが、土師器皿・小皿・台付皿・鍋、灰釉陶器片、緑釉陶器片、無釉陶器椀(山茶椀)・皿(山皿)、青磁椀や鉄釘が整理箱で２箱分出土している。Ⅳ期以降のものとみられる。

SK9826　第153次西調査区を東へ拡張した箇所の南東隅から第143次・第165－1次調査区にかけて検出した南北3.0m、東西2.0m、深さ約0.2mの楕円形の土坑である。土師器皿・小皿・台付皿・鍋、ロクロ土師器椀・皿、無釉陶器椀(山茶椀)などが出土している。Ⅳ期でも前半のものとみられる。

SK9827　第153次西調査区のほぼ中央で検出した、長径2.1m、短径2.0m、深さ約0.7mの深いすり鉢状の土坑である。遺物の出土は多くはない。土師器皿・小皿・台付皿・甕、須恵器片、緑釉陶器片、無釉陶器椀(山茶椀)、鉄釘が出土している。Ⅳ期のものとみられる。

SD9845　第153次調査東調査区の西半で検出した、幅約0.5m、深さ約0.1m～0.15mの緩やかに屈曲する東西溝である。溝底はわずかに東へ下がっている。土師器片、ロクロ土師器皿、陶器片が出土している。

SD9846　第153次西調査区から第8－9次・第165－1次・第143次調査区にかけて検出した幅およそ1.0m～1.5mの幅の広い浅い溝で、複数回掘り直されている。土師器片・陶磁器片が出土しており、近世以降のものとみられる。第143次調査区のSD9043と一体のものである可能性がある。

(５)時期不明の遺構

SK9020　第143次調査区から第152次調査区にかけて検出した長径3.2mの不整円形の土坑で、平安時代の遺物の他、瓦が出土しており、近世まで下る可能性がある。

第７節　第152次調査区の遺構

平成19年度に実施した柳原区画の中央部での調査である。調査面積はこれまでの計画調査で最も広い2,625㎡ある。西に第28次調査区、南に第143・153次調査区、北東に第167次調査区と接しており、現道を介して北西に第157次調査区、南東に第159次調査区がある。

調査区の北部には後世の耕作溝があり、西部の第28次調査区と接する部分にも大型攪乱土坑があるが、全体的に遺構の残存状態は良い。

（１）斎宮跡第Ⅰ期の遺構

【掘立柱建物】

SB9672　調査区の北辺付近で検出した5間×2間の東西棟である。柱間は桁行2.4m、梁間2.5m、柱掘形は一辺0.6m～0.7mの隅丸の方形で、直径20cmほどの柱痕跡を確認している。棟方向はN4°Wである。東辺の柱筋を南のSB9710とそろえている。両者の間隔は約9.6mで、斎宮跡の基準尺である1尺（小尺）＝0.296mをあてはめると32.4尺ほどになる。Ⅰ－4期～Ⅱ－1期頃のものとみられる。

SB9709　第152次調査区の北東から第167次調査区にかけて検出した5間×2間の東西棟である。柱間は桁行2.1m、梁間2.4m、最大で一辺１mほどの柱掘形で、黒色シルト質の埋土を持ち、出土遺物は少量の土器片のみである。柱痕跡は確認できなかった。棟方向はN2°Wとみられる。Ⅰ－4期に属すとみられる。

SB9710　第152次調査区の東辺から第167次調査区にかけて検出した3間×2間の南北棟である。第167次調査区内では近世以降の溝により柱穴は確認できていない。一辺約0.6mの略方形の柱掘形で、直径20cm弱の柱痕跡を持つ。柱穴の重複関係から、SB9712より古い。東西棟SB9672とは逆「L」字の配列となる。柱間は桁行・梁間ともに2.1m、棟方向はN4°Wである。Ⅰ－4期からⅡ－1期にかけてのものとみられる。

SB9735　第152次調査区の東辺中央部付近から第167次調査区にかけて検出した5間×2間の東西棟である。柱間は桁行2.0m、梁間2.1m、柱掘形は一辺0.8m～1.0mあり、直径20cm強の柱痕跡を確認している。棟方向はN4°Wである。南辺の柱穴は、Ⅲ期以降の溝SD0273に壊されており、その部分で掘形底まで調査したところ、平均的な遺構検出面高から深さ10cmほどしか残っていないことが判明した。SB9735から南の一帯が柳原区画内でも微高地の最高点になるが、平安時代よりかなりの削平が行われている事がうかがわれる。Ⅰ－4期～Ⅱ－1期のものとみられる。

SB9763　第152次調査区のほぼ中央で検出した。桁行とみられる側柱が南北でそれぞれ３間分が確認できたものの、東側棟柱を確認することができなかった。棟方向もN10°Wと、他の建物と比べて特異である。柱間は桁行・梁間とも2.1m、柱掘形は一辺約１mの大形のもので、第8－10次調査で半裁されている部分で確認すると、深さも最大で30cm残っており、周辺の建物の掘形に比べて深い。出土遺物は少量の土器片のみである。Ⅰ－4期か、あるいはさらに若干遡る可能性もある。

【井戸・溝・土坑】

SE0276　第152次調査区南半中央の井戸である。第8－10次調査で深さ2mまで調査されていたが、さらに第152次調査で底部まで掘削したところ、Ⅰ－4期～Ⅱ－1期の土器が出土しており、Ⅰ－4期まで遡るものと考えた。遺構検出面で直径約2mの不整円形、検出面から30cmの深さで

直径1.2m程度の円形となる。最終的に遺構検出面から4.35mの深さまで調査したが、出土遺物は若干の土師器片がみられたのみで、井戸枠などの施設は確認できず、素掘りの井戸とみられる。第8－10次調査での出土遺物にはⅡ－1期の土師器杯Ａ・ⅢＡ・甕、須恵器片が出土しており、井戸の掘削はⅠ－4期まで遡ると判断した。より新しい時期の遺物はみられず、Ⅱ期の早い段階で埋められた可能性がある。

SD6801　調査区の南端で検出した溝で、古代伊勢道の北側溝にあたる溝である。SD6801は第143次で検出されたものの延長部分であるため、同じ遺構番号を付している。断面は緩やかな「Ｕ」字形である。幅0.5m～0.6m、遺構検出面からの深さは25cm～30cmで、黒色シルト質の埋土である。第152次調査区内での溝底の傾斜は確認されない。この溝を西に延長すると、第28次調査のSD1327に連続することになるが、調査区西端で一端途切れていることを確認している。

SD9046　第143次調査区から続く溝で、幅0.8m～1.0m、深さ0.3m、断面形は緩い逆台形状になる。黒色シルト質の埋土で、土師器杯Ａ・杯Ｇ・椀・皿・甕・鍋、須恵器杯Ａ・蓋などが出土した。Ⅰ－4期～Ⅱ－1期のものとみられる。

SD9790　SD6801の南に平行するかたちで、長さ7m分を検出した。幅約0.6m、深さ約30cmの浅い断面「Ｕ」字形の溝で、黒褐色の埋土である。古代伊勢道の改修などに伴い掘削された溝であろうか。微小な土器片以外出土遺物はない。

SE9670　第152次調査区の北端で確認した井戸で、遺構検出面で直径約2.6m、深さ約0.4mのところで直径2m強になる。検出面から深さ4.05mで底部に達した。素掘りの井戸とみられ、井戸枠などの施設はみられなかった。埋土は大きく4層に分類され、第Ⅰ層：地山土粒混灰黄褐色壌土（層厚約1.65m）、第Ⅱ層：白色粘土混灰褐色壌土（層厚約0.75m）、第Ⅲ層：地山土粒混りのにごった黄褐色壌土（層厚約1.1m）、第Ⅳ層：円礫混灰黄褐色壌土（層厚約0.35m）、第Ⅴ層：円礫層（層厚約0.2m）となる。このうち、第Ⅰ層からはⅡ－2～3期の土師器杯Ａ・杯Ｇ・高杯・甕類、黒色土器椀、須恵器片が遺物整理箱で13箱ほど出土している。また、第Ⅳ層でも土師器甕の大形破片が出土している。井戸としての存続期間はⅠ－4期～Ⅱ－3期頃と考える。

SK9675　第152次調査区の北東隅付近で検出した不整円形の土坑である。平均的な深さは0.3m前後である。Ⅰ－4期の土師器を中心に整理箱で5箱分の遺物が出土している。土師器は精良な胎土を持つものが多く、盤が多いことから、非日常的な器物が廃棄されたとみられる。

SK9803　調査区の南東端付近で検出した長径2.3m×短径2.1m、深さ約0.3mの不整円形の土坑である。黒色シルト質の埋土を持つ。土師器杯類のほか、大形の須恵器盤が出土している。

SK9805　調査区の南西端近くで検出した、東西4.5m×南北1.7m、深さ約0.2mの南北に長い楕円形の浅い土坑である。土師器杯類や須恵器片が出土している。Ⅱ－1期のSB9800とⅢ期のSK9797が重複する。

（２）斎宮跡第Ⅱ期の遺構

1）Ⅱ－1～2期の遺構

【掘立柱建物】

SB9671　第152次調査区の北端で検出した東西3間の建物である。柱掘形は直径0.3m～0.4mの円形で、柱間は桁行1.8mの小型の建物である。棟方向はN3°Wである。Ⅱ－2～3期に属する。

SB9673　第152次調査区の北端で検出した東西2間の建物である。南北方向に長い建物になると

みられる。柱掘形は、一辺約0.5mの略方形だが、柱間は桁行・梁間とも約2.6mと長い。棟方向はN2°Eである。Ⅱ－2～3期のものとみられる。

SB9676　調査区の北部で検出した3間×2間の東西棟である。柱間は桁行1.95m、梁間1.9m、柱掘形は直径0.3m前後の円形である。棟方向はN2°Eで、Ⅱ－2～3期のものとみられる。

SB9678　第152次調査区北東隅近くで検出した、3間×2間の南北棟である。柱掘形は一辺0.5m前後で、柱痕跡は約20cmである。柱間寸法も桁行1.5m、梁間で1.7mと小規模な建物である。棟方向はN2°Wである。柱穴の重複関係からSB9672より新しい。Ⅱ－1期～2期とみられる。

SB9687　第152次調査区北西部、SE9670の南で検出した3間×2間の東西棟である。柱間は桁行1.85m、梁間1.8m、柱掘形は一辺0.4m～0.5mの略方形で、柱痕跡は直径15cmほどである。棟方向はN2°Wである。Ⅱ－1～2期とみられる。

SB9688　第152次調査区北部で検出した3間×2間の東西棟で、Ⅱ－1～2期のSB9687を建替えたものである。柱間は桁行1.85m、梁間1.8m、柱穴は大きいもので一辺0.4m～0.5mの略方形で、直径15cmほどの柱痕跡がある。棟方向はN4°Wである。Ⅱ－2期に属する。

SB9690　第152次調査区北西部で検出した3間×2間の東西棟である。柱間は桁行2.1m、梁間2.0mあるが柱穴は小さく、直径約30cmの掘形に直径10cm程度の柱痕跡がある。棟方向はN4°Wである。Ⅱ－2～3期とみられる。

SB9691　第152次調査区北半中央付近で検出した5間×2間の東西棟である。5間×2間の規模ながら、柱穴は直径0.3m～0.4mの円形で、柱間も桁行・梁間とも1.9mと小型である。棟方向はN2°Eである。Ⅱ－2～3期に属するとみられ、ほぼ同時期のSB9692とは重複する位置関係にあり、棟方向も大きく異なるが、柱穴の重複はない。

SB9692　調査区北部のSB9691に重なる位置で検出した3間×2間の東西棟である。周囲で見つかっている3間×2間の東西棟と比べ、柱掘形が一辺0.6m～0.7mと大きく、柱痕跡も直径20cmほどのものが確認されている。柱間は桁行2.1m、梁間1.9mで、棟方向はN2°Wである。Ⅱ－2期に属するとみられる。

SB9702　第152次調査区の北西端で一部調査区を拡張して検出した3間×2間とみられる東西棟である。柱間は桁行・梁間とも2.0m、柱掘形は最大一辺約0.5mの略方形で、柱痕跡は直径15㎝になる。棟方向はN0°である。第157次調査で延長を確認しておらず、また東方のSB9706と南面の柱筋を揃えることから、3間×2間とみて間違いないだろう。Ⅱ－1期に属すとみられる。

SB9706　第152次調査区北西部のSB9702の東方10.2mのところで確認した同規模の3間×2間の東西棟である。SB9702の東辺との距離を、斎宮の基準尺をあてはめると34.5尺となり、あるいは35尺を計画して配置したものかもしれない。柱掘形や柱痕跡の規模もＳＢ9702とほぼ同規模になるが、柱間が桁行2.0m、梁間1.8mと、やや小規模になっている。棟方向はN0°である。Ⅱ－1期とみられる。

SB9712　第152次調査区の東辺で確認した、3間×2間の南北棟である。東接する第167次調査区でも痕跡的に東桁行柱筋を確認している。柱間は桁行・梁間とも2.4m、柱掘形は一辺0.8m～0.9mとやや大きく、直径約20cmの柱痕跡がある。棟方向はN2°Wである。Ⅱ－1期とみられる。

SB9729　調査区中央やや西寄りで検出した3間×2間の東西棟である。北側柱と東西の棟柱のみを検出しており、南辺は明らかではないが、周囲の他の建物の状況から梁行2間の規模のものと

判断した。柱間は桁行・梁間とも1.9m、柱掘形は直径約0.4mの略円形で、直径20cm弱の柱痕跡がある。棟方向はN2°Eである。Ⅱ－2～3期に属するとみられる。

SB9739　調査区西端中央付近で検出した3間×2間の東西棟である。柱間は桁行・梁間とも1.8m、一辺0.5m～0.6mの隅丸方形の柱掘形に直径約20cmの柱痕跡がある。棟方向はN1°Wである。東方の同規模で時期的にも近いSB9743とは、約14.4m（約48.6尺）の間隔をあけて並列している。約50尺を意図した計画的配置とみられる。Ⅱ－1～2期のものとみられる。

SB9740　調査区西端中央のSB9739に重複して検出した3間×2間の同規模の建物である。桁行は桁行・梁間とも1.8m、柱掘形は一辺約0.4mの略方形、直径15cm前後の柱痕跡がある。棟方向はN1°Wである。他の遺構との重複関係から、同規模のSB9804より古いことは確認できるが、出土遺物からⅡ－1～2期の間に建てられたものとしか判断できない。ただし、南面の柱筋を東方の庇付建物SB9774の北辺と揃えているとも考えられ、Ⅱ－2期にまで下る可能性がある。

SB9742　第152次調査区のほぼ中央で検出した3間×2間の東西棟である。重複して掘られたSD0273や後世の削平により、南の側柱や西の棟柱を失っているものの、先行するSB9743・9744の建て替えと考え、南北2間の規模と推定した。柱間は桁行2.1m、梁間1.7m、柱穴は直径0.2m～0.3mの円形と小型で、柱痕跡も明らかでない。棟方向はN1°Wで、Ⅱ－2～3期のものと考えられる。

SB9743　調査区中央のやや東よりで検出した3間×2間の東西棟である。先述のSB9739と東西に並列する形で建てられている。検出した柱掘形の形状は直径0.4m～0.5mの不整方形である。柱間寸法は桁行1.9m、梁間2.0m、棟方向はN1°Wである。柱穴の重複関係からSB9744より新しい。

SB9744　先述のSB9743に重複して検出した3間×2間の東西棟である。柱間は、桁行1.8m、梁間1.6m、一辺0.4m～0.5mの隅丸方形の柱掘形に、直径約20cmの柱痕跡がある。棟方向はN2°Wで、時期はⅡ－1～2期とみられるが、柱穴の重複関係からSB9743より古いと判断される。

SB9745　第152次調査区の中央東端で検出した。南東隅が調査区外へのびているが、5間×2間の南北棟と確認できた。柱間は桁行2.0m、梁間2.2m、柱掘形は一辺約0.6m～0.7mの隅丸方形で、直径約20cmの柱痕跡が確認された。棟方向はN1°Wで、Ⅱ－1～2期のものとみられる。

SB9750　調査区中央で検出した5間×4間の東西棟で、後述するⅡ－1期のSB9800と同規模の四面庇付建物である。西側庇の柱筋のうち1個の柱穴が欠落する。身舎は直径あるいは一辺0.6m～0.7mの略方形か円形の柱掘形で、直径約20cmの柱痕跡があり、庇は直径0.4m～0.5mの円形ないしは略方形の柱掘形で、直径15cm～20cmの柱痕跡がある。柱間は桁行・梁間・庇出とも2.15mである。棟方向はSB9800同様N1°Wである。柱穴の出土遺物をみると、掘形にはⅡ期の遺物が、柱痕跡の中にはⅢ期の遺物が多数みられる。また、Ⅱ－2～3期の土坑群SK9758・9760・9762の埋土の上から柱穴が掘られていることから、Ⅱ－2期後葉からⅡ－3期のはじめまでに建てられたものと推定した。先行するSB9800とは、北に約7.5m（25尺）平行移動したような位置関係にあり、柱穴の規模や柱間寸法、棟方向はほぼ同一のものだが、この2棟が並存していた時期の可能性は、Ⅱ－2期の極めて短期間には想定される得るものの、SB9800からの建替えの建築期間程度の幅が想定される。

SB9768　第152次調査区南半中央で検出した3間×2間の東西棟である。柱間桁行・梁間とも1.9mで、一辺0.8mの隅丸方形の柱掘形に、直径20cm前後の柱痕跡がある。棟方向はN1°Wである。Ⅱ－1期以降のものとみられる。北側の柱筋をＳＢ9779の南辺と揃えており、「Ｌ」字形の配置を

構成する。両者の間隔は約2.5m（約8.4尺）である。

SB9774　調査区の中央東寄りで検出した3間×3間の建物で、東に1間分の庇出がある。柱穴は最大のもので直径約0.4mの円形ないしは略方形で、直径20cm弱の柱痕跡がある。柱間は桁行で3.0m（約10尺）と広く、梁間は2.2m、庇出は約2.0mと短い。棟方向はN1°Wである。時期的にはⅡ－2～3期頃のものとみられるが、西方の四面庇付建物SB9750の身舎の南側柱とSB9774の南側柱が揃う。SB9750の東辺とSB9774の東辺との距離は約14.7m（約50尺）で、両者は計画的な配置である可能性がある。

SB9779　第152次調査区南半東寄で検出した3間×2間の東西棟である。柱間は桁行・梁間とも2.0m、一辺0.5m～0.6mの隅丸方形の柱掘形に、直径15cm前後の柱痕跡がある。棟方向はN1°Wである。Ⅱ－1～2期のものとみられる。

SB9794　調査区南端で検出した3間×2間の南北棟で、第143次調査で確認されていたSB9010が建替えられたものである。柱間は桁行・梁間とも2.1mとSB9010よりやや広くなるものの、柱掘形は直径0.4m～0.5mの略円形になり、棟方向もN2°Wと若干振れる。SB9010に後出することからⅡ－1～2期のものとみられる。

SB9795　第152次調査区の南西隅で検出したもので、第143次調査の成果とあわせて南北2間分を確認し、第153次調査ではこの延長部分で柱穴を確認していないため、3間×2間の東西棟と判断した。柱間は桁行2.4m、梁間2.1m、一辺約0.7mの隅丸方形の柱掘形に直径20cm弱の柱痕跡がある。棟方向はN0°である。柱穴からの出土遺物がほとんどないが、Ⅱ－2期以降の四面庇付建物SB9750の西側柱筋と東側柱筋を揃えており、また両者の間隔が約21m（約70尺）であるため、並存する可能性が高いと考えた。

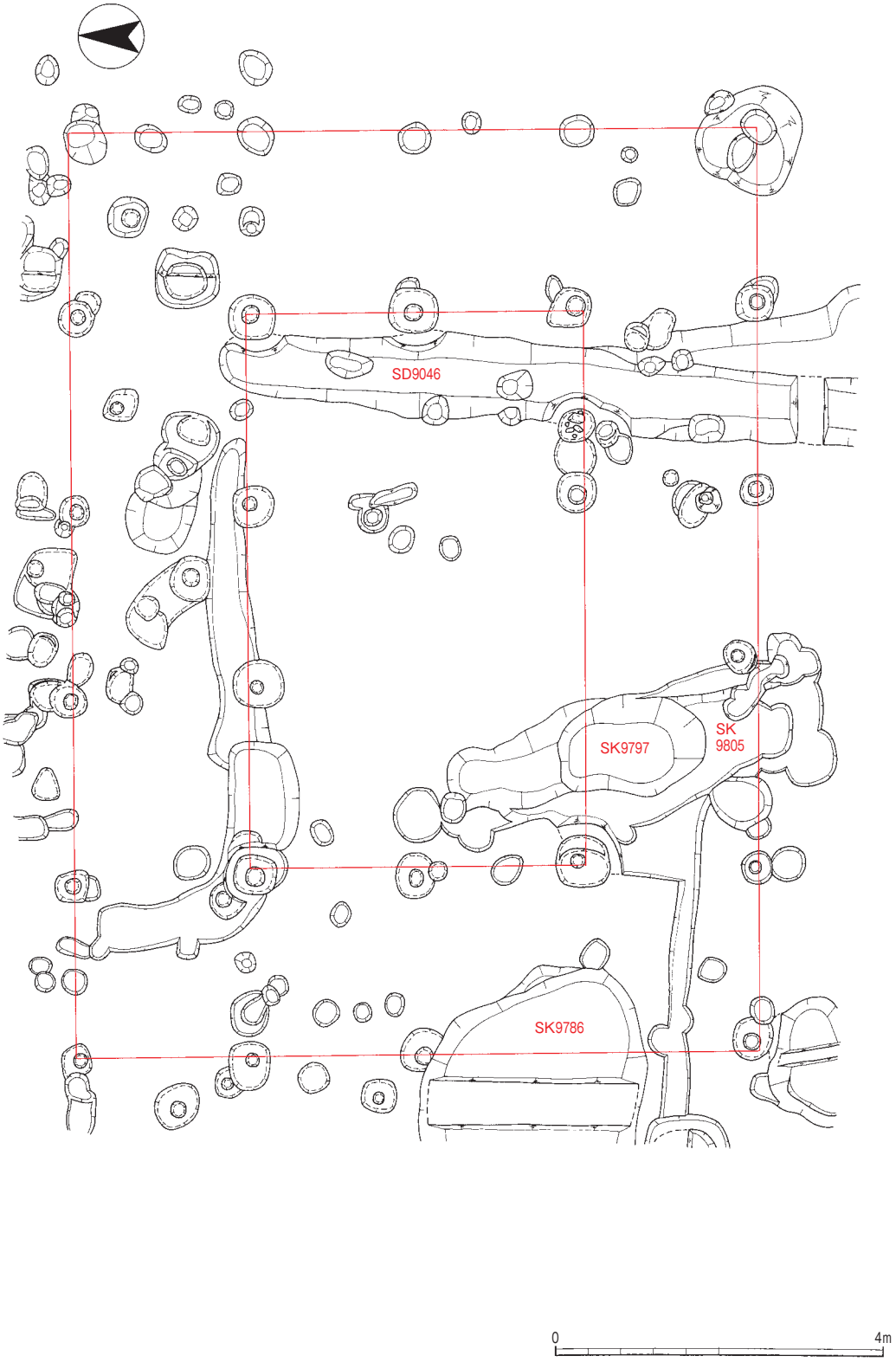
SB9800　第152次調査区の南端付近で検出した5間×4間の東西棟で、3間×2間の身舎に、東西南北それぞれに1間分の庇出が付く四面庇付建物である。身舎の柱掘形は0.5m～0.6mの隅丸方形で、直径20cm前後の柱痕跡がある。庇の柱掘形はおおむね0.4m～0.5mの略方形で、直径15cm程度の柱痕跡がある。第152次調査では身舎の南辺で柱穴が1個欠落していたが、その後の補足調査で掘形は判明しないものの柱痕跡的な染みは確認している。柱間は梁間側が2.1m（約7尺）であるのに対し、桁行側は約2.25m（約7.6尺）になっている。棟方向はN1°Wである。

他の遺構との重複関係では、Ⅰ－4期～Ⅱ－1期のSK9805やSD9046より新しく、Ⅱ－1～2期のSK9786より古いと判断される。SK9786との重複関係については土坑の土層断面からも確認した。土器等の廃棄土坑であるSK9786から出土した土器群が、斎宮跡編年でⅡ－1期からⅡ－2期の古い様相のものまでを含むことから、SB9800の存続期間はⅡ－1期の途中からⅡ－2期の前葉までと想定される。

SB9802　調査区の南東端近くで南北3間分を検出した。東西方向の規模は不明である。柱間は桁行で2.5m、柱掘形は一辺0.7m～0.8mの方形で、黒色シルト質の埋土を持つ。棟方向はN4°Wである。出土遺物はほとんどない。当区画の中でも古い建物と判断できるためⅡ－1期頃のものと推定した。重複関係からSK9803より新しいと判断される。

【溝・土坑・その他の遺構】

SD1326　第28次調査区からの延長部分で、全体で延長約50mのものになる。一部で若干狭くなるが幅約0.9mで、残存する深さは0.15m～0.1mと浅く、断面は弱い「U」字形になる。溝の向き



第 25 図　SB9800 遺構平面図（1：80）

はほぼ東西正方位になり、東端は途絶するように終わる。先端付近で、底部から若干上のレベルで土師器鍋Ｂが破砕した状態で出土している他、土師器杯・甕、須恵器片が出土している。形状や規模から、柳原区画内の区画施設であったと考えられる。

SK9677　調査区の北端近くで検出した直径約2.6m、深さ約0.2mの浅い皿状の土坑である。土師器片の他、緑釉陶器片が出土している。出土遺物からⅡ－2～3期のものとみられるが、埋土の重複関係からⅡ－2～3期のSB9676より古いと判断される。

SK9680　調査区の北西隅付近で検出した、直径約2.0m、深さ0.2mの略円形で皿状の土坑である。出土遺物は少ないが、土師器長胴甕片が出土している。Ⅱ－1～2期のものと推定される。

SK9694　調査区北半の中ほどで検出した南北2.5m×東西1.4m、深さ約15cmの浅い土坑である。出土遺物は少ないが、Ⅱ－1～3期の土師器杯・鉢や須恵器蓋が出土している。重複するSB9672に先行するとみられる。

SK9703　調査区北西部で検出した、東西2.3m×南北1.8m、深さ0.1mの浅いすり鉢状の土坑である。土師器杯・高杯・甕・鍋や須恵器片が出土している。遺構検出時は確認できなかったが、重複するSB9725に先行するものと考える。Ⅱ－1～2期と推定される。

SK9736　調査区中央の東端付近で検出した東西3.5m×南北2.4m、深さ約0.15mの浅い皿状の土坑である。検出時には上面でⅢ期の遺物もみられたが、下部ではⅡ－1～2期頃とみられる土器片のみになる。土師器杯・椀・皿・甕・竈、黒色土器椀、須恵器杯・蓋や炭化材が出土している。

SK9758　調査区のほぼ中央で検出された、土坑群のひとつである。これらの土坑群からは多量の土器類が出土している。これらは斎宮跡の土器編年でⅡ－2～3期のものだが、このうちⅡ－3期と判断されるものはごくわずかであり、大多数はⅡ－2期に属するものである。その中でも黒笹14号窯式期に位置づけられる須恵器や灰釉陶器が多数出土している点が注目される。土坑群には形状から区別してそれぞれ個別に遺構番号を与えたが、重複関係は明確に判別できなかった。Ⅱ－2期からⅡ－3期のごく初頭の間に掘削され、埋没したものとみられる。

SK9758は、長径2.5m×短径2.0m、深さ0.35mの底部が平坦な皿状の土坑である。整理箱で2箱分の出土遺物があり、土師器杯・椀・皿・甕、須恵器杯・甕などの他、灰釉陶器の出土が目立つ。また製塩土器、土錘、鉄製品片、炭化材も出土した。この土坑の埋土の上からSB9750の柱穴が掘られている。

SK9759　SK9758の東に接する直径約1.3m、深さ約0.4mの略円形の土坑である。小型の土坑ながら、整理箱2箱分の出土遺物がある。土師器杯・椀・皿・甕、須恵器片、灰釉陶器、製塩土器、土錘などがある。土器はⅡ－2～3期のものである。

SK9760　SK9758の南東に広がる、長径3.7m×短径2.2m、深さ約0.1mで底部の平坦な浅い土坑である。整理箱で4箱分の出土遺物があり、土師器杯・椀・皿・甕、須恵器杯・高杯、灰釉陶器椀・皿・段皿・壺のほか、製塩土器や土錘、炭化材が出土している。この土坑の埋土もSB9750を建てる際に柱穴を掘られている。

SK9761　SK9760の南西で検出した直径約1.5m、深さ約0.35mの円形土坑である。底部から円礫が出土している。出土遺物はやや少なく整理箱１箱分の土師器、須恵器、灰釉陶器、製塩土器が出土している。遺物はⅡ－2～3期のものである。

SK9762　SK9760の南で検出した長径2.0m×短径1.8m、深さ約0.1mの略方形の土坑である。出土

遺物は少なく、土師器片、灰釉陶器片が少量見られたのみである。

SK9785　第152次調査区南西隅付近で検出した南北2.8m×東西2.5m、深さ約0.7mの略円形の土坑である。壁がほぼ垂直に立ち上がり平らな底部になっている。一次整理時で整理箱に37箱分の遺物が出土しており、その大半が土器類である。その大部分が土師器の杯・椀・皿といった供膳具で、完形品も多数含むが、土師器煮炊具や黒色土器も多く、また多種の須恵器が出土している。土師器杯類には口縁に油煙の付着するものも多い。また製塩土器の破片や土錘もみられる。この他、刀子片や釘・円盤状製品などの鉄製品や、鋳造に関連するとみられる金属滓や多量の炭化材が出土している点も注目される。埋土断面の観察からは、埋没にやや時間幅が見て取れるが、土器形式の上ではⅡ－1期内で収まり、差はみられない。

SK9786　SK9785の北東にわずかな間隔をあけて掘られた、東西3.5m×南北2.6m、深さ約0.6mのやや歪んだ楕円形の形状の土坑で、壁がほぼ垂直に近く、底部は平坦になっている。整理箱で40箱の多量の遺物が出土しており、内容的にも土師器杯･椀･皿を中心に、土師器煮炊具や黒色土器、須恵器類、製塩土器、土錘や釘などの鉄製品、焼粘土塊、炭化材とSK9785とほぼ同様の構成である。土師器杯類には口縁に油煙が付着するものがみられる。土師器皿類の器壁が若干薄くなる傾向のものがみられ、SK9785より若干後出する土器群であると推定した。土器群はⅡ－1～2期にかけての時期に位置づけられるとみられるが、四面庇建物SB9800の庇柱が想定される位置で断面を観察しながら調査したが、柱掘形の痕跡はなく、SK9786が後出することが確認できており、土坑の成立はⅡ－2期とみられる。

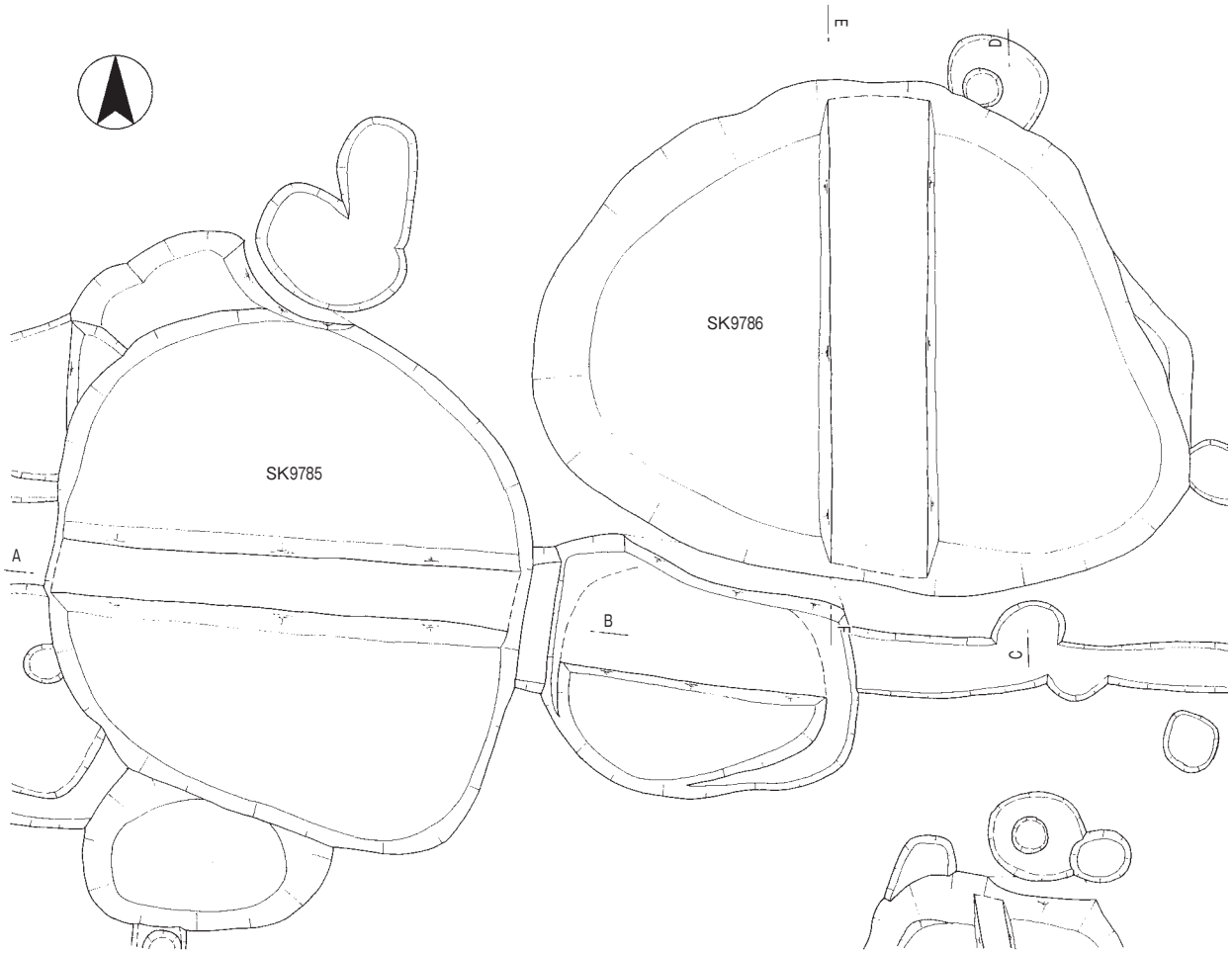
SK9787　調査区南西隅部のSK9785の東に位置する東西1.6m×南北1.4m、深さ約0.4mの不整形の土坑である。黒褐色の埋土で出土遺物は少ない。土師器皿と須恵器片が出土した。Ⅱ－1～2期に推定される。

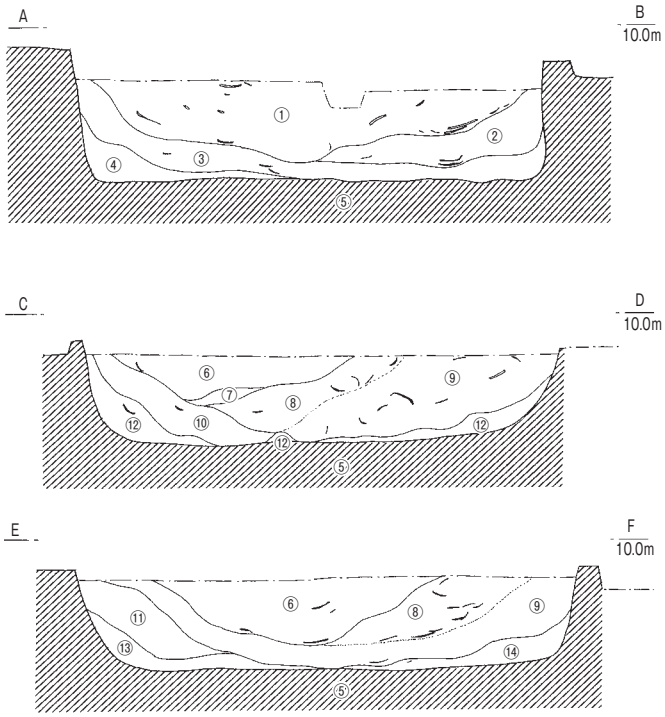
SD9788　調査区の南西隅近くで検出した幅約0.3mの溝で、深さは最大で7cmと浅い。断面は弱い「U」字形である。両端に他の土坑が重複しているため、本来の長さは分からないが、検出長で約4.6mある。遺物は少ないが、黒褐色の埋土で、ＳＫ9785やＳＫ9787より古いことからⅡ－1期のものと考えられる。

SK9789　調査区の南端付近で検出した長径約1.6mの不整円形の土坑で、深さは0.35mである。出土遺物は多くないが、土師器片、須恵器片、炭化材が出土している。遺構埋土の重複関係からSB9800より古い。Ⅱ－1～2期にかけてのものとみられる。

SD9792　調査区南端付近のSD9799の下部で検出した溝である。調査区内での検出長は約7.8m、幅約0.9m、遺構検出面からの深さは約0.25mで、断面は逆台形状になる。溝はいったん途切れるが、この部分が柳原区画の東西センターライン付近にあたること、西の第20次調査区には、この溝の西の延長部分でSD1044があり、これをつなぐと延長約52mになる。溝の方向もおおむね東西正方位であり、Ⅱ－1期のSD1326と溝の心々間で約22.2m（75尺）となることから、区画内を細分する施設とみられる。

SX9806　調査区南半の西寄りで検出した埋納遺構である。0.33m×0.27m、深さ26cmの円錐状のピットで、底部より上面で大形の須恵器杯Ｂが出土した。須恵器は西にむかって傾いた状態で出土したが、上側の口縁が破損しており、本来は正置状態であったものが、後世の耕作等により傾いたものと推定できる。ピットの内部には他には遺物は見られなかった。地鎮などに関連する





0　2m

① 土器片・炭化材を多量に含む黒褐色壌土（10YR 3/2）
② 土器片を多量に含む黒褐色壌土（10YR 3/2）
③ 土器片を少量含む黒褐色壌土（10YR 3/1）
④ 地山崩壊土を多量に含む黒褐色壌土（10YR 3/2）
⑤ 明黄褐色粘質土（10YR 6/8）
⑥ 土器小片を含む黒褐色壌土（10YR 3/1）
⑦ 土器小片を含む黒褐色壌土（10YR 3/2）
⑧ 多量の土器片（大型破片含む）・炭化材を含む黒褐色壌土（10YR 3/2）
⑨ ⑧と同じ土質だが、層位的に分離できる黒褐色壌土（10YR 3/2）
⑩ 土器片・炭化材・焼土粒を含む灰黄褐色壌土（10YR 4/2）
⑪ 焼土粒を含む黒褐色壌土（10YR 3/1）
⑫ 土器片（大型破片含む）・炭化材を含む黒褐色壌土（10YR 3/1）
⑬ 若干の土器片を含む焼土層（5YR 4/6）
⑭ 地山崩壊土粒・礫を含む褐灰色壌土（10YR 6/8）

第 26 図　SK9785・9786 遺構平面図・土層図（1：40）

遺構であろうか。須恵器の形式からⅡ－1期頃のものとみられる。

2）Ⅱ－3～4期の遺構

【掘立柱建物・柵列】

SB9674　第152次調査区の北端で検出した東西3間の建物である。柱間は1.8m、柱掘形は最も大きいもので一辺約0.4mの略方形である。棟方向はN2°Wで、重複関係上SB9673より新しい。Ⅱ－3期頃のものとみられる。

SB9754　調査区西端の第28次調査区との境で検出した5間×2間の南北棟である。柱間は桁行1.85m、梁間1.9m、柱穴は直径0.4m弱の円形で、直径15cm前後の柱痕跡がある。棟方向はN0°である。Ⅲ期のSB9764などに継続するとみられ、Ⅱ期でも新相のものとみられる。

SB9765　調査区西端のSB9754の東で検出した4間×2間の南北棟である。柱間は桁行2.2m、梁間2.1m、柱穴は直径0.4m前後の円形で、柱痕跡は直径10cm強である。棟方向はN1°Eである。これもⅡ－3期頃のものとみられる。

SB9766　調査区の南西部で検出した5間×4間の東西棟である。第152次調査の概要報告の段階では3間×2間の東西棟と推定したが、別にSB9767としていたものとあわせて、これも四面庇付建物になることを確認した。Ⅱ－2～3期のSB9750とは同形式、ほぼ同規模になる。柱間は桁行2.15m、梁間2.1m、庇出2.15m、身舎の柱掘形は直径約0.5mの略円形で、直径15cm前後の柱痕跡がある。庇の柱穴は直径約0.4mの円形ないし略方形で、直径約15cmの柱痕跡がある。棟方向はN2°EとSB9750と比べると大きく振れる。SB9750と位置的に重複することから後出するⅡ－3期のものとみられる。

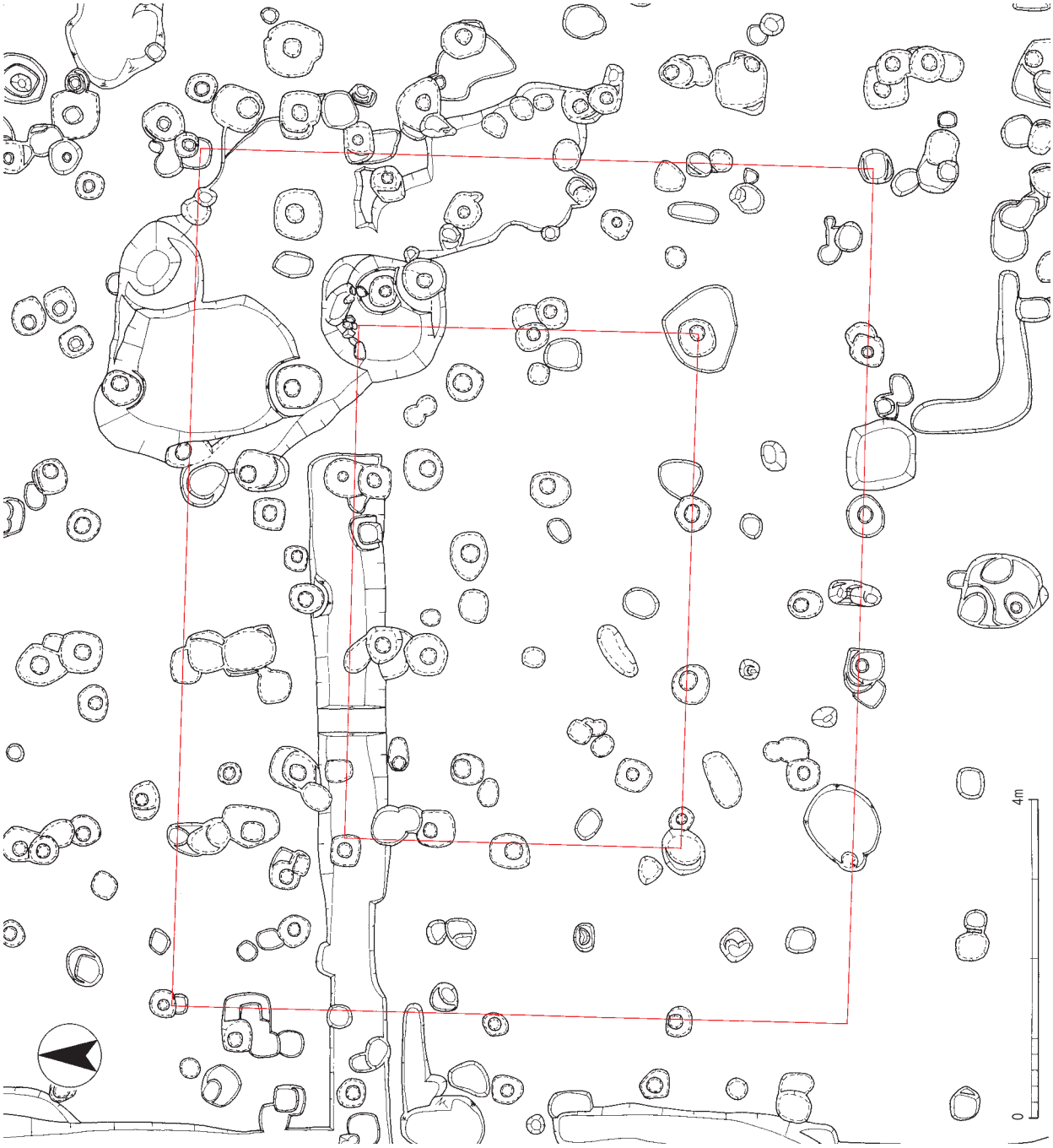
SB9775　調査区中央東よりで検出した3間×2間の南北棟である。柱間は、この建物も桁行は長く、約3.3m（約11尺）を測るのに対し、梁間は2.3mとなっている。柱穴は直径約0.7mの略方形とやや大振りで、柱痕跡の直径は約20cmである。棟方向はN3°Wである。出土遺物などからⅡ－3期以降のものとみられ、庇は持たないものの、位置的に見て先行するⅡ－2～3期のSB9774の機能を引き継ぐものかもしれない。この建物もまた、東接する第167次調査区で検出した同様に桁行の柱間が広い南北棟SB10173と約12mの間隔で並列する。

SB9776　調査区中央東寄りでSB9775とほぼ同じ位置で検出した3間×2間の南北棟である。柱間は桁行・梁間とも2.2m、柱掘形は直径約0.5mの略円形で、直径20cm弱の柱痕跡がある。棟方向はN1°Wである。Ⅱ－3～4期のものとみられる。

SB9778　調査区南半中央で検出した5間×2間の南北棟である。柱間は桁行1.7m、梁間1.9m、直径約0.5mの略円形の柱掘形に、直径約15cmの柱痕跡がある。棟方向はN2°Wである。東側柱の南から2個目の柱穴の柱痕跡に、須恵器甕とⅢ－1期相当（東山72号窯式併行）の灰釉陶器椀が埋納されていた。建物の廃絶に伴う祭祀の跡かもしれない。これにより建物はⅡ－3期からⅢ－1期にかけてのものと判断した。

SB9780　調査区南半中央のSB9778の東側で検出した3間×2間の東西棟である。柱間は桁行2.1m、梁間1.9mで、柱穴は最大で0.5m～0.6mの略方形で、直径20cm弱の柱痕跡がある。棟方向はN2°Wである。Ⅱ－3～4期のものとみられ、SB9778とは約2.1m（7尺）の距離をおいて「L」字形の配置となるとみられる。

SB9782　調査区南半の東端付近で検出した5間×2間の南北棟である。柱間は桁行・梁間とも2.1



第 27 図　SB9766 遺構平面図（1：80）

mである。最大で直径約0.6mの円形の柱掘形に、直径20cm強の柱痕跡がある。棟方向はN2°Eで、Ⅱ－3～4期に属する。ほぼ同規模のSB9783に先行する。第159次調査で約11m東で検出した南北棟SB10057とは並列する。

SB9783　SB9782を建替えた5間×2間の南北棟である。柱穴の重複関係からSB9783が後出である。柱間は桁行・梁間とも約2.15mと若干広くなっている。一方、柱穴は掘形が直径0.5mの円形に、柱痕跡が直径20cm弱とやや小振りになっている。棟方向はN2°WとSB9783より西に約4°振っている。時期的にはⅡ－3期のものと考えられる。

SA9756　調査区南半の西寄りで検出した南北方向の掘立柱列である。柱穴は直径約0.3m、柱痕跡は直径約10cmである。掘立柱建物の残欠の可能性もあるが、柱間が2.1mから3.3mまでバラつきがあるため、柵列と判断した。N4°Wの方向を取る。詳細な時期は不明だが、SD1326と交差する部分が最も柱間を広く取っており、両者には関連性があるかもしれない。

SA9796　調査区の南端付近で検出した掘立柱列である。柱穴で13個、少なくとも12間分の延長34.0mを検出した。柱穴は直径0.2m～0.3mと小さく、柱間は2.5m～2.7mとややバラつきがある。東から3間目のみ柱間4.5mと広い。東西に正方位の向きで、出土遺物や遺構の重複関係では確認できないが、Ⅱ期後半以降のものとみられる。

3)その他のⅡ期の遺構

SB9804　第152次調査区中央西寄りで検出した3間×2間の東西棟である。北側と西側の柱筋が欠落しているが、SB9739･9740などの建て替えとみて、南北2間と推定した。柱間は桁行･梁間とも2.1m、柱穴は直径0.3m～0.4mの略円形で、棟方向はN5°Wである。柱穴の重複関係から、東側にある同規模のSB9729より新しい。Ⅱ期でも後半のものとみられる。

SA9695　調査区北東隅付近の掘立柱列である。柱穴5個と延長7.5m分を検出した。柱穴は直径約0.3m、柱痕跡は直径10cm強で、柱間は1.4mから2.4mまでバラつきがある。方向は東で北に4°振った向きである。詳細な時期は不明である。

SK9693　調査区北部で検出した長径1.2m×短径0.9m、深さ約0.4mの不整円形の土坑である。少量の土師器片・須恵器片が出土している。

SK9697　調査区北西隅で一部を検出した土坑で、直径約1.1m、深さ約0.25mの円形の土坑である。土師器片・須恵器片が出土しており、埋土の重複関係からⅢ期のSD9681より古い。

SK9698　SK9697の北東で検出した長径約1.5m、深さ約0.2mの浅い土坑である。土師器片・須恵器片が出土している。

SK9701　調査区の北西部で検出した直径約1.6m、深さ4cmほどの略円形の皿状の土坑である。遺物は少なく、土師器片・須恵器片のほか、ロクロ土師器椀の小片も出土しているが、白色の古式のものであり、遺構としてはⅡ－3～4期頃のものと推定される。

SK9711　調査区北半の東端付近で検出した残長2.6m、幅1.3m、深さ6cmの浅い長方形の土坑である。黒色の埋土で出土遺物も極めて少ないが、Ⅱ期の古い段階と推定される。

SK9718　調査区北西部の土坑群のひとつで、長径2.2m、深さ約0.25mの不整円形の土坑である。土師器片・須恵器片が出土している。

SK9719　SK9718に南接する長径1.5m、深さ約0.27mの不整円形土坑である。土師器片・須恵器片が出土している。

SK9728　調査区の北西部で検出した長径1.4m×短径1.0m、深さ約0.35mの長方形の土坑である。土師器甕片が出土している。

（3）斎宮跡第Ⅲ期の遺構

1）Ⅲ－1期の遺構

SB9713　第152次調査区の北西端で南北2間分を検出した建物である。東西方向は2間以上になるが、西の第157次調査でこの延長は確認できず、東西3間の規模になるとみられる。柱間は桁行2.1m、梁間2.0m、柱穴は直径0.4m～0.45mの円形で、直径10cm強の柱痕跡がある。棟方向はN1°Wである。出土遺物等からⅢ－1期頃のものと判断した。重複するほぼ同規模のSB9714より新しい。

SB9714　SB9713とほぼ同位置で検出した建物で、同様に3間×2間の東西棟になると考えられる。柱間は桁行2.3m、梁間2.2m、柱穴は一辺0.4m～0.5mの略方形で、直径10cm強の柱痕跡がある。棟方向はN1°Wで、Ⅲ－1期頃のものと推定される。

SB9751　第152次調査区のほぼ中央で検出した5間×4間の東西棟で、SB9750やSB9766の建替えとみられる四面庇付建物である。身舎では一辺0.6mの略方形の柱掘形に、直径20cmほどの柱痕跡があり、庇では直径0.4m～0.45mの略方形の柱掘形に直径15cm前後の柱痕跡がある。柱間寸法は桁行2.25m、梁間2.15mである。棟方向は、N1°Wである。

柱穴の掘形からはⅡ期～Ⅲ－1期頃の、柱痕跡からはⅢ－2期頃の土器片が出土し、また他の遺構との前後関係は、Ⅲ－2期以降のSB9752や、Ⅲ期のSD9772より古いと判断されるので、SB9751はSB9766以後のⅢ－1～2期頃に存続期間が求められる。

SB9764　調査区中央の西端で検出した5間×2間の南北棟である。柱間は桁行・梁間とも2.1m、柱穴は直径0.3m～0.4mの略円形で直径10cm前後の柱痕跡がある。棟方向はN3°Wである。出土遺物からⅢ－1期以降のものと判断した。周囲にはⅡ期に同様の規模の南北棟SB9754・9765があり、Ⅱ－4期からⅢ－1期頃にかけて引き続き建て替えられたと考えられる。

SB9777　調査区南半の東端付近で検出した4間×2間の東西棟である。柱間は桁行1.95m、梁間1.75m、柱穴は一辺0.4m～0.45mの略方形ないしは円形で、直径15cm前後の柱痕跡がある。棟方向はN3°Wである。柱穴の出土遺物から、Ⅲ－1期に属するとみられる。

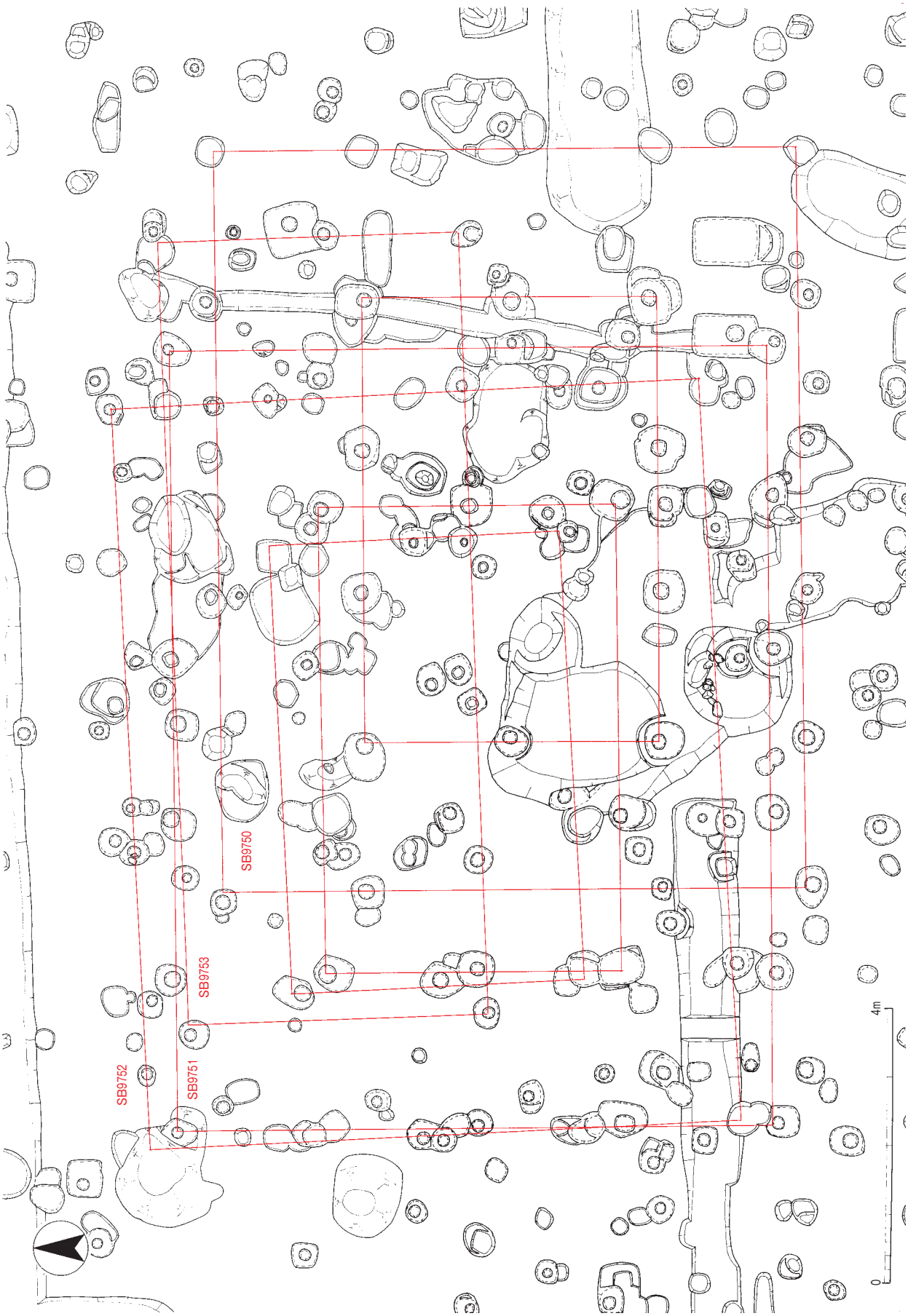
SK9797　調査区南端付近で検出した長径1.8m×短径1.3m、深さ約0.5mの楕円形土坑である。土師器片・須恵器片が出土しており、Ⅲ－1～2期頃のものと推定する。

2）Ⅲ－2期の遺構

SB9707　第152次調査区北半の中央で検出した5間×2間の東西棟である。柱間は桁行・梁間とも2.1m、柱穴は最大で直径約0.4mの不整円形で、直径10cm強の柱痕跡がある。棟方向はN5°Wである。柱穴の重複関係からSA9717より新しい。柱穴遺物等からⅢ－2期以降のものとみられる。

SB9708　調査区北半のほぼ中央で検出した3間×2間の東西棟である。柱間は桁行2.1m、梁間2.0m、柱掘形は最大で一辺0.4m～0.5mの隅丸方形で、直径20cm弱の柱痕跡がある。棟方向はN4°Wである。概要報告段階ではⅡ期に比定していたが、再検討の結果Ⅲ－2期以降のものと判断した。西方約7.4m（約25尺）の間隔でSB9725とは並列配置の関係にあるとみられる。

SB9722　調査区北半のSB9707の西側で検出した3間×2間の東西棟である。柱間は桁行2.1m、梁間1.8m、柱穴は直径0.3m～0.4mの円形で、柱痕跡は直径約10cmと小振りである。棟方向はN4°



第 28 図　SB9750・9751・9752・9753 遺構平面図

W である。出土遺物からⅢ－2期のものと考えられるが、柱穴の重複関係より SB9707より古いと判断される。

SB9725　第152次調査区北半の SB9708の西に位置する3間×2間の東西棟とみられる建物である。北辺と西辺の一部の柱を確認した。南辺は明らかでないものの、先の SB9708との関係から3間×2間の規模となるものとみられる。柱間は桁行2.25m、梁間1.6m、残存している柱穴は直径0.25m～0.3mの小型で円形のもので、直径10cm 前後の柱痕跡が見つかっている。棟方向は N4° W である。概要報告段階ではⅡ期に比定していたが、改めてⅢ－2～3期のものと推定した。

SB9726　調査区の中央やや北よりで東西3間分を確認した。柱穴4個のみの検出であるため、柵列等の可能性もあるが、周辺に同規模の建物が長期間にわたり建替え続けられていることから、3間×2間の東西棟の一部と判断した。柱穴は最大のもので直径約0.4mの略円形で、直径20cm 弱の柱痕跡がある。柱間は桁行で2.1m、棟方向は N4° W。概要報告段階ではⅡ期に比定していたが、再検討の結果Ⅲ－2期のものと推定した。

SB9730　調査区の北半中央のやや東寄りのところで検出した東西3間とみられる建物である。北・西側柱を欠失するが、柱穴の規模や周囲の状況から3間×2間の規模になると推定される。柱穴は直径約0.4mの円形で、直径10cm 強の柱痕跡がある。柱間は桁行2.2m、棟方向は N4° W である。Ⅲ－2～3期とみられる。

SB9731　SB9730のやや南で検出した3間×2間の南北棟である。柱間は桁行2.0m、梁行2.1m、柱穴は直径約0.5mの略円形で、直径15cm 前後の柱痕跡がある。棟方向は N4° W である。Ⅲ－2期のものとみられる。柱穴の重複関係から SB9730より古い。

SB9732　SB9731に重複して検出した3間×2間の南北棟である。柱間は桁行2.0m、梁間2.2m、柱穴は最大で直径約0.45mの楕円形で、直径10cm 強の柱痕跡がある。棟方向は N3° 30′ W である。Ⅲ－2～3期と推定される。

SB9733　SB9732と重複して検出した3間×3間の南北棟で、3間×2間の身舎の東側に1間分の庇出を持つ。南側柱の2個を欠失する。柱間は桁行・梁間・庇出ともに2.1m、柱穴は小さく、最大で直径約0.3mの円形で、直径10cm 前後の柱痕跡がある。棟方向は N3° 30′ W である。Ⅲ－2～3期に属するとみられるが、約1.9mの間隔をおいて、SB9770と西側柱筋を揃えており、併存していた可能性が考えられる。

SB9752　第152次調査区の中央で検出した5間×4間の東西棟である。3間×2間の身舎の四方にそれぞれ1間ずつ庇出を持つ四面庇付建物で、庇北西隅の柱穴を攪乱坑により欠失する。身舎・庇とも柱穴は直径約0.4mの略円形で、直径10cm 強の柱痕跡がある。柱間は桁行・梁間・庇出とも2.15m、棟方向は N4° W である。Ⅲ－1期の四面庇付建物 SB9751より後出とみられ、Ⅲ－2期以降に比定されるが、北側柱を約11.4mの距離を置いて東方の SB9770の南側柱と揃えており、SB9773も含め同時期の規則的な建物配置を構成していたと推察される。

SB9770　第152次調査区の中央東端付近で検出した3間×2間の東西棟である。柱間は桁行1.85m、梁間1.7m、柱穴は直径約0.4mの略円形で、直径15cm～20cm 弱の柱痕跡がある。棟方向は N3° W である。Ⅱ－2～3期のものとみられる。SB9733・9752と規則的な建物配置を取る可能性がある。

SB9773　調査区の中央東端付近で検出した3間×2間の東西棟とみられる建物である。南側柱筋を欠失するが、周辺の他の建物の状況から3間×2間と推定した。柱間は桁行で2.0m、柱穴は最大

のものが直径0.4mの略円形で、直径10cm強の柱痕跡がある。棟方向はN4°Wである。SB9770と類似するが、前後関係は明らかではない。

SA9717　調査区の北半を二分する東西方向の区画施設と考えられる掘立柱列である。柱穴は直径0.3m～0.35mの円形で、直径10cm弱の柱痕跡がある。柱穴12個、延長24.3m分を検出した。柱間は一定しないが、平均で2.15mほどになる。また西から7個目と8個目の柱穴の間が約2.8mと広くなっており、あるいは通路となっていた可能性がある。東で北に約2°振った向きになる。時期は柱穴の出土遺物からⅢ－2期頃とみられ、SA9716と同時存在した可能性もある。

調査区西部の土坑群　SK9747はSD9746に先行する東西約2.3m、深さ約0.2mの不整形土坑。SK9748は3.4m×2.0m、深さ約0.3mの不整形の土坑で、土師器片、ロクロ土師器片、須恵器片、灰釉陶器片、陶器椀片や長石塊が出土している。その南のSK9755は、直径約1.5m、深さ約0.15mの略円形の土坑で、土師器片、ロクロ土師器片などが出土した。これらの土坑群は、いずれもⅢ－2～3期頃に位置づけられる。

3）Ⅲ－3～4期の遺構

SB9753　第152次調査区中央で、四面庇付建物SB9752をやや南東にずらした位置で検出された5間×2間の東西棟である。西側棟柱を欠失する。柱間は桁行2.25m、梁間2.2m、柱穴は直径0.3m～0.5mの略円形で、直径15cm前後の柱痕跡がある。棟方向はN2°Wである。Ⅲ－3期に属するとみられ、柳原区画の中央に建てられてきた中心建物の最終的な形態とみられる。

SD0273　調査区の北と南を分ける、幅約1.1m、深さ0.1m～0.15mの断面「U」字状の浅い溝で、調査区内での延長は38.1mである。磨耗の進んだ土師器片や須恵器片などが出土している。南に平行して近世以降の土地の境界溝とみられるSD9809があり、少なくともⅢ－3期以降のものとみられる。

SK9715　先述の土坑群とはやや離れた位置にある長径2.6m×短径2.1m、深さ約0.4mとやや大形の土坑である。土師器片、ロクロ土師器片、須恵器片、無釉陶器椀（山茶椀）・皿（山皿）、白磁片が出土しており、Ⅲ－3期に位置づけられる。

SK9734　調査区中央の東よりで検出した長径1.7m×短径1.3m、深さ約0.1mの浅い楕円形の土坑である。土師器片、ロクロ土師器片、須恵器片、無釉陶器椀（山茶椀）片が出土しており、Ⅲ－3期に位置づけられる。

SK9741　調査区中央西よりで検出した長径3.4m×短径2.6m、深さ約0.3mの不整円形の土坑である。複数の土坑が結合したものとみられるが、埋土や遺物では分離できなかった。土師器片、ロクロ土師器片、須恵器片、灰釉陶器片も、無釉陶器椀（山茶椀）片、瓦器皿が出土しており、Ⅲ－3期に位置づけられる。

SD9746　調査区南半の西端で検出した、幅0.5m～0.7m、深さは最大で約0.2mで、溝底は南から北に傾斜している。細片が多いが、土師器片、ロクロ土師器片、須恵器片、灰釉陶器片、白磁片、軽石が出土している。埋土の重複関係から、SK9747・9748より新しいと判断され、Ⅲ－3期以降のものとみられる。

SD9791　調査区の南端付近で検出した、幅約0.7m、深さ約0.2mの溝で、調査区内では延長13.8mを検出した。土師器片、ロクロ土師器片、無釉陶器椀（山茶椀）片、白磁片が出土しており、Ⅲ－3期以降のものと考えられ、SD9894などと一体となって区画を構成する溝になる可能性がある。

調査区北西部の土坑群　調査区の北西部には、Ⅲ期に属する小規模な土坑が多数作られており、これをまとめて記述する。

SK9699は調査区北西隅で検出した直径約1.8m、深さ約0.3mの円形の土坑である。土師器片、ロクロ土師器片、須恵器片、無釉陶器椀(山茶椀)片が出土している。その北東約1.5mのSK9700は、直径約2.3m、深さ約0.3mの円形土坑で、土師器片、ロクロ土師器片、緑釉陶器片、白磁片が出土している。SK9721は長径1.2m、深さ約0.2mの不整円形で、土師器片、無釉陶器椀(山茶椀)片が出土している。SK9723は約1.7m四方、深さ約0.15mの方形の土坑で、土師器片、ロクロ土師器片、須恵器片、灰釉陶器片、無釉陶器椀(山茶椀)片、鉄製品の一部が出土している。東接するSK9724は長径2.3m×短径1.9m、深さ約0.1mの長方形の土坑で、土師器片、ロクロ土師器片、須恵器片、灰釉陶器片、無釉陶器椀(山茶椀)片、土錘、鉄製品の一部が出土している。以上の土坑群はいずれもⅢ－3期頃に位置づけられる。

このほかにもSK9704・9705・9720といった同様の土坑がある。出土遺物が微細なため、詳細な時期決定にはいたらなかったが、Ⅲ期でも後半に属する可能性が高い。

4)その他のⅢ期の遺構

SB9771　第152次調査区中央部東端でSB9770の北側で、南側柱筋のみを3間分検出した。柱穴は一辺約0.5mの略方形で、直径20cm弱の柱痕跡を持つことから、3間×2間の東西棟の残欠である可能性が高い。柱間は2.0mで、棟方向はN4°Wである。柱穴の遺物からⅢ期の前半頃のものと推定した。

SB9781　調査区中央部東端でSB9777に重複する3間×2間の南北棟である。柱間は桁行2.1m、梁間2.0m、柱穴は直径約0.4mの円形で、直径10cmの柱痕跡がある。棟方向はN3°Wである。Ⅲ期でも後半のものであろうか。

SA9716　調査区中央の西端で検出した、区画施設と考えられる掘立柱列である。柱穴は小さく、直径0.3m前後の円形で、柱痕跡は直径10cm弱である。検出長で8.0mあるが、調査区の北側にさらに延びるとみられる。柱間は約2.0mで、N2°Eの方向を取る。柱穴の出土遺物はⅢ－1～2期に比定されるが、SB9313・9314と重複するため、これらより後出のものとみられる。

SA9727　SA9717の南1mほどの所につくられた東西方向の掘立柱列である。柱穴で12個、延長23.65m分を検出した。柱穴の大きさはSA9717とほぼ同じで、柱間も平均2.15mほどになる。東で北に約4°北に振った向きになる。

SD9737・9738　調査区北半中央部で「L」字に折れる溝である。東西溝をSD9737、南北溝をSD9738とした。SD9737で幅約0.7m、深さ約0.2mで、調査区内での検出延長は19.7mである。SD9738は幅約0.5m、深さ約0.1mで、南にいくに従って浅くなる。また途中j－18グリッドのところで一端途切れたようになる。SD0273を越えてSD9772も本来は一連の溝であった可能性もある。SD9737・9738からは土師器片、須恵器片、灰釉陶器片が出土しており、Ⅲ期の中に位置づけられるが詳細な時期決定はできない。しかし、位置や形状から、Ⅲ－2期以降のSB9733などを囲郭する施設であったとみられる。

SD9772　調査区のほぼ中央で検出した幅約0.4m、深さ約0.1mの溝である。検出長は約7.5mだが、若干湾曲した形状である。遺物は少量の土師器片のみだが、埋土の重複関係から、SB9750・9751の柱穴より新しいとみられる。調査区北半のSD9738と一連の区画施設である可能性もある。

SD9784　調査区南西端でｆ－22グリッドで途切れたSD9747の南端から約1ｍ付近から南にのびる溝だが、若干形状が異なるためSD9746とは別の遺構番号を付した。幅約0.5ｍ、深さ0.1ｍ～0.2ｍで、溝底は南に向かって傾斜している。調査区内では延長18.3ｍを検出した。形状や規模はやや異なるものの、第153次調査区のSD9810とも一体のものである可能性がある。出土遺物は少なく、土師器片、ロクロ土師器片、須恵器片が出土しており、Ⅲ期の後半のものと推定される。

調査区北西部の溝遺構　調査区の北西部では、幅0.4ｍ～0.5ｍ、深さ0.1ｍ～0.15ｍの小規模な溝遺構が多数検出された。これらは調査区北端で認められた近世以降の耕作溝と異なり埋土の固結度が高く、Ⅲ期の土器小片を多く含み、南端が16グリッド列まで延びてくることから耕作溝と識別される。SD9681・9683・9685・9686・9689は出土遺物からⅢ－2期以降のものと判別される。SD9679・9682・9684も出土遺物が微細だが、Ⅲ期の後半には位置付けられるものと推定される。

(5)時期不明の遺構

SK9798　調査区の南端付近で検出した長さ3.6ｍ、深さ約0.1ｍの細長い土坑である。調査当初、溝として検出したが、土坑に改めた。土師器片・須恵器片が出土している。埋土の重複関係からSD9046より新しいと判断される。Ⅱ～Ⅲ期のものとみられる。

第8節　第157次調査区の遺構

平成20年度に実施した柳原区画の北西隅部での調査である。調査面積は1,280㎡である。調査区は現道を介して南に第28次調査区、南東に第152次調査区がある。調査区は地形に合わせていびつな逆「L」字状となっているが、北東部では後世の攪乱により遺構面は一部しか残存していない。また調査区全面に後世の耕作溝が縦横に走っている。調査区の北西隅付近と南部、東部の一部に建物遺構等が比較的密集する箇所がある。

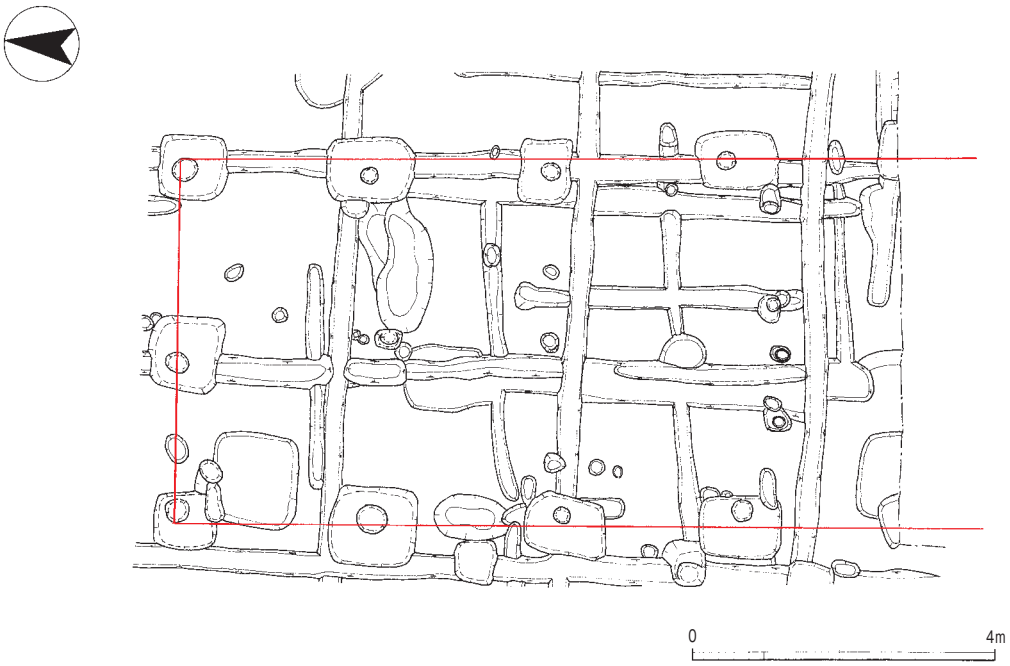
(1)斎宮跡第Ⅰ期の遺構

SB9873　調査区北端部中央で検出した3間×2間の東西棟である。柱間は桁行2.0ｍ、梁間1.8ｍ、ただし、南東隅に位置する柱堀形は、他のものと規模や柱筋がやや異なる。棟方向はN4°Ｗを取る。柱堀形より土師器の小片が出土したのみで、遺物からは時期決定できなかったが、SB9910と南側柱筋をほぼ揃えて建てられていることから、併存していたものと考えられる。

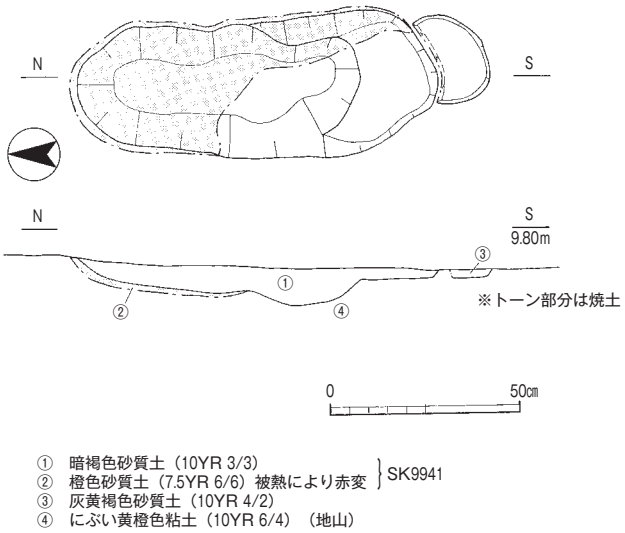
SB9880　調査区東部中ほどで検出した3間×2間の東西棟である。柱間は桁行2.4ｍ、梁間2.3ｍを測る。柱堀形は一辺0.7ｍ～１ｍの方形もしくは長方形を呈し、柱痕跡は直径20㎝～30㎝である。棟方向はN3°30′Ｗで、建物の南面とSB9900の北面がほぼ揃い、建物の西面同士の間隔が小尺で70尺である。

SB9883　調査区南西部で検出した南北棟で、棟方向は東列でN0°、西列でN4°Ｗ、北列でN5°Ｗと振れが大きい。柱堀形は一辺0.5ｍ前後の方形を呈しており、柱間は1.5ｍ～1.6ｍと狭い。SB9883の中心には、SK9941が存在することから、SB9883はこの土坑を囲む簡易な建物であった可能性も考えられる。重複関係よりSB9900に先行する。

SB9900　調査区南西部で検出した桁行4間以上×梁行2間の南北棟である。南の第28次調査区には続かないことから、桁行5間の可能性が高い。柱間は桁行・梁間とも2.4ｍ、柱堀形は一辺0.7ｍ～1.1ｍの方形ないしは長方形を呈する大型のもので、柱痕跡は直径20㎝～40㎝である。４基の柱堀形には、建物内側の隅部分に長径0.4ｍ～0.6ｍ×短径0.2ｍ程度の細長い小ピットが確認でき、



第 29 図　SB9900 遺構平面図（1：100）



第 30 図　SK9941 遺構平面図・断面図（1：20）

床束に伴う遺構である可能性も考えられるが、柱堀形の南側や北側に存在するなど位置が揃っていないことや東西で対応する柱堀形で確認できなかったことから、積極的に床束であるとは判断できなかった。棟方向はN3° 30′ Wで、柱堀形からの出土土器により、Ⅰ－4期の遺構と考えられる。

SB9910　調査区北西部で検出した5間×2間の東西棟である。柱間は桁行2.3m、梁間2.0m、柱堀形は一辺0.6m～0.8mの方形もしくは長方形を呈し、柱痕跡は20㎝前後である。4箇所の柱堀形で柱抜き取り痕を確認している。棟方向はN4° Wで、重複関係よりSK9930に先行することがわかる。

SB10621　調査区北東部の後世の土取りを免れた遺構面で検出した掘立柱建物である。桁行柱列とみられる柱間1.85mの東西5個の柱穴に対し、南側に約3.6m（1.8mで2間分）の距離で、規模や埋土の状態で対応する可能性のある柱穴を1個確認しているため、規模は不明だが、東西棟であると考えた。柱掘形は一辺0.5m～0.7mの略方形で、直径約20㎝の柱痕跡を持つ。棟方向はN0°。柱掘形は黒色の埋土で、Ⅰ－4～Ⅱ－1期にかけてのものとみられる。

SK9931　調査区中央北寄りで検出した土坑で、長径1.9mの楕円形を呈し、深さは0.4mである。土師器杯・椀・皿・甕、黒色土器A類椀が出土しており、Ⅰ－4期と考えられる。

SK9941　調査区南西部で検出した土坑で、長径1.0m×短径0.35mの細長い楕円形を呈する。深さは0.07m～0.1mで中央部がやや深くなり、南部は浅くなる。底面の北半から東半部が火を受けて赤変しており、遺構埋土には焼土片や炭片が混じっていることから、小規模な炉跡の可能性が考えられる。位置的・時期的に重なるSB9883に伴う遺構である可能性が高く、Ⅰ－4期～Ⅱ－1期の遺構と考えられる。

（2）斎宮跡第Ⅱ期の遺構

1）Ⅱ－1～2期の遺構

SB9881　調査区中央部で検出した3間×2間の南北棟である。柱間は桁行1.85m、梁間2.0m、柱掘形は一辺0.5m～0.6mの略方形で、直径20㎝弱の柱痕跡がみられる。棟方向はN3° Eで、柱堀形から土師器杯・甕、須恵器が出土しており、Ⅱ－2期以降のものと考えられる。

SB9890　調査区中央南寄りで検出した3間×2間の東西棟である。柱間は桁行2.1m、梁間2.0m、柱堀形は一辺0.5m～0.7mの方形を呈し、柱痕跡は直径20㎝～30㎝である。棟方向はN1° Wで、柱穴の出土遺物からⅡ－1～2期のものと考えられる。

SD9907　調査区東端で検出した南北溝で、南側調査区外へ続く。第152次調査区まで続く可能性がある。幅0.6m、深さ0.15mで、溝方向はおよそN3° Wである。土師器甕・高杯、須恵器甕、白色玉石などが出土した。重複関係よりSD9897に先行する。出土遺物よりⅡ－1期に属するものと考えられる。

SK9934　調査区中央部西寄りで検出した土坑で、長径2.0m×短径1.7mの隅丸方形を呈する。土師器杯・椀・皿・鉢・鍋、須恵器杯蓋・杯・台付盤など、多数の土器が出土した。出土遺物よりⅡ－1～2期に属するものと考えられる。重複関係よりSB9876に先行する。

2）Ⅱ－3期の遺構

SB9874　調査区北西部で検出した3間×2間の東西棟で、SB9875･9876と重複する。柱間は桁行2.05m、梁間2.2mを測る。棟方向はN2° W。柱堀形の遺物からⅡ－3～4期のものと考えられる。

SB9876　調査区北西部で検出した3間×2間の東西棟である。柱間は桁行・梁間とも1.9m、柱掘形は一辺0.5m～0.7mの方形で、直径約20cmの柱痕跡を持つ。棟方向はN0°30′Wで、重複関係よりSB9910・SB9874・SB9876に後出し、SB9878に先行する。柱堀形より土師器杯・皿・甕、土錘などが出土しており、Ⅱ－3期のものと考えられる

SB9877　調査区北西部で検出した3間×2間の東西棟で、SB9878と南半部が重複する。柱間は桁行1.9m、梁間2.0m、柱掘形は一辺0.5m～0.7mの略方形で、直径20cm～25cmの柱痕跡がある。棟方向はN6°30′W。柱堀形出土土器からⅡ－3～4期のものと考えられる。

SB9878　SB9877と北半部が重複する3間×2間の東西棟である。柱間は桁行1.9m、梁間1.8m、柱掘形は最大で一辺0.8mの方形で、直径約20cmの柱痕跡を持つ。棟方向はN6°Wで、柱堀形出土遺物などからⅡ－3～4期のものと考えられる。柱穴の重複関係より、SB9877に後出する。

SB10616　調査区の南西隅で検出した桁行5間の南北棟とみられるものである。柱間は2.25m、柱掘形は直径0.5m～0.6mの円形ないしは略方形で直径10cm～20cmの柱痕跡がある。N6°Wの棟方向である。柱穴の遺物からⅡ－3期頃のものとみられる。

SK9928　調査区中央部やや北寄りで検出した土坑で、長径1.2m×短径1.0mの楕円形を呈する。深さは0.1mで、土師器杯・皿・甕、灰釉陶器皿が出土した。出土遺物よりⅡ－3期に属すると考えられる。

SK9930　調査区北西隅部で検出した土坑で、長径2.0m×短径1.5mの楕円形を呈する。深さは0.5mで、埋土は灰黄褐色および黒褐色砂質土である。重複関係よりSB9910より後出する。土師器杯・椀・皿・甕・鉢、灰釉陶器段皿、志摩式製塩土器などが出土しており、Ⅱ－3期の良好な一括資料である。

SK9933　調査区北西隅部で検出した土坑で、長径3.3m×短径2.0mの不定形を呈する。深さは0.15m～0.2mで、南側が一段深い。重複関係よりSB9910に後出すると判断できる。土師器杯・椀・皿・甕、灰釉陶器、志摩式製塩土器、フイゴ羽口などが出土した。Ⅱ－3期のものである。

3）Ⅱ－4期の遺構

SB9875　調査区北西部で検出した3間×2間の東西棟で、SB9874・9876と重複する。柱間は桁行・梁間とも1.9m、柱掘形は一辺0.4m～0.5mの略方形で、直径約15cmの柱痕跡がある。棟方向はN6°Wである。柱穴からの出土遺物により、Ⅱ－4期～Ⅲ－1期のものと考えられる。柱堀形の1つでは、柱痕跡上部で礫と土師器椀が重なった状態で出土しており、建物廃絶後に祭祀行為が行われた可能性がある。また、SB9874・9875・9876の前後関係については、出土遺物や重複関係より、SB9876→SB9874→SB9875の順であったと考えられる。

SB9920　調査区北部中央で検出した4間×2間の東西棟である。柱間は桁行2.2m、梁間2.1mで、柱堀形の多くが、長辺1m前後×短辺0.5m前後の長方形を呈している。梁間中央の柱堀形が桁行と異なり南北方向に長いことから、長方形の柱堀形を持つ1棟の建物と判断した。ただ、建て替えによって方形の柱堀形が重複し、長方形を呈している可能性も考えられる。棟方向はN4°W。出土遺物は、土師器や土錘が僅かに出土したのみであり、詳細な時期決定は出来なかったが、西側に位置するSB9875と北面をほぼ揃えていることから、併存していた可能性が考えられる。おおむねⅡ－4期～Ⅲ－1期ころのものとみられる。

4）その他のⅡ期の遺構

SB10615　調査区の北西部で検出した4間×2間の南北棟である。柱間は桁行1.7m、梁間2.0m、柱穴は直径0.3m～0.4mの円形ないしは不整形で、直径10㎝強の柱痕跡がある。棟方向はN6°Wである。

SB10620　調査区南端で検出した梁間2間の南北棟とみられるものである。柱間は1.5mで、南の第28次調査区で延長を確認していないので、桁行3間のものと推定される。柱穴は直径0.3m強の円形で、直径15㎝程度の柱痕跡がある。N6°Wの棟方向である。

SA10622　調査区の西端で検出した柵列で、調査区外南々西方向に続く可能性がある。今回は4間分を検出した。調査区の西側に展開する掘立柱建物の可能性もあるが、柱穴が小さく、柱間にバラつきがあるため、柵列と判断した。柱間は1.8m～2.8mで、柱穴は直径0.25m～0.3mの円形で、直径10㎝前後の柱痕跡がある。N4°30′Eの方向を取る。

SK9927　調査区中央南寄りで検出した東西2.3m×南北1.5mの不整形土坑である。土師器片・須恵器片が出土しているが、詳細な時期等は不明である。

SK9935　調査区西端南寄りで検出した南北2.8mの方形土坑である。暗褐色の埋土で、土師器杯・甕・甑、須恵器片が出土している。Ⅱ期でも古相のものだろうか。

(3)斎宮跡第Ⅲ期以降の遺構

1)Ⅲ－2期の遺構

SB9879　調査区西部で検出した5間×2間の南北棟である。柱間は桁行1.85m、梁間2.1mで、柱穴は直径0.3m前後の円形である。棟方位はN3°Wで、柱痕上部より、砥石を土師器椀に納めた状態で出土しており、建物廃絶後に祭祀行為が行われたと考えられる。Ⅲ－2期頃のものとみられる。

SK9924　調査区東半南寄りで検出した幅約2.0m、深さ約0.3mの断面が浅い「U」字形の溝状の土坑である。延長約6.5m分を検出しており、東の第152次調査まで連続していると捉えると、約11.5mの長さになる。土師器皿・台付皿・甕、黒色土器杯、須恵器甕、灰釉陶器椀・壺、椀形鉄滓、炭化材など多彩な遺物が出土している。Ⅲ－2期に比定している。

SK9925　調査区東端の中央付近で検出した長径約1.0mの不整形土坑である。土師器杯・皿・台付皿・甑、ロクロ土師器皿、須恵器甕、鉄滓等が出土している。Ⅲ－2期に比定している。

SK9940　調査区東部中ほどで検出した土坑で、SK9926の底部で確認された遺構である。長径1.5m×短径0.9mの楕円形を呈する。深さは約0.3mで、底部より土師器小皿・杯、ロクロ土師器小皿・椀がまとまって出土している。Ⅲ－2期のものである。

2)Ⅲ－3～4期の遺構

SD9897　調査区中央部を走る東西溝で、延長約23mを検出した。東端を粘土取り土坑に、西端をSD9901・9902に壊される。緩やかに蛇行するものの、方位は概ねE7.5°Nである。幅0.6m、深さ0.1m程度で、重複関係よりSD9907に後出し、SD9901・9902に先行する。土師器杯、須恵器杯、灰釉陶器椀、白磁椀、無釉陶器椀(山茶椀)、鉄滓等、多様な遺物が出土しており、Ⅲ－3期と考えられる。

SK9926　SK9940の埋没後に掘削された土坑で、長径2.6m×短径1.8mの楕円形を呈する。深さは0.15mで、土師器杯、ロクロ土師器皿、灰釉陶器椀、無釉陶器椀(山茶椀)等が出土している。Ⅲ－3期のものである。

3）斎宮跡第Ⅳ期以降の遺構

SD9901　調査区中央部を東西に貫く溝で、幅2.5m～2.9m、深さ0.3mを測る。土師器皿・甕・鍋・羽釜、須恵器甕、灰釉陶器椀、無釉陶器椀（山茶椀）等が出土しており、南伊勢系の土師器鍋も含まれることから、埋没は中世後期頃と考えられる。

SD9902　SD9901の中央部分を再掘削した溝で、幅0.9m～1.4m、深さ0.25mを測る。方位は概ねE5°Nで、土師器や須恵器、無釉陶器椀（山茶椀）、常滑製甕等が出土している。中世後期に収まるものと考えられる。

SD9917　調査区南端の拡張部で検出した溝で、幅や形状については未確認である。土師器片・須恵器片や常滑産とみられる陶器甕の破片が出土している。中世の遺構と考えられる。

（4）時期不明の遺構

SB9872　調査区の南西隅で検出した桁行3間以上の東西棟とみられる掘立柱建物である。柱間は1.6m、柱穴は直径約0.3mと小規模である。N5°Wの棟方向を取る。

SB9882　調査区北半中央で検出した4間×2間の南北棟である。柱間は桁行2.05m、梁間2.1m、柱穴は直径0.3m～0.35mの円形で、直径10㎝強の柱痕跡がある。棟方向がN8°Wと、他の建物から大きく振れている。

SB10617　調査区南西隅で確認した掘立柱建物である。北東隅にあたる3個の柱穴を確認したのみで全体の規模は分からない。柱間は東西2.1m、南北2.4mで、柱掘形は一辺0.6m前後の方形、直径約20㎝の柱痕跡がある。概ねN0°の棟方向である。Ⅰ－4期～Ⅱ期のものだろうか。

SB10618　調査区北端中央で検出した梁間2間の南北棟とみられるものである。南側梁間筋のみを検出した。柱間は1.9m、柱穴は直径約0.3mの円形である。N4°Wの方向を取る。

SB10619　調査区北半中央で検出した4間×2間の東西棟である。柱穴の重複からⅡ－4期～Ⅲ－1期のSB9920より古い。北西・南西・南東の隅柱はSB9920の柱穴に完全に置き換えられる。柱間は桁行2.2m、梁間2.1m、柱掘形は全体をうかがえるものはないが、一辺0.5m～0.7mの方形とみられる。N4°Wの棟方向である。

SA10623　調査区東部中央で検出した「L」字に折れる柵列である。東西で3間分、南北に2間分あり、掘立柱建物の一部である可能性もあるが、柱穴が直径20㎝弱と小さく、南側柱筋が検出できていないため、ここでは柵列とした。柱間も1.8m～2.6mと不揃いである。N1°30′Wの方向を取る。

なお、第157次調査の概要報告では、さらに多数の遺構が掲げられていたが、再検討の結果、近世以降の耕作溝や、遺構としてのまとまりに乏しいものがあり、それらについては今回の報告の対象としなかった。削除した遺構番号は下記のとおりである。

SD9884・SD9885・SD9886・SD9887・SD9888・SD9889・SD9891・SD9892・SD9893・SD9894・SD9895・SD9896・SD9898・SD9899・SD9903・SD9904・SD9905・SD9906・SD9908・SD9909・SD9911・SD9912・SD9913・SD9914・SD9915・SD9916・SK9919・SK9921・SK9922・SK9929・SK9932・SK9936・SK9937・SK9938・SK9939・SK9942・SK9943・SK9944

第９節　第159次調査区の遺構

柳原区画の南東部で、平成20年度から21年度にかけて実施した調査である。調査面積は838㎡で、現道を介して西に第8－9次・143次・152次・165－1次調査区があり、東に第10次調査区がある。調査区の南端部で、柳原区画南辺道路の部分に該当するが、東の第10次調査区の状況と似て、この部分は区画道路の遺構とみられるものは残っているものの、全体的に大規模な削平を受けていた。調査区中央付近に小規模な柱掘形の建物群が密集する箇所がある。

（１）斎宮跡第Ⅰ期の遺構

SB10067　調査区の中央付近で検出した5間×2間とみられる東西棟である。西側の第143次調査区で延長を確認していないため、桁行5間と判断した。柱間は桁行・梁間ともに2.3m、柱掘形は一辺0.7m～0.8mの略方形で、柱痕跡は確認できなかった。棟方向はN4°Wをとる。Ⅰ－4～Ⅱ－1期のものとみられる。

SD10094　柳原区画南辺道路の北側側溝である。SD10094は幅約1.2mで、SK10112の南西から約5m西に延び、調査区外へ続く。埋土は黒色シルト質壌土で地山がブロック状に混じる。土師器の杯・甕の小片が出土している。

SD10096　柳原区画南辺道路の南側溝である。調査区南部の大規模な削平の底部で、わずかに溝底部分を検出したのみで、幅は約0.7mを測る。

SD10094から南側は約0.4mの段差をもって全面的に一段低くなっており、区画道路造成に伴う整地の可能性も考えられたが、埋土をつき固めたような状態にはなく、断面に等間隔で並ぶ畝状の痕跡が認められることや、南側溝SD10096がこの落ちこみの底で検出されたことから、耕作等に伴う地形の改変の可能性も考えられる。

（２）斎宮跡第Ⅱ期の遺構

1）Ⅱ－1～2期の遺構

SB10060　調査区北西部で検出した東西棟で、桁行2間分×梁間2間を検出したのみであるが、西の第152次調査で延長を確認していないことから、3間×2間の規模になると判断される。柱間は桁行1.8m、梁間1.65mで、柱掘形は一辺約0.5mの略方形、柱痕跡は直径20㎝～25㎝である。棟方向はN0°Wとなる。Ⅱ－1～2期のものとみられる。

SB10061　SB10060と位置的に重複する3間×2間とみられる東西棟である。柱間は桁行2.3m、梁間2.4mを測る。柱掘形は一辺約0.5mの隅丸方形で、柱痕跡は径20㎝～25㎝である。N1°Wの棟方向をとる。SB10060との前後関係は、柱穴の重複がないため不明であるが、柱掘形の形状や規模からSB10060に先行すると考えられる。

SB10086　第159次調査区の中央部西端から第165－1次調査区にまたがって検出した3間×2間の東西棟である。東西の梁間柱筋のみを確認している。柱間は桁行2.0mとみられ、梁間は2.1mである。柱掘形は一辺約0.5mの略方形で、直径約20㎝の柱痕跡がある。棟方向はN2°Eである。Ⅱ－1～2期のものとみられる。柱穴の重複関係からSB10087より古いと判断される。

SB10087　第159次調査区中央部西端でSB10086に重複して検出した3間×2間の東西棟である。梁間は桁行1.9m、梁間2.0m、柱掘形は直径約0.5mの円形、棟方向はN0°である。Ⅱ－1～2期のものとみられるが、柱穴の重複からSB10086より新しい。

SK10107　調査区南半中央で検出した長径1.4m×短径0.9mの楕円形の土坑である。検出面から

の深さは約0.4mで、土師器杯・皿・甕・竈等が出土した。Ⅱ－2期に属すると考えられる。

SK10108　調査区南半中央で検出した長径約3.5m×短径約2.5mの略方形の土坑で、検出面からの深さは約0.3mである。土師器杯・皿・竈、須恵器杯・甕の他、ヘラ描き土器や墨書土器が出土した。Ⅱ－2期に属すると考えられる。

SK10110・10111　調査区中央部南寄りで検出した大型の土坑である。重複関係からSK10110のほうが古く、長径約2.5m×短径1.3m以上、検出面からの深さ0.7mである。SK10111は長径3.5m以上×短径2.7m、検出面からの深さ0.5mである。土師器杯・皿・高杯・甕・竈、黒色土器椀、須恵器杯・甕、灰釉陶器椀、製塩土器、鉄製品等が出土しているが、遺構の規模に比して量はそれほど多くはない。Ⅱ－2期に属すると考えられる。

2)Ⅱ－3～4期の遺構

SB10056・10057　第159次調査区の北端で検出した南北棟で、棟方向はいずれもN2°Eをとる。それぞれ桁行は2間以上で調査区北へ続き、梁間は妻柱を確認できなかったが2間と考えると、柱間寸法は、SB10056が桁行2.2m、梁間2.1m、SB10057が桁行2.0m、梁間2.1mである。柱掘形はSB10056が一辺約0.5mの略方形、SB10057が一辺0.5m～0.6mの略方形で、いずれにも直径20㎝弱の柱痕跡がみられる。柱穴の重複関係からSB1056が先行する。いずれもⅡ－3期に属すると考えられる。

SB10058　第159次調査区北東隅で柱穴3個を検出した。全体の規模は不明だが、東の第10次調査区への延長が確認できていないため、梁間2間の南北棟かもしれない。柱間は東西・南北とも2.1m、柱穴は直径0.4mの円形で、直径約10㎝の柱痕跡がある。N2°Eの棟方向である。詳細な時期もわからないが、Ⅱ－3～Ⅲ－1期頃のものであろうか。

SB10059　SB10058に位置的に重複して柱穴を3個検出した。SB10058同様、南北棟の可能性がある。柱間は東西1.8m、南北2.1m、柱穴は直径0.3m弱の円形で、直径10㎝弱の柱痕跡がある。N2°Eの棟方向とみられる。Ⅱ－3期～Ⅲ－1期頃と推定されるが、SB10058との前後関係は不明である。

SB10063　調査区北部東端で検出した。東側の第10次調査で延長を確認していないことから、桁行3間×梁間2間の南北棟になるとみられる。柱間は桁行方向が1.9m＋1.7m＋1.9m、梁間が1.8m、柱掘形は一辺0.4m～0.5mの略方形で、柱痕跡は径約15㎝である。棟方向はN2°Eである。Ⅱ－3期頃のものとみられる。

SB10064　調査区中央北寄りで検出した東西棟で、西側梁間柱筋が調査区外に伸びるが、5間×2間のものと推定される。Ⅱ－1～2期のSB9005・9006に後出し東に2間分ずれて重複する。柱間は、桁行・梁間ともに2.4m、柱掘形は不定形で、規模も径0.5～0.9mと不揃いである。柱痕跡も確認していない。棟方向はN1°Wである。Ⅱ－3～4期頃のものとみられる。

SB10065　SB10064に後出する東西棟で、桁行4間以上×梁間2間で調査区外へ続くが、西側の第143次調査では確認されていない。柱間は桁行2.4m、梁間2.1mで、柱掘形は一辺0.5～0.6mの略方形で、柱痕跡は直径約20㎝である。棟方向はN4°Wとなる。Ⅱ－3～4期に属すると考えられる。

SB10066　調査区中央部でSB10065から約2.2m東にずれて重複する東西棟で、柱穴の重複からSB10065に先行する。桁行3間以上×梁間2間で調査区外へ続く。柱間は桁行2.4m、梁間2.1m、柱掘形は一辺0.6mの略方形で、柱痕跡は直径約20㎝である。N4°Wの棟方向を取る。Ⅱ－3～4

期に属すると考えられる。

SB10071　調査区中央部で検出した3間×2間の東西棟である。柱間は桁行1.9m、梁間2.0m、柱掘形は一辺約0.3mの略方形ないしは略円形、掘形埋土には黒褐色もしくは暗褐色土で地山がブロック状に混じる。柱痕跡は20㎝である。棟方向はN0°Wとなる。柱穴から土師器杯・高杯、須恵器、灰釉陶器が出土している。Ⅱ－3期以降のものとみられる。

SK10099　調査区の中央東端で検出した。南側はⅢ期の土坑SK10100と重複する。長径1.3m以上、短径約1.0mの隅丸長方形で、検出面からの深さは0.3m以上である。土師器杯・皿、灰釉陶器椀等が出土した。Ⅱ－3期に属すると考えられる。

SK10105　調査区中央部西寄りで検出した土坑で、長径1.7m、短径1.2mの楕円形である。検出面からの深さは約0.3mである。土師器杯・皿の他、製塩土器が出土した。Ⅱ－3期に属すると考えられる。

SK10109　調査区中央部南寄りで検出した土坑で、SK10110と重複する。調査区外の西へ続いていくため全体規模は不明だが、東西2.5m以上、南北1.5m以上の規模をもつ。土師器杯･皿･甑･竈、須恵器杯、転用硯、製塩土器、土錘等が出土している。Ⅱ－3～4期に属するものと考えられる。

SK10112　調査区南部東端で一部を検出した。第10次調査では大規模な土坑状の遺構が拡がっており、今回検出したのはその西端の部分にあたるとみられる。検出面からの深さは約0.7mで、埋土は黒色土である。出土遺物はあまり多くはないが、土師器杯･皿、緑釉陶器椀等が出土した。

3)その他のⅡ期の遺構

SD10095　Ⅰ－4期の区画道路北側溝ＳＤ10094を再掘削したもので幅約0.4m、検出面からの深さは約0.2mを測り、断面形状は逆台形をなす。埋土は砂質の黒褐色土である。

（3）斎宮跡第Ⅲ期以降の遺構

1)Ⅲ－1期の遺構

SB10070　調査区の中央部で検出した5間×2間の東西棟である。柱間は桁行・梁間ともに2.0m、柱掘形は一辺0.4～0.5mの略方形や略円形で、埋土は黒褐色もしくは暗褐色土に地山がブロック状に混じる。柱痕跡は径15㎝である。棟方向はN0°Wである。柱穴から土師器片、ロクロ土師器片が出土しており、Ⅲ－1～2期に属すると考えられる。

SB10084　第159次調査区中央部から第10次調査区にかけて検出した5間×2間の東西棟である。柱間は桁行2.1m、梁間約2.2m、柱掘形は一辺0.5m前後の略方形とみられる。柱痕跡は確認することができなかった。棟方向はN3°Wをとる。Ⅲ－1～2期のものとみられる。

2)Ⅲ－2期の遺構

SB10068　第159次調査区中央部東寄りから第10次調査区にかけて検出した5間×2間の東西棟である。第10次調査区で東側梁間筋の一部を検出している。柱間は桁行1.95m、梁間2.0m、柱掘形は径0.3m～0.4mの略円形で、柱痕跡は直径約15㎝である。棟方向はN0°Wである。柱穴から土師器片が出土しており、Ⅲ－2期に属すると考えられる。

SB10069　第159次調査区中央部で検出した桁行4間以上×梁間2間の東西棟である。柱間は桁行2.25m、梁間2.4m、柱掘形は一辺0.3m前後の略方形をなし、柱痕跡は直径約10㎝である。棟方向はN4°Wである。土師器杯､灰釉陶器片などが出土しており､Ⅲ－2～3期に属すると考えられる。

SB10072　第159次調査区中央東端で西梁間筋の柱穴2個を検出し、第10次調査区で東梁間筋の柱

第 31 図　第 10 次・第 159 次調査区のⅢ－１期建物　（1：200）

第 32 図　第 10 次・第 159 次調査区のⅢ－２期建物　（1：200）

穴3個を検出した3間×2間の東西棟になるとみられるものである。柱間は桁行・梁間とも2.1m、棟方向はN4°Wをとる。Ⅲ－2～3期のものとみられる。

SB10073　SB10072同様、第159次調査区から第10次調査区にかけて検出した3間×2間の東西棟とみられる。柱間は桁行2.5m、梁間2.1m、柱棟方向はN4°Wである。Ⅲ－2～3期に属すると考えられる。柱穴の重複関係からSB10072に先行する。

SB10076　第159次調査区中央部から第10次調査区にかけて検出した5間×2間の東西棟である。柱間は桁行2.1m、梁間2.5m、柱掘形は径約0.4mの略方形で、柱痕跡は直径20cmである。棟方向はN3°Wである。土師器、陶器鉢が出土しており、Ⅲ－2～3期頃のものとみられる。柱穴の重複関係からSB10077より新しいと判断できる。

SB10077　SB10076より西側に1間分ずれて重複する桁行4間以上×梁行3間の東西棟で、南側に1間分の庇出がある。柱間は桁行・梁間ともに約2.2m、庇出も約2.2mである。柱掘形は一辺0.3m～0.4mの不整形をなし、柱痕跡は径15cm～20cmである。棟方向はN3°Wをとる。土師器、ロクロ土師器が出土しており、Ⅲ－2～3期に属すると考えられる。

SB10078　第159次調査区中央から第10次調査区にかけて検出した5間×2間の東西棟である。柱間は桁行2.35m、梁間2.1m、柱掘形は一辺0.3～0.4mの略方形ないしは略円形で、柱痕跡は径約15cmである。棟方向はN3°Wである。柱穴から土師器杯・甕が出土しており、Ⅲ－2期以降のものとみられる。ＳＢ10075と柱穴が重複し、より古いことが分かる。

SB10079　調査区中央部南寄りで検出した桁行3間以上×梁間2間の東西棟である。柱間は桁行・梁間とも2.1m、柱掘形は一辺約0.3mの略方形ないしは略円形をなす。柱痕跡は直径10cm～15cmである。棟方向はN4°Wをとる。土師器杯･甕、ロクロ土師器片、灰釉陶器段皿が出土しており、Ⅲ－2～3期に属すると考えられる。

SB10083　調査区中央部南寄りで検出した桁行3間以上×梁間2間の東西棟である。柱間は桁行2.0m、梁間1.9m、柱掘形は径0.3m～0.4mの略円形で、柱痕跡は直径約15cmである。棟方向はN3°Wである。柱穴からの出土遺物によりⅢ－2～3期に属すると考えられる。

SK10097　調査区中央部で検出した長径約1.7m、短径約1.4mの不整円形土坑である。完掘していないが、土師器小皿・台付小皿、陶器椀等が出土した。Ⅲ－2～3期に属すると考えられる。

SK10098　調査区中央部東寄りで検出した直径1.6m～1.7mの楕円形土坑である。完掘はしていない。周辺の土坑の状況からⅢ－2～3期頃のものとみられる。

SK10102　調査区中央部西寄りで検出した直径0.5～0.6mの楕円形土坑で、検出面からの深さは約0.2mである。土師器杯・皿、ロクロ土師器、白磁片等が出土しており、Ⅲ－2～3期に属すると考えられる。

SK10103　SK10102の北側で検出した。古代伊勢道南側溝SD10002と重複する。長径約1.8m、短径約1.5mの楕円形土坑である。検出面からの深さ約0.3mである。土師器杯・皿、ロクロ土師器、製塩土器等が出土した。Ⅲ－2～3期に属すると考えられる。

SK10104　調査区中央西寄りの位置で検出した長径約1.6m、短径約1.1mの長楕円形の土坑である。検出面からの深さは約0.3mである。土師器皿などが出土しており、Ⅲ－2～3期に属すると考えられる。

3）Ⅲ－3～4期の遺構

SB10080　調査区中央部やや南寄りで、SB10079とは西側に約1.4mずれて重複する桁行4間以上×梁間2間の東西棟である。柱穴の重複関係からSB10079より新しい。柱間は桁行2.15m、梁間2.1m、柱掘形は直径約0.4mの略円形をなし、柱痕跡は直径約20cmである。棟方向はN4°Wである。柱穴から土師器片、灰釉陶器椀が出土しており、Ⅲ－3～4期に属すると考えられる。

SB10081　調査区中央部やや南寄りで検出した桁行3間以上×梁間2間の東西棟である。柱間は桁行2.1m、梁間2.0m、柱掘形は直径0.2m～0.3mの不定円形で、柱痕跡は確認することができなかった。棟方向はN3°Wをとる。柱穴から土師器杯、ロクロ土師器片、陶器鉢、白磁片が出土している。Ⅲ－3～4期に属すると考えられる。

SB10082　調査区中央部やや南寄りで検出した桁行3間以上×梁間2間の東西棟である。柱間は桁行2.2m、梁間2.15m、柱掘形は一辺約0.4mの略方形で、柱痕跡は直径約20cmである。棟方向はN3°Wをとる。柱穴から土師器杯・皿が出土しており、Ⅲ－3～4期のものとみられる。柱穴の重複関係からSB10081に先行する。

SB10085　調査区中央部やや南寄りで検出した桁行3間以上×梁間2間の東西棟である。柱間は桁行1.9m、梁間1.75m、柱掘形は0.3m～0.35mの略円形をなし、柱痕跡は直径約15cmである。棟方向はN4°Wである。Ⅲ－3～4期のものとみられる。

SB10088　調査区中央やや南寄りで検出した桁行3間以上×梁間2間の東西棟である。南側柱がSB10089の北側柱と重複する。柱間は桁行2.2m、梁間1.9m、柱掘形は一辺0.4m前後の円形もしくは楕円形で、柱痕跡は直径約15cmである。棟方向はN1°Wである。柱穴の重複関係からSB10089に先行する。柱穴から土師器片、灰釉陶器片、白磁片が出土しており、Ⅲ－3～4期に属すると考えられる。

SB10089　SB10088と重複し、これに後出する桁行4間以上×梁間2間の東西棟である。柱間は桁行約2.1m、梁間1.75m、柱掘形は直径0.3m～0.4mの略円形で、柱痕跡は直径15cm～20cmである。棟方向はN1°Wである。柱穴から土師器片、灰釉陶器片が出土しており、Ⅲ－3～4期に属すると考えられる。

SK10100　調査区中央部東寄りでⅡ－3期のSK10099と重複する長径約1.4m、短径約1.2mの隅丸長方形の土坑である。検出面からの深さは0.4mと平面規模に比して深い。土師器杯・皿・小皿、ロクロ土師器片、陶器椀等が出土しており、Ⅲ－3期に属すると考えられる。

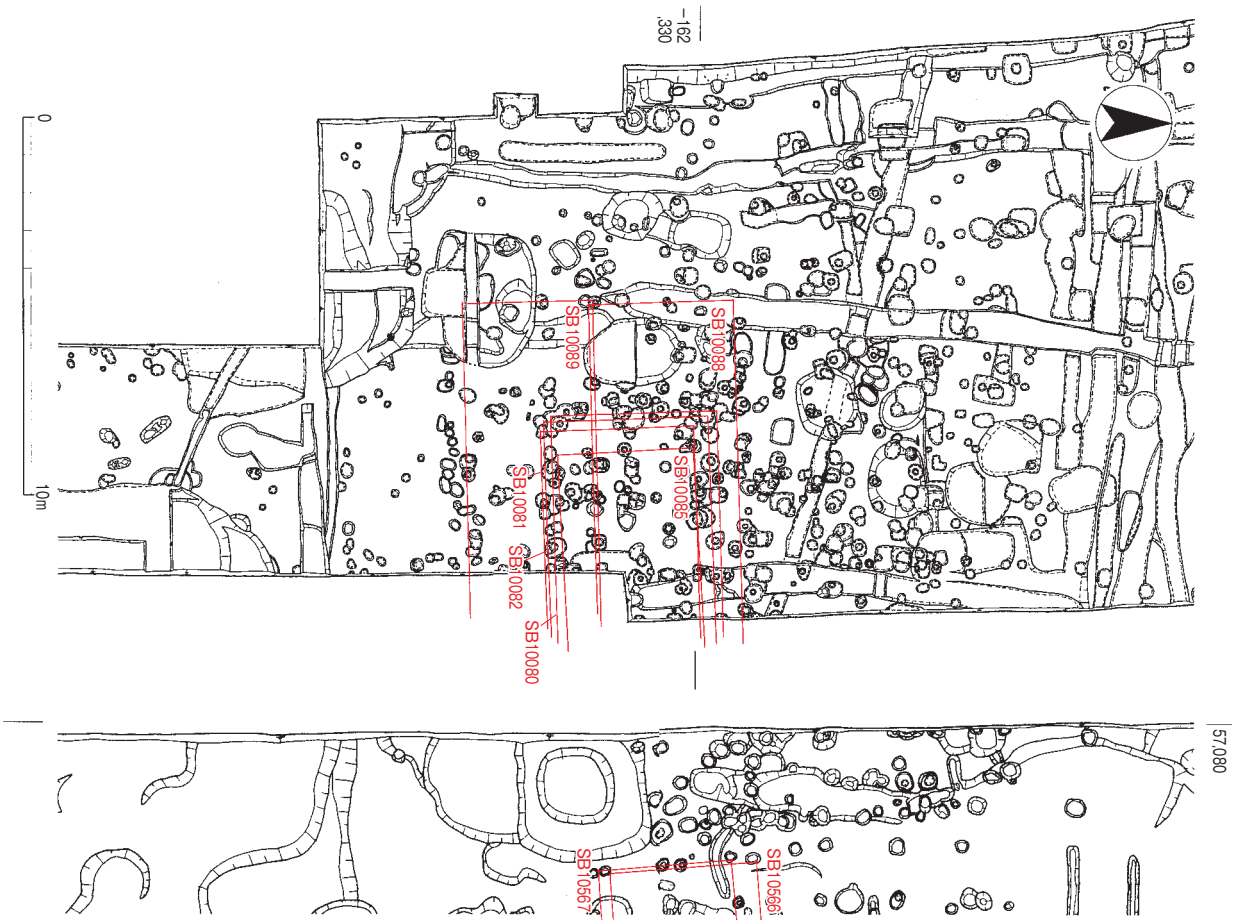
SK10101　調査区中央部東寄りで検出した長径約1.0m、短径約0.7mの楕円形土坑である。検出面からの深さは約0.3mである。土師器杯・皿・甕、ロクロ土師器、緑釉陶器、製塩土器等が出土した。Ⅲ－3期に属すると考えられる。

4)その他のⅢ期の遺構

SB10062　第159次調査区の北部で検出した5間×2間の東西棟で、柱間は桁行で東端1間が1.9mと狭くなる他は2.0m、梁間は2.3mである。柱掘形は直径0.2～0.4mの不定形をなし、柱痕跡は直径約15cmである。N5°Eと他の建物とは特異な棟方向である。Ⅲ期以降に属すると考えられる。

SB10074　調査区の中央部で検出した桁行3間以上×梁間2間の東西棟である。柱間は桁行・梁間ともに2.1m、柱掘形は直径0.3m弱の略円形をなし、柱痕跡は直径約10cmである。棟方向はN2°Wである。柱穴から土師器片やロクロ土師器片が出土しており、Ⅲ期に属すると考えられる。

SB10075　調査区の中央部で検出した桁行4間以上×梁間2間の東西棟である。柱間は桁行2.0m、



第33図　第10次・第159次調査区Ⅲ－3～4期建物（1：200）

間2.1m。柱掘形は直径約0.3m～0.35mの略円形ないしは略方形で、柱痕跡は直径約20cmである。棟方向はN4°Wである。

SD10090　古代伊勢道上で検出した幅約0.7mの東西溝で、延長約10m分を確認した。N4°Eの方向で東方向へのび、さらに調査区外へ続くが第10次調査では確認されていない。土師器片や須恵器片、灰釉陶器片、緑釉陶器片、陶器片等が出土している。Ⅳ期のSK10114に埋土を掘られている一方、SB10062と方向を揃えていることから、Ⅲ期以降に掘削されたと考えられる。

SD10091～10093　調査区中央付近で検出したSD10090と直交する南北方向の溝である。調査区中央のSD10091と南寄りのSD10092はほぼ直列に並び、調査区中央東端のSD10093と並行する。両者の間隔は芯々で約7mを測る。溝幅は約0.8mで、検出面からの深さは約0.2mである。それぞれの遺構から土師器杯・皿のほか、ロクロ土師器片、灰釉陶器片等が出土している。掘立柱建物との位置関係からⅣ期以降に掘削されたと考えられる。

SK10114　調査区の中央東よりの位置で検出した。隅丸長方形をなし、長径約1.7m×短径約1.2mを測る。土師器杯・皿等が出土した。SD10090と重複しそれより新しい。Ⅳ期のものとみられる。

(4)時期不明の遺構

SK10106　調査区中央部南寄りで検出した長径2.5m×短径1.8mの楕円形土坑である。出土遺物がないため、時期決定することができない。

第10節　第167次調査区の遺構

柳原区画の北東部で、平成22年度に実施した調査である。調査面積は537㎡で、西に第152次調査区、東に第10次調査区と接している。第167次調査区は第2章でもふれたように、柳原区画内の微高地に位置している。調査区の西端、第152次調査区との間が現在の字「柳原」と「西加座」の境となっており、多数の近世以降の南北溝が掘られていた。

（１）斎宮跡第Ⅰ期の遺構

SB10163　調査区東端中央部で検出した桁行１間以上×梁間２間の東西棟で、梁間2.0ｍを測る。柱穴は直径約0.5ｍの円形で、直径約15㎝の柱痕跡がある。棟方向はN0°W。建物は調査区東側へ展開するが、第10次調査区では延長を確認していない。土師器皿・甕が出土している。Ⅰ－4期とみられる。

SE10210　調査区北端部で検出した素掘りの井戸で、遺構の南半部を確認した。遺構は検出面で直径約1.7ｍを測り、検出面から0.35ｍ下で直径1.1ｍとなる。検出面から深さ1.4ｍまで掘削したが、遺構はさらに続く。井戸の中層から土師器杯が、上層から土師器皿が出土しているほか、土師器椀・甕・甑、須恵器なども出土している。Ⅱ－1期には埋没したものと考えられる。

SK10213　調査区北端部で検出した土坑で、遺構の南半部を確認した。東西約2.0ｍの不整形で、遺構の重複関係からⅢ期のSK10214・10215より古い。土師器杯・椀・皿・甕・盤・甑などが出土しており、Ⅰ－4期のものとみられる。

（２）斎宮跡第Ⅱ期の遺構

1）Ⅱ－１～２期の遺構

SB10156　調査区北西部で検出した5間×2間の南北棟で、柱間は桁行2.1ｍ、梁間2.5ｍ、柱掘形は一辺0.6ｍ～0.7ｍの略方形で、直径30㎝弱の柱痕跡がある。棟方向はN2°W。溝によって削平を受けており、棟持柱は南北とも欠損する。遺構の重複関係からSB10157より新しく、SK10225より古いと判断できる。Ⅱ－2期頃のものと考えられる。

SB10157　SB10156に重複する5間×2間の南北棟である。柱間は桁行1.84ｍ、梁間2.2ｍで、柱掘形は一辺0.5ｍ～0.9ｍの隅丸方形で、直径20㎝～30㎝の柱痕跡がある。棟方向はN3°W。西側柱列は溝によって削平され、柱穴の底部のみを確認した。Ⅱ－2期に相当し、柱穴の重複関係からSB10156よりも古い。

SB10158　調査区北部に位置し、建物の西側梁間筋は調査区西部の溝により削平されるため、全体の規模はうかがえない。桁行３間以上×梁間２間の東西棟で、柱間は桁行2.7ｍ、梁間2.6ｍで、柱掘形は一辺0.7ｍ～0.8ｍの隅丸方形を呈する。棟方向はN2°Wを測る。Ⅱ－1～2期に相当する。

SB10161　調査区北東の端部で検出した5間×2間の東西棟である。第167次調査区では西側柱列のみを確認し、東半部は第10次調査区で検出している。柱間は桁行2.1ｍ、梁間2.05ｍ、柱穴は一辺0.7ｍの方形ないしは円形で、棟方向はN2°Wである。Ⅱ－2～3期に相当する。

SB10162　調査区中央部で検出した5間×2間とみられる東西棟である。西側梁間筋は溝によって削平され、東側梁間筋は調査区外へ続く。柱間桁行1.9ｍ、梁間2.0ｍで、柱掘形は一辺0.5ｍ～0.8ｍの方形ないしは略方形で、直径20㎝弱の柱痕跡がある。棟方向はN2°W。Ⅱ－2～3期に相当するとみられ、重複関係からSD10224やSK10218よりも古い。

SB10164　調査区中央部東端やや南寄りで検出した5間×2間の東西棟である。南西隅柱等を溝

の削平により欠失している。柱間は桁行2.0m、梁間2.4m、柱穴は直径0.6m～0.7mの略方形で、直径20㎝前後の柱痕跡がみられる。棟方向はN2°W。柱穴出土遺物からⅡ－1～2期のものと考えられる。

SB10165　調査区中央部南寄りで検出した3間×2間の東西棟である。柱間は桁行2.0m×梁間2.1m、柱掘形は一辺0.5m～0.6mの方形ないしは略方形で、棟方向はN1°W。土師器杯・皿、須恵器杯、土錘等の柱穴出土遺物からⅡ－1～2期に相当するとみられる。柱穴の重複関係よりSB10167よりも古い。

SK10218　調査区中央北寄りで検出した土坑で、長径2.0m×短径1.4mの不整形である。土師器甕や須恵器甕が出土しており、Ⅱ－2期頃のものとみられる。

SK10222　調査区北の拡張部で検出した土坑で、長径2.4m×短径2.3mの不整形である。遺構の重複関係よりSB10158・SK10221より古い。土師器杯・皿・甕、須恵器杯蓋・甕が出土している。一部混入遺物もあるもののⅡ－1～2期のものとみられる。

SK10229　調査区中央部東端で検出した土坑で、遺構の大部分は調査区外に続くため、全体の規模は不明である。深さ0.34mで、土師器杯・皿・高杯・甕・甑、須恵器杯・甕・壺が出土している。Ⅱ－1期に相当するものとみられる。

2）Ⅱ－3期の遺構

SB10152　調査区北端で東西3間の柱列を検出した東西棟とみられる建物である。柱間は1.9mで、柱穴は直径0.5mの円形、直径約15㎝の柱痕跡を持つ。棟方向はN1°W。東端の柱痕跡からは、土師器杯・皿・高杯・甑、灰釉陶器椀・皿・壺が一括して出土していることから、これらは建物の廃絶に伴い、一括して廃棄されたものと考えられる。遺物からⅡ－4期までに廃絶したものと考えられる。

SB10159　調査区北東の拡張部で検出した5間×2間の東西棟である。柱間は桁行1.9m、梁間2.1m、柱穴は直径約0.5m～0.6mの円形である。棟方向はN2°Wで、SB10160とは柱穴がほぼ重複し、重複関係からSB10160より古い。複数の柱痕跡から人頭大程度の石が出土しており、廃絶時に意図的に投入された可能性も考えられる。Ⅱ－3期以降のものとみられる。

SB10166　調査区中央部で検出した5間×2間の東西棟とみられる建物である。柱間は桁行2.1m、梁間2.4m、柱掘形は一辺約0.6mの方形で、棟方向はN2°Wである。遺構の重複関係よりSK10228よりも古く、Ⅱ－3期頃のものと考えられる。

SB10167　調査区南半部で検出した3間×2間の東西棟である。柱間は桁行1.95m、梁間2.0mで、柱穴は長径約0.5mの楕円形である。棟方向はN4°W。遺構の重複関係より、Ⅱ－2期のSB10165より新しく、斎宮Ⅱ－3期以降のものとみられる。

SB10168　調査区南半部で検出した桁行3間以上×梁間2間の東西棟である。柱間は桁行2.25m、梁間2.4mで、柱掘形は一辺0.5m～0.6mの隅丸方形で、直径20㎝弱の柱痕跡がある。棟方向はN4°W。SB10165より新しく、Ⅱ－3期のものとみられる。

SB10172　調査区南端部で検出した3間×2間の南北棟である。柱間は桁行2.0m、梁間2.1mで、柱掘形は一辺約0.5mの略方形、直径約20㎝の柱痕跡がある。棟方向はN3°W。遺構の重複関係からSK10237より古く、斎宮Ⅱ－3期のものとみられる。

SB10173　調査区南端部で検出した特異な3間以上×2間の南北棟である。柱間が梁間2.1mに対

し桁行が3.7mと長い。間に補助的な柱穴が存在するか、あるいは特別な目的を持った建物の可能性がある。柱穴は直径約0.5mの円形で、直径20㎝弱の柱痕跡がある。棟方向はN3°Wで、Ⅱ－3～4期のものとみられる。

SB10174　調査区南端部で検出した桁行3間以上×梁間2間の東西棟である。建物の西側梁間筋は後世の溝群によって削平され、東側は調査区外へ続く。柱間は桁行1.9m、梁間1.7m、柱穴は直径約0.5mの円形で、直径20㎝弱の柱痕跡がある。棟方向はN5°Wである。遺構の重複関係より、Ⅱ－3期のSB10172より古く、Ⅱ－3期以前のものと考えられる。

SB10175　SB10174と重複する桁行3間以上×梁行2間の東西棟である。東西梁間筋についてもSB10174と同様である。柱間は桁行2.0m、梁間1.7m、柱穴は直径30㎝～40㎝の円形で直径10㎝強の柱痕跡がある。棟方向はN4°W。遺構の重複がないためSB10174との前後関係は不明だが、建物位置や柱間間隔などから考えて、建替えの可能性が考えられる。斎宮Ⅱ－3期以降のものとみられる。

SD10211・10212　調査区北端で検出した南北方向の溝である。後述するⅡ－4期のSB10153の梁間柱筋と合致するため、Ⅱ－3期の遺物を含むものの、SB10153の一部である可能性がある。

SK10216　調査区北部中央で検出した土坑で、長径1.6m×短径1.5m、深さ0.26mの楕円形で、東半部は0.35mと深い。土師器杯・甕・甑、黒色土器、須恵器杯・甕、灰釉陶器椀が出土している。斎宮Ⅱ－3期のものとみられる。

SK10219　調査区中央やや北寄りで検出した小規模な土坑で、遺構の大部分はⅢ期のSK10220によって削平を受ける。灰釉陶器椀･皿、土錘が出土しており、斎宮Ⅱ－3～4期のものとみられる。

SK10228　調査区中央やや南寄りで検出した土坑で、直径1.5m、深さ0.05mの円形である。遺構の重複関係から、SB10164・10166よりも新しい。土師器高杯・甕、須恵器壺が出土している。Ⅱ－3期頃のものとみられる。

SK10230　調査区中央部で検出した土坑で、長径1.6m×短径1.5m、深さ0.2mの楕円形である。土師器杯・椀・皿・甕・台付甕、須恵器壺、灰釉陶器椀・皿、緑釉陶器椀が出土している。Ⅱ－3期に相当するとみられる。

3）Ⅱ－4期の遺構

SB10153　調査区北端で東西３間の柱列を検出した。柱間1.9mを測り、柱方向はN1°W。建物の南側柱列になるものと考えられ、北半は調査区外に続く。東西側柱列部分に重複して幅0.3m～0.4m、深さ約0.1mのSD10212・10211が存在する。柱穴は溝の底部で確認しており、溝持柱の可能性が考えられる。Ⅱ期でも新しいものと考えられる。

SB10155　調査区北半の拡張部東端で検出した5間×2間の南北棟とみられる建物である。東半部は調査区外に続くが、第10次調査区では延長を確認していないため、梁間2間と推定した。柱間は桁行1.8m、梁間2.0m、柱穴は直径0.4mの円形で、棟方向はN3°Wである。遺構の重複関係からSB10160よりも新しい。柱掘形から折戸52号窯式期平行の灰釉陶器椀片が出土しており、Ⅱ－4期の遺構と考えられる。

SB10160　調査区北半の拡張部で検出した5間×2間の東西棟で、Ⅱ－3期のSB10159に重複して建替えたものである。柱間は桁行1.9m、梁間2.1m、柱穴は長径0.6mの楕円形で、直径20㎝弱の柱痕跡がある。棟方向はN3°W。SB10159の建替えであるため、Ⅱ－4期の遺構と考えられる。

4)その他のⅡ期の遺構

SB10151　調査区北端で検出した桁行3間以上×梁間2間の南北棟である。建物の北半は調査区外へ続く。柱間は桁行1.85m、梁間2.1m、柱穴は直径0.4m～0.6mの円形で、直径20㎝弱の柱痕跡がある。棟方向はN1°Wである。

SB10171　調査区南半で検出した3間×2間の南北棟である。柱間は桁行2.2m、梁間2.05m、柱穴は直径0.4m～0.6mの円形ないしは不整形で、直径10㎝強の柱痕跡がみられる。棟方向はN4°W。Ⅱ期の建物とみられる。

SK10217　調査区北部で検出した土坑で、長径1.3m×短径0.9mの楕円形である。土師器片や須恵器甕が出土している。詳細な時期は不明である。

SD10223　調査区中央部で検出した東西長い土坑状の溝で、全長1.8m×幅0.7mを測る。土師器片が出土している。

SK10234　調査区南部で検出した土坑で、直径1.2m、深さ0.2mの円形である。土師器片や緑釉陶器片が出土している。

(3)斎宮跡第Ⅲ期の遺構

1)Ⅲ－1期の遺構

SK10235　調査区南半東端で検出した土坑で、遺構の大部分は東の調査区外に続く。深さ0.1mである。土師器椀・皿・甕・甑、須恵器杯、灰釉陶器皿が出土している。遺物にはⅠ－4期、Ⅱ－3～4期のものも含むが、遺構の時期はⅢ－1期と推定した。

2)Ⅲ－2期の遺構

SB10154　調査区北部で検出した5間×2間の東西棟である。柱間は桁行1.95m、梁間1.85m、柱穴は直径0.3m～0.35mの円形で、直径10㎝強の柱痕跡がある。棟方向はN5°Wである。柱痕から土師器小皿・台付鉢・甕、白磁椀片が出土していることから、建物の時期はⅢ－2期以前のものとみられる。

SK10214　調査区北端部で検出した土坑で、Ⅰ－4期のSK10213に重複する。長径1.85m×短径1.4m、深さ0.2mの楕円形である。土師器台付皿・甕、須恵器甕、ロクロ土師器台付皿、灰釉陶器椀が出土している。Ⅲ－2期以降のものとみられる。

SK10215　調査区北端部で検出した土坑で、長径1.6m以上×短径1.3m、深さ0.2mの楕円形である。土師器杯・皿・台付皿・甕・甑、緑釉陶器、灰釉陶器椀、釘が出土している。Ⅲ－2期以降のものである。隣接するSK10214との前後関係は不明である。

SD10224　調査区中央部で検出した東西方向の小規模な溝で、東端は調査区外へ続く。幅0.6m、深さ0.15mで、土師器皿、灰釉陶器椀が出土している。Ⅲ－2期以降のものと考えられる。

SK10225　調査区中央部で検出した土坑で、長径2.5m×短径2.3m、深さ0.2mの楕円形を呈する。土師器杯・甕、須恵器壺、陶器椀が出土しているが、いずれも小片である。Ⅲ－2～3期に相当する。

SK10231　調査区南部で検出した土坑で、長径1.8m以上×短径1.6m、深さ0.2mの楕円形である。土師器甕、須恵器蓋・高杯・甕、ロクロ土師器皿が出土している。Ⅲ－2期頃までのものとみられる。

SK10237　調査区南端近くで検出した土坑で、長径2.4m×短径2.0mの楕円形で、北半部にはⅢ期後半のSK10236が重複する。土師器杯・皿、ロクロ土師器皿・台付皿、須恵器甕・壺、灰釉陶器椀、粘土塊、不明金属製品が出土している。Ⅲ－2期のものとみられる。

3）Ⅲ－３～４期の遺構

SD10207　調査区の北西部で検出した南北溝で、延長6.5mを確認した。Ⅳ期のSD10208によって削平を受ける。幅0.5m×深さ0.3mを測り、土師器皿が出土している。Ⅲ－3期以降のものである。

SK10221　調査区北の拡張部で検出した土坑で、直径約3.0mの楕円形で、南半部は調査区外に続く。土師器皿・高杯・甕、須恵器甕、ロクロ土師器皿・台付皿、灰釉陶器、陶器椀が出土している。遺構の重複関係よりSK10222より新しく、Ⅲ－3期以降に相当すると考えられる。

SK10236　調査区南端近くのSK10237の北半で検出した土坑で、長径1.6m×短径1.0mの隅丸三角形を呈する。土師器甕、灰釉陶器片、陶器壺が出土している。Ⅲ－2～3期に相当する。SK10237と一連のものかもしれない。

SK10238　調査区南端で検出した一辺約1.8mの方形状土坑で、南半部は調査区外に続く。土師器皿・高杯、ロクロ土師器皿、陶器が出土している。Ⅲ－3期以降のものとみられる。

SK10239　調査区南端部で検出した土坑で、西半はSK10238によって削平を受ける。土師器甕・台付皿、ロクロ土師器台付皿が出土している。これもⅢ－3期以降のものとみられる。

4）その他のⅢ期以降の遺構

SB10169　調査区南部で検出した桁行3間以上×梁間2間の東西棟である。西側梁間筋を溝で削平されている。柱間は桁行2.0m、梁間1.7m、柱穴は直径0.3m前後の円形ないし不整形で、直径約10cmの柱痕跡がある。棟方向はN6°Wである。詳細な時期は不明である。遺構の重複関係からSB10170より新しい。

SB10170　調査区南部でSB10169と重複して検出した桁行3間以上×梁間2間以上の東西棟である。これも西側梁間筋が構成の溝の掘削により欠失している。柱間は桁行2.0m、梁間1.75m、柱穴は直径0.3m～0.4mの円形である。棟方向はN4°Wである。使用際な時期は不明だが、遺構の重複関係からSB10169より古い。

SD10208　調査区の西端を南北に縦断する溝で、幅0.7m～1.3m、深さ0.3mを測る。土師器椀･甕･甑、須恵器甕、無釉陶器椀（山茶椀）などが出土している。山茶椀は藤沢良祐氏の編年の第５型式にあたり、鎌倉前期以降の遺構と考えられる。

SD10209　調査区の西部を南北に縦断する溝で、幅0.8m～1.3m、深さ0.3mを測る。土師器、陶器壺、近世陶磁器、近世瓦が出土している。調査区の西端は現在、「字西加座」と「字柳原」の境となっており、この溝は字境を示すものと考えられる。

SK10220　調査区中央やや北寄りで検出した、Ⅱ－３～4期のSK10219に重複する土坑で、長径1.1mの楕円形である。土師器甕片が出土しているのみで、詳細は不明である。

SK10226・10227　調査区中央部で検出した土坑で、長径1.6m×短径1.4mの、本来は一体のものの可能性がある。出土遺物は少ない。

第５表　柳原区画内掘立柱建物一覧

遺構番号	調査次数	ピット番号 ※（　）はグリッド番号	時期	規模 間（m）×間（m）	柱間寸法 （m）	主軸	方位 （N基準）	備考
SB0260	8-9 次 143 次 153 次 165-1 次	143 次：(i7)P2 153 次：(k10)P5/(i10)P3 165-1 次：(I7)P2	Ⅱ -3	5(12.0) × 2(4.4)	（桁行）2.4 （梁間）2.2	南北	N3° 30′ W	
SB0263	8-9 次 143 次 153 次 159 次 165-1 次	143 次：(o8)P1	Ⅰ -4 ～	4(7.4) × 4(7.0)	（桁行）1.85 （梁間）1.75	南北	N4° W	SB9851 より古 総柱建物か
SB0265	8-9 次 143 次	(k7)P6/(k8)P2	Ⅱ	4(8.2) × 2(3.8)	（桁行）2.05 （梁間）1.9	南北	N1° W	SB10614 より古
SB0321	8-9 次 20 次	20 次：(F9)P2	Ⅰ -4 ～Ⅱ -1	4(9.4) × 2(4.7)	（桁行）2.35 （梁間）2.35	東西	N4° W	
SB0322	8-9 次 20 次 153 次	20 次：(H8)P2 153 次：(d9)P3・P4	Ⅲ -3 ～	5(8.5) × 2(3.6)	（桁行）1.7 （梁間）1.8	東西	N2° E	SB1081 より新
SB0540	10 次	なし	Ⅱか	-(-) × 2(5.0)	（桁行）－ （梁間）2.5	東西	N3° W	
SB0543	10 次	(W61)P1/(E61)P1・P3・P4/(W62)P2・P4/(E62)P5	Ⅲ	3(5.55) × 2(3.8)	（桁行）1.85 （梁間）1.9	東西	N6° W	
SB0544	10 次	(W62)P3・P4・P5/(E62)P3/(W63)P3・P31/(E63)P20・P34	Ⅱ -4 ～	3(5.25) × 2(4.0)	（桁行）1.75 （梁間）2.0	東西	N5° W	
SB0545	10 次	(E64)P5・P6/(E65)P2・P12・P16/(W64)P7・P13/(W65)P6・P12・P18	Ⅲ -2	3(6.0) × 2(4.0)	（桁行）2.0 （梁間）2.0	東西	N4° W	
SB0560	10 次	(W70)P5/(W71)P7/(W72)P2	Ⅱ -4 ～	3(6.3) × -(-)	（桁行）2.1 （梁間）－	南北	N5° W	SB10559 より新か
SB0565	10 次 159 次	159 次：(s2)P3/(s3)P2・P3	Ⅱ -3 ～Ⅲ -1	5(8.75) × 2(3.5)	（桁行）1.75 （梁間）1.75	東西	N0°	
SB1040	20 次	(E3)P1	Ⅰ -4	(4)(-) × 2(4.0)	（桁行）2.0 （梁間）2.0	南北	N4° W	
SB1041	20 次 28 次	28 次：(G9)P3/(H8)P8/(I9)P1	Ⅱ	4(9.2) × 2(4.0)	（桁行）2.3 （梁間）2.0	東西	N6° W	
SB1042	20 次 28 次	20 次：(G2)P1 28 次：(I8)P1・P3/(I9)P2・P3	Ⅱ -1 ～ 2	4(9.4) × 2(5.2)	（桁行）2.35 （梁間）2.6	東西	N3° W	
SB1046	20 次	(F2)P1/(F3)P2/(F4)P1・P2/(G3)P1・P2/(G4)P1	Ⅱ -1	3(6.6) × 2(4.8)	（桁行）2.2 （梁間）2.4	南北	N0°	
SB1047	20 次	(G3)P3・P5	Ⅲ	3(5.7) × 2(4.6)	（桁行）1.9 （梁間）2.3	南北	N2° W	
SB1050	20 次	(H4)P3/(I5)P2・P3/(I6)P3/(G6)P4	Ⅰ -4 ～	4(8.6) × 3(7.5)	（桁行）2.15 （梁間）2.5	南北	N4° W	SB1080 より古 総柱建物
SB1051	20 次	(D7)P11/(E5)P1/(E7)P7/(F7)P1	Ⅲ -2 ～	4(8.6) × 3(6.4)	（桁行）2.15 （梁間）2.15 （庇出）2.1	東西	N2° W	北面庇付建物
SB1053	20 次	(D7)P7・P10/(E7)P4	Ⅲ -2	3(5.85) × 2(4.2)	（桁行）1.95 （梁間）2.1	東西	N6° 30′ W	
SB1054	20 次	(D7)P3・P8/(D8)P4/(E7)P5/(E8)P7	Ⅲ -2 ～ 3	3(5.7) × 2(3.5)	（桁行）1.9 （梁間）1.75	東西	N6° 30′ W	
SB1055	20 次	(C7)P4/(D7)P9・P13/(D8)P1	Ⅲ -2	3(6.6) × 2(4.1)	（桁行）2.2 （梁間）2.05	東西	N3° W	
SB1057	20 次	(C8)P1/(D8)P2・P3/(E8)P3・P6/(E9)P28	Ⅲ -2 ～ 3	5(10.75) × 2(4.4)	（桁行）2.15 （梁間）2.2	東西	N4° 30′ W	
SB1058	20 次	(D8)P8/(D9)P10/(D10)P5・P10/(E9)P1・P23/(E10)P14・P15	Ⅲ -2 ～	3(6.25) × 3(6.4)	（桁行）2.15 （梁間）2.15 （庇出）2.1	東西	N4° W	南面庇付建物
SB1059	20 次 55 次	20 次：(C9)P9・P13/(C10)P11・P15/(D9)P19 55 次：(H11)P1/(I11)P1/(I12)P1・P2	Ⅲ -2 ～ 3	5(10.75) × 2(4.6)	（桁行）2.15 （梁間）2.3	東西	N3° W	
SB1060	20 次	(C9)P11/(C10)P5/(D9)P18・P21/(D10)P13/(E9)P8・P30	Ⅲ -3 ～	5(11.25) × 2(4.6)	（桁行）2.25 （梁間）2.3	東西	N3° W	
SB1061	20 次	(C9)P1・P6/(C10)P2/(D10)P14	Ⅲ -2 ～	-(-) × 2(4.3)	（桁行）2.0 （梁間）2.15	東西か	N3° W	
SB1062	20 次	(C9)P7/(C10)P1	Ⅲ -3 ～	-(-) × 2(4.0)	（桁行）－ （梁間）2.0	東西か	N6° W	
SB1063	20 次	(C9)P11・P12/(C10)P14	Ⅲ -3 ～ 4	-(-) × 2(4.0)	（桁行）2.1 （梁間）2.0	東西か	N3° W	
SB1064	20 次	(D9)P3・P18/(D10)P11/(E9)P33/(E10)P12	Ⅲ -2 ～	3(6.0) × 2(4.2)	（桁行）2.0 （梁間）2.1	東西	N2° W	
SB1066	20 次	(D9)P12/(D10)P7・P9/(E9)P4/(E10)P4	Ⅲ -3	3(6.3) × 2(4.2)	（桁行）2.1 （梁間）2.1	東西	N5° W	
SB1068	20 次	(E9)P18・P22/(D10)P8	Ⅲ -2 ～	4(8.4) × 2(3.8)	（桁行）2.1 （梁間）1.9	東西	N6° W	
SB1070	20 次	(D9)P6・P14/(E9)P19・P25/(E10)P7・P14・P15/(F10)P6	Ⅱ -4 ～Ⅲ -1	5(10.5) × 2(4.0)	（桁行）2.1 （梁間）2.0	東西	N9° W	
SB1075	20 次	(G9)P3/(G10)P1・P2・P3/(H9)P1・P5/(H10)P3・P6	Ⅱ -4 ～Ⅲ -1	3(6.0) × 2(3.7)	（桁行）2.0 （梁間）1.85	南北	N8° E	

遺構番号	調査次数	ピット番号 ※（　）はグリッド番号	時期	規模 間（m）×間（m）	柱間寸法 (m)	主軸	方位 (N基準)	備考
SB1077	20 次 28 次	28 次：(I9)P3/(K9)P4	Ⅱ -1 ～ 2	3(7.2) × 2(4.4)	(桁行) 2.4 (梁間) 2.2	東西	N2° W	
SB1078	20 次 153 次	20 次：(J7)P2・P4	Ⅲか	3(6.3) × 2(3.7)	(桁行) 2.1 (梁間) 1.85	東西	N1° W	
SB1080	20 次 153 次	20 次:(G4)P2/(G5)P1・P2/(G6)P1・P3・P5/(H4)P2/(H5)P1/(H6)P1/(H7)P1・P2/(I4)P1・P3/(I5)P1・P4/(I6)P2・P4 153 次：(d4)P7・P8/(d5)P2・P6/(d7)P1/(e4)P2/(e5)P1/(e6)P2・P7/(e7)P31・P32	Ⅱ -1 ～ 2	6(15.0) × 4(10.8)	(桁行) 2.4 (梁間) 2.4 (庇出) 3.0	東西	N1° 30′ W	SB1050 より新 三面庇付建物 2 回の建替えが想定される
SB1081	20 次 153 次	20 次：(I9)P5 153 次：(e9)P19・P26	Ⅲ -2 ～	5(10.5) × 2(4.4)	(桁行) 2.1 (梁間) 2.2	東西	N3° W	SB0322 より古
SB1084	20 次 153 次	20 次：(I9)P3・P4・P7/(J9)P4 153 次：(d9)P2/(e9)P4・P17・P25/(e10)P1・P3・P4	Ⅲ -3 ～	5(10.25) × 2(4.2)	(桁行) 2.05 (梁間) 2.1	東西	N1° W	
SB1301	28 次	(D1)P4/(E1)P6/(F1)P6/(G1)P6	Ⅰ -4 ～Ⅱ -1	4(9.4) × -(-)	(桁行) 2.35 (梁間) -	東西	N3° W	
SB1302	28 次	(E1)P5/(G1)P5・P15	Ⅰ -4 ～Ⅱ -1	4(9.6) × -(-)	(桁行) 2.4 (梁間) -	東西	N4° W	
SB1306	28 次	(C3)P2/(C4)P3・P4/(D3)P2・P3/(D4)P3・P4・P5	Ⅱ -1 ～	3(5.7) × 2(4.0)	(桁行) 1.9 (梁間) 2.0	南北	N0°	SB1307 より古
SB1307	28 次	(C3)P3・P4/(C4)P5・P6/(D3)P1/(D4)P6・P8	Ⅱ -1 ～	3(6.0) × 2(4.0)	(桁行) 2.0 (梁間) 2.0	南北	N1° 30′ W	SB1306 より新
SB1310	28 次	(D2)P4・P5・P7/(E1)P10/(E3)P1・P6/(F1)P1/(G3)P4/(H3)P2	Ⅱ -1 ～ 2	5(12.25) × 2(5.0)	(桁行) 2.45 (梁間) 2.5	東西	N2° 30′ W	
SB1315	28 次	(E1)P1・P3・P8/(E2)P2・P5/(F1)P3/(F2)P2/(G1)P3/(G2)P1・P4/(H1)P1・P2	Ⅱ -1 ～ 2	5(11.75) × 2(4.4)	(桁行) 2.35 (梁間) 2.2	東西	N1° W	
SB1318	28 次	(G1)P2・P10/(H1)P3・P6/(I2)P4	Ⅱ -3 ～	4(9.4) × 2(4.7)	(桁行) 2.35 (梁間) 2.35	東西	N5° W	
SB1320	28 次	(E1)P7・P11/(E2)P4/(F1)P2/(F2)P1・P5/(G1)P4・P8/(H2)P3・P4	Ⅱ -3 ～	5(10.5) × 2(4.4)	(桁行) 2.1 (梁間) 2.2	東西	N4° W	
SB1321	28 次	(F1)P5・P7・P9・P10/(F2)P4/(G1)P11・P14/(G2)P2	Ⅱ -2	3(5.55) × 2(3.6)	(桁行) 1.85 (梁間) 1.8	東西	N1° W	
SB1325	28 次	(G1)P12/(H1)P4・P7/(I1)P2/(H2)P2・P7/(I2)P1・P3	Ⅱ -1 ～ 2	5(10.5) × 2(5.0)	(桁行) 2.1 (梁間) 2.5	東西	N5° W	
SB1330	28 次	(B7)P2/(B8)P2・P4/(C8)P3・P7/(D7)P10/(D8)P4・P6	Ⅲ -1 ～ 2	5(9.75) × 2(4.0)	(桁行) 1.95 (梁間) 2.0	東西	N7° W	
SB1333	28 次	(C6)P1・P3/(C7)P3・P4/(D6)P3/(D7)P3・P6	Ⅲ	3(6.0) × 2(4.0)	(桁行) 2.0 (梁間) 2.0	東西	N7° W	
SB1334	28 次	(C6)P2・P4/(C7)P2・P5/(D6)P2・P8/(D7)P11	Ⅲ	3(6.0) × 2(3.9)	(桁行) 2.0 (梁間) 1.95	東西	N7° W	
SB1340	28 次	(D7)P7/(E6)P7・P8/(E7)P3・P19/(F6)P2/(F7)P7/(G6)P3・P4/(G7)P2	Ⅱ -3 ～Ⅲ -1	5(10.5) × 2(4.4)	(桁行) 2.1 (梁間) 2.2	東西	N3° 30′ W	
SB1350	28 次	(D6)P10/(D7)P5/(E6)P5・P12/(E7)P3/(E8)P1・P5	Ⅲ -1 ～	3(6.0) × 2(4.4)	(桁行) 2.0 (梁間) 2.2	南北	N7° W	
SB1360	28 次	(F6)P1・P7・P8/(F7)P8/(G6)P1・P6	Ⅱ -2 ～	3(5.4) × 2(3.6)	(桁行) 1.8 (梁間) 1.8	東西	N9° W	
SB1373	28 次	(G5)P6・P8/(G6)P10/(H5)P1・P5/(H6)P5・P6	Ⅲ -1	3(5.4) × 2(3.9)	(桁行) 1.8 (梁間) 1.95	東西	N5° E	
SB1380	28 次	(F8)P6/(F9)P4/(G8)P4・P6/(H7)P1/(H8)P4	Ⅱ -3	3(5.7) × 2(4.0)	(桁行) 1.9 (梁間) 2.0	東西	N6° W	
SB1386	28 次 152 次	28 次：(L4)P3・P8・P12	Ⅲ	3(5.1) × 2(3.8)	(桁行) 1.7 (梁間) 1.9	東西	N1° W	
SB1389	20 次 28 次	28 次：(J8)P5/(J9)P2/(K8)P3	Ⅱ -2 ～ 3	3(5.4) × 2(3.9)	(桁行) 1.8 (梁間) 1.95	東西	N5° W	
SB1390	20 次 28 次	20 次：(G2)P4 28 次：(I8)P2/(J8)P2・P4/(K8)P1/(K9)P1	Ⅱ -1 ～ 2	3(6.0) × 2(3.5)	(桁行) 2.0 (梁間) 1.75	東西	N2° W	
SB1391	28 次 152 次	28 次：(L8)P1/(L9)P1/(M8)P1 152 次：(e1)P1/(f1)P14・P15・P17/(f2)P4・P5	Ⅱ -1	3(5.7) × 2(3.6)	(桁行) 1.9 (梁間) 1.8	東西	N1° E	SB1392 より新
SB1392	28 次 152 次	152 次：(e1)P2/(f1)P8・P19/(g2)P7	Ⅱ -1	3(7.5) × 2(4.8)	(桁行) 2.5 (梁間) 2.4	東西	N0°	SB1391 より古
SB1393	28 次	(F7)P10・P17/(G7)P11・P12/(G8)P5/(H6)P3・P7/(H7)P8/(I6)P1・P2・P3	Ⅲ -1	5(9.75) × 2(4.2)	(桁行) 1.95 (梁間) 2.1	東西	N4° W	
SB1394	28 次	(F7)P9・P10・P14・P15/(G7)P9・P10/(H6)P1/(H7)P4・P5	Ⅱ -3	3(5.55) × 2(3.5)	(桁行) 1.85 (梁間) 1.75	東西	N7° W	
SB1396	28 次	(G1)P13/(H1)P5/(H2)P6・P8/(I2)P5	Ⅲ	3(5.7) × 2(3.8)	(桁行) 1.9 (梁間) 1.95	東西	N7° 30′ E	
SB9003	143 次 165-1 次	143 次：(m6)P2・P6/(n5)P4/(i6)P8・P9/(n6)P3・P4・P10/(i7)P6/(n7)P2/(i8)P14・P15・P23/(m8)P2・P8/(n8)P2 165-1 次：(l8)P4/(m8)P3/(n8)P15	Ⅱ -1 ～ 2	5(12.25) × 3(7.6)	(桁行) 2.45 (梁間) 2.3 (庇出) 3.0	南北	N1° W	東面庇付建物 SB10130 より古
SB9004	143 次 165-1 次	143 次：(n7)P1・P6・P7・P9・P10/(o7)P5・P7・P9 165-1 次：(n8)P9・P16/(o8)P2・P8・P9・P10	Ⅱ -3	3(5.85) × 2(3.6)	(桁行) 1.95 (梁間) 1.8	南北	N5° W	SK9038 より新

遺構番号	調査次数	ピット番号 ※（　）はグリッド番号	時期	規模 間（m）×間（m）	柱間寸法 (m)	主軸	方位 （N基準）	備考
SB9005	143 次 159 次	143 次：(O4)P1 159 次：(p4)P4/(p6)P1/(q6)P1・P3・P4	Ⅱ -1 ～ 2	4(8.6) × 3(7.6)	（桁行）2.15 （梁間）2.4 （庇出）2.8	東西	N0°	南面庇付建物 SB9006 より古
SB9006	143 次 159 次	143 次：(n4) 坑 25/(n5) 坑 28/(o5)P1 159 次：(p4)P6/(p5)P3/(q4)P6/(q5)P1	Ⅱ -2 ～	5(12.0) × 2(4.8)	（桁行）2.4 （梁間）2.4	東西	N0°	SB10057 より新 SK9015 より古
SB9007	143 次 152 次	なし	Ⅰ -4 ～Ⅱ -1	4(-) × 3(5.1)	（桁行）1.8 （梁間）1.7	東西	N0°	西から 2 間目に間仕切り状の柱穴
SB9008	143 次	(j4)P2/(l4)P2/(j5)P7・P12・P18	Ⅲ	3(6.6) × 2(4.2)	（桁行）2.2 （梁間）2.1	東西	N1° E	
SB9010	143 次 152 次	143 次：(h3)P2・P3/(i3)P4・P5 152 次：(h2)P6・P7・P10/(i2)P8・P11/(h3)P2・P4・P5/(i3)P1	Ⅱ -1	3(6.0) × 2(3.8)	（桁行）2.0 （梁間）1.9	南北	N0°	SB9794 より古
SB9011	143 次 153 次	143 次：(h6)P1・P2・P3・P4/(i6)P2/(i7)P13・P16 153 次：(g6)P2・P3/(g7)P4	Ⅱ -2 ～ 3	5(10.0) × 2(4.4)	（桁行）2.0 （梁間）2.2	東西	N1° W	SB9821 より古
SB9012	143 次 153 次	143 次：(i6)P6/(h7)P6/(i7)P9・P10/(i8)P16 153 次：(g6)P13/(g8)P2	Ⅱ -2 ～ 3	5(9.0) × 2(4.6)	（桁行）1.8 （梁間）2.3	東西	N3° 30′ W	
SB9671	152 次	(j12)P7・P8	Ⅱ -2 ～ 3	3(5.4) × -(-)	（桁行）1.8 （梁間）—	東西	N3° W	
SB9672	152 次	(l12)P11・P17/(m12)P2・P6/(m13)P1・P7/(l13)P5・(k13)P1・P3	Ⅰ -4 ～Ⅱ -1	5(12.0) × 2(5.0)	（桁行）2.4 （梁間）2.5	東西	N4° W	SB9678 より新
SB9673	152 次	(k12)P3/(l12)P6	Ⅱ -2 ～ 3	-(-) × 2(5.2)	（桁行）2.6 （梁間）2.6	南北	N2° E	SB9674 より古
SB9674	152 次	(k12)P1・P4/(l12)P7・P12/(m12)P4・P5・P7・P8	Ⅱ -3	-(-) × 3(5.4)	（桁行）— （梁間）1.8	南北	N2° W	SB9673 より新
SB9676	152 次	(j12)P2/(k12)P5/(j13)P1・P3/(k13)P2・P4・P6・P7	Ⅱ -2 ～ 3	3(5.85) × 2(3.8)	（桁行）1.95 （梁間）1.9	東西	N2° E	
SB9678	152 次	(m12)P3・P7/(n12)P2/(m13)P3・P12/(n13)P3・P8・P10	Ⅱ -1 ～ 2	3(4.5) × 2(3.4)	（桁行）1.5 （梁間）1.7	南北	N2° W	SB9672 より古
SB9687	152 次	(h13)P3・P7・P8/(i13)P6・P11/(h14)P2・P5・P6・P12/(i14)P2・P3・P6・P7	Ⅱ -1 ～ 2	3(5.55) × 2(3.6)	（桁行）1.85 （梁間）1.8	東西	N2° W	SB9688 より古
SB9688	152 次	(i13)P5・P7/(h14)P3・P4・P7・P13/(i14)P8	Ⅱ -2	3(5.55) × 2(3.6)	（桁行）1.85 （梁間）1.8	東西	N4° W	SB9687 より新
SB9690	152 次	(g14)P2・P9・P10/(g15)P4・P15・P18/(h15)P15・P24	Ⅱ -2 ～ 3	3(6.3) × 2(4.0)	（桁行）2.1 （梁間）2.0	東西	N4° W	
SB9691	152 次	(i13)P1・P2・P3・P4/(j13)P2・P5/(i14)P1/(j14)P1・P2・P9/(k14)P4・P6・P7	Ⅱ -2 ～ 3	5(9.5) × 2(3.8)	（桁行）1.9 （梁間）1.9	東西	N2° E	
SB9692	152 次	(k14)P5・P11/(j15)P9・P12/(k15)P3	Ⅱ -2	3(6.3) × 2(3.8)	（桁行）2.1 （梁間）1.9	東西	N2° W	
SB9702	152 次	(f15)P14・P15・P21・P26/(e16)P6/(f16)P5・P6・P7	Ⅱ -1	3(6.0) × 2(4.0)	（桁行）2.0 （梁間）2.0	東西	N0°	
SB9706	152 次	(i15)P6/(j15)P2・P5・P6/(i16)P4・P5・P25/(j16)P1	Ⅱ -1	3(6.0) × 2(3.6)	（桁行）2.0 （梁間）1.8	東西	N0°	
SB9707	152 次	(h15)P3・P4/(i15)P7・P8・P14・P15・P18/(j15)P3・P4/(h16)P4・P6/(i16)P34・P38/(j16)P3・P4/(k16)P2・P3・P6・P11	Ⅲ -2 ～	5(10.5) × 2(4.2)	（桁行）2.1 （梁間）2.1	東西	N5° W	SB9708 より古
SB9708	152 次	(j15)P13/(l15)P7・P8/(k16)P4/(l16)P1・P2・P10	Ⅲ -2 ～	3(6.3) × 2(4.0)	（桁行）2.1 （梁間）2.0	東西	N4° W	SB9707 より新
SB9709	152 次 167 次	152 次：(n15)P2・P3・P5 167 次：(o16)P2/(p14)P4/(q14)P15/(q15)P2/(q16)P2	Ⅰ -4	5(10.5) × 2(4.8)	（桁行）2.1 （梁間）2.4	東西	N2° W	
SB9710	152 次	(o15)P1/(n16)P4/(n17)P4	Ⅰ -4 ～Ⅱ -1	3(6.3) × 2(4.2)	（桁行）2.1 （梁間）2.1	南北	N4° W	SB9712 より古
SB9712	152 次 167 次	152 次：(n16)P1/(n17)P1・P2・p3 167 次：(o17)P2	Ⅱ -1	3(7.2) × 2(4.8)	（桁行）2.4 （梁間）2.4	南北	N2° W	
SB9713	152 次	(d16)P2・P3/(d17)P2・P3・P12・P13	Ⅲ -1	3(-) × 2(4.0)	（桁行）2.1 （梁間）2.0	東西	N1° W	SB9714 より新
SB9714	152 次	(d16)P4・P5/(d17)P1・P10/(d18)P3	Ⅲ -1	3(-) × 2(4.4)	（桁行）2.3 （梁間）2.2	東西	N1° W	SB9713 より古
SB9722	152 次	(g16)P7・P8・P9・P11・P29/(h16)P5・P16・P28・P29・P31/(i16)P21	Ⅲ -2	3(6.3) × 2(3.6)	（桁行）2.1 （梁間）1.8	東西	N4° W	SB9707 より古
SB9725	152 次	(g16)P2・P21/(h16)P10・P12・P20・P26・P33・P34/(g16)P4	Ⅲ -2 ～ 3	3(6.75) × (2)(-)	（桁行）2.25 （梁間）1.6	東西	N4° W	SB9722 より古か
SB9726	152 次	(h17)P3/(i17)P5・P6・P10	Ⅲ -2	3(6.3) × -(-)	（桁行）2.1 （梁間）—	東西	N4° W	
SB9729	152 次	(g18)P2・P3・P4・P5/(h18)P1・P2	Ⅱ -2 ～ 3	3(5.7) × 2(3.8)	（桁行）1.9 （梁間）1.9	東西	N2° E	SB9804 より古
SB9730	152 次	(l17)P3・P5/(m17)P4	Ⅲ -2 ～ 3	3(6.6) × -(-)	（桁行）2.2 （梁間）—	東西	N4° W	SB9731 より新
SB9731	152 次	(l17)P4・P5・P12・P13・P19・P22/(m17)P5・P6・P11/(l18)P11・P12・P19・P21/(m18)P7・P8・P10・P11・P12・P14	Ⅲ -2	3(6.0) × 2(4.2)	（桁行）2.0 （梁間）2.1	南北	N4° W	SB9730 より古
SB9732	152 次	(l17)P6・P20・P21/(m17)P13・P15/(l18)P4・P5・P13・P16/(l19)P17/(m19)P22・P26	Ⅲ -2 ～ 3	3(6.0) × 2(4.4)	（桁行）2.0 （梁間）2.2	南北	N3° 30′ W	

遺構番号	調査次数	ピット番号 ※（　）はグリッド番号	時期	規模 間（m）×間（m）	柱間寸法 (m)	主軸	方位 （N基準）	備考
SB9733	152 次	(l17)P1・P7・P8/(m17)P2・P10・P16・P17/(l18)P2・P3/(m18)P5・P6・P18・P19/(n17)P6/(n18)P3・P4・P7	Ⅲ −2 ～ 3	3(6.3) × 3(6.3)	（桁行）2.1 （梁間）2.1 （庇出）2.1	南北	N3° 30′ W	東面に庇一間
SB9735	152 次 167 次	152 次：(n18)P9・P10/(m19)P18・P19/(n19)P9 167 次：(o18)P1	Ⅰ −4 ～Ⅱ −1	5(10.0) × 2(4.2)	（桁行）2.0 （梁間）2.1	東西	N4° W	
SB9739	152 次	(e18)P2・P5/(f18)P9・P10・P18/(g18)P8・P10/(e19)P3・P6/(f19)P1・P3・P8/(g19)P1・P2/(g20)P2	Ⅱ −1 ～ 2	3(5.4) × 2(3.6)	（桁行）1.8 （梁間）1.8	東西	N1° W	
SB9740	152 次	(e19)P1・P2・P10/(f20)P3・P4	Ⅱ −1 ～ 2	3(5.4) × 2(3.6)	（桁行）1.8 （梁間）1.8	東西	N1° W	SB9804 より古
SB9742	152 次	(k18)P2/(k19)P3	Ⅱ −2 ～ 3	3(6.3) × (2)(−)	（桁行）2.1 （梁間）1.7	東西	N1° W	
SB9743	152 次	(k18)P1/(l18)P1/(l19)P2	Ⅱ −1 か	3(5.7) × 2(4.0)	（桁行）1.9 （梁間）2.0	東西	N1° W	SB9744 より新
SB9744	152 次	(j18)P2/(i19)P2	Ⅱ −1 ～ 2	3(5.4) × 2(3.2)	（桁行）1.8 （梁間）1.6	東西	N2° W	SB9743 より古
SB9745	152 次	(m19)P7/(n19)P19・P20/(o19)P1/(m20)P18・P19・P24/(o20)P1/(m21)P5/(n22)P3・P4	Ⅱ −1 ～ 2	5(10.0) × 2(4.4)	（桁行）2.0 （梁間）2.2	南北	N1° W	SB9774・9775 より古
SB9750	152 次	(h20)P9・P16・P17・P26/(i20)P14・P15・P18/(h21)P10・P11・P12・P15・P20/(i21)P19・P20・P30・P31/(j21)P1・P14・P17・P18/(h22)P3・P11・P13・P14・P18・P20/(i22)P3・P4・P5・P22・P24・P26/(j22)P10・P11・P13・P14	Ⅱ −2 ～ 3	5(10.75) × 4(8.6)	（桁行）2.15 （梁間）2.15 （庇出）2.15	東西	N1° W	身舎 3 間× 2 間の東西南北に 1 間の庇が付く四面庇付建物
SB9751	152 次	(g20)P8・P9・P16・P17/(h20)P7・P10・P12・P30/(j20)P4・P10・P11/(g21)P2・P4・P5・P7・P9・P13・P17・P18/(h21)P6・P23/(i21)P7・P8/(j21)P19・P21/(g22)P3・P5・P10・P13・P20・P24・P32/(h22)P2・P6・P12・P19・P21/(i22)P9・P14・P15・P17・P19/(j22)P4・P8・P12	Ⅲ −1 ～ 2	5(11.25) × 4(8.6)	（桁行）2.25 （梁間）2.15 （庇出）2.25 2.15	東西	N1° W	身舎 3 間× 2 間の東西南北に 1 間の庇が付く四面庇付建物。東西の庇出は 2.25m、南北は 2.15m。SB9752 より古。
SB9752	152 次	(g20)P10/(h20)P4・P14・P15/(i20)P5・P7・P13・P21・P22/(g21)P1・P6・P12・P14・P17/(h21)P18・P24/(i21)P2・P12/(g22)P2/(h22)P1	Ⅲ −2 ～	5(10.75) × 4(8.6)	（桁行）2.15 （梁間）2.15 （庇出）2.15	東西	N4° W	SB9751 より新
SB9753	152 次	(g20)P5・P6/(h20)P5・P6・P18・P19/(i20)P10/(h21)P28・P30・P32/(i21)P13・P25・P26/(j21)P4・P9・P12・P15	Ⅲ −3 ～	5(11.25) × 2(4.4)	（桁行）2.25 （梁間）2.2	東西	N2° W	SB9763 より新
SB9754	28 次 152 次	28 次：(M5)P3 152 次：(e21)P2・P3/(e23)P3/(f21)P13/(f22)P9・P10/(f23)P9・P10・P11	Ⅱ −3 ～	5(9.25) × 2(3.8)	（桁行）1.85 （梁間）1.9	南北	N0°	
SB9763	152 次	(k19)P6/(k20)P3/(l20)P37/(j21)P8	Ⅰ −4 か	3(6.3) × 2(4.2)	（桁行）2.1 （梁間）2.1	東西	N10° W	SB9753 より古
SB9764	152 次	(g21)P20・P21/(g22)P6/(f23)P8/(g23)P2・P16	Ⅲ −1 ～	5(10.5) × 2(4.2)	（桁行）2.1 （梁間）2.1	南北	N3° W	SB9765 より新
SB9765	152 次	(f22)P12・P13・P17・P18/(g22)P15・P31/(g23)P13/(f24)P3	Ⅱ −3 か	4(8.4) × 2(4.2)	（桁行）2.2 （梁間）2.1	南北	N 1° E	SB9764 より古
SB9766	152 次	(g22)P23・P29/(h22)P7・P23・P24/(g23)P3・P4・P8・P10・P11・P15/(h23)P2・P4・P5・P6・P7・P9/(i23)P8/(g24)P3/(h24)P2・P3・P4/(i24)P11	Ⅱ −2 ～ 3	5(10.75) × 4(8.4)	（桁行）2.15 （梁間）2.1 （庇出）2.15 2.1	東西	N2° E	身舎 3 間× 2 間の東西南北に 1 間の庇が付く四面庇付建物。東西の庇出は 2.15m、南北は 2.1m。
SB9768	152 次	(i23)P11/(j23)P3・P4/(i24)P2/(j24)P1・P10/(i25)P8/(j25)P2	Ⅱ −1 ～	3(5.7) × 2(3.8)	（桁行）1.9 （梁間）1.9	南北	N1° W	
SB9770	152 次	(l19)P1・P11・P12/(m19)P5・P8・P9・P13/(l20)P9/(m20)P16/(n20)P4	Ⅲ −2 ～ 3	3(5.55) × 2(3.4)	（桁行）1.85 （梁間）1.7	東西	N3° W	SB9745・9775 より新
SB9771	152 次	(l19)P3・P4・P19/(m19)P10・P11・P21・P24	Ⅲか	3(6.0) × −(−)	（桁行）2.0 （梁間）—	東西	N4° W	
SB9773	152 次	(l19)P7/(m19)P16・P17/(m20)P17	Ⅲ −2 か	3(6.0) × (2)(−)	（桁行）2.0 （梁間）—	東西	N4° W	
SB9774	152 次	(l20)P21・P22・P41/(n19)P12・P13/(m20)P1・P21・P25/(n20)P12・P17/(l21)P30・P33・P34/(m21)P8/(n21)P1・P2/(m22)P4/(n22)P5・P6	Ⅱ −2 ～ 3	3(9.0) × 3(6.4)	（桁行）3.0 （梁間）2.2 （庇出）2.0	南北	N1° W	東面に庇一間
SB9775	152 次	(m20)P27/(l21)P6・P14・P18/(m21)P6・P18・P19/(m22)P33・P35	Ⅱ −3 ～	3(9.9) × 2(4.6)	（桁行）3.3 （梁間）2.3	南北	N3° W	SB9770 より古・SB9745 より新
SB9776	152 次	(l20)P8・P17・P18/(m20)P10・P11/(n20)P3・P10・P11/(l21)P4・P5・P9・P12/(m21)P11/(n21)P9・P14	Ⅱ −3 ～ 4	3(6.6) × 2(4.4)	（桁行）2.2 （梁間）2.2	南北	N1° W	SB9770 より古
SB9777	152 次	(l21)P32/(m21)P17・P20・P30・P34/(n21)P6・P12/(l22)P27・P28/(m22)P21・P31・P32/(n22)P11	Ⅲ −1	4(7.8) × 2(3.5)	（桁行）1.95 （梁間）1.75	東西	N3° W	
SB9778	152 次	(k22)P3・P4・P8・P9/(l22)P26/(l23)P11・P22・P26/(l24)P5・P6・P10・P11	Ⅱ −3 ～Ⅲ −1	5(8.5) × 2(3.8)	（桁行）1.7 （梁間）1.9	南北	N2° W	SB9779 より新
SB9779	152 次	(k22)P1/(k23)P1/(l22)P5・P24/(l23)P3・P9・P15・P16	Ⅱ −1 ～ 2	3(6.0) × 2(4.0)	（桁行）2.0 （梁間）2.0	東西	N1° W	SB9778 より古

遺構番号	調査次数	ピット番号 ※（　）はグリッド番号	時期	規模 間（m）×間（m）	柱間寸法 （m）	主軸	方位 （N基準）	備考
SB9780	152 次	(l22)P1・P8・P9・P12・P17/(m21)P4/(m22)P20・P22・P30/(n22)P12	Ⅱ -3 ～ 4	3(6.3) × 2(3.8)	（桁行）2.1 （梁間）1.9	東西	N2° W	SB9775 より古
SB9781	152 次	(m21)P16/(n21)P11/(m22)P24/(n22)P14・P16/(m23)P2・P4・P6/(n23)P8	Ⅲ	3(6.3) × 2(4.0)	（桁行）2.1 （梁間）2.0	南北	N3° W	
SB9782	152 次	(m22)P18・P36/(n22)P9/(n23)P3・P6・P11・P12・P13/(n24)P7・P9	Ⅱ -3 ～ 4	5(10.5) × 2(4.2)	（桁行）2.1 （梁間）2.1	南北	N2° E	SB9783 より古
SB9783	152 次	(m22)P6・P7/(m23)P5/(n23)P2・P4・P5・P9/(n24)P1・P2・P10/(m25)P2・P3/(n25)P2	Ⅱ -3	5(10.75) × 2(4.3)	（桁行）2.15 （梁間）2.15	南北	N2° W	SB9782 より新
SB9794	143 次 152 次	152 次：(h2)P4・P5・P8・P9/(i2)P9・P10・P13・P14/(h3)P3・P6・P7/(i3)P2・P3	Ⅱ -1 ～ 2	3(6.3) × 2(4.2)	（桁行）2.1 （梁間）2.1	南北	N2° W	SB9010 より新
SB9795	143 次 152 次 153 次	143 次：(h4) 坑 60 152 次：(g3)P1・P6	Ⅱ -2	3(-) × 2(4.2)	（桁行）2.4 （梁間）2.1	東西	N0°	SB10610 より古
SB9800	152 次	(h24)P5・P8・P12・P13/(i24)P13・P19/(j24)P2・P3/(h25)P4・P9・P11・P12・P16・P20・P21・P22/(i25)P4・P5・P6/(j25)P1・P3・P4・P5/(h1)P3・P5・P8・P9・P11/(i1)P4・P5・P6・P7・P9/(j1)P2・P3・P4・P12・P13	Ⅱ -1 ～ 2	5(11.25) × 4(8.4)	（桁行）2.25 （梁間）2.1 （庇出）2.25 2.1	東西	N1° W	身舎 3 間 × 2 間の東西南北に 1 間の庇が付く四面庇付建物。庇出は東西 2.25m、南北 2.1m
SB9802	152 次	(n2)P4	Ⅱ -1 ～ 2	3(7.5) × -(-)	（桁行）2.5 （梁間）—	南北	N4° W	
SB9804	152 次	(e18)P4/(g18)P9/(f19)P10	Ⅱか	3(6.3) × 2(4.2)	（桁行）2.1 （梁間）2.1	東西	N5° W	
SB9814	143 次 153 次	143 次：(h6)P5・P18 153 次：(g5)P1/(g6)P4	Ⅱ	3(7.2) × 2(4.8)	（桁行）2.4 （梁間）2.4	南北	N4° W	SB9812·9821 より古
SB9815	143 次 153 次	143 次：(g5)P3/(g6)P1・P2 153 次：(f6)P7/(g6)P7	Ⅱ -4 ～	3(6.0) × 2(4.0)	（桁行）2.1・1.8 （梁間）2.0	南北	N0°	
SB9817	153 次	(e6)P6・P8/(f6)P12・P13/(e7)P19・P20/(i7)P14	Ⅱ -3 ～ 4	3(5.1) × 2(4.0)	（桁行）1.7 （梁間）2.0	南北	N1° W	
SB9819	153 次	(d7)P5/(e7)P12・P21・P26	Ⅱ -2 ～ 3	3(5.4) × 2(3.9)	（桁行）1.8 （梁間）1.95	東西	N1° W	
SB9820	153 次	(e7)P2・P5/(f7)P8	Ⅱ -3	3(6.6) × 2(4.2)	（桁行）2.2 （梁間）2.1	南北	N4° W	SB9822 より古
SB9821	143 次 153 次	143 次：(i6)P3・P4/(i7)P2/(h7)P1・P4 153 次：(g6)P1/(g7)P5	Ⅱ -3	5(10.25) × 2(3.8)	（桁行）2.05 （梁間）1.9	東西	N3° 30′ W	SB9011・9014 より新
SB9822	20 次 153 次	20 次：(I7)P2 153 次：(d7)P10/(e7)P8・P23・P30	Ⅲ -1 ～ 2	3(6.0) × 2(4.2)	（桁行）2.0 （梁間）2.1	東西	N0°	SB9820 より新
SB9823	153 次	(e8)P2/(e9)P1・P7/(f9)P3	Ⅱ -3 ～ 4	3(5.7) × 2(3.8)	（桁行）1.9 （梁間）1.9	南北	N2° W	SB9824 より古
SB9824	20 次 153 次	20 次：(I9)P11/(J9)P1	Ⅲ	5(10.5) × 2(4.2)	（桁行）2.1 （梁間）2.1	東西	N1° W	SB9823 より新
SB9825	20 次 153 次	20 次：(I9)P7・P14/(J9)P3 153 次：(d8)P2/(e9)P14/(f9)P7	Ⅲ -1 ～	5(10.5) × 2(3.8)	（桁行）2.1 （梁間）1.9	東西	N1° W	
SB9839	8-9 次 153 次 165-1 次	153 次：(h10)P5・P10/(i10)P10・P15/(j10)P1	Ⅱ -3 ～	5(10.75) × 2(4.3)	（桁行）2.15 （梁間）2.15	東西	N3° W	
SB9840	153 次	(h10)P1・P7・P11/(h11)P6・P8/(i10)P9・P17	Ⅲ -2 ～ 3	5(10.75) × 2(4.5)	（桁行）2.15 （梁間）2.25	東西	N2° W	
SB9841	8-9 次 153 次 165-1 次	153 次：(i10)P18/(j10)P10・P12/(k10)P6・P7/(l10)P14	Ⅲ -1 ～	5(10.75) × 2(4.2)	（桁行）2.15 （梁間）2.1	東西	N4° W	
SB9842	8-9 次 8-10 次 153 次 165-1 次	153 次：(i10)P1/(j10)P11/(k10)P11/(l10)P18	Ⅲ -1 ～	5(10.5) × 2(4.2)	（桁行）2.1 （梁間）2.1	東西	N0°	
SB9843	8-9 次 8-10 次 153 次	153 次：(j10)P5・P21/(k10)P8/(l10)P4・P9・P10・P22	Ⅲ -2 ～	5(10.0) × 2(4.0)	（桁行）2.0 （梁間）2.0	東西	N3° W	SB9844 より新
SB9844	8-9 次 8-10 次 153 次	(j10)P4・P23・P24/(k10)P9/(l10)P15	Ⅲ -2 ～	5(10.0) × 2(4.0)	（桁行）2.0 （梁間）2.0	東西	N3° W	SB9843 より古
SB9848	8-10 次 143 次 153 次 165-1 次	143 次：(I7)P8/(I8)P12 153 次：(k10)P1・P4/(l10)P1 165-1 次：(I8)P26	Ⅱ -3 ～ 4	5(11.75) × 2(4.4)	（桁行）2.35 （梁間）2.2	南北	N3° W	SB0260 より新
SB9849	8-9 次 153 次 165-1 次	153 次：(l10)P8/(m10)P8・P12・P13	Ⅱ -3 ～ 4	4(8.8) × 2(3.6)	（桁行）2.2 （梁間）1.8	南北	N3° E	
SB9851	8-9 次 153 次 165-1 次	(m10)P10・P13/(n10)P1・P5/(o10)P1	Ⅱ -4 ～	3(6.9) × 2(4.0)	（桁行）2.3 （梁間）2.0	東西	N3° W	
SB9872	157 次	(u17)P6・P7・P9/(v17)P1	不明	(3)(4.8) × -(-)	（桁行）1.6 （梁間）—	東西	N5° W	
SB9873	157 次	(x11)P3・P4・P5・P6/(y11)P5	Ⅰ -4	3(6.0) × 2(3.6)	（桁行）2.0 （梁間）1.8	東西	N4° W	
SB9874	157 次	(u12)P6・P8/(u13)P11/(v12)P6・P14/(v13)P2・P15/(w12)P7・P9/(w13)P1	Ⅱ -3 ～ 4	3(6.15) × 2(4.4)	（桁行）2.05 （梁間）2.2	東西	N2° W	SB9876 より新

遺構番号	調査次数	ピット番号 ※（　）はグリッド番号	時期	規模 間（m）×間（m）	柱間寸法 (m)	主軸	方位 （N基準）	備考
SB9875	157 次	(u12)P3・P10/(u13)P6/(v13)P9・P19/(v12)P15/(v13)P19/(w12)P10・P14	Ⅱ -4 ～Ⅲ -1	3(5.7) × 2(3.8)	（桁行）1.9 （梁間）1.9	東西	N6° W	SB9874 より新
SB9876	157 次	(u12)P7・P13/(u13)P16/(v12)P8・P10/(v13)P4・P17/(w13)P7	Ⅱ -3	3(5.7) × 2(3.8)	（桁行）1.9 （梁間）1.9	東西	N0° 30′ W	SB9910・SK9934 より新
SB9877	157 次	(t12)P6/(t13)P4・P8/(u13)P7/(v12)P9/(v13)P14	Ⅱ -3 ～ 4	3(5.7) × 2(4.0)	（桁行）1.9 （梁間）2.0	東西	N6° 30′ W	SB9876 より新
SB9878	157 次	(t13)P3・P7/(u13)P5・P10/(u14)P10・P12/(v14)P8	Ⅱ -3 ～ 4	3(5.7) × 2(3.6)	（桁行）1.9 （梁間）1.8	東西	N6° W	SB9877 より新
SB9879	157 次	(u13)P3・P8・P12/(u14)P1・P8/(u15)P2・P5・P6/(v13)P13/(v14)P9/(v15)P5・P7	Ⅲ -2	5(9.25) × 2(4.2)	（桁行）1.85 （梁間）2.1	南北	N3° W	
SB9880	157 次	(b14)P2/(c13)P2・P3/(c14)P3・P8/(c15)P7/(d13)P2/(d14)P2/(d15)P1・P5	Ⅰ -4	3(7.2) × 2(4.6)	（桁行）2.4 （梁間）2.3	東西	N3° 30′ W	SK9924 より古
SB9881	157 次	(w13)P5/(w14)P1・P13/(x13)P1/(x14)P1・P2/(x15)P3・P4	Ⅱ -2 ～	3(5.55) × 2(4.0)	（桁行）1.85 （梁間）2.0	南北	N3° E	
SB9882	157 次	(y11)P3・P4/(y12)P1	不明	4(8.2) × 2(4.2)	（桁行）2.05 （梁間）2.1	南北	N8° W	
SB9883	157 次	(u16)P1・P3/(u17)P2・P3/(v16)P3・P4/(v17)P3・P9	Ⅰ -4 か	3(4.2) × 2(3.0)	（桁行）1.6 ？ （梁間）1.5 ？	南北	N0° ～ N5° W	SB9900 より古
SB9890	157 次	(x15)P1・P2/(x16)P1/(y15)P1・P2/(y16)P2・P3/(a15)P2・P3/(a16)P3	Ⅱ -1 ～ 2	3(6.3) × 2(4.0)	（桁行）2.1 （梁間）2.0	東西	N1° W	
SB9900	157 次	(v15)P3/(v16)P1・P6/(w15)P2/(w16)P1・P2/(w17)P4/(w18)P8	Ⅰ -4	(5)(12.0) × 2(4.8)	（桁行）2.4 （梁間）2.4	南北	N3° 30′ W	SB9883 より古
SB9910	157 次	(t11)P2/(t12)P5/(u11)P1・P2/(u12)P9/(v11)P3・P4/(v12)P12/(w12)P5	Ⅰ -4	5(11.5) × 2(4.0)	（桁行）2.3 （梁間）2.0	東西	N4° W	SK9930 より古
SB9920	157 次	(w12)P11/(x12)P2/(x13)P1・P3/(y11)P1/(y12)P4・P6/(a13)P3	Ⅱ -4 ～Ⅲ -1	4(8.8) × 2(4.2)	（桁行）2.2 （梁間）2.1	東西	N4° W	
SB10056	159 次	(p24)P7/(q24)P1・P3/(p25)P3/(q25)P2	Ⅱ -3	(2)(4.4) × 2(4.2)	（桁行）2.2 （梁間）2.1	南北	N2° E	SB10057 より新
SB10057	159 次	(p24)P4/(q24) ｶｸﾗﾝ土坑 1・P4/(p25)P1/(q25)P3	Ⅱ -3	(2)(4.0) × 2(4.2)	（桁行）2.0 （梁間）2.1	南北	N2° E	SB10056 より古
SB10058	159 次	(s24)P6・P13	Ⅱ -3 ～Ⅲ -1	(2)(4.2) × (2)(4.2)	（東西）2.1 （南北）2.1	不明	N2° E	
SB10059	10 次 159 次	(s24)P8・P12	Ⅱ -3 ～Ⅲ -1	(2)(-) × (2)(-)	（東西）1.8 （南北）2.1	不明	N2° E	
SB10060	159 次	(p25)P4・P5	Ⅱ -1 ～ 2	(2)(3.6) × 2(3.3)	（桁行）1.8 （梁間）1.65	東西	N0°	
SB10061	159 次	(q1)P4/(q2)P1	Ⅱ -1 ～ 2	(3)(6.9) × 2(4.8)	（桁行）2.3 （梁間）2.4	東西	N1° W	
SB10062	159 次	(r2)P1/(s2)P5/(q3)P3・P4	Ⅲ～	5(9.9) × 2(4.6)	（桁行）2.0・1.9 （梁間）2.3	東西	N5° E	
SB10063	159 次	なし	Ⅱ -3 か	3(5.5) × (2)(3.6)	（桁行）1.9・1.7 （梁間）1.8	南北	N2° E	
SB10064	159 次	(r5)P1	Ⅱ -3 ～ 4	(4)(9.6) × 2(4.8)	（桁行）2.4 （梁間）2.4	東西	N1° W	SB9006 より新
SB10065	159 次	(r4)P3・P4/(p5)P2	Ⅱ -3 ～ 4	(4)(9.6) × 2(4.2)	（桁行）2.4 （梁間）2.1	東西	N4° W	SB10066 より古
SB10066	143 次 159 次	159 次：(p4)P1・P2・P5/(q4)P1・P4/(p5)P4/(q5)P2	Ⅱ -3 ～ 4	(3)(7.2) × 2(4.2)	（桁行）2.4 （梁間）2.1	東西	N4° W	SB10065 より新
SB10067	159 次	(r6)P1・P7/(q7)P7・P16/(r7)P21・P22	Ⅰ -4 ～Ⅱ -1	(5)(11.5) × 2(4.6)	（桁行）2.3 （梁間）2.3	東西	N4° W	
SB10068	10 次 159 次	(r6)P3/(s6)P2・P5/(r7)P4/(s7)P2・P35	Ⅲ -2	5(9.75) × 2(4.0)	（桁行）1.95 （梁間）2.0	東西	N0°	
SB10069	159 次	(r7)P1・P17・P24/(s7)P34/(r8)P12/(s8)P31・P33	Ⅲ -2 ～ 3	(4)(10.0) × 2(4.8)	（桁行）2.25 （梁間）2.4	東西	N4° W	
SB10070	159 次	(r7)P3・P5/(s7)P1・P48/(t7)P3/(r8)P3・P27/(s8)P13・P46/(t8)P15	Ⅲ -1 ～ 2	5(10.0) × 2(4.0)	（桁行）2.0 （梁間）2.0	東西	N0°	
SB10071	159 次	(q7)P12/(r7)P23/(s7)P17/(q8)P8・P10/(r8)P9・P24/(s8)P2	Ⅱ -3 ～	3(5.7) × 2(4.0)	（桁行）1.9 （梁間）2.0	東西	N0°	
SB10072	10 次 159 次	10 次：(W81)P4・P5/(W82)P2 159 次：(s7)P10・P23	Ⅲ -2 ～ 3	3(6.3) × 2(4.2)	（桁行）2.1 （梁間）2.1	東西	N4° W	SB10073 より古
SB10073	10 次 159 次	10 次：(W81)P10/(W82)P3・P18・P19 159 次：(s7)P12・P41	Ⅲ -2 ～ 3	3(7.5) × 2(4.2)	（桁行）2.5 （梁間）2.1	東西	N4° W	SB10072 より新
SB10074	159 次	(s7)P6/(r8)P21・P32・P34/(s8)P3	Ⅲ	(3)(6.3) × 2(4.2)	（桁行）2.1 （梁間）2.1	東西	N2° W	
SB10075	159 次	(r7)P16/(s7)P3/(r8)P19・P30/(s8)P18	Ⅲか	(4)(8.0) × 2(4.2)	（桁行）2.0 （梁間）2.1	東西	N4° W	SB10078 より新
SB10076	10 次 159 次	159 次：(r8)P26/(s8)P15/(t8)P11/(r9)P21	Ⅲ -2 ～ 3	5(10.5) × 2(5.0)	（桁行）2.1 （梁間）2.5	東西	N3° W	SB10077 より新
SB10077	159 次	(r8)P11/(s8)P38・P40/(t8)P12/(r9)P25/(s9)P3・P35	Ⅲ -2 ～ 3	(4)(8.8) × 3(6.6)	（桁行）2.2 （梁間）2.2 （庇出）2.2	東西	N3° W	南側に1間分の庇
SB10078	10 次 159 次	10 次：(W82)P20 159 次：(r7)P7/(s7)P37・P51/(r8)P12(s8)P31・P33/(t8)P21	Ⅲ -2 ～	5(11.75) × 2(4.2)	（桁行）2.35 （梁間）2.1	東西	N3° W	SB10075 より古
SB10079	159 次	(s8)P1・P11/(r9)P11/(s9)P8・P24	Ⅲ -2 ～ 3	(3)(6.3) × 2(4.2)	（桁行）2.1 （梁間）2.1	東西	N4° W	SB10080 より古

遺構番号	調査次数	ピット番号 ※（　）はグリッド番号	時期	規模 間（m）×間（m）	柱間寸法 （m）	主軸	方位 （N基準）	備考
SB10080	159 次	(r8)P29/(s8)P10/(r9)P12・P28/(s9)P8・P18	Ⅲ -3 ～ 4	(4)(8.6) × 2(4.2)	（桁行）2.15 （梁間）2.1	東西	N4° W	SB10079 より新
SB10081	159 次	(r8)P39/(s8)P39/(t8)P6/(r9)P13/(s9)P6・P13	Ⅲ -3 ～ 4	(3)(6.3) × 2(4.0)	（桁行）2.1 （梁間）2.0	東西	N3° W	SB10082 より新
SB10082	159 次	(s8)P16・P47/(t8)P8/(s9)P4・P7・P38	Ⅲ -3 ～ 4	(3)(6.6) × 2(4.3)	（桁行）2.2 （梁間）2.15	東西	N3° W	SB10081 より古 SB10083 より新
SB10083	159 次	(s8)P44・P55/(s9)P11・P27	Ⅲ -2 ～ 3	(3)(6.0) × 2(3.8)	（桁行）2.0 （梁間）1.9	東西	N3° W	SB10082 より古 SB10084 より新
SB10084	10 次 159 次	10 次：(W82)P4・P27/(W83)P18 159 次：(r8)P13・P20/(s8)P39/(t8)P9/(s9)P16・P29	Ⅲ -1 ～ 2	5(10.5) × 2(4.4)	（桁行）2.1 （梁間）2.2	東西	N3° W	SB10083 より古
SB10085	159 次	(s9)P10・P15・P25	Ⅲ -3 ～ 4	(3)(5.7) × 2(3.5)	（桁行）1.9 （梁間）1.75	東西	N4° W	
SB10086	159 次 165-1 次	なし	Ⅱ -1 ～ 2	3(6.0) × 2(4.2)	（桁行）2.0 （梁間）2.1	東西	N2° E	
SB10087	159 次 165-1 次	(q9)P2・P3	Ⅱ -1 ～ 2	3(5.7) × 2(4.0)	（桁行）1.9 （梁間）2.0	東西	N0°	
SB10088	159 次	(r8)P1・P23/(s8)P17・P29	Ⅲ -3 ～ 4	(3)(6.6) × 2(3.8)	（桁行）2.2 （梁間）1.9	東西	N1° W	SB10089 より古
SB10089	159 次	(r9)P30/(s9)P19・P32/(r10)P3/(s10)P5	Ⅲ -3 ～ 4	(4)(8.4) × 2(3.5)	（桁行）2.1 （梁間）1.75	東西	N1° W	SB10088 より新
SB10121	8-9 次 153 次 165-1 次	165-1 次：(h8)P1・P8/(i8)P5・P14	Ⅲ -3 ～	5(10.5) × 2(4.2)	（桁行）2.1 （梁間）2.1	東西	N4° W	
SB10122	143 次 165-1 次	143 次：(h8)P8/(i7)P4・P5/(i8)P1/(j7)P1/(j8)P8	Ⅲ -4 ～	5(10.75) × 2(4.0)	（桁行）2.15 （梁間）2.0	東西	N4° W	
SB10123	8-9 次 143 次 165-1 次	143 次：(i7)P24/(j7)P10/(j8)P1・P2・P6・P7 165-1 次：(j8)P21	Ⅲ -4 ～	5(10.75) × 2(3.7)	（桁行）2.15 （梁間）1.85	東西	N4° W	SB10125 より新
SB10124	143 次 165-1 次	143 次：(i6)P5・P8/(i8)P8/(j8)P14 165-1 次：(i8)P7/(j8)P2	Ⅱ -1 ～ 2	3(6.9) × 2(4.6)	（桁行）2.3 （梁間）2.3	南北	N3° W	
SB10125	143 次 165-1 次	143 次：(i7)P16/(j7)P6/(j8)P7/(l7)P7/(l8)P5・P6	Ⅲ -4 ～	5(10.5) × 2(4.2)	（桁行）2.1 （梁間）2.1	東西	N4° W	
SB10126	8-10 次 143 次 165-1 次	143 次：(j8)P5/(i8)P3/(l8)P8 165-1 次：(i8)P13/(j8)P13	Ⅲ -3 ～	5(9.5) × 2(3.8)	（桁行）1.9 （梁間）1.9	東西	N4° W	
SB10127	8-9 次 143 次 153 次 165-1 次	143 次：(l8)P12 165-1 次：(i8)P11・P14/(j8)P4・P15・P22/(k8)P1・P12/(l8)P26	Ⅲ -3 ～	5(10.75) × 2(4.3)	（桁行）2.15 （梁間）2.15	東西	N4° W	
SB10128	8-9 次 143 次 165-1 次	143 次：(l8)P10・P19 165-1 次：(l8)P17	Ⅲ -3 ～	3(6.0) × 2(4.2)	（桁行）2.0 （梁間）2.1	東西	N3° W	
SB10129	8-10 次 153 次 165-1 次	153 次：(i10)P14/(j10)P2・P14/(k10)P1・P2・P4/(l10)P1	Ⅲ -2 ～ 3	5(10.5) × 2(4.6)	（桁行）2.15 （梁間）2.3	東西	N1° W	
SB10130	8-10 次 143 次 165-1 次	143 次：(l6)P9/(l7)P14	Ⅱ -3 ～Ⅲ -1	5(11.5) × 2(4.4)	（桁行）2.3 （梁間）2.2	南北	N1° W	SB0260・9003 より新
SB10131	8-10 次 143 次 165-1 次	143 次：(m7)P3/(m8)P3	Ⅲ -2 ～ 3	(3)(7.2) × 2(5.0)	（桁行）2.4 （梁間）2.5	南北	N2° E	SB9003 より新
SB10151	167 次	(r12)P2/(p13)P2/(q13)P17・P20	Ⅱ	-(-) × 2(4.2)	（桁行）1.85 （梁間）2.1	南北	N1° W	
SB10152	167 次	(q13)P6/(r13)P8・P18/(s13)P9	Ⅱ -3 ～ 4	3(5.7) × -(-)	（桁行）1.9 （梁間）—	東西	N1° W	
SB10153	167 次	(q13)P13/(r13)P22/(s13)P10	Ⅱ -4 か	3(5.7) × -(-)	（桁行）1.9 （梁間）—	東西か	N1° W	溝持柱建物か
SB10154	167 次	(q13)P4・P8/(r13)P17・P19・P20/(s13)P7/(q14)P5・P11・P16/(r14)P12・P15/(s14)P9・P17	～Ⅲ -2	5(9.8) × 2(3.7)	（桁行）1.95 （梁間）1.85	東西	N5° W	
SB10155	167 次	(s13)P12/(t13)P1/(s14)P7/(t15)P1	Ⅱ -4	5(9.0) × 2(4.0)	（桁行）1.8 （梁間）2.0	南北	N3° W	SB10160 より新
SB10156	167 次	(o14)P1/(p14)P3/(p15)P2/(o16)P1/(o17)P1	Ⅱ -2	5(10.5) × 2(5.0)	（桁行）2.1 （梁間）2.5	南北	N2° W	SK10225 より古
SB10157	167 次	(p14)P5/(q14)P9/(q15)P3・P9/(q16)P5・P6/(q17)P2	Ⅱ -2	5(9.2) × 2(4.4)	（桁行）1.84 （梁間）2.2	南北	N3° W	
SB10158	167 次	(q15)P8/(r15)P3・P4・P5/(q16)P4/(r16)P9	Ⅱ -1 ～ 2	-(-) × 2(5.2)	（桁行）2.7 （梁間）2.6	東西	N2° W	SK10222 より新
SB10159	167 次	(q14)P4/(r14)P3/(s14)P8・P11/(t14)P1・P2/(q15)P4/(r15)P4・P16・P17/(t15)P2	Ⅱ -3 ～	5(9.5) × 2(4.2)	（桁行）1.9 （梁間）2.1	東西	N2° W	SB10160 より古
SB10160	167 次	(q14)P6/(r14)P10/(s14)P12/(t14)P3	Ⅱ -4 ～	5(9.5) × 2(4.4)	（桁行）1.9 （梁間）2.1	東西	N3° W	SB10155 より古 SB10159 より新
SB10161	10 次 167 次	10 次：(W64)P2/(W65)P1・P4 167 次：(s14)P6/(s15)P6	Ⅱ -2 ～ 3	5(10.5) × 2(4.1)	（桁行）2.1 （梁間）2.05	東西	N2° W	
SB10162	167 次	(p15)P3/(q15)P6/(r15)P14/(q16)P8/(r16)P12	Ⅱ -2 ～ 3	5(-) × 2(4.0)	（桁行）1.9 （梁間）2.0	東西	N2° W	SD10224 より古
SB10163	167 次	(r16)P7・P10/(r17)P3	Ⅰ -4	-(-) × 2(4.0)	（桁行）— （梁間）2.0	東西	N0°	

遺構番号	調査次数	ピット番号 ※（　）はグリッド番号	時期	規模 間（m）×間（m）	柱間寸法 （m）	主軸	方位 （N基準）	備考
SB10164	167 次	(p18)P2/(q18)P26・P29/(r18)P5・P18/(p19)P3/(q19)P15/(r19)P8	Ⅱ -1 ～ 2	5(10.0) × 2(4.8)	（桁行）2.0 （梁間）2.4	東西	N2° W	SK10228 より古
SB10165	167 次	(p18)P1/(q18)P11/(r18)P2・P11/(q19)P22・P25/(r19)P16	Ⅱ -1 ～ 2	3(6.0) × 2(4.2)	（桁行）2.0 （梁間）2.1	東西	N1° W	SB10167 より古
SB10166	167 次	(q18)P17・P18/(r18)P6・P24/(q19)P18・P23	Ⅱ -3	5(10.5) × 2(4.8)	（桁行）2.1 （梁間）2.4	東西	N2° W	SK10228 より古
SB10167	167 次	(p18)P3/(q18)P8・P19/(r18)P12/(q19)P26/(r19)P4・P22	Ⅱ -3 ～	3(5.85) × 2(4.0)	（桁行）1.95 （梁間）2.0	東西	N4° W	SB10165 より新
SB10168	167 次	(r18)P23/(q18)P14/(q20)P20/(r20)P3・P23	Ⅱ -3	-(-) × 2(4.8)	（桁行）2.25 （梁間）2.4	東西	N4° W	
SB10169	167 次	(q19)P7・P10・P21・P27/(r19)P6・P9・P34	Ⅲか	-(-) × 2(3.4)	（桁行）2.0 （梁間）1.7	東西	N6° W	SB10170 より新
SB10170	167 次	(q19)P6・P9・P28・P31/(r19)P15	Ⅲか	-(-) × 2(3.5)	（桁行）2.0 （梁間）1.75	東西	N4° W	SB10169 より古
SB10171	167 次	(q18)P5・P25/(r18)P13/(q19)P17・P20/(r19)P2・P38/(q20)P15	Ⅱ～	3(6.6) × 2(4.1)	（桁行）2.2 （梁間）2.05	南北	N4° W	
SB10172	167 次	(q19)P9/(p20)P2・P4/(q20)P5/(p21)P10/(q21)P2・P19	Ⅱ -3	3(6.0) × 2(4.2)	（桁行）2.0 （梁間）2.1	南北	N3° W	
SB10173	167 次	(p19)P9/(p20)P2・P4/(q20)P5/(p21)P10/(q21)P2・P19	Ⅱ -3 ～ 4	3(11.1) × 2(4.2)	（桁行）3.7 （梁間）2.1	南北	N3° W	
SB10174	167 次	(p20)P6/(q20)P8/(p21)P8/(q21)P11・P18/(r21)P11	～Ⅱ -3	-(-) × 2(3.4)	（桁行）1.9 （梁間）1.7	東西	N5° W	
SB10175	167 次	(p20)P1/(q20)P8/(r20)P5・P17/(q21)P7/(r21)P13	Ⅱ -3 ～	-(-) × 2(3.4)	（桁行）2.0 （梁間）1.7	東西	N4° W	
SB10550	10 次	(W59)P3	Ⅲ -1	-(-) × 2(3.6)	（桁行）2.2 （梁間）1.8	東西	N7° 30′ W	
SB10551	10 次	(E64)P4・P52・P58/(E65)P30	Ⅲ -2	-(-) × 2(3.7)	（桁行）1.85 （梁間）1.85	東西	N4° W	
SB10552	10 次	(W64)P35/(W65)P2・P12・P14	Ⅱ -3 か	3(5.25) × 2(4.2)	（桁行）1.75 （梁間）2.1	東西	N2° E	
SB10553	10 次	(E64)P7/(E65)P17	Ⅲ -2 ～	-(-) × 2(4.5)	（桁行）－ （梁間）2.25	東西	N2° W	
SB10554	10 次	(E65)P19/(W66)P6・P48	Ⅲ	-(-) × 2(4.0)	（桁行）2.1 （梁間）2.0	東西	N3° W	
SB10555	10 次	(E65)P10/(E66)P2・P4	Ⅲ -3	-(-) × 2(4.2)	（桁行）2.1 （梁間）2.1	東西	N4° W	
SB10556	10 次	(E65)P1・P7/(W66)P7/(E66)P2・P32・P57	Ⅲ -2	3(5.4) × 2(4.0)	（桁行）1.8 （梁間）2.0	東西	N2° W	
SB10557	10 次	(E68)P1	Ⅲ -3 ～ 4	-(-) × 2(4.4)	（桁行）1.8 （梁間）2.2	東西	N4° W	
SB10558	10 次	(E68)P1・P2・P11/(E69)P2	Ⅲ -3 ～ 4	-(-) × 2(4.0)	（桁行）2.1 （梁間）2.0	東西	N3° W	
SB10559	10 次	(W69)P2・P4/(W70)P4・P9/(W71)P2・P4	Ⅱ -4	3(6.3) × -(-)	（桁行）2.1 （梁間）2.1	南北	N5° W	SB0560 より古か
SB10560	10 次	(E70)P7・P20/(E71)P1	Ⅱ	-(-) × 2(4.0)	（桁行）2.3 （梁間）2.0	東西	N2° W	
SB10561	10 次	(E70)P3・P8	Ⅲ -2 ～ 3	-(-) × 2(4.3)	（桁行）－ （梁間）2.15	東西	N5° W	
SB10562	10 次	(E71)P2・P3/(E72)P1	Ⅲ -2 ～ 3	3(6.6) × -(-)	（桁行）2.2 （梁間）－	南北	N1° E	
SB10563	10 次	(W81)P6・P9・P25/(W82)P8・P10・P12	Ⅲ -2	3(6.6) × 2(4.0)	（桁行）2.2 （梁間）2.0	東西	N0°	
SB10564	10 次	(E81)P2・P3/(E82)P5・P7	Ⅲ -2 ～	-(-) × 2(3.7)	（桁行）2.0 （梁間）1.85	東西	N4° W	
SB10565	10 次	(E81)P5/(E82)P6・P8	Ⅲ	-(-) × 2(3.6)	（桁行）1.8 （梁間）1.8	東西	N3° W	
SB10566	10 次	(W82)P25/(E82)P2・P9/(W83)P5・P10/(E83)P4・P7・P8	Ⅲ -3 ～ 4	3(6.3) × 2(3.9)	（桁行）2.1 （梁間）1.95	東西	N4° W	
SB10567	10 次	(W82)P26/(W83)P5・P6・P9・P11	Ⅲ -3 ～ 4	3(6.0) × 2(3.6)	（桁行）2.0 （梁間）1.8	東西	N5° W	
SB10590	20 次	(C11)P1・P4/(C12)P1	Ⅱ -3 ～ 4	-(-) × 2(3.8)	（桁行）－ （梁間）1.9	東西か	N4° 30′ W	
SB10591	20 次	(F11)P2	Ⅱ -4 ～Ⅲ -1	-(-) × 2(4.2)	（桁行）1.9 （梁間）2.1	南北か	N0°	
SB10592	20 次	(F11)P1・P3	Ⅱ -3 ～	-(-) × 2(4.0)	（桁行）2.0 （梁間）2.0	南北か	N10° W	
SB10593	20 次	(H9)P2	Ⅲ	3(6.0) × 2(3.7)	（桁行）2.0 （梁間）1.85	南北	N7° E	
SB10595	20 次	(C7)P1・P2	Ⅲ -1 ～ 2	-(-) × 2(5.0)	（桁行）2.1 （梁間）2.5	東西	N5° W	
SB10596	28 次	(I4)P3・P6/(I5)P1/(J4)P3・P5・P9	Ⅱ -2 ～ 3	3(6.0) × 2(3.9)	（桁行）2.0 （梁間）1.95	東西	N2° W	
SB10597	28 次	(C8)P6/(D7)P4・P8/(D8)P7/(D9)P3・P4	Ⅲ -2	5(9.0) × 2(4.2)	（桁行）1.8 （梁間）2.1	南北	N1° 30′ W	
SB10598	28 次	(E6)P9・P11・P13/(E7)P4/(F6)P3・P10/(F7)P6/(G6)P2/(G7)P3・P5/(G8)P3	Ⅱ -4 ～Ⅲ -1	5(8.5) × 2(4.2)	（桁行）1.7 （梁間）2.1	南北	N5° W	
SB10599	28 次	なし	不明	-(-) × 2(3.5)	（桁行）1.8 （梁間）1.75	南北	N4° E	

遺構番号	調査次数	ピット番号 ※（　）はグリッド番号	時期	規模 間（m）×間（m）	柱間寸法 (m)	主軸	方位 （N基準）	備考
SB10610	143 次 152 次	143 次：(h3)P5 152 次：(g03)P6/(h03)P8・P9	Ⅱ	3(6.9) × 2(4.6)	（桁行）2.3 （梁間）2.3	東西	N2° W	SB9795 より新
SB10611	143 次	(h6)P9・P13/(h7)P2	Ⅱ -2 か	3(6.3) × 2(4.2)	（桁行）2.1 （梁間）2.1	南北	N1° 30′ W	
SB10612	143 次	なし	Ⅲか	3(5.7) × 2(3.2)	（桁行）1.9 （梁間）1.6	東西	N1° 30′ W	
SB10613	143 次	(k5)P3/(l5)P6	Ⅲ	3(4.35) × 2(3.4)	（桁行）1.45 （梁間）1.7	南北	N0°	
SB10614	143 次	(l6)P2・P6/(l7)P15/(k7)P2	Ⅱ？	4(8.0) × 2(4.2)	（桁行）2.0 （梁間）2.1	南北	N0°	SB0265 より新
SB10615	157 次	(v13)P4・P22/(u14)P4・P7・P9/(v14)P1・P4・P5	Ⅱ	4(6.8) × 2(4.0)	（桁行）1.7 （梁間）2.0	南北	N6° W	
SB10616	157 次	(t15)P4・P7/(t16)P2・P4/(u17)P7	Ⅱ -3	5(11.25) × -(-)	（桁行）2.25 （梁間）—	南北	N6° W	
SB10617	157 次	なし	不明	-(-) × -(-)	（東西）2.1 （南北）2.4	不明	N0°	
SB10618	157 次	なし	不明	-(-) × 2(3.8)	（桁行）— （梁間）1.9	南北か	N4° W	
SB10619	157 次	なし	不明	4(8.8) × 2(4.2)	（桁行）2.2 （梁間）2.1	東西	N4° W	SB9920 より古
SB10620	157 次	(w17)P3・P7	Ⅱ	-(-) × 2(3.0)	（桁行）— （梁間）1.5	南北か	N6° W	
SB10621	157 次	(e10)P1/(e11)P3	Ⅰ -4 ～Ⅱ -1	(5)(-) × (2)(-)	（桁行）1.85 （梁間）1.8？	東西	N0°	

第６表　柳原区画内柵列・塀一覧

遺構番号	調査次数	ピット番号 ※（　）はグリッド番号	時期	規模 間（m）×間（m）	柱間寸法 (m)	主軸	方位 （N基準）	備考
SA0564	10 次 159 次	159 次：(q3)P2/(r3)P1/(s3)P1	Ⅱ -3 ～	14 間分 (26.6m) 検出	1.9	東西	N3° W	
SA9695	152 次	(m14)P7	Ⅱか	4 間分 (7.5m) 検出	1.4 ～ 2.4	東西	N4° W	柱間寸法のバラつき大きい
SA9716	152 次	(d17)P7・P11・P13/(d18)P7・P8	Ⅲ -1 ～ 2	4 間分 (8.0m) 検出	2.0	南北	N2° E	
SA9717	152 次	(e16)P4/(g16)P26・P28/(h16)P8・P13/(i16)P41・P42/(j16)P5・P6/(k16)P9	Ⅲ -2	11 間分 (24.3m) 検出	2.15	東西	N2° W	i16 グリッドの部分のみ柱間が約 3.0m。
SA9727	152 次	(f17)P3・P4/(g17)P10・P13/(h16)P32/(i16)P19・P32/(k16)P7/(l16)P6	Ⅲ -2 ～	11 間分 (23.65m) 検出	2.15	東西	N4° W	
SA9756	152 次	(f21)P12・P14/(f22)P4/(f23)P1	Ⅱ -3 ～ 4	4 間分 (9.6m) 検出	2.1 ～ 3.3	南北	N4° W	掘立柱建物の一部か
SA9796	152 次	(g2)P8・P10/(i2)P3・P4・P6・P7/(l2)P1/(n2)P5	Ⅱ -3 ～ 4	12 間分 (34.0m) 検出	2.5 ～ 2.7	東西	N0°	m2 グリッドの部分のみ柱間が 4.5m。
SA9816	153 次	(f6)P8/(f7)P5・P9・P10	Ⅲ～Ⅳ	6 間 分 (12.0m) 検出	平均 2.0	南北	N5° E	
SA10133	8-9 次 143 次 152 次 165-1 次	143 次：(n3)P1/(n4)P1/(n6)P9/(n7)P11/(n8)P1 165-1 次：(n8)P1	Ⅱ	10 間分 (27.5m) 検出	2.4 ～ 3.2	南北	N2° E	
SA10600	28 次	なし	不明	9 間 分 (28.5m) 検出	2.6 ～ 3.9		N11° 30′ W	
SA10622	157 次	(t12)P1・P3/(t14)P4	Ⅱか	4 間分 10m 検出	1.8 ～ 2.8		N4° 30′ E	
SA10623	157 次	なし	不明	東西 3 間・南北 2 間分検出	1.8 ～ 2.6		N1° 30′ W	

第７表　柳原区画内検出遺構（井戸・溝・土坑）一覧

遺構名	種別	調査区	グリッド	時期	出土遺物	備考
SK0261	土坑	8-9次	N54	Ⅱ-3	土師器:杯A・皿A　須恵器:高杯　灰釉陶器片	
SK0262	土坑	8-9次	N58	Ⅱ-4	土師器:杯A・甕　灰釉陶器:椀	
SD0273	溝	第152次	e19・f19・g19・h19・i19・j19・k19・l19・m19・n19・o19	Ⅲ-3～	土師器:杯A・皿A・甕・鍋B　ロクロ土師器:皿・小皿　須恵器片　灰釉陶器:椀	
SE0276	井戸	第152次	j24・k24	Ⅰ-4～	土師器片	
SK0323	土坑	第8-9次 第153次	(153次)f8・f9	Ⅲ-3	土師器:皿・台付皿・台付小皿・甕・鍋　ロクロ土師器:台付皿　灰釉陶器:壺　緑釉陶器:椀・皿　無釉陶器:椀(山茶椀)・壺　白磁:椀　鉄滓	
SD0324	溝	第8-9次 第153次	(153次)f7・g7・f8・g8・f9・g9・f10・g10・f11・g11・f12・g12	Ⅳ～	土師器:杯A・皿・小皿・高杯・鍋B・鍋・粗製鉢　黒色土器:椀　ロクロ土師器:椀・小皿・台付小皿　灰釉陶器:椀・段皿　陶器:椀・鉢・壺　鉄製品:釘	
SD0529	溝	10次	E54・W54	Ⅰ-4	土師器:杯A・高杯・鍋？　須恵器片	区画道路側溝
SD0530	溝	10次	E57・W57	Ⅰ-4～Ⅱ－1	土師器:杯A・高杯・鉢・甕・鍋　須恵器:杯・鉢・甕	区画道路側溝
SD0531	溝	10次	E56・W56	Ⅲ	土師器:甕　ロクロ土師器:台付小皿　須恵器:蓋	
SD0532	溝	10次	E56・E59・E60・W60	Ⅲ-1～2	土師器:杯A・甕　ロクロ土師器:台付小皿　須恵器:甕・壺	
SD0533	溝	10次	E59・W59	Ⅲ-1～2	土師器:杯・甕　ロクロ土師器片　須恵器:蓋・甕	
SD0535	溝	10次	E56・E57・W57・E58・E59・E60・E61	Ⅰ-4～Ⅱ－1	土師器:杯A・皿A・高杯・甕　黒色土器A類:椀　須恵器:杯AB・蓋・甕・壺	区画道路側溝
SK0541	土坑	10次	W60・W60・E61・W61	Ⅰ-4	土師器:杯A・杯G・蓋・高杯・甕・鍋　須恵器:盤・甕	
SD0542	溝	10次	W61・E61	不明	土師器片　須恵器片	
SK0546	土坑	10次	E64	Ⅲ-4	土師器:杯　ロクロ土師器:小皿　陶器:椀(山茶椀)　瓦(丸瓦・平瓦)	
SK0547	土坑	10次	E64	Ⅲ-4～	土師器:杯・小皿・甕　ロクロ土師器:杯・小皿・台付小皿・椀　陶器:椀(山茶椀)　白磁:皿	
SK0548	土坑	10次	E64	Ⅲ-4	土師器:皿・小皿　ロクロ土師器:杯・小皿・台付小皿　陶器:椀(山茶椀)　チャート片	
SK0549	土坑	10次	E65	Ⅲ-4～	土師器:皿・小皿・台付小皿・高杯　ロクロ土師器:小杯・小皿　陶器:椀(山茶椀)　青白磁片　土錘　炭化材	
SK0550	土坑	10次	E67	Ⅲ-4～	土師器:皿・小皿・甕　ロクロ土師器:小皿　須恵器:杯B・甕	
SK0551	土坑	10次	E67	Ⅲ-3～4	土師器:杯・小皿・甕・鍋　ロクロ土師器:小皿・台付小皿・椀　須恵器:蓋・壺　陶器:椀(山茶椀)　灰釉陶器片	
SK0552	土坑	10次	W67	Ⅰ-4	土師器:杯A・皿AB・高杯・甕　須恵器:壺　炭化材	
SK0553	土坑	10次	W67	Ⅰ-4	土師器:杯・皿A・高杯・甕・鍋　須恵器:杯B・蓋	
SK0554	土坑	10次	W68	Ⅲ-3～4	土師器:杯・皿・高杯・甕　瓦器:椀　ロクロ土師器:台付杯・小皿・椀　陶器:椀(山茶椀)・皿(山皿)・鉢　須恵器片　灰釉陶器片　白磁:皿　鉄釘　調査時は井戸と認識	
SK0555	土坑	10次	E68	Ⅲ-4～	土師器:杯・小皿・蓋・甕　ロクロ土師器:杯・小皿　陶器:椀(山茶椀)　白磁片　坩堝　羽口　小型模造品(瓦器三足羽釜)　鉄製品　炭化材	
SK0556	土坑	10次	W68	Ⅲ-4～	土師器:杯・小皿・高杯・鍋　ロクロ土師器:杯・小皿・台付小皿　陶器:椀(山茶椀)　青白磁:合子片　土製支脚　炭化材	
SK0557	土坑	10次	E69・E70	Ⅱ-1	土師器:杯A・皿A・椀AB・高杯・鉢・甕　須恵器:蓋・盤・甕・壺L	

遺構名	種別	調査区	グリッド	時期	出土遺物	備考
SK0559	土坑	10次	E68・69	Ⅲ-4～	土師器:皿・小皿・高杯　ロクロ土師器:皿・小杯・小皿・椀　陶器:甕・壺・椀・椀(山茶椀)・擂鉢	
SK0561	土坑	10次	E71	Ⅲ-3～4	土師器:皿・甕・鍋　ロクロ土師器:椀　須恵器:杯B　灰釉陶器:段皿　陶器:椀(山茶椀)	
SK0563	土坑	10次	E74・W74・E75・W75・E76・W76	Ⅱ－1	土師器:杯AG・皿A・高杯・蓋・鉢・甕・鍋・甑　須恵器:杯AB・蓋・皿AB・盤・高杯・甕・短頸壺・長頸壺　フイゴ　粘土塊　炭化材	
SE0570	井戸	10次	W83	Ⅲ-3	土師器:杯・甕　ロクロ土師器:杯・台付杯・小皿　須恵器:杯A・甕　灰釉陶器:椀	
SK0573	土坑	10次	E90・W90	Ⅲ～	土師器:皿・炮烙　ロクロ土師器:小皿　陶器:椀(山茶椀)	
SD1043	溝	20次	G2	Ⅲ-3～	土師器:皿A・甕　ロクロ土師器片　須恵器:杯B・甕　陶器:椀(山茶椀)	
SD1044	溝	20次	G3	Ⅱ後半か	土師器:甕	
SK1045	土坑	20次	F3	Ⅱ-2	土師器:杯A・皿AB・椀AB・高杯・甕・鍋　黒色土器:杯　須恵器:杯AB・蓋・壺　灰釉陶器:皿・壺・長頸瓶・壺蓋　緑釉陶器:皿	斎宮跡第Ⅱ期第2段階の基準資料整理箱30箱以上出土
SK1048	土坑	20次	C3	Ⅲ-1	土師器:杯・皿・椀・甕・竈　ロクロ土師器:皿・小皿　黒色土器:杯　灰釉陶器片　緑釉陶器片　製塩土器片　炭化材	
SK1049	土坑	20次	D4	Ⅲ-3	土師器:杯・小皿・甕　ロクロ土師器:杯・台付杯・小皿・台付小皿・椀	
SK1052	土坑	20次	E7	不明	遺物なし	
SK1056	土坑	20次	E7	Ⅱ-2	土師器:杯A・皿A・甕・甑　フイゴ　製塩土器片	
SK1069	土坑	20次	F9	Ⅲ-3	土師器:杯・小皿・鉢・甕　ロクロ土師器:台付杯・小皿・椀　須恵器:壺　灰釉陶器:椀　白磁片　土錘	
SK1071	土坑	20次	F9	Ⅲ-3	土師器:皿・小皿・甕　黒色土器:A類椀　ロクロ土師器:杯・台付杯・小皿　須恵器:壺・甕　白磁片	
SK1072	土坑	20次	F5	Ⅲ-3～4	土師器:杯・皿A・小皿・台付小皿・高杯　ロクロ土師器:台付小皿　須恵器:蓋　灰釉陶器片	
SK1073	土坑	20次	F9・G9	Ⅱ-3・Ⅲ-3	土師器:杯AB・皿A・椀・鉢・高杯・甕　黒色土器:B類椀　ロクロ土師器:杯・小皿・台付小皿　須恵器:杯B・甕　灰釉陶器:椀・皿　土錘　製塩土器片	
SK1074	土坑	20次	G9	Ⅲ-2～	土師器:杯・小皿・鉢・甕　ロクロ土師器:杯・台付杯・台付皿・小皿・台付小皿・椀　須恵器:鉢・壺　灰釉陶器:椀・鉢・長頸瓶・広口瓶　陶器:椀(山茶椀)　青磁片	斎宮跡第Ⅲ期第2段階の基準資料
SK1076	土坑	20次	H9	Ⅰ-4～Ⅱ-1	土師器:皿A・高杯・甕　須恵器:杯A・甕	
SK1079	土坑	20次	F5	Ⅱ-1	土師器:杯A・皿A・杯G・高杯・甕・鍋　須恵器:蓋・鉢　炭化材	
SD1085	溝	第20次 第153次	(153次)d9・e9	不明	遺物なし	
SK1291	土坑	28次	G7・F8・G8	Ⅰ-4	土師器:杯AB・杯G皿・蓋・高杯・甕・甑・竈　須恵器:杯・蓋・高杯・甕　製塩土器	
SK1292	土坑	28次	C-1	Ⅰ-4	土師器:杯・皿・甕　須恵器:杯B・蓋・短頸壺　製塩土器	
SK1294	土坑	28次	D-1	Ⅱ-3～4	土師器:杯・皿・甕　須恵器:蓋・甕　灰釉陶器:椀・皿	
SE1295	井戸	28次	D2	Ⅰ-4～Ⅲ-1	土師器:杯・皿・台付皿・高杯・甕　ロクロ土師器:小皿　須恵器:杯B・大型鉢・甕　灰釉陶器:椀・段皿	
SK1296	土坑	28次	C-2・D-2・D-3	Ⅰ-4	土師器:杯・皿・甕・鍋　須恵器:蓋	
SK1297	土坑	28次	B3・C3	Ⅲ-1	土師器:杯・小皿・台付皿・高杯・甕　ロクロ土師器:小皿　須恵器片　灰釉陶器:椀・皿	
SK1299	土坑	28次	D2	Ⅰ-4か	土師器:杯・甕	
SK1303	土坑	28次	E1・E2	Ⅱ-3	土師器:杯・皿・甕　灰釉陶器:椀	

遺構名	種別	調査区	グリッド	時期	出土遺物	備考
SK1322	土坑	28次	H2	Ⅱ-2	土師器:杯・皿・椀・甕　黒色土器A類:椀　須恵器蓋　製塩土器	
SD1326	溝	第28次 第152次	(28次)B4・C4 (152次)e22・f22・g22・h22	Ⅱ-1	土師器:杯AG・皿・鍋B・甕　須恵器:壺・甕	区画内区画溝
SD1327	溝	28次	B5・E6・F7	Ⅰ-4以前	土師器:杯・皿　灰釉陶器片	古代伊勢道北側溝
SD1328	溝	28次	B8・B9	Ⅱ-1～2	土師器:杯・皿　須恵器:盤・甕	SD1329より古　南北区画道路東側溝
SD1329	溝	28次	A6・A7・A8	Ⅱ-1～2	土師器:杯・皿・椀・高杯・甕　須恵器:甕	SD1328より新
SD1332	溝	28次	D7・E7・H7・I7	Ⅰ-4～	土師器:甕　ロクロ土師器片　陶器片	区画内区画溝 Ⅲ期の遺物は混入か
SD1335	溝	28次	B9・C9・D9・F9	Ⅲ-3～	土師器:台付皿　ロクロ土師器:皿　灰釉陶器:椀　無釉陶器:椀(山茶椀)	
SK1336	土坑	28次	C8	Ⅲ-2	土師器:台付皿・小皿	
SK1337	土坑	28次	D5	Ⅱ-3	土師器:杯・皿・甕　須恵器:蓋・甕　灰釉陶器:椀・皿　製塩土器	
SK1338	土坑	28次	D5	Ⅱ-3	土師器:杯	
SK1339	土坑	28次	D5	Ⅱ-3	土師器片	
SK1341	土坑	28次	D5	Ⅲ-2～3	土師器:杯・小杯・台付皿・台付小皿　ロクロ土師器:小皿	
SK1342	土坑	28次	D5	Ⅲ-2～3	土師器片	
SK1343	土坑	28次	D5	Ⅲ-2～3	土師器:杯・小皿　ロクロ土師器:台付皿　無釉陶器:椀(山茶椀)	
SK1344	土坑	28次	D6	Ⅲ-2～3	土師器:杯・台付椀　須恵器:甕	
SK1345	土坑	28次	D6	Ⅲ-1～2	土師器:杯・甕　灰釉陶器:椀	
SK1347	土坑	28次	D8	Ⅱ-4	土師器:杯・皿・甕　緑釉陶器片	
SK1348	土坑	28次	E4	Ⅰ-4	土師器:杯・皿・甕　須恵器:蓋・長頸壺	
SK1349	土坑	28次	E6	Ⅲ-1	土師器:台付皿・小皿	
SK1351	土坑	28次	E6	Ⅲ-1～2	土師器:高杯・甕　ロクロ土師器:小皿	
SK1352	土坑	28次	E8	Ⅱ-4～Ⅲ-1	土師器:杯	
SK1353	土坑	28次	E4	Ⅰ-4	土師器:皿	
SK1354	土坑	28次	F7	Ⅱ-2～3	土師器:杯・皿・椀・甕　灰釉陶器:椀・皿	
SK1356	土坑	28次	F7	Ⅱ-3	土師器:杯・高杯・甕　須恵器:甕	
SK1364	土坑	28次	G5	Ⅱ-3	土師器片　須恵器片　灰釉陶器椀	
SK1366	土坑	28次	G7	Ⅱ-2	土師器:杯・皿・椀・甕　須恵器:杯B・蓋・壺・甕　灰釉陶器:椀　製塩土器　鉄製品	
SK1370	土坑	28次	B2・C2	Ⅰ-4	土師器杯・皿・椀・高杯・甕・短頸壺　須恵器杯B・蓋・鉢・壺E	
SK1372	土坑	28次	I5	Ⅰ-4か	土師器片	

遺構名	種別	調査区	グリッド	時期	出土遺物	備考
SK1374	土坑	28次	I6	Ⅱ-3	土師器:皿　灰釉陶器:椀	
SK1377	土坑	28次	H8	Ⅱ-1	土師器:杯・皿・椀・甕　須恵器:杯・蓋　土錘　刀子	
SK1378	土坑	28次	I7	不明	土師器片　須恵器片	
SD1379	溝	28次	I7	Ⅰか	土師器細片	Ⅰ-4期以前か 古代伊勢道北側溝の可能性がある
SK1381	土坑	28次	J4	Ⅱ-3	土師器:皿　灰釉陶器片	
SK1383	土坑	28次	K4	Ⅰ-4	土師器:皿	
SK1387	土坑	28次	K6	Ⅱ-3	土師器:杯	
SD1388	溝	28次	L6・L7	Ⅲ-3～	土師器:小皿・甕　瓦器片　無釉陶器:椀(山茶椀)　土錘	
SD1395	溝	28次	(28次)D8 (153次)d3・e3	Ⅰ-4以前	土師器細片	古代伊勢道南側溝
SK3571	土坑	第55次	J9	Ⅲ-3	土師器:杯・小皿　無釉陶器:椀(山茶椀)	
SD6801	溝	第143次 第152次 第159次	(152次)e1・f1・f2・g2・h2・i2・j3・k3 (159次)p4・q4・q5・r5・s5・t5	Ⅰ	土師器:杯・甕 須恵器:杯	古代伊勢道北側溝
SD6802	溝	第143次 第153次 第159次	(159次)p7・q7・r7	Ⅰ	土師器片	古代伊勢道南側溝
SH9001	竪穴建物跡	第143次	h4・i4・g5・h5・i5	Ⅰ-4～Ⅱ-1	土師器:杯・椀・皿・高杯・蓋・壺・盤・甕　須恵器:杯・蓋・皿・折縁皿・壺・壺蓋・盤・甕・円面硯　土玉　製塩土器　土錘　釘　ﾌｲｺﾞ羽口　炉材　炭化物	
SK9002	土坑	第143次 第152次	(143次)g3・g4	Ⅰ-4～Ⅱ-1	土師器:杯・皿・高杯・甕　須恵器:杯・蓋・皿・長頸瓶　土錘	第152次調査区に続く 土坑に訂正
SE9014	井戸	第143次	i3・j3・i4・j4	Ⅲ-1～Ⅳ	土師器:皿・鉢・鍋・羽釜　ロクロ土師器:台付皿　陶器:杯・椀・皿・鉢・火入　青磁　白磁:椀	
SK9015	土坑	第143次	n5	Ⅱ－4	土師器:杯・甕　須恵器:甕 灰釉陶器椀	SB9006より新
SK9016	土坑	第143次	m5・n5	Ⅱ-3～4	土師器:杯・皿・甕　須恵器蓋　灰釉陶器:皿・段皿　鉄滓	SB9003より新
SK9017	土坑	第143次	m5	Ⅱ-4	土師器:皿	
SK9018	土坑	第143次	l4・l5	Ⅲ-2～3	土師器:皿　ロクロ土師器　灰釉陶器:椀　陶器:鉢　白磁:椀	SK9019より新
SK9019	土坑	第143次	l4・l5	Ⅲ	土師器:皿　ロクロ土師器:皿　陶器片	SK9018より古
SK9020	土坑	第143次 第152次	(143次)l3 (152次)l3	近世か	土師器:杯　灰釉陶器　瓦片	
SK9021	土坑	第143次	l6	Ⅲ	土師器:皿　須恵器:杯　灰釉陶器　緑釉陶器	SB9003より新
SK9022	土坑	第143次	k5・l5	Ⅳ	土師器:皿　須恵器:甕　陶器:椀	
SK9023	土坑	第143次 第165-1次	(143次)j8	Ⅲ-4	土師器:皿・甕　須恵器:杯・甕　陶器:椀	
SK9024	土坑	第143次	j7	Ⅲ-2～3	土師器:皿・台付皿　ロクロ土師器:皿　須恵器:甕　灰釉陶器:椀・鉢・壺	
SK9025	土坑	第143次	i6・j6	Ⅲ-3	土師器:杯・皿・鍋　ロクロ土師器:杯　須恵器:甕　陶器:椀・皿 白磁:椀	
SK9026	土坑	第143次	i5・j5・i6・j6	Ⅲ-3	土師器:杯・皿・高杯・甕・鍋　ロクロ土師器:杯・皿　須恵器:壺 灰釉陶器:椀　陶器:椀　瓦器:椀　白磁　土錘	
SK9027	土坑	第143次	h6・i6・h7・i7	Ⅲ-4～Ⅳ	土師器:杯・皿・台付皿　ロクロ土師器:皿　陶器:椀・鉢　白磁:椀　瓦器:椀	
SK9028	土坑	第143次	h5・i5・h6・i6	Ⅲ-3	土師器:杯・皿・台付皿・高杯・甕　須恵器:壺　ロクロ土師器:椀・皿・台付皿　緑釉陶器　灰釉陶器:皿・段皿　青白磁　白磁 鉄滓	
SK9029	土坑	第143次	h6・h7	Ⅲ-2	土師器:皿　須恵器:杯・蓋・壺蓋・甕　灰釉陶器:椀　黒色土器A類	

遺構名	種別	調査区	グリッド	時期	出土遺物	備考
SK9030	土坑	第143次	g4・h4	Ⅰ-4	土師器:杯・皿・高杯・甕　須恵器:壺	
SK9031	土坑	第143次	g4	Ⅰ-4か	土師器:杯　須恵器片	
SK9032	土坑	第143次	g5・g6	Ⅲ-2	土師器:杯・皿・壺・脚台　ロクロ土師器:皿　須恵器:蓋　陶器:杯・壺　緑釉陶器　青磁:椀	
SK9033	土坑	第143次	h7	Ⅲ-2～3	土師器:杯・皿・台付皿・甕　ロクロ土師器:杯・皿・台付皿　陶器:椀　白磁	
SK9034	土坑	第143次 第165-1次	(143次)g8・h8 (165-1次)g8・h8	Ⅱ-1～2	土師器:杯・椀・皿・高杯・蓋・甑・甕　須恵器:杯　黒色土器A類:杯　製塩土器　土錘	
SK9035	土坑	第143次 第153次	(143次)g7 (153次)g7	Ⅲ-4～Ⅳ	土師器:杯・皿・台付皿・高杯・鍋　ロクロ土師器:皿・小皿　緑釉陶器:陰刻花文片　須恵器:蓋・甕　灰釉陶器:段皿　陶器:椀　青磁:皿	
SK9037	土坑	第143次	l8	Ⅲ-2	土師器:杯・皿　ロクロ土師器:皿　黒色土器　灰釉陶器　猿面硯　緑釉陶器	
SK9038	土坑	第143次	o6	Ⅱ-3	灰釉陶器:皿	SB9004より古
SK9039	土坑	第143次	k5・l5	Ⅲ-2か	土師器:皿・甕　ロクロ土師器	
SK9040	土坑	第143次	i5	Ⅲ	土師器:皿　ロクロ土師器:鉢	
SD9041	溝	第8-9次 第143次 第152次 第153次 第165-1次	(143次)m3・m4・m5・m6・m7・m8 (153次)n9・n10 (165-1次)m8・n8	Ⅲ-2	土師器:皿　ロクロ土師器:台付椀　白磁片	第153次・第165-1次ではSD9047と誤記
SD9042	溝	第143次	j5・k5・k6・l5・l6・m5・m6	Ⅲか	土師器:皿・台付皿・高杯　ロクロ土師器:皿　陶器:椀　灰釉陶器:皿　青磁　白磁	
SD9043	溝	第143次 第152次	(143次)h3・h4	Ⅲか	土師器:椀・皿・高杯・甕　ロクロ土師器:杯　須:恵器壺・甕　白磁片　製塩土器	
SD9044	溝	第8-9次 第143次 第153次 第165-1次	(143次)i6・i7・i8 (153次)i9・i10・i11・i12 (165-1次)i8	Ⅰ-4～Ⅱ-1	土師器:杯・椀・皿・甕　須恵器:杯・蓋・壷・甕　土錘	区画内区画溝
SD9045	溝	第143次 第165-1次	(143次)h6・i6・h7・i7・h8・i8	Ⅲ-2	土師器:杯・皿・甕　ロクロ土師器:杯　陶器:椀	
SD9046	溝	第143次 第152次	(143次)j4・j5 (152次)j25・j1・j2・j3	Ⅰ-4～Ⅱ-1	土師器:杯A・杯G・皿AB・椀A・甕・台付皿・鍋　須恵器:杯A・蓋・壺	SB9800より古 第143次ではⅢ-3期
SD9047	溝	第143次 第153次 第165-1次	(143次)n6・n7・n8 (153次)m9・n9・m10・n10 (165-1次)n8・m8	Ⅲ-3～	土師器:杯A・皿・高杯・甕・鍋　ロクロ土師器:皿　須恵器:蓋　灰釉陶器:椀　緑釉陶器片　無釉陶器:椀(山茶椀)　白磁片	第165-1次ではSD10139
SE9670	井戸	第152次	h11・h12	Ⅰ-4～Ⅱ-1	土師器:杯A・杯G・椀A・皿A・高杯・小型把手付壺・甕・長胴甕・竈　黒色土器:椀　須恵器:杯A・杯B・皿B・蓋・盤・壺・平瓶・甕　炭化材	
SK9675	土坑	第152次	m12・n12	Ⅰ-4	土師器:杯A・杯G・椀B・皿A・蓋・高杯・盤・把手付盤・鉢・鍋A・甕・長胴甕・甑　須恵器:蓋・鉢・甕	
SK9677	土坑	第152次	j12・j13	Ⅱ-2～3	土師器:杯・椀A・皿A・注口・甕・甑　緑釉陶器片	
SD9679	溝	第152次	h12・h13・h14	Ⅲ	土師器:杯A・甕　ロクロ土師器:小皿・台付小皿　須恵器:甕　灰釉陶器片　鉄製品	
SK9680	土坑	第152次	h13	Ⅱ-1～2	土師器:長胴甕	
SD9681	溝	第152次	e15・f15	Ⅲ-2～	土師器:小皿・蓋　須恵器:杯・壺	
SD9682	溝	第152次	e15・f15	Ⅲか	土師器片	
SD9683	溝	第152次	f14・f15	Ⅲ-2～	土師器:杯・皿・甕　ロクロ土師器:小皿　須恵器:甕・壺　陶器:椀(山茶椀)　土錘	
SD9684	溝	第152次	f14・f15・f16	Ⅲ	土師器:杯A・甕　須恵器:壺	
SD9685	溝	第152次	g13・g14・g15	Ⅲ-2～	土師器: 皿・小皿・・台付小皿・竈　ロクロ土師器:台付小皿　須恵器:壺・甕　灰釉陶器:椀　陶器:椀(山茶椀)・小皿(山皿)	
SD9686	溝	第152次	g13・g14・g15・g16	Ⅲ-2～	土師器:台付小皿・甕　ロクロ土師器:小皿　須恵器:壺　陶器:皿(山皿)　白磁片	
SD9689	溝	第152次	h14・h15	Ⅲ-2～	土師器片　須恵器片　陶器片(山茶椀)　灰釉陶器片	
SK9693	土坑	第152次	j14	Ⅱ	土師器片　須恵器片	

遺構名	種別	調査区	グリッド	時期	出土遺物	備考
SK9694	土坑	第152次	j14	Ⅱ-1	土師器:杯A・鉢　須恵器:蓋	
SD9696	溝	第8-9次 第143次 第152次 第165-1次	(152次)n12・n13・o13・n14・o14・n15・o15・n16・o16・n17・o17・o18・o19・o20・n21・021・n22・n23・n24・n25・n1 (165-1次)O8	近世～	土師器片　須恵器片　灰釉陶器片　緑釉陶器片　陶器片 瓦片	柳原と西加座の字境に相当
SK9697	土坑	第152次	e15・f15	Ⅱか	土師器:杯A・椀A・小皿・甕　須恵器片　灰釉陶器片	
SK9698	土坑	第152次	f14・f15	Ⅱか	土師器:杯・甕　須恵器片	
SK9699	土坑	第152次	f15	Ⅲ-3	土師器:小皿・台付小皿・甕　ロクロ土師器:小皿　須恵器片　陶器:椀(山茶椀)　鉄製品　炭化材	
SK9700	土坑	第152次	g14・g15	Ⅲ-3	土師器:杯・皿・小皿・甕　ロクロ土師器:椀・台付小皿　緑釉陶器:椀　白磁:椀	
SK9701	土坑	第152次	g15・h15	Ⅱ-3～4	土師器:甕　ロクロ土師器:椀　須恵器:甕	
SK9703	土坑	第152次	f15・g15・f16・g16	Ⅱ-1～2	土師器:杯A・高杯・甕・鍋B　須恵器片	
SK9704	土坑	第152次	f16・g16	Ⅲ	土師器:杯A・皿A・皿B・甕　ロクロ土師器:椀	
SK9705	土坑	第152次	f16・g16	Ⅲ	土師器片	
SK9711	土坑	第152次	m15・n15・m16・n16	Ⅱか	土師器:甕　須恵器:杯・細頸壺・甕	
SK9715	土坑	第152次	c18・d18	Ⅲ-3	土師器:皿・小皿・高杯　ロクロ土師器:小皿　須恵器:杯B・甕 陶器:椀(山茶椀)・皿(山皿)　白磁:椀	
SK9718	土坑	第152次	e17	Ⅱか	土師器:甕　須恵器:甕	
SK9719	土坑	第152次	e17	Ⅱか	土師器片　須恵器片	
SK9720	土坑	第152次	e17・f17	Ⅲ	土師器:杯・高杯・甕　ロクロ土師器:小皿	
SK9721	土坑	第152次	g15・g16	Ⅲ-3	土師器:杯A・甕　須恵器片　陶器:椀(山茶椀)	
SK9723	土坑	第152次	g17	Ⅲ-3	土師器:皿・台付皿・甕　ロクロ土師器:小皿　須恵器片　灰釉陶器:椀　陶器:椀(山茶椀)　鉄製品	
SK9724	土坑	第152次	g17・h17	Ⅲ-3	土師器:皿・甕　ロクロ土師器:小皿　須恵器:蓋・甕　灰釉陶器:椀 陶器:椀(山茶椀)　土錘　鉄製品	
SK9728	土坑	第152次	g16	Ⅱか	土師器:甕	
SK9734	土坑	第152次	m17・n17	Ⅲ-3	土師器:皿・小皿　ロクロ土師器:小皿　須恵器片　陶器:椀(山茶椀)	
SK9736	土坑	第152次	m18・n18	Ⅱ-1～2	土師器:杯A・椀A・皿A・甕・竈　黒色土器:椀　須恵器:杯B・蓋・盤 炭化材	
SD9737	溝	第152次	j15・k15・l15・m15・n15	Ⅲ	土師器:甕　須恵器:甕　灰釉陶器:皿	
SD9738	溝	第152次	j15・j16・j17・j18	Ⅲ	土師器:杯A・甕　須恵器片　SD9747と一体か	
SK9741	土坑	第152次	g18・h18	Ⅲ-3	土師器:皿・小皿・台付小皿・高杯・甕　ロクロ土師器:台付皿・台付小皿　須恵器:壺　灰釉陶器:椀　緑釉陶器片　陶器:椀(山茶椀)　瓦器:小皿	
SD9746	溝	第152次	f19・f20・f21・f22	Ⅲ-3～	土師器:杯・皿・台付皿・高杯・甕　ロクロ土師器片　須恵器片 灰釉陶器:皿・壺　白磁:椀　軽石	
SK9747	土坑	第152次	f20	Ⅲ-2～	土師器:皿・小皿　陶器片	
SK9748	土坑	第152次	f20・f21	Ⅲ-3	土師器:杯・皿・小皿・台付小皿　ロクロ土師器:小皿　須恵器片 灰釉陶器:椀　陶器:椀(山茶椀)　長石塊	
SD9749	溝	第152次	e20・e21・e22・e23・e24・e25・e1・e2	近世～	土師器片　須恵器片　陶磁器片　瓦片	
SK9755	土坑	第152次	f21・f22	Ⅲ-2～3	土師器:小皿　ロクロ土師器:小皿　須恵器:甕	
SK9758	土坑	第152次	h21・h22	Ⅱ-2～3	土師器:杯A・椀A・皿A・蓋・甕・甑　須恵器:杯B・壺・甕　灰釉陶器:椀・皿　製塩土器　土錘　鉄製品　炭化材	

遺構名	種別	調査区	グリッド	時期	出土遺物	備考
SK9759	土坑	第152次	h21・i21・h22・i22	Ⅱ-2～3	土師器:杯A・椀A・椀B・皿A・皿B・甕　須恵器:甕　灰釉陶器:椀・皿　製塩土器　土錘	
SK9760	土坑	第152次	i21・h22・i22	Ⅱ-2～3	土師器:杯A・椀A・皿A・皿B・鉢・甕・竈　須恵器:杯・高杯・壺　灰釉陶器:椀・皿・段皿・細頸壺　製塩土器　土錘　炭化材	
SK9761	土坑	第152次	h22・i22	Ⅱ-2～3	土師器:杯A・椀A・甕　須恵器:椀・蓋・甕　灰釉陶器:椀・皿　製塩土器	
SK9762	土坑	第152次	i22・i23	Ⅱ-2～3	土師器:杯A・甕　灰釉陶器:椀	
SD9772	溝	第152次	j20・j21・j22	Ⅲ	土師器片	
SD9784	溝	第152次	f22・f23・f24・f25・f1・f2	Ⅲ	土師器片　ロクロ土師器:椀　須恵器片	
SK9785	土坑	第152次	g1	Ⅱ-1	土師器:杯A・杯B・杯G・椀A・椀B・皿A・皿B・蓋・高杯・鉢・盤・壺E・甕・長胴甕・鍋A・鍋B・竈・用途不明品(把手部)　黒色土器:椀・小椀　須恵器:杯A・杯B・把手付杯・蓋・薬壺蓋・高杯・盤・壺・壺E・甕・円面硯　土錘　製塩土器　鉄製品:釘・刀子・円盤状製品　金属滓　炭化材	
SK9786	土坑	第152次	g25・h25・g1・h1	Ⅱ-1～2	土師器: 杯A・椀A・椀B・皿A・蓋・高杯・小型平底壺・壺E・甕・長胴甕・鍋A・鍋B　黒色土器:椀・台付椀・甕　須恵器:杯A・杯B・蓋・盤・高杯・鉢・壺E・壺L・短頸壺・甕　製塩土器　土錘　鉄製品　焼粘土塊　炭化材	
SK9787	土坑	第152次	g1・h1	Ⅱ-1～2	土師器:皿A　須恵器:蓋	
SD9788	溝	第152次	g1・h1	Ⅱ-1～	土師器:杯・甕　須恵器:甕	
SK9789	土坑	第152次	h1・h2	Ⅱ-1～2	土師器:杯A・皿A・蓋・甕・竈　須恵器:盤・甕　炭化材	
SD9790	溝	第152次	f2・g2・h2	Ⅰか	土師器片　奈良古道の側溝の一部か	
SD9791	溝	第152次	h2・i2・j2	Ⅲ-3～	土師器:杯・皿・高杯・甕・竈　ロクロ土師器:台付小皿　須恵器:蓋・壺・甕　灰釉陶器:椀　陶器:椀(山茶椀)　白磁:椀	
SD9792	溝	第152次	g2・h2	Ⅱ-2～	土師器:杯A・甕　須恵器:蓋	
SD9793	溝	第152次	g2・h2・i2・g3・h3・i3	近世～	土師器片　須恵器片　瓦片	
SK9797	土坑	第152次	i1・i2	Ⅲ-1～2	土師器:杯・小皿　須恵器片	
SK9798	土坑	第152次	j1・j2	Ⅱ～Ⅲ	土師器片　須恵器片	
SD9799	溝	第152次	i2・j2・k2・l2・m2・n2・o2・i3・j3・k3・l3・m3・m3・o3	近世～	土師器片　ロクロ土師器片　須恵器片　陶器片(山茶椀)　施釉陶器片　磁器片　瓦片	
SD9801	溝	第152次	k2・l2・m2・n2・o2	近世～	土師器片　須恵器片	
SK9803	土坑	第152次	n25・n1	Ⅰ-4～Ⅱ-1	土師器:杯A・杯G　須恵器:盤・甕	
SK9805	土坑	第152次	i1・i2	Ⅰ-4～Ⅱ-1	土師器:杯A・皿A・椀A・鍋B　須恵器:蓋・甕　土錘　雲母片	
SX9806	埋納遺構	第152次	g23	Ⅱ-1～	須恵器:杯B	
SD9809	溝	第152次	f19・g19・h19・i19・j19・k19・l19・m19・n19・o19	近世～	土師器:杯A・皿A・甕　ロクロ土師器:小皿・台付小皿　須恵器片　灰釉陶器:皿　近世陶磁器片	
SD9810	溝	第153次	f3・f4・f5・f6・f7・f8・g8	Ⅳ～	土師器:杯A・皿・小皿・台付皿・甕　ロクロ土師器:杯・小皿　須恵器片　無釉陶器:椀(山茶椀)・壺　白磁:皿	
SK9811	土坑	第153次	f4	Ⅲ	土師器:杯・皿・甕　須恵器片	
SK9812	土坑	第153次	f5・g5	Ⅳ	土師器:皿・小皿・台付皿・鍋　灰釉陶器片　緑釉陶器片　無釉陶器:椀(山茶椀)・皿(山皿)　青磁:椀　鉄製品:釘	
SK9813	土坑	第153次	f5・f6	Ⅲ	土師器片　灰釉陶器片　土錘	
SK9818	土坑	第153次	e7・f7	Ⅱ-2～3	土師器:杯A・椀AB・皿A・高杯・片口鉢・甕・鍋B　須恵器:杯AB・蓋・双耳壺・甕・円面硯　灰釉陶器片　緑釉陶器片	
SK9826	土坑	第143次 第153次 第165-1次	(153次)g7・g8 (165-1次)G8	Ⅳ	土師器:皿・小皿・台付皿・鍋　ロクロ土師器:椀・皿　無釉陶器:椀(山茶椀)・鉢　用途不明土製品	
SK9827	土坑	第153次	e8・f8・e9・f9	Ⅳ	土師器:皿・小皿・台付皿・甕　須恵器:高杯　緑釉陶器片　無釉陶器:椀(山茶椀)　鉄製品:釘	

遺構名	種別	調査区	グリッド	時期	出土遺物	備考
SK9828	土坑	第153次	g12	Ⅱ-1	土師器:皿	溝埋土内の落ち込み
SK9829	土坑	第153次	e10	Ⅱ-2～3	土師器:杯A・椀A・皿A・鉢・甕・長胴甕・竈　黒色土器:椀　須恵器:壺・甕　灰釉陶器:椀　緑釉陶器:椀	
SK9830	土坑	第153次	e10・f10	Ⅱ-3	土師器:杯A・鍋B・甕　須恵器:蓋　灰釉陶器:椀	
SK9831	土坑	第153次	f10	Ⅱ-3	土師器:杯A・椀A・皿A・鉢・台付鉢・甕　須恵器:甕　灰釉陶器:椀・皿・段皿　緑釉陶器:椀・皿　製塩土器	
SK9833	土坑	第153次	e11・f11	Ⅲ-2～3	土師器:杯A・椀A・皿A・高杯・甕・長胴甕・竈　須恵器:杯B・甕　灰釉陶器:椀	
SK9834	土坑	第153次	f11	Ⅱ-2～3	土師器:杯A・椀AB・皿A・甕　須恵器:蓋・壺・小型平底壺・甕　灰釉陶器:椀・皿・段皿・壺	
SE9835	井戸	第153次	g10・h10・g11・h11	Ⅲ-1～2 (埋没時期)	土師器:皿・小皿・台付皿・台付杯・高杯・甕　ロクロ土師器:椀・皿・小皿・台付小皿　須恵器:細頸壺・鉢・甕・円面硯　陶器:椀　灰釉陶器:椀・耳皿・小型壺　緑釉陶器:椀　白磁:椀　鉄製品:火打鎌　長石塊	掘削はⅡ-1期頃まで遡るとみられる
SD9836	溝	第153次	e11・e12	Ⅱか	土師器片	
SD9837	溝	第153次	g11・g12	Ⅱ-1～2	土師器:杯A・椀A・皿A・甕・長胴甕　須恵器:杯B　土錘	
SK9838	土坑	第153次	g12	Ⅱ-1～2	土師器:杯A・椀A・皿A・蓋・鉢・長胴甕　須恵器:杯B・蓋・壺　土錘	
SD9845	溝	第153次	h10・i10・j10	Ⅳ～	土師器:皿　ロクロ土師器:皿　陶器:壺	
SD9846	溝	第8-9次 第143次 第153次 第165-1次	(153次)i9・i10・i11・i12 (165-1次)h8・i8	Ⅳ～	土師器片　陶磁器片	
SK9847	土坑	第153次	j11・j12	Ⅱ-2	土師器:杯A・椀A・皿A・甕　須恵器片	
SD9850	溝	第8-9次 第143次 第153次 第165-1次	(153次)n9・n10 (165-1次)n8	Ⅲ-2～3	土師器:皿　ロクロ土師器:皿　須恵器片　陶器片	
SK9852	土坑	第153次	m10・n10・o10・m11・n11・o11	Ⅱ-2か	土師器:杯A・椀A・皿A・高杯・鉢・甕　須恵器:甕　弥生土器:器台部片・甕	
SK9853	土坑	第153次	g12	Ⅱ-1～2	須恵器:杯B・盤	
SK9855	土坑	第153次	o11	Ⅱ-1～2	土師器:杯A・椀A・皿A・甕　須恵器:甕　炭化材	
SK9856	土坑	第153次	n11・o11・n12・o12	Ⅱ-1～2	土師器:椀A・皿A・高杯・甕　須恵器:杯B・蓋・壺・甕	
SD9897	溝	第157次	a13	Ⅲ-3	土師器台付皿・甕、須恵器杯、灰釉陶器椀・小椀、白磁椀、山茶椀、鉄滓	
SD9901	溝	第157次	e13～w13	16世紀	土師器:杯・皿・甕・鍋・羽釜　須恵器:甕　灰釉陶器:椀　無釉陶器:椀(山茶椀)	南伊勢系鍋4期
SD9902	溝	第157次	b13～t14	Ⅳ～	土師器:甕　須恵器:杯・甕　無釉陶器:椀(山茶椀)　常滑甕	山茶椀4型式
SD9907	溝	第157次	e12	Ⅱ-1	土師器:甕・高杯・把手　須恵器:甕　白石	
SD9917	溝	第157次	u18～v18	中世	土師器片　須恵器片　常滑甕	
SK9924	土坑	第157次	c15	Ⅲ-2	土師器:皿・台付皿・甕　黒色土器:杯　須恵器:甕　灰釉陶器:椀・壺　椀形鉄滓　炭化材	灰釉・百代寺
SK9925	土坑	第157次	d14	Ⅲ-2	土師器:杯・皿・台付皿・甑　ロクロ土師器:皿　須恵器:甕　鉄滓	Ⅱ-3期混入多し
SK9926	土坑	第157次	c14	Ⅲ-3	土師器:椀・皿　ロクロ土師器:皿　灰釉陶器:椀　無釉陶器:椀(山茶椀)	Ⅲ-2を多く含む 山茶椀4型式
SK9927	土坑	第157次	x15～x16	Ⅱ？	土師器:甕　須恵器片	
SK9928	土坑	第157次	w12～w13	Ⅱ-3～4	土師器:杯・皿・甕　灰釉陶器:皿	灰釉K90(新)
SK9930	土坑	第157次	u12	Ⅱ-3	土師器:杯・椀・皿・鉢・甕・甑　灰釉陶器:段皿　製塩土器	
SK9931	土坑	第157次	x12～y12	Ⅰ-4	土師器:杯・椀・皿・甕　黒色土器A類:椀	

遺構名	種別	調査区	グリッド	時期	出土遺物	備考
SK9933	土坑	第157次	v11～w11	Ⅱ-3	土師器:杯・椀・皿・甕　須恵器:甕　灰釉陶器:椀　製塩土器　フイゴ羽口	
SK9934	土坑	第157次	w13	Ⅱ-1～2	土師器:杯・椀・台付椀・皿・盤・鉢・甕・鍋　須恵器:杯・蓋・台付盤・甕　鉄滓	Ⅱ-3混じる
SK9935	土坑	第157次	t15～u15	Ⅱ	土師器:杯・甕・甑　須恵器:甕	
SK9940	土坑	第157次	c14	Ⅲ-2	土師器:杯・皿　ロクロ土師器:皿	
SK9941	土坑	第157次	v17	Ⅰ-4～Ⅱ-1	土師器片	床面に炭化材
SD10090	溝	第159次	r5/s5	Ⅲ～	土師器:杯・甕 須恵器:杯・甕 灰釉陶器 緑釉陶器 陶器:椀	
SD10091	溝	第159次	r4・5・6・7・8	Ⅲ	土師器:甑 ﾛｸﾛ土師器:皿 陶器:鉢	
SD10092	溝	第159次	r9/r10	Ⅲ	土師器:杯・甕 ﾛｸﾛ土師器 灰釉陶器:椀 陶器:椀	
SD10093	溝	第159次	t6・7・8	Ⅲ	土師器:杯・皿・甕 ﾛｸﾛ土師器 灰釉陶器:椀・段皿 陶器:椀・鉢 白磁	
SD10094	溝	第159次	r13/s13	Ⅰ-4	土師器:杯・甕	区画道路北側溝
SD10095	溝	第159次	p13/s13	Ⅱ	土師器:杯・甕	SD10094より新
SD10096	溝	第159次	s16	Ⅰ-4	なし	区画道路南側溝
SK10097	土坑	第159次	s6	Ⅲ-2～3	土師器:小皿・台付小皿 陶器:椀	
SK10098	土坑	第159次	s6	Ⅲ-2～3	土師器片	
SK10099	土坑	第159次	s6/t6	Ⅱ-3	土師器:杯・皿 灰釉陶器:椀	
SK10100	土坑	第159次	s6/t6	Ⅲ-3	土師器:杯・皿・小皿 ﾛｸﾛ土師器 陶器	
SK10101	土坑	第159次	s7	Ⅲ-3	土師器:杯・皿・甕 ﾛｸﾛ土師器 緑釉陶器　製塩土器	
SK10102	土坑	第159次	r7/s7	Ⅲ-2～3	土師器:杯・皿 ﾛｸﾛ土師器 白磁	
SK10103	土坑	第159次	r7/s7	Ⅲ-2～3	土師器:杯・皿 ﾛｸﾛ土師器 製塩土器	
SK10104	土坑	第159次	q8	Ⅲ-2～3	土師器:皿・ての字	
SK10105	土坑	第159次	q8・9	Ⅱ-3	土師器:杯・皿 製塩土器	
SK10106	土坑	第159次		不明	なし	
SK10107	土坑	第159次	r9	Ⅱ-2	土師器:杯・皿・甕・竈	
SK10108	土坑	第159次	q9・10/r9・10	Ⅱ-2	土師器:杯・皿・竈 須恵器:杯・甕 ヘラ描・墨書土器	
SK10109	土坑	第159次	q10	Ⅱ-3～4	土師器:杯・皿・甕・甑 須恵器:杯 転用硯 製塩土器 土錘	
SK10110	土坑	第159次	q10/r10・11	Ⅱ-2	土師器:杯・皿・竈 須恵器:甕 灰釉陶器:椀 黒色土器:椀	
SK10111	土坑	第159次	q10/r10・11	Ⅱ-2	土師器:杯・皿・高杯・甕・竈 須恵器:杯 灰釉陶器:椀 製塩土器 鉄製品	
SK10112	土坑	第159次	s11・12・13	Ⅱ-3～4	土師器:杯・皿 須恵器:杯 緑釉陶器	
SK10114	土坑	第159次	s6	Ⅳ	土師器:皿・小皿	
SK10135	土坑	第143次 第165-1次	(165-1次)h8	Ⅰ－4？	なし	

遺構名	種別	調査区	グリッド	時期	出土遺物	備考
SK10136	土坑	第8-9次 第165-1次	(165-1次)l8	Ⅲ－2～	土師器:小皿・甕　ロクロ土師器:小皿	
SK10137	土坑	第165-1次	(165-1次)m8	Ⅱ－4	土師器片　灰釉陶器片	
SK10138	土坑	第165-1次	(165-1次)n8・m8	Ⅲ－2	土師器:皿・小皿　ロクロ土師器片	
SD10140	溝	第165-1次	(165-1次)m8・n8・o8	Ⅰ－4	土師器:杯　須恵器:甕	
SD10207	溝	167次	o12-o15	Ⅲ-3～	土師器皿	
SD10208	溝	167次	o12-o20	Ⅳ	土師器:椀・甕・甑、須恵器:甕、陶器山茶:椀	SD10207より新
SD10209	溝	167次	p12-p22	近世	土師器、陶器壺、近世陶磁器片、瓦	
SE10210	井戸	167次	q12-q13	Ⅰ-4～Ⅱ-1	土師器:杯・皿・甑・甕、須恵器	
SD10211	溝	167次	r12-r13	Ⅱ-3～4	土師器:皿・甕、灰釉陶器:椀	SB10153に関する溝か
SD10212	溝	167次	s12-s13	Ⅱ-3～4	土師器:甕、須恵器:甕	SB10153に関する溝か
SK10213	土坑	167次	r12	Ⅰ-4	土師器:杯・椀・皿・盤・甕・甑	SK10214･10215より古
SK10214	土坑	167次	r13	Ⅲ-2～	土師器:台付皿・甕、須恵器:甕、ロクロ土師器:台付皿、灰釉陶器:椀	
SK10215	土坑	167次	r13-s13	Ⅲ-2	土師器:杯・皿・台付皿・甕・甑、緑釉陶器、灰釉陶器:椀、釘	
SK10216	土坑	167次	q14	Ⅱ-3	土師器:杯・甕・甑、黒色土器、須恵器:杯・甕、灰釉陶器:椀	
SK10217	土坑	167次	q15	Ⅱか	土師器、須恵器:甕	
SK10218	土坑	167次	q15-q16	Ⅱ-2～	土師器:甕、須恵器:甕	SB10162より古
SK10219	土坑	167次	q16	Ⅱ-3～4	灰釉陶器:椀・皿、土錘	
SK10220	土坑	167次	q16-r16	Ⅲか	土師器:甕	
SK10221	土坑	167次	r15-s15	Ⅲ-3～	土師器:皿・高杯・甕、須恵器:甕、ロクロ土師器:皿・台付皿、灰釉陶器、陶器山茶椀	SK10222より新
SK10222	土坑	167次	s14-s15	Ⅱ-1～2	土師器:杯・皿・甕、須恵器:杯蓋・甕、灰釉陶器:椀	SB10158・SK10221より古
SD10223	溝	167次	q16-r16	Ⅱか	土師器	
SD10224	溝	167次	q16-r16	Ⅲ-2～	土師器:皿、灰釉陶器:椀	SB10162より古
SK10225	土坑	167次	p18-q19	Ⅲ-2～3	土師器:杯・甕、須恵器:壺、灰釉陶器:椀	SB10156より新
SK10226	土坑	167次	q18	Ⅲか	なし	SK10227より古
SK10227	土坑	167次	q18	Ⅲか	土師器:甕、灰釉陶器	
SK10228	土坑	167次	q18-r18	Ⅱ-3	土師器:高杯・甕、須恵器:壺	SB10164・10166より新
SK10229	土坑	167次	r16-r17	Ⅱ-1	土師器:杯・皿・高杯・甕・甑、須恵器:杯・甕・壺	
SK10230	土坑	167次	r17-r18	Ⅱ-3	土師器:杯・椀・皿・甕・台付甕、須恵器:壺、灰釉陶器:椀・皿、緑釉陶器:椀	
SK10231	土坑	167次	q19	～Ⅲ-2	土師器:甕、須恵器:蓋・高杯・甕、ロクロ土師器:皿	

遺構名	種別	調査区	グリッド	時期	出土遺物	備考
SK10234	土坑	167次	q20	Ⅱか	土師器、緑釉陶器	
SK10235	土坑	167次	r19-r20	Ⅲ-1	土師器:椀・皿・甕・甑、須恵器:杯、灰釉陶器:皿	Ⅰ-4～Ⅱ-4期の土器を含む。
SK10236	土坑	167次	q20	Ⅲ-2～3	土師器:甕、灰釉陶器、陶器壺	
SK10237	土坑	167次	p20-q21	Ⅲ-2	土師器:杯・皿、ロクロ土師器:皿・台付皿、須恵器:甕・壺、灰釉陶器:椀、粘土塊、不明金属製品	
SK10238	土坑	167次	p21-q21	Ⅲ-3～	土師器:皿・高杯、ロクロ土師器:皿、灰釉陶器	
SK10239	土坑	167次	q21	Ⅲ-3～	土師器:甕・台付皿、ロクロ土師器:台付皿	SK10238より古
SK10568	土坑	10次	E63	Ⅲ-3～4	土師器:杯・小皿・高杯・甕・竈　ロクロ土師器:小皿・台付小皿・杯・台付杯・椀	
SK10569	土坑	10次	W64・W65	Ⅲ-3～4	土師器:杯・小皿・盤　ロクロ土師器:椀・小皿　須恵器:杯・甕　製塩土器片	
SK10570	土坑	10次	W66	Ⅲ-4～	土師器:杯・小皿・高杯・甕・鍋　ロクロ土師器:小皿　陶器:椀(山茶椀)・壺　緑釉陶器片　軽石	
SK10571	土坑	10次	W69	Ⅲ-3～4	土師器:小皿　ロクロ土師器片　白磁片	
SD10572	溝	10次	W70	Ⅱ	土師器小片　須恵器小片	
SK10573	土坑	10次	W70	Ⅲ-3～	土師器小片　ロクロ土師器:台付小皿　陶器:椀(山茶椀)	
SD10574	溝	10次	W71	不明	土師器片	
SE10575	井戸	10次	W72	不明	土師器片　須恵器片	
SD10576	溝	10次	W78	不明	土師器片　須恵器片	
SD10577	溝	10次	W82	Ⅲ-4か	土師器:杯・蓋・鉢・甕　須恵器:蓋(転用硯？)　陶器:椀(山茶椀)	
SK10578	土坑	10次	E82	Ⅲ-3～	土師器:杯・小皿　陶器:椀(山茶椀)・皿(山皿)	
SK10579	土坑	10次	E84・E85	Ⅱ-1	土師器:杯AG・皿A・椀A・甑・甕・竈　須恵器:杯A・皿・蓋・甕・短頸壺	
SK10580	土坑	10次	E85ほか	Ⅱ-1～2	土師器:杯A・皿A・椀AB・高杯・甕・竈　須恵器:甕・壺	

第４章　柳原区画の検討

第１節　斎宮方格地割と柳原区画の変遷

（１）段階設定

平安時代斎宮における柳原区画の性格を検討するのにあたり、前章で報告した遺構の変遷を整理する。柳原区画で検出している遺構は極めて多数におよび、また一部はおよそ40年前の発掘調査であるため、遺構埋土の状況や遺構間の重複関係など、すべてのデータを同じ精度で検証するのは困難であるため、主要な建物遺構を中心に検討を試みる。

遺構の変遷の画期を設定するのにあたっては、この区画で長期間にわたり中央部におかれ続けてきた四面庇付建物の変動を指標とするのが適当と考えられる。柳原区画の四面庇付建物は斎宮跡Ⅱ－1期からⅢ－2期頃まで、実年代観で9世紀初め頃から11世紀までの存続期間が想定される。その間、区画内での位置と規模をほとんど変えておらず、平安時代のほぼ全期間を通じて同じ役割を担っていたものと考えられる。また、四面庇付建物はそれぞれ僅かながら棟方向を違えており、周辺の建物も区画の中心である四面庇付建物に連動して棟方向を合わせていると考えられる。そこで、この各々の四面庇付建物の存続期間を柳原区画の画期の指標として、柳原区画の主に建物群の変遷を整理する。

（２）Ａ期の主要遺構配置（第37・38図）

出土遺物などからⅠ－4期からⅡ－1期にかけての時期に位置づけられ、区画の中央に四面庇付建物が成立する以前の段階である。建物の変遷からさらに2期の小期が想定され、それぞれＡ－1期、Ａ－2期とする。

Ａ－1期は方格地割の成立段階と重なり、建物もN4°Ｗに近い棟方向を取るものが多い。中にはSB9007やSB9763のように他と大きく棟方向が異なるものもあるが、Ａ－1期の中でも細かい時期差があるのかもしれない。この段階の最大の特徴は、区画の東西･南北のほぼ中軸線の位置に、区画を四等分する小区画を作るようにSD1332・SD9044が設けられることである。可視的な遺構はこの溝以外には見られないが、柳原区画の東西･南北の中軸線上には遺構が見られないことや、全般的に区画の北東部は後世の削平のためか残された遺構も浅くなっており、かつては区画溝等があった可能性が高いことから、本来は区画を四等分する意識があったとみてよいだろう。

特に南西と南東の二小区画のほぼ中央にはSB1050と、SB0263の大型の総柱建物が設けられ、一方､北西の小区画にも大型の柱穴を持ち､総柱建物と同様に倉庫の可能性があるSB9900がある。また、区画内のSE0276・1295・9670・9835・10210の5つの井戸もこの段階頃までさかのぼる可能性があり、区画内におよそ均等に配置されているようにも見えることから、四等分された区画の等質性がうかがえる。Ａ－1期の柳原区画は、小区画に配置された総柱建物や大型柱穴の建物など倉庫と考えられる建物とそれに伴う建物を単位とした実務官衙域であったと考えられる。

Ａ－2期は、Ⅰ－4期～Ⅱ－1期にかけての段階のうち、南半の二小区画の総柱建物が消失する段階である。建物の棟方向がN4°Ｗを踏襲するものから、後述するＢ期に主体となる正方位に近いものまでみられる。区画の東西・南北の中軸線付近にも建物がみられるようになるが、依然として区画全体に建物は等質的に配置されているようにみえる。なお、区画全体あるいはそれぞ

れの小区画を囲むような施設はSD1322とSD9044以外は検出されておらず、築地や掘立柱塀など囲繞する施設は当初から無かったものと考えられる。

（３）Ｂ期の主要遺構配置（第39図）

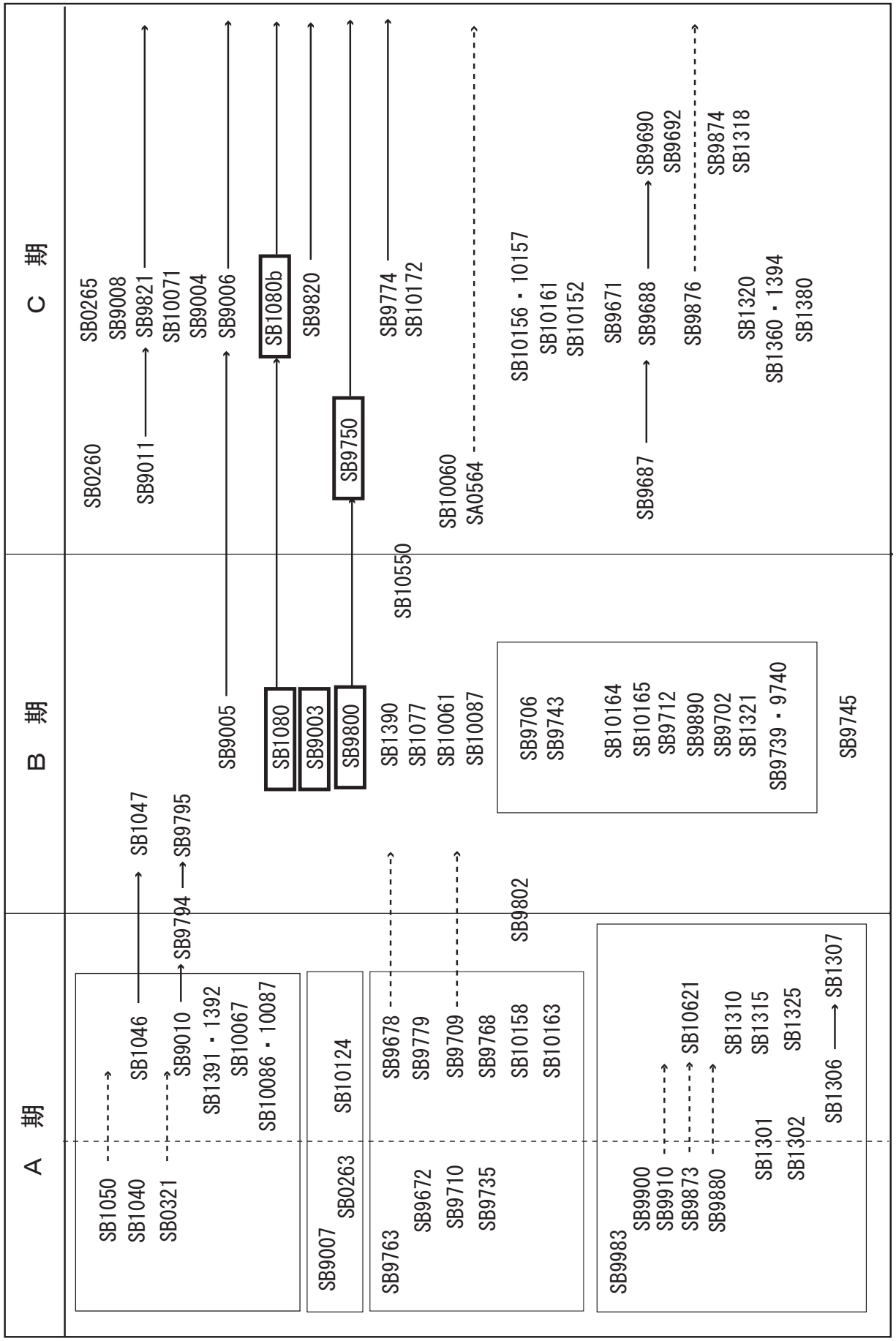
区画を四等分する意識は完全になくなり、区画中央部やや南寄りに建てられた3間×2間の身舎の四面に1間ずつ庇が付くSB9800を中心に区画が構成される段階である。また、ほぼ正方位のSD1326を境に区画の南半と北半で配置される建物に明確な違いが現われる。この段階の建物は正方位～N2°Wまでの棟方向をとる。

区画南半では、SB9800を中心に、その前面西寄りに棟方向をあわせて5間×2間の東西方向の身舎の東南北の三面に庇が付く建物SB1080が、前面東寄りに5間×2間の南北方向の身舎の東面に庇が付く建物SB9003が配される。SB9800の南正面にはこの三棟に囲まれたおよそ1,000㎡の空間があり、その南端に大型の井戸SE9835がある。SB9003の東側には5間×2間の身舎の南面に庇が付く建物SB9005が直交する位置に建てられる。SB9800の東西両脇には3間×2間のSB1077やSB10061がシンメトリーな位置に配される。区画南半ではSB9800を中心建物（正殿）として、その前面の東西に脇殿を配するという、方格地割内の他の区画ではこれまで確認されたことがない建物配置がこの段階に成立する。このようにＢ期の区画南半は、極めて整った建物配置がみられるが、国庁等の正殿域のように正殿に対して左右対称に南北棟の脇殿が並ぶような形態ではない。

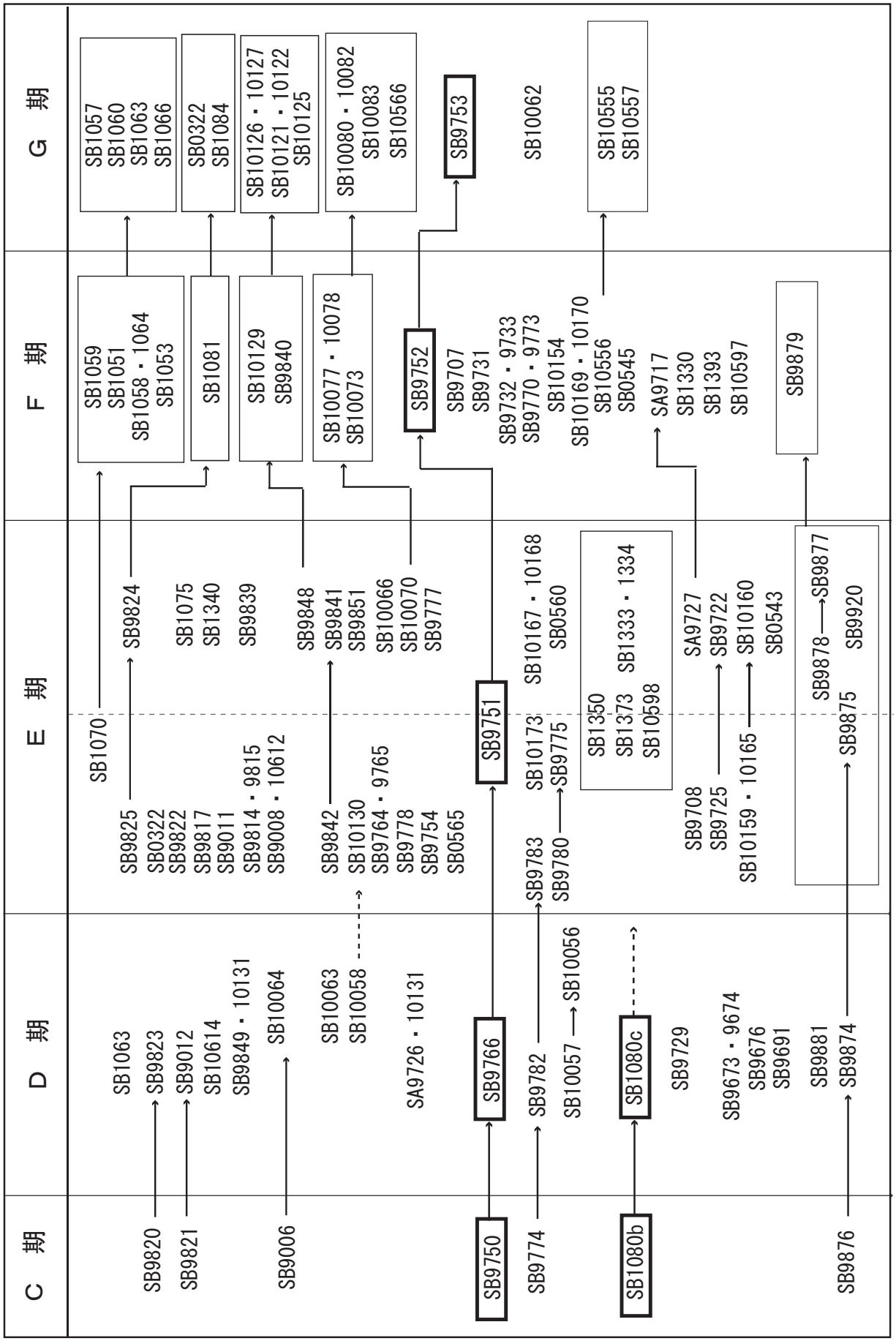
一方、区画北半では顕著な大型建物は無く、3間×2間程度の小規模な東西棟が複数、東西方向に規則的に配置されている。これらは規模や形状から倉庫や雑舎的なものと考えられることから、Ｂ期の柳原区画は南半をハレの場、北半はそれを支える後背的なエリアとして区画全体が一体的に機能するよう再構成されたことがわかる。SD1326は第152次調査区では箱堀状に掘削されていたことを確認しており、方格地割の排水系統でもある区画道路側溝には接続せず、断続的な溝となっていることから、区画施設としてのみ意図されるものだったと考えられる。SD1326は区画の中心であるSB9800の北側と、北半建物群の間隙の部分で切れているため、この部分を通路としていた可能性が考えられ、区画東部の微地形的に尾根状地形となっている箇所が後世の耕作などにより遺構面の削平が進んでいることから、当初は東西対称な形で溝があった可能性がある。

柳原区画の大きな画期であるＢ期の詳細な時期については、区画南半のSB9800・SB1080・SB9003から検討を行った。SB9800はⅠ－4期～Ⅱ－1期の遺物を含むSD9046・SK9805の埋土の上から柱穴を掘削しており、Ⅱ－1～2期の土器を多量に含むSK9786に柱穴を壊されていることを確認している。これにより、SB9800はⅡ－1期～2期の中に存続時期が想定される。

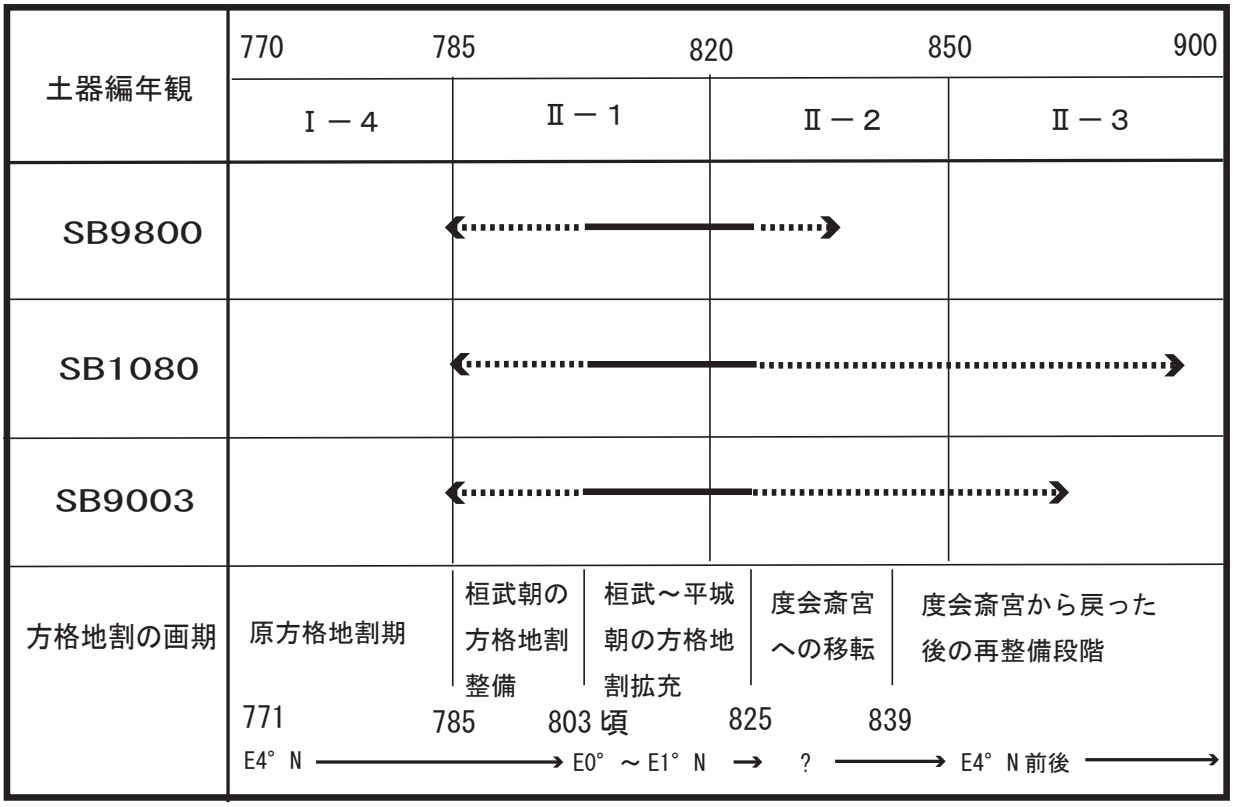
SB1080は、前代のⅠ－4期の遺物を柱穴に含み、棟方向がN4°Wの総柱建物SB1050の柱穴に重複している一方、Ⅱ－2～3期のSK9818に柱穴の一部を壊されている。第3章の遺構の報告の際にも記したが、SB1080は少なくとも同じ位置で5間×2間の身舎の三方向に庇を持つ段階と、庇を消失して5間×2間の建物として建て直された段階（この段階はさらに2時期以上に細分される）に分かれ、庇を有する段階は黒色系の柱掘形埋土からⅡ－1期頃までさかのぼると考えられること、三面の庇出がそれぞれ10尺（3.0m）を測り、これまでの斎宮跡の発掘調査では10尺の庇出を有する建物はⅠ－4期～Ⅱ－1期にしか見つかっていないことから、三面の庇を有する段階のSB1080はⅡ－1期に建築時期が想定される。



第 34 図　柳原区画の建物相互関係図（A 期～ C 期）



第35図　柳原区画の建物相互関係図（D期～G期）

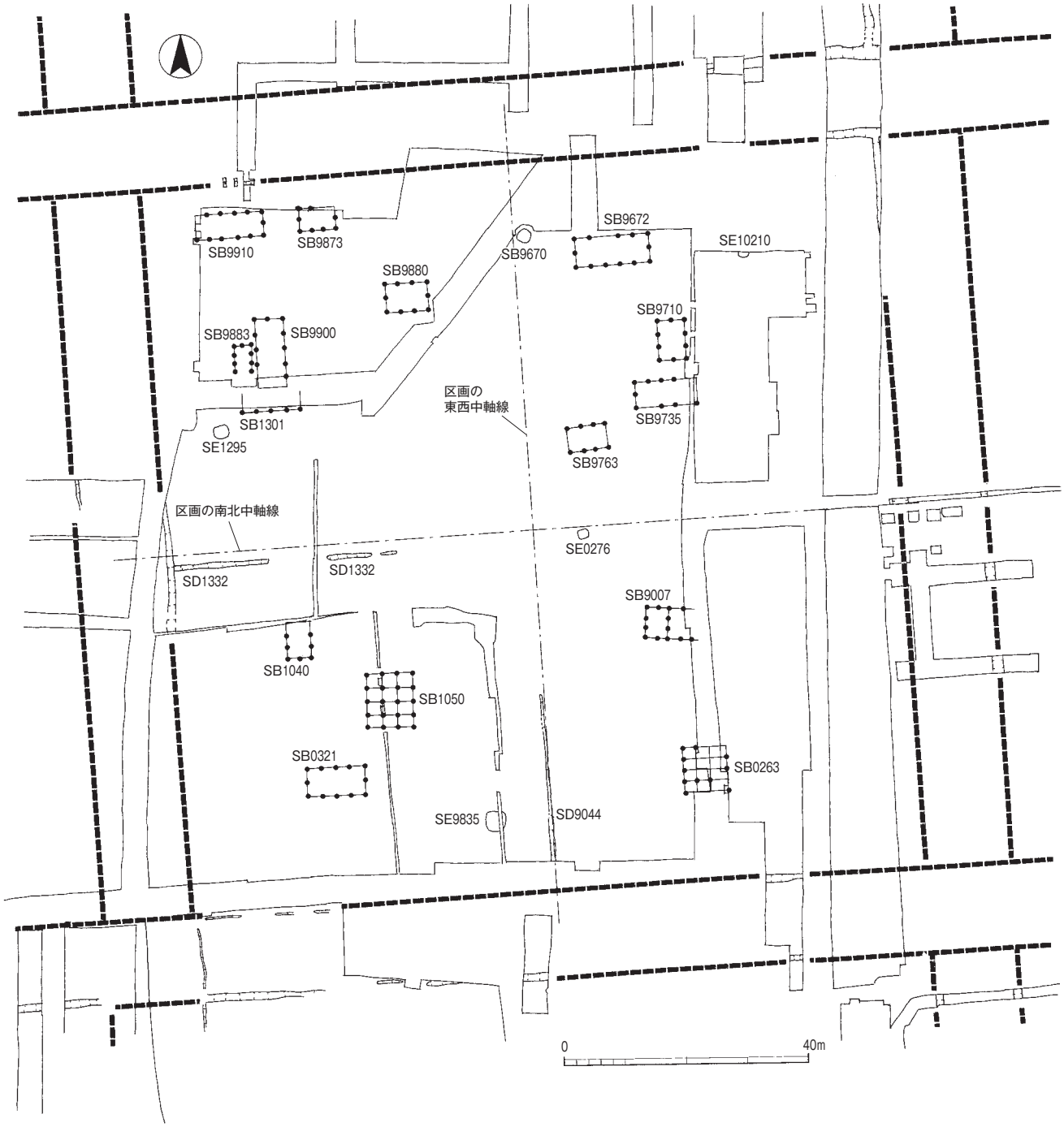


第36図　柳原区画Ｂ期の時期決定

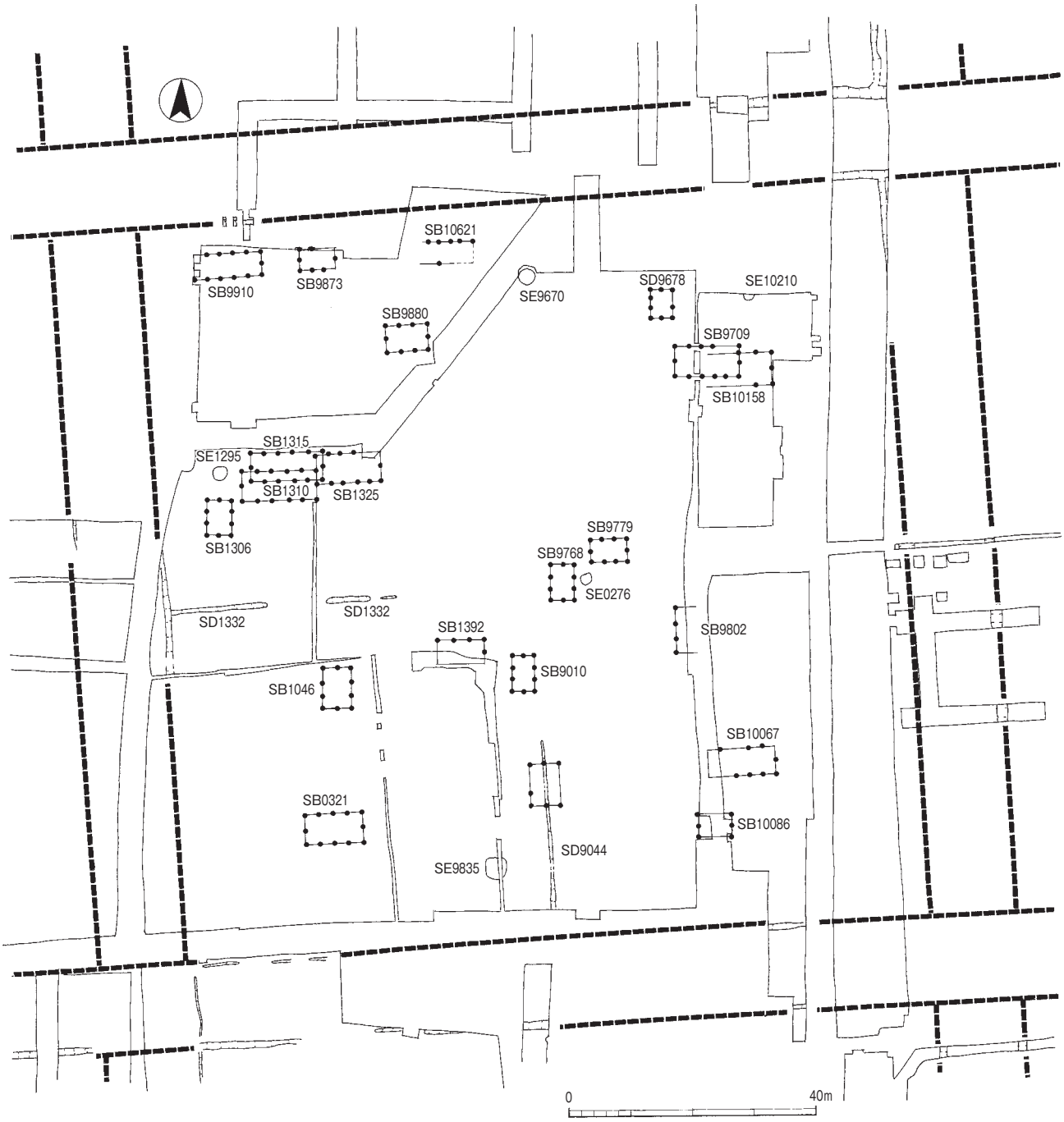
SB9003はⅠ－4期～Ⅱ－1期のSD10140の埋土の上から柱穴が掘削され、Ⅱ－2～3期のものとみられるSB9004が併存不可能な位置にあり、庇出が10尺規模であることから、Ⅱ－1～2期に建築時期を求められるものと考えられる。

これら三棟はいずれも正方位に近い棟方向となっており、方格地割の基軸およそN4° 20′ W前後と一致しない。方格地割はおおむね光仁朝に相当する斎宮跡Ⅰ－4期になって、史跡西部から鍛冶山西区画とその周辺に遷され、その後桓武朝の延暦四(785)年に紀作良を造斎宮長官に派遣された段階から、光仁朝の斎宮を核にした本格的な方格地割の造営が開始されたと考えられている。この段階までは主要な殿舎は方格地割にあわせてN4° 20′ W前後を棟方向の基準としていたと考えられ、A期の遺構の状況はそれを反映しているものと考えられる。またその一方でB期の棟方向のずれも、前段階のものを踏襲しない新たな建物配置の設定によるものと考えられる。

方格地割造営の次の画期として延暦二十二(803)年から大同元(808)年頃の、斎宮寮の増員に伴う機構整備が想定されている。これにより、方格地割は南西に少なくとも四区画分拡張されたと考えられ、これによりそれまでの方格地割内の構造も再編成されたものと考えられる。柳原区画でもA期の一般官衙、曹司的な建物配置がB期に大きく転換したのも、こうした機構整備に伴うものとも推定される。その後、斎宮は天長元(824)年から承和六(839)年まで度会郡離宮院への移転が試みられているが、この段階に相当するⅡ－2期には方格地割の区画道路上に道路機能を損なうような廃棄土坑が多数掘削されており、多気郡の斎宮は本格的に廃止する強い意図があったものと考えられ、この時期に他の区画では類を見ない四面庇付建物を中心とした構成を新たに



第 37 図　柳原区画の建物変遷（A － 1 期）



第 38 図　柳原区画の建物変遷（A － 2 期）

設ける必然性は無いと考えられる。このように見てくると、B期は延暦二十二(803)年頃から天長元年(824)年までのおよそ20年間の間に位置付けることが可能であろう(第36図参照)。方格地割の拡張に伴い、それぞれの区画の機能の再編成も同時に進行したとみられるのである。

(4)C期の主要遺構配置(第40図)

四面庇付建物SB9750が区画の中心建物として建てられる時期である。SB9750はB期のSB9800とほぼ同規模で棟方向もSB9800同様ほぼ正方位である。また、SB9800をそのまま真北に16mほど移したような位置関係にあり、特に西側庇の柱筋はよく揃い、SB9800の位置を十分に意識した上でSB9750が建てられた可能性もある。SB9750の前面にはおよそ20m南まで建物は併存しておらず、B期同様、区画の中心建物(正殿)の前面に広く空間を取っていることがわかる。

区画の中心建物がB期と強い関連性をうかがわせるのに対し、区画全体の建物配置には変化もみられる。B期に区画の北と南を二分していたSD1326は、この段階には埋没しているとみられ、北半には依然3間×2間の小型建物は多いものの、B期ほどは明確な格差はなくなっている。B期のSB9800に対応していた西側の脇殿SB1080は、C期には三面の庇を喪失した形で身舎の部分を建替えて5間×2間の東西棟として残る(柱穴が残らない程度の小規模な濡縁がめぐるような構造であった可能性はある)。南北棟で東面庇を持つSB9003はこの段階では消失しているが、正殿東脇のSB9774や、あるいはSB0260やSB0265などの南北棟がその機能を継続している可能性はある。南面庇建物のSB9005は、これも庇は無くなるがSB9006に機能が引き継がれたものとみていいだろう。ただ、これらの他にもSB9011やSB9821のような東西棟や、SB9820とSB9004のような小型の南北棟など、C期になって新たに現れる建物もある。SB9750の東の東面庇付建物SB9774・10172や区画西側のSB1360・1380、SB1318・1320の建物群も新たに現れた建物構成である。また、建物の棟方向との親和性から区画内の南東部を細分するSA0564をこの段階のものと推定しているが、中心建物SB9750の前面を柵列で区切るのも、C期で現れた要素とみている。同様に区画の南西では、区画を区切る東西溝(第20次調査のSD1044と第152次調査のSD9792)がこの段階の頃に成立するとみられる。B期の建物機能を残しながらも、四面庇付建物の南を別途区切る意識もこの頃からみられるのである。

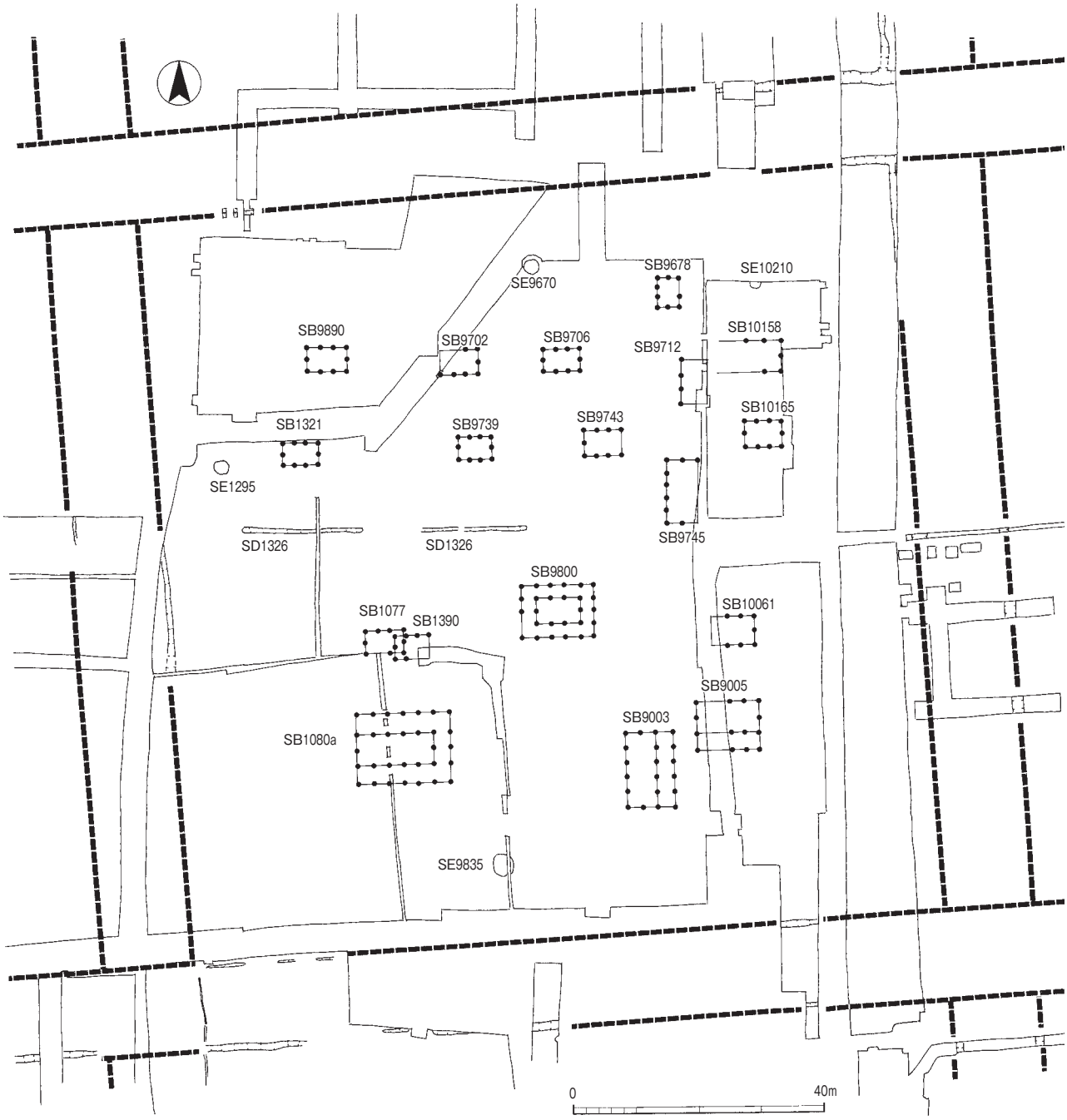
C期は遺構からの出土遺物ではⅡ－2～3期頃に相当するが、B期を斎宮が度会へ移転する直前の段階であるとすれば、承和六(839)年に度会斎宮の火災を受けて、斎宮が多気郡に戻ってからの造営と考えるのが自然であろう。四面庇付建物とその前面の空間を中心とする構成は踏襲しつつも、区画内の建物配置に様々な変化が生じているのは、この地での斎宮の再構築にあたっての様々な事情が反映しているものと考えられる。

なお、C期の建物はN0°～2°Wのほぼ正方位に近いものとN3°～4°Wのものがあり、B期が正方位を基調としていたことから、総じて後者がやや後出するものと考えられる。

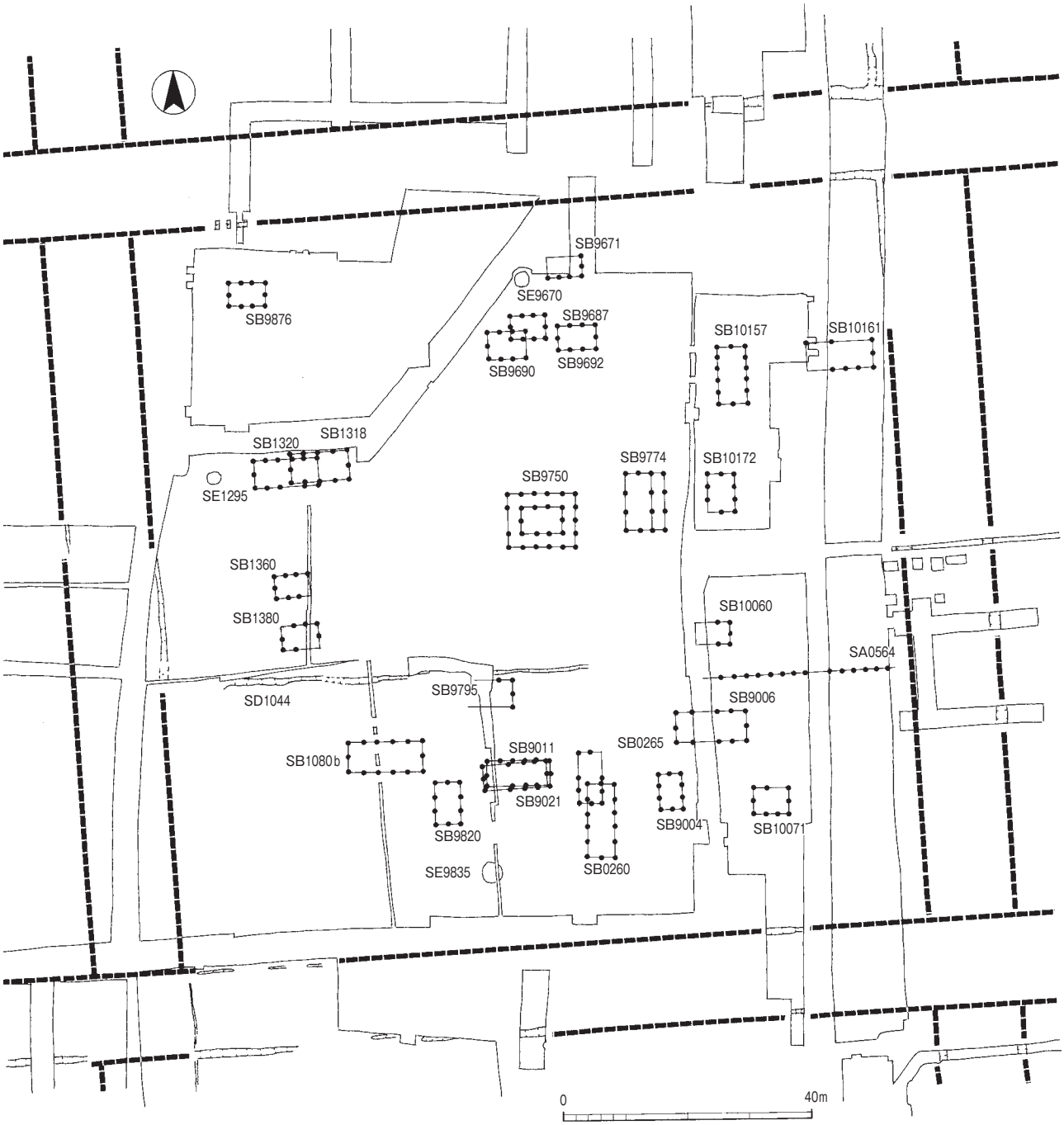
(5)D期の主要遺構配置(第41図)

区画の中心の四面庇付建物がSB9750からSB9766にかわる。両者は柱筋が重なるため、SB9750が解体されたのち建てられたものである。SB9766の前面にも建物の無い空間があり、同様の機能を果たしていたものとみられる。区画南に5間×2間となったSB1080がまだ存続している可能性がある他、区画内の建物配置はC期を踏襲しているように見える。

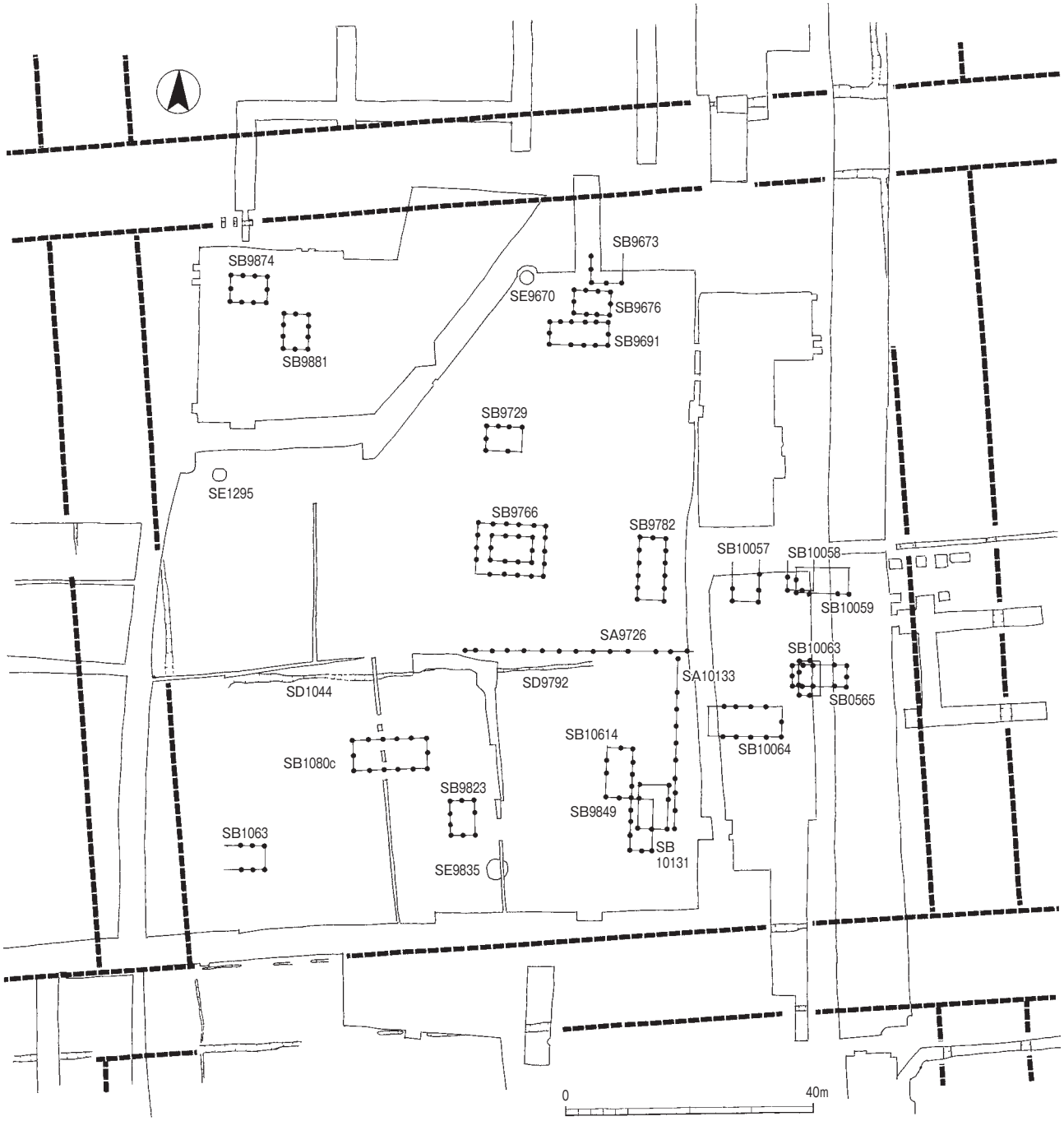
しかし、このSB9766の棟方向はN2°Eとこれまでのものと大きく異なり、これと向きを揃え



第 39 図　柳原区画の建物変遷（B 期）



第 40 図　柳原区画の建物変遷（C 期）



第 41 図　柳原区画の建物変遷（D 期）

る建物は区画の北半や南半にも及んでいる。また、中心建物SB9766の前面を、建物と方向を揃える東西方向のSA9726が通り、これに対して南にほぼ直角に折れるSA10133もあって、区画の中でも南半を意図的に区切る意識が明瞭になる。C期頃からとみられるSD1044とSD9792の溝も残っているものと考えられる。

区画内の建物方向が方格地割の基軸であるE4°Nと逆方向に振れる様子は、東隣の西加座南区画のⅡ－2～3期(SB5830・SB6815など)や西隣の御館区画のⅡ－2期以降にもみられ(SB1000・SB0999など)、これらが同時期のものとすると、D期には方格地割内の建物に一斉に変化があったことになる。D期は土器編年からは斎宮跡Ⅱ－3期を中心とした時期とみられ、9世紀の後半の年代観が想定されるが、現時点ではこうした建物の変化の根拠は明らかではない。

(6)E期の主要遺構配置(第42図)

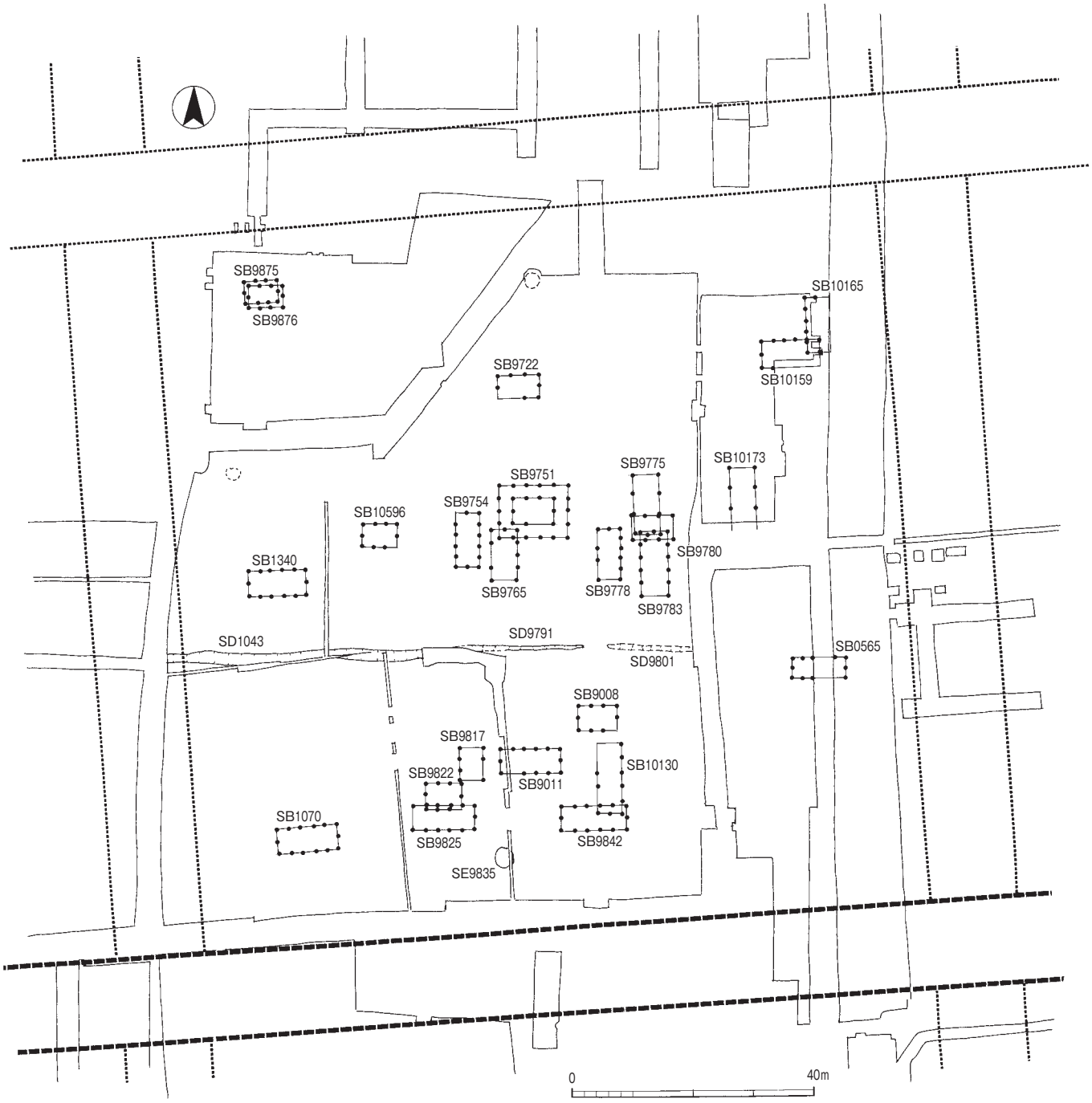
柱穴からの出土遺物から、斎宮跡の土器編年でⅡ－3期からⅢ－1期に位置付けられ、9世紀末から11世紀前葉の実年代観が想定される。区画の中心建物である四面庇付建物はSB9751に建替えられる段階である。D期のSB9766とは柱筋が重なるためSB9766の解体後建てられたものである。また、SB9751に重複するSB9765や、非常に近接した位置にあるSB9754があり、E期の間には区画の中心建物(正殿)が無かった期間があったものとみられる。

SB9751はD期のSB9766がN2°Eと東に振れていたのに対し、N1°Wと正方位に近い棟方向に戻っている。斎宮跡土器編年のⅡ－3期やⅢ－1期に相当する建物には、棟方向が正方位に近いものから方格地割に近いN3°～4°Wものがあり、両者が時期差を反映したものと考えて、E期をE－1期とE－2期の二つの小期に分けて分類した。

E－1期は、中心建物であるSB9751のN1°Wというほぼ正方位に近い棟方向を取る建物群を抽出した。この中には先述の南北棟SB9765のように出土遺物からⅡ－3期頃とみられる建物が、SB9751に重複しており、E－1期の冒頭では四面庇付建物が無かった時期が想定され、もう1小期が設定できる可能性がある。このSB9765は同時期の南北棟SB9778とおよそ13mの間隔をあけて並列するような位置関係にある。同様にSB9751の東側にもSB9775とSB10173のように並列関係の南北棟があり、区画中央部に南北棟が卓越する特異な期間があった可能性がある。

これ以外は、棟方向以外はおおむねD期の建物配置を踏襲している。区画南半を区分するSA9726に代わって、第28次調査区のSD1043、第152次調査のSD9791がE期の頃とみると、やはり区画の南部を区切る意識は強いとみられる。その一方で中心建物SB9751の南面には一定の空間が確保されている。区画南半では、この時期までにSB1080は消失していると考えられるものの、一方で西から5間×2間のSB1070、SB9825、SB9842などの東西棟を中心に区画の南部に並び建てられた様子がみられる。こうした傾向が明瞭になってくるのもこの時期の特徴といえるだろう。また、SB9751の西側や北側、区画の北西隅部にそれぞれ建物のグループが構成されはじめる。

E－2期は基本的にはE－1期の建物配置を踏襲し、明らかに建替え関係がうかがえるものもあるが、SB9751を除き棟方向はN3°～4°Wに振れていくものが多い。SB9751周辺以外の区画南半、区画西部、北西部、北部、北東部のそれぞれの建物グループがE－1期よりも顕著になる。また、柳原区画の成立期より存続していたとみられる井戸の多くはこの時期までに機能しなくなり、この時期までに区画南東部に新たにSE9014やSE0570が設けられる。区画の北を限るSA9727は他の建物との重複からこの段階のものと考えられる。



第 42 図　柳原区画の建物変遷（E － 1 期）

第 43 図　柳原区画の建物変遷（E－２期）

（７）Ｆ期の主要遺構配置（第44図）

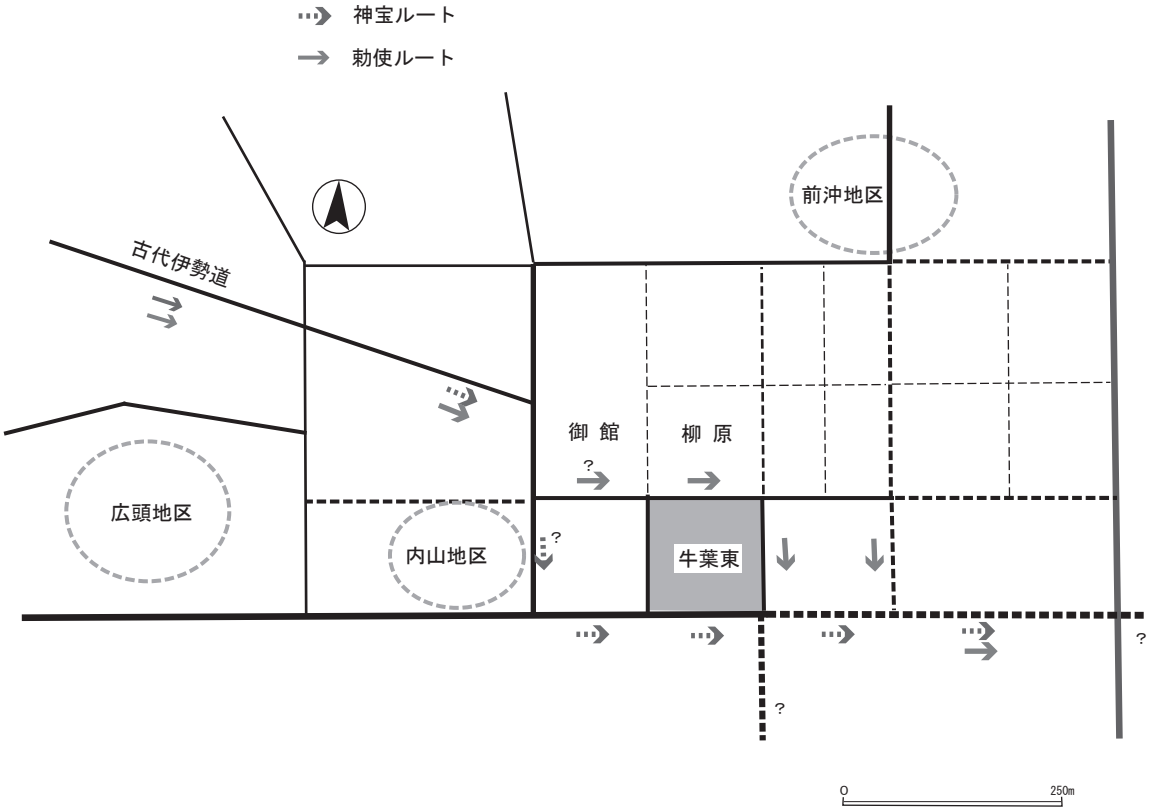
区画中心の四面庇付建物がSB9751からSB9752に建替えられる段階である。SB9752はN4°Wの棟方向をとるが、区画内の建物は正方位に近いものから東で北に7°近く振るものまである。SB9752の南面には広大な空間があり、区画南半、西部、北西部、北部～北東部に建物群が分かれることはＥ期から踏襲している。また区画南面の建物群は、さらに区画南西隅、区画中央西寄り、区画中央東寄り、区画南東４つのグループ5間×2間の東西棟だけでなく、南西隅近くのSB1058と南東隅のSB10077のように南面に庇を持つ建物もあり、南面の区画道路への意識を強くしていることがうかがわれる。

区画北東部のグループはさらに、「L」字形の溝SD9737・9738にSB9733・9770が囲まれるような構造になっている。

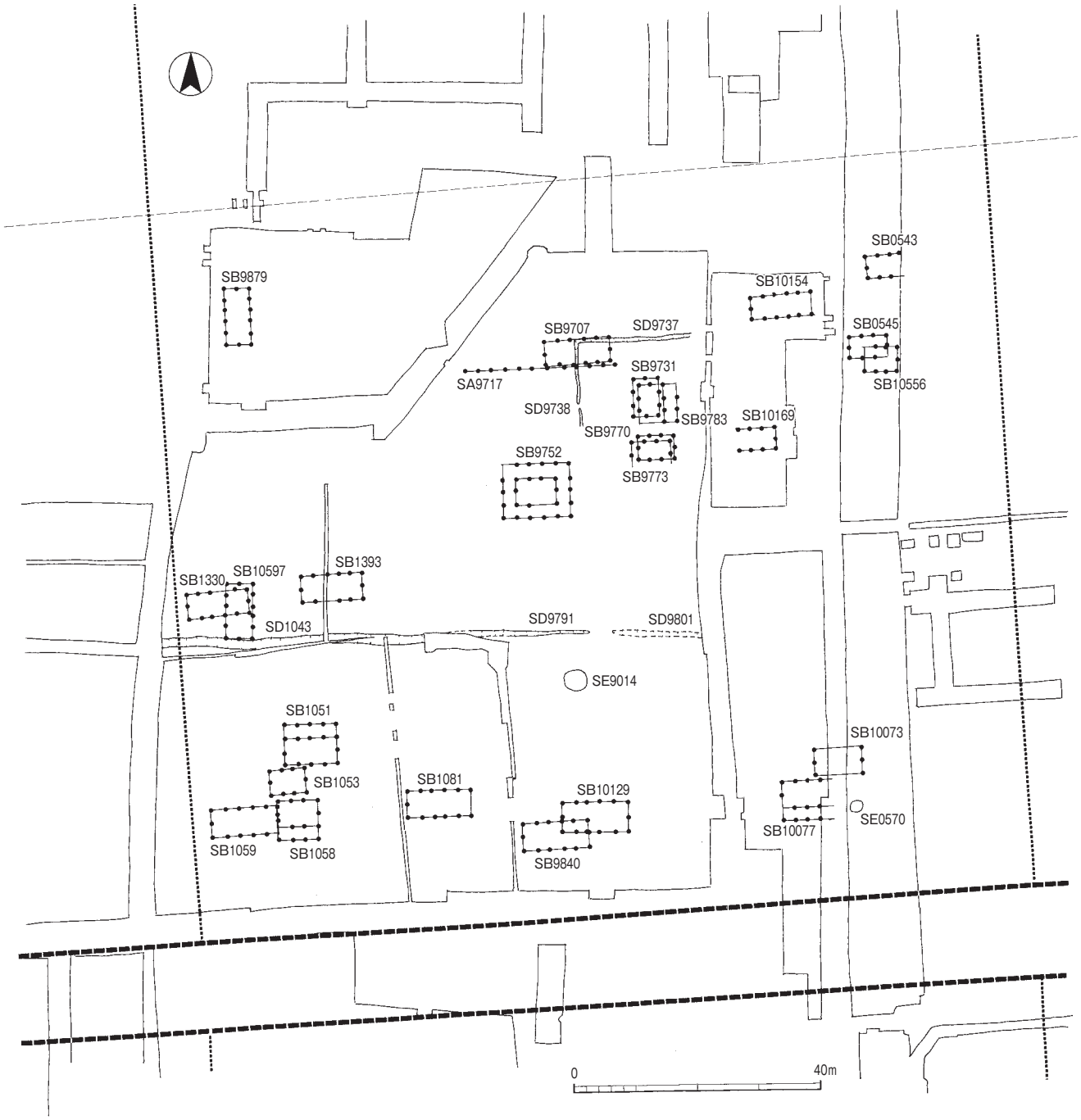
Ｆ期は斎宮跡土器編年でⅢ－2期頃に相当する遺物が柱穴などから出土しており、11世紀の中葉から後葉頃の年代観が与えられる。

（８）Ｇ期の主要遺構配置（第46図）

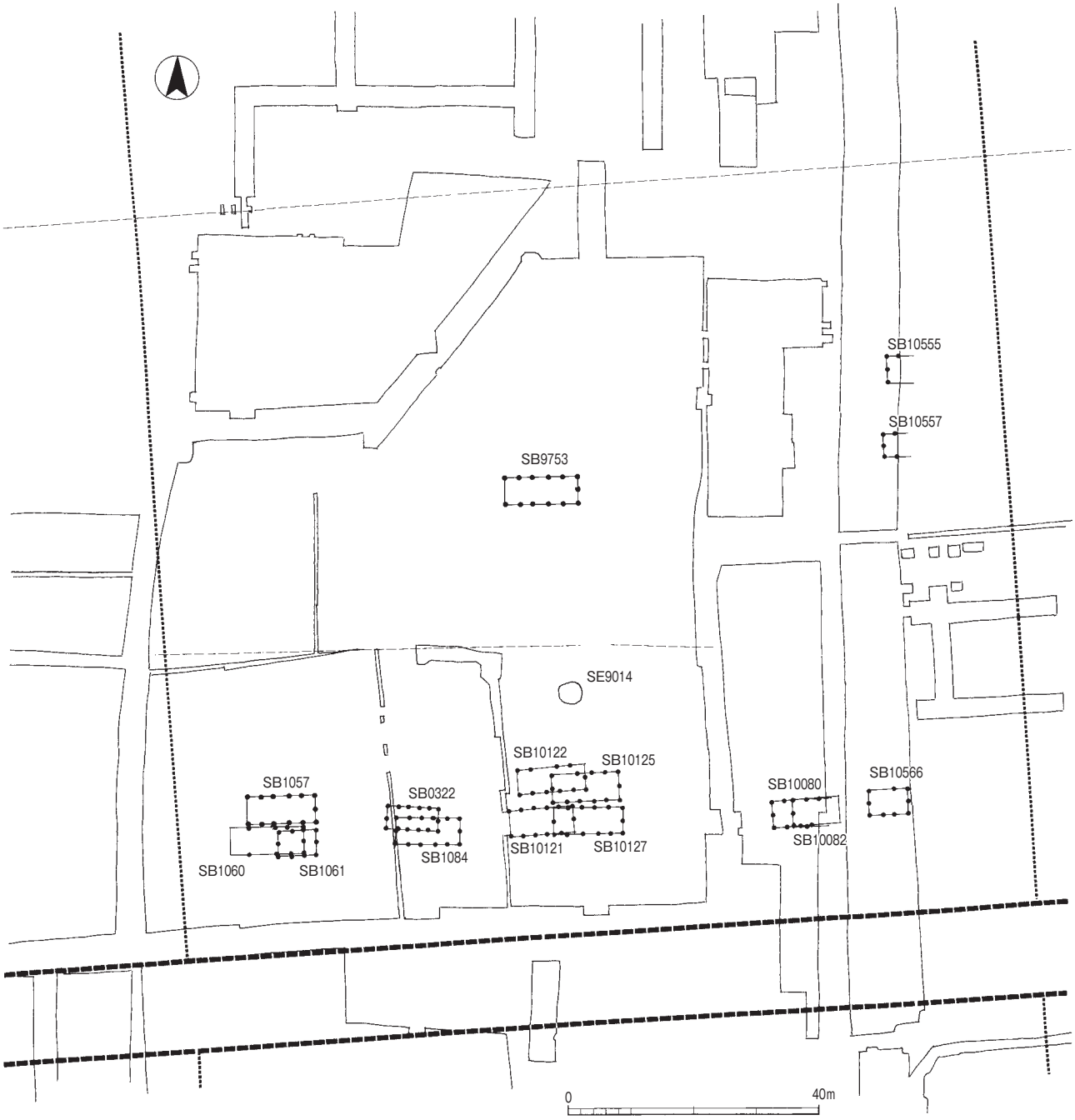
斎宮跡土器編年でⅢ－３～４期に相当し、おおむね12世紀代にあたる。区画の中央から四面庇付建物が失われる段階である。ただし区画中央部には他の建物と独立して5間×2間の東西棟SB9753が建てられ、形式こそ変化するものの建物の機能は継承されている可能性がある。全体的に区画内の建物の密度は低くなり、区画南辺付近以外は小規模な建物が区画東辺付近にわずかにみられるのみとなる。



第 44 図　平安末期の勅使ルート（試案）



第 45 図　柳原区画の建物変遷（F 期）



第 46 図　柳原区画の建物変遷（G 期）

区画の南辺にはＥ～Ｆ期に形作られる４か所に分かれる5間×2間の東西棟を中心とした建物のグループが一層顕著になり、それぞれのグループで数回の建替えが想定される。平安時代後期以降になると、方格地割内でも道路機能が維持される箇所に沿って建物が集中して建てられるという状況が、内山地区、前沖地区や近年では下園東地区でも確認されている。こうした地区で確認される建物群の多くは、小規模なものが不規則に建てられているのに対し、柳原区画ではＥ期以降、5間×2間の東西棟を中心に比較的規則的に配置されている。南接する牛葉東区画が「内院」に推定されることとあわせ考えると、12世紀代の勅使の伊勢下向の記録との関連が注目される。『雅実公記』の長治二(1105)年にみられる「過斎宮寮之間、神寶過南門。予従西路経北路渡東。見物桟敷所々雑人少々、宮寺(？)邊等閑也。」(1)や、『中右記』永久二(1114)年にみられる「午刻過斎宮北面方、神寶過南門前。斎宮女房立車見物。」(2)に現れる「内院」の北側を通り、勅使が通過する斎宮北路は、幅員が狭いと考えられる方格地割北辺道路や12世紀には道路の存在も不明瞭な柳原区画北辺道路でなく、この柳原区画南辺道路であった可能性が最も高いと考えられ、当時の斎宮の幹線道路であったとみられる柳原区画南辺道路に沿った部分にだけ建物が建てられている状況は、まさに「宮寺(？) 邊等閑也」という表現にあたるものと考えられる(第45図参照)。

註

(1)『雅実公記』長治二(1105)年8月　勅使 源国信

(2)『中右記』永久二(1114)年正月　勅使 藤原宗忠

(９)遺構の変遷からみた柳原区画の画期と特徴

以上、柳原区画の主に建物配置からみた変遷をＡ～Ｇ期の７つの段階を設定して報告を行ったが、そこから明確になったこの区画の画期と特徴を整理したい。

1)柳原区画の画期

①柳原区画第一段階

Ａ期がこれに該当する。方格地割の整備にあわせて柳原区画も形づくられ、地割の基準軸であるE4°20′Ｎ前後の棟方向を持つ建物が建てられる。区画内はさらに均等に４分割され、それぞれに倉庫とみられる総柱建物や大型掘立柱建物、それに伴う建物、井戸が等質的に配置される。この段階の柳原区画は曹司的な性格を持っていたものと考えられる。

②柳原区画第二段階

Ｂ期がこれに相当する。第一段階から一転して、区画中央部の四面庇付建物SB9800を正殿として、その南側に西に三面庇付建物SB1080、東に東面庇を持つSB9003と南面庇を持つSB9005が脇殿として建てられ、正殿の南面にはこれらの建物に囲まれた空間が設けられる。

区画北半には3間×2間の東西棟を中心に比較的小型の建物が東西方向に並列するように建てられ、この段階には区画を「ハレ」の空間の南半と後背的な北半に分けて整備される。建物の棟方向は正方位に近いもので、方格地割の基準線からはやや振れている。出土遺物や遺構の重複関係などから、延暦二十二(803)年頃から天長元年(824)年までの、斎宮の機構整備とそれに伴う方格地割の拡充にあわせて大規模な再整備が行われたものと考えられる。

③柳原区画第三段階

Ｃ～Ｆ期がこれに相当する。区画中央部に、前段階から北に約16m付近に四面庇付建物が建替

えられ続け、その南面に建物のない空間を持つ点では第二段階と同じだが、第三段階からは四面庇付建物は重複した位置に建替えられる。また、前段階には明瞭に認められる区画の北半と南半を分ける構造は、C～D期頃には建物配置にそうした意識がやや見受けられるもののE期までにはほぼ無くなり、第三段階では区画の中央部以外は南半部、西部、北西部、北部～北東部にそれぞれ建物のグループを形成していく。特に区画南半では柵列や溝で区切られた範囲内に、区画南辺道路に沿って、5間×2間の東西棟が並びたてられる様子は、他の区画ではみられない建物配置である。この南辺道路に沿った建物群は大きく４つのグループに分かれていく。

天長元(824)年に度会郡離宮院に斎宮が移転した斎宮が、承和六(839)年に多気郡に復してから、11世紀代まで段階である。

④柳原区画第四段階

G期がこれに相当する。区画中央の四面庇付建物が消失する段階である。ただし、区画中央には四面庇付建物を踏襲する位置に5間×2間の東西棟SB9753が建てられ、機能は継承している可能性がある。区画内の建物は激減するが、前段階から引き続いて区画南辺道路に沿って、5間×2間を中心とした東西棟が４つのグループを形成している。おおむね12世紀代に相当するとみられるが、柳原区画はこの段階を最後に斎宮跡Ⅳ期にまで入るとみられる建物遺構は明らかになっておらず、この間段階を境に区画の機能は終焉したものと考えられる。

2)柳原区画の特徴

このような区画の変遷・画期を踏まえたうえで、斎宮方格地割における柳原区画の遺構上の特徴を遺構の検出状況とあわせて改めて整理すると下記のようなものが挙げられる。

・　方格地割の創成期から平安時代を通して区画としての形態を維持し機能している。
・　第1段階(A期)を除き、B期の区画再構成以後は区画中央部に四面庇付建物やその機能を継承したと考えられる中心建物が設置され続ける。
・　区画中央の四面庇付建物は少なくとも５回にわたり建替えられるが、基本的に規模・形状を変えていない。またその南面には常に一定の空間が確保されており、南を正面とする意識がうかがわれる。
・　区画中心建物の他にも三面庇付建物をはじめ、庇付建物を比較的数多く検出している。
・「内院」や南西隅の木葉山西区画と異なり、大型の掘立柱塀や築地・土塁などの囲繞施設は確認されていない。
・　第三段階C期頃から、区画南辺道路を意識した建物配置がみられ、平安時代の終わりまでそれは継続する。この範囲は柵列や溝により明確に区切られたものである。
・　土器類の廃棄土坑は各時期にみられるが、「内院」でみられるような供膳形態の土師器を中心とした祭祀的な色彩が想定される土師器廃棄土坑はない。
・　区画内に火気の使用をうかがわせる遺構はⅠ－4期のSK9941などを除くと検出されていない。煮炊具である土師器甕の出土は多くない。また、区画内で多量の土器が出土した土坑は、斎宮跡土器編年のⅡ期では区画中央の四面庇付建物や三面庇付建物の周辺、Ⅲ期は区画南西部と南東部の区画南辺道路に沿った建物の北側にみられる。区画の北半にも各期の土器を出土する土坑はあるが、いずれも小規模である。

以上の特徴を踏まえて、次に斎宮における柳原区画の機能について検討を進めたい。

第２節　四面庇付建物の検討

（１）斎宮跡の多面庇付建物

柳原区画において、遺構から認められる最大の特徴は、斎宮跡Ⅰ－4期からⅡ－１期初めころを除き、区画の中心に四面庇付掘立柱建物が建替えを経ながらⅢ－2期頃まで存続し、一定の機能を持続させていたと考えられることにある。また、最も区画が整備されたと考えられるⅡ－1期のSB9800を中心とする段階では、「内院」である鍛冶山西区画のSB7950（第119次調査）を除けば、方格地割内で最大の規模を持つ三面庇付建物SB1080や、大型の柱掘形を持つ東面庇付建物SB9003、南面庇付建物のSB9005といった庇付建物が区画の中央で建物群を構成するような状況は、斎宮跡のこれまでの発掘調査では知られていない。さらにこのⅡ－1期頃だけでなく、Ⅲ期にもSB1058、SB9733、SB10077といった庇付建物が顕著となる段階がある。

斎宮跡の特に方格地割内での庇付建物の検出状況を確認するため、二面以上の多面庇付建物を第8表に抽出した。方格地割の他の区画は、多画の庇を有する建物が一時的にみられても、平安時代の中で区画内の建物構成を変化させていくのに対し、柳原区画では四面庇付建物とその前面に正面性を意識した空間が存続し続ける点は他の区画には見られない大きな特徴である。

このような点からも、第二段階以降の柳原区画は方格地割の中にあっては曹司等の一般官衙とは異なるものであったと考えられる。

（２）文献に現れる斎宮の建物名称

次に、柳原区画の四面庇付建物の性格を検討するために、これまでに知られている文献に著さ

第８表　斎宮跡の多面庇付建物一覧

遺構番号	調査次数	区画名	全体規模				身舎の規模				庇の規模		時期
			規模(間)	棟方向	桁(m)	梁(m)	桁行(m)	梁間(m)	柱掘形(m)	柱痕跡(cm)	庇出(m)	庇面数	
SB7950	119	鍛冶山西	6×4	E4°N	17.7	10.8	2.95	3.0	一辺1.3～1.5	径45	北2.1 南2.7	2	Ⅰ-4
SB7918	119	鍛冶山西	6×3	E4°N	14.4	8.4	2.4	2.7	一辺1.0～1.2	径35	南3.0 東西2.7	3	Ⅱ-1
SB7919	119	鍛冶山西	5×4	E4°N	12.0	11.4	2.4	2.7	一辺1.0～1.2	径35	南北3.0	2	Ⅱ-1
SB1430	29・109	鍛冶山西	6×3	E4°N	15.0	8.4	2.4	2.7	一辺1.1～1.3	径40	西3.0 南3.2	2	Ⅱ-2
SB6732	98	鍛冶山西	4×3	E5°N	8.0	7.0	2.0	2.3	一辺0.5	径30	南西2.4m	2	Ⅱ-4
SB1080	20・153	柳原	6×4	N1°30′W	15.0	10.8	2.4	2.4	一辺1.1～1.2	径30	東南北3.0	3	Ⅱ-1～2
SB9800	8-10・152	柳原	5×4	N1°W	11.25	8.4	2.25	2.1	一辺0.5～0.6	径20強	東西2.25 南北2.1	4	Ⅱ-1～2
SB9750	152	柳原	5×4	N1°W	10.75	8.6	2.15	2.15	一辺0.6～0.7	径20強	四方2.15	4	Ⅱ-2～
SB9751	152	柳原	5×4	N1°W	11.25	8.6	2.25	2.15	径0.6	径20強	東西2.25 南北2.15	4	Ⅲ-1～2
SB9766	152	柳原	5×4	N2°E	10.75	8.4	2.15	2.1	径0.5	径20弱	東西2.15 南北2.1	4	Ⅱ-2～3
SB9752	152	柳原	5×4	N4°W	10.75	8.6	2.15	2.15	径0.5	径20強	四方2.15	4	Ⅲ-2～
SB1000	8-9・19	御館	6×3	N0°	15.0	7.9	2.4	2.4	一辺0.7～1.0	不明	東南3.1	2	Ⅱ-1～2
SB1438	34	西加座南	5×2	E4°N	11.5	4.2	3.0/2.5	2.1	一辺0.8	不明	東西3.5	2	Ⅱ-2頃
SB5815	83	西加座南	6×3	E3°S	12.2	4.6	2.44	2.3	一辺1.0	不明	南2.8 東3.0	2	Ⅱ-2
SB5830	83	西加座南	5×4	E3°S	12.0	4.6	2.4	2.3	一辺1.0	不明	北2.9 南2.6	2	Ⅱ-2
SB6423	90	西加座北	3×4	N2°E	5.8	3.8	1.9	1.9	径0.3	不明	西1.8 東2.4	2	Ⅲ-2
SB3218	51	西加座北	4×3	N0°	5.8	4.3	1.93	2.15	径0.5	径20	北2.1 西2.5	2	Ⅱ-4
SB5323	79	東加座北②	4×4	E4°S	9.2	8.3	2.33	2.15	一辺0.3～0.5	不明	南北2.0 東2.2	3	Ⅱ-4
SB5272	78	宮ノ前南	6×3	E12°S	13.7	7.1	2.2	2.2	一辺0.8	径30	南西2.7	2？	Ⅱ-3
SB7880	118	宮ノ前南	5×5	E4°N	11.8	11.3	2.36	2.27	一辺0.6	径20	北2.1 南2.41	2	Ⅰ-3
SB7870	118	宮ノ前南	6×3	E3°N	13.5	6.3	2.24	2.25	一辺0.4～0.5	径20～25	南1.8 西2.3	2	Ⅲ-1
SB7897	118	宮ノ前南	6×2	N5°W	12.6	4.2	2.1	2.1	一辺0.45	径15～20	南北2.1	2	Ⅲ-1

第９表　文献に現れる斎宮の建物名称

番号	地区名	建物名	その他（空間・エリア等）	年号(西暦年)	出　典
1		大盤所		弘仁五(814)年	太神宮諸雑事記
2		官舎		承和六(839)年	続日本紀
3		官舎		貞観九(867)年	日本三代実録
4		雑舎		元慶五(881)年	日本三代実録
5	内院・中重	宮の南門・大垣・大庭・厨家・諸司雑舎・内院神殿・寝殿・出居殿	溝隍	延喜五(927)年	延喜式
6	寮庁	台盤所	斎の遣水・みかはの池	天慶年間(938～)	斎宮女御集
7		斎宮南門		応和二(962)年	太神宮諸雑事記
8		雑舎		天元四(981)年	日本紀略
9			斎宮のやり水	正暦二(991)年以前	夫木和歌集
10		**寮頭館**の禿倉		長元四(1031)年	太神宮諸雑事記
11		**御勅使房**		長暦二(1038)年	春記
12		蔵部司倉		長暦四(1040)年	春記
13		**御匣殿**		寛徳二(1045)年	太神宮諸雑事記
14	垣外	**御汗殿**	竹河の祓・斎宮西鳥居・覆館司	永承三(1048)年	太神宮諸雑事記
15		**駅館院**		永承四(1049)年	太神宮諸雑事記
16		南門		天喜五(1057)年	太神宮諸雑事記
17		**御汗殿**		康平三(1060)年	太神宮諸雑事記
18	内膳炊部司	**御匣殿・進物所**		康平六(1063)年	太神宮諸雑事記
19	斎宮の西陣	内面妻戸の下板敷・**進物所**	南面御前・西面	治暦二(1066)年	太神宮諸雑事記
20		北門・殿屋		承保元(1074)年	径信郷記
21		中・外院の殿舎・舎屋		承暦年間(1077～1081)	太神宮諸雑事記
22		斎宮南門		寛治四(1090)年	江記
23		斎宮の南門・西中門・坤角戸口垂板敷・東廊		寛治六(1092)年	江家次第
24		寮の南門・宮殿		長治二(1105)年	勅使部類記
25		寮の南門・御殿の東庇		嘉承二(1107)年	勅使部類記
26		斎宮南門	北面	永久二(1114)年	中右記
27		内院中御殿		天承二(1132)年	山塊記
28		内院神殿		天養元(1144)年	本朝世紀
29		内院殿舎・門・築垣	鳥居	仁平三(1153)年	皇大神宮禰宜補任次第
30	内院・中院・外院			保元頃(1156～)	新任弁官抄
31		**寮頭館**		承安二(1172)年	百錬抄
32	内院・中院・外院			文治三(1187)年	類聚大補任
33		宣旨曹司		建久二(1191)年	都玉記
34		井		建久二(1191)年	文保記
35	内中院			建仁元(1201)年以前	類聚大補任
36			南庭	鎌倉初期	神宮雑例集
37	内中外院			承元三(1209)年	神宮年表
38	中院			建保七(1219)年以前	嘉元二内仮遷
39		**頭宿館**		承久三(1221)年	類聚大補任
40	中院			安貞二(1228)年以前	類聚大補任
41	中院			延応元(1239)年以前	類聚大補任
42		**御櫛笥殿**		仁治三(1242)年	百錬抄
43		**頭宿館**		仁治三(1242)年	類聚大補任
44		**御汗殿・頭宿館**		文永九(1272)年	類聚大補任

れた斎宮の建物の表記を第9表のとおり整理した。

繰り返し述べているように、「内院」は鍛冶山西区画と牛葉東区画と推定しているので、「寝殿」「出居殿」「内院神殿」「内院中御殿」「内院殿舎」は該当しないとみられる。次に柳原区画の建物構成や建物の格式に相応しいと考えられるものとして、斎宮寮頭に関連する「寮頭館」「頭宿館」が、斎王や近侍の女官に関連するものとして「御匣殿」「御櫛笥殿」「御汗殿」「進物所」が、その他のものとして「御勅使房」「駅館院」があげられる。これらの建物名称は柳原区画の基本的な構成が確立する９世紀まで遡るものはないが、いずれも斎宮の基本的な機能に関わる性格のものと考えられるため、柳原区画がこれらのうちいずれかの機能を備えていた可能性はあると考えられる。このうち「御匣殿」「御櫛笥殿」は平安宮では内裏北部の貞観殿に置かれ、女官が天皇の装束の調整や身の回りの奉仕を行う場所であり、また斎宮にあっては『太神宮諸雑事記』や『百錬抄』等には斎王が退下するのにあたり一時的にここに遷ったとしている(1)。「進物所」は宮中では内裏南西隅にあり、天皇への供御の準備等を行い、食器の保管なども行う内廷的な所、「御汗殿」は斎王の月の障りにあたって一時的に退去する建物を指すため、これらの建物の性格や平安宮内での事例から「内院」内に設置されるものと考えられ、またＢ期の建物配置のように区画一つをこれに充てるような性格のものではないと考えられるため除外してよいだろう。

註

(1)『太神宮諸雑事記』康平六(1063)年五月廿六日

『百錬抄』仁治三(1242)年正月十一日

『類聚大補任』文永九(1272)年七月

(３)四面庇付建物の全国事例との比較

柳原区画の四面庇付建物の性格を考えるため、他の遺跡での四面庇付建物の状況と比較してみたい。平成24年に刊行された全国の四面庇建物の集成(1)によると、国衙・郡衙等の行政施設の正殿、仏堂、国司館、京内邸宅などに想定された事例がある。

このうち行政庁の正殿としては、四面庇付建物に対応する脇殿の構成が非対照的であったり、正殿に直交する配置ではなく、この区域を囲む築地や塀などが無い事から同様のものとは考え難い。また仏堂というのも斎宮の性格や、「内院」に近接した位置関係から該当しないと考えられる。国司館は「寮頭館」「頭宿館」との比較対象になる。全国的には四面庇付建物を有する国司館と推定される事例には第10表のようなものがある。他にも下野国府介館推定地(第25・26・27次調査区)や、肥前国府の国司館と推定される久池井Ｂ遺跡のように三面庇付建物や南面庇付建物を主殿としている事例もある。

これらの国司館と推定される遺構は国衙政庁域から離れた場所に一定程度の空間を占拠しており、主殿は三面ないし四面の庇付建物であることが多く、それに付属する脇殿や雑舎がみられる(2)。こうした点は柳原区画も共通しており、柳原区画の建物群は国守クラスの館と比較しても遜色はなく、国守同様、五位相当官であった斎宮寮頭に関わる施設と考えることは十分可能である。

しかし、国司館の存続期間については9世紀から10世紀の中に納まるものが多く、それぞれ長くとも数十年から百年程度の存続期間であることや、全国的にみて10世紀頃から国衙政庁域は衰退し、国衙機能は国司館に集中していったと考えられていることから、国司館は国府域の中で移

第 10 表　国司館の四面庇付建物

遺跡名	地区名	所　在	遺構名	正殿規模	時　期	備　考	文　献
館前遺跡	―	宮城県多賀城市	SB02	7間×4間	9世紀後半	多賀城政庁南東の方格地割内	『館前遺跡－昭和54年度発掘調査報告』多賀城市教育委員会 1980
山王遺跡	千刈田地区	〃	SB474A～D	9間×4間	10世紀前半	多賀城政庁南西の方格地割内	『山王遺跡ほか－発掘調査報告書－』多賀城市埋蔵文化財調査センター 1993
市川橋遺跡	―	〃	SB1880	5間×4間	9世紀後半～10世紀	多賀城政庁南	『市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅲ－』多賀城市埋蔵文化財調査センター 2004
市川橋遺跡	―	〃	SB1881	7間×4間	9世紀後半～10世紀	多賀城政庁南	〃
下野国府	第2･3･5次調査区	栃木県栃木市	SB006A･B	5間×4間	10世紀以降	三面に孫庇	『下野国府跡Ⅰ　昭和51～53年度発掘調査概報』栃木県教育委員会 1979
下野国府	第2･3･5次調査区	〃	SB007	5間×4間	10世紀以降	三面に孫庇	〃
下野国府	第2･3･5次調査区	〃	SB009A･B	8間×4間か	10世紀以降	南北棟、南側未検出	〃
武蔵国府	国衙北方地区	東京都府中市	SB12	6間×4間	10世紀前半	国衙域北	『武蔵国府関連遺跡調査報告17 －国府地域の調査15－』府中市教育委員会ほか 1996
武蔵国府	御殿地地区	東京都府中市	SB5	7間×6間	7世紀末葉～8世紀前半	国衙域南西	『武蔵国府関連遺跡調査報告47 －国府地域の調査33－武蔵国衙跡（御殿地地区）』府中市教育委員会ほか 2012
武蔵国府	府中本町地区	東京都府中市	SB1	5間×4間	9世紀	国衙域西南西	『平成7年度府中市内発掘調査概報』武蔵国府の調査25 府中市教育委員会ほか 2004
武蔵国府	府中本町地区	東京都府中市	SB4	5間×-間	9世紀	国衙域西南西	〃
武蔵国府	府中本町地区	東京都府中市	SB6	-間×5間	9世紀	国衙域西南西	〃
武蔵国府	府中本町地区	東京都府中市	SB7	5？間×4間	9世紀	国衙域西南西	『武蔵国府関連遺跡調査報告書　プラウドシティ府中建設に伴う事前調査』株式会社盤古堂 2008
出雲国府	大舎原地区	島根県松江市	1号b	7間×4間	9世紀後半～10世紀	政庁北、介館か	『史跡出雲国府跡1』風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書14 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター 2003
出雲国府	大舎原地区	島根県松江市	4号b	7間×4間	9世紀後半～10世紀	政庁北、介館か	〃
周防国府	築地地区	山口県防府市	SB6460	7間×4間	10世紀後葉～11世紀初	政庁南、南北棟	『周防国府跡第98次発掘調査概要』防府市教育委員会ほか 1998
築後国府	ギヤクシ･風祭地区	福岡県久留米市	SB26	5間×4間	9世紀後半	Ⅱ期国庁南東	『筑後国府跡－平成12･13年度発掘調査概要報告－』久留米市教育委員会 2002

動を繰り返している可能性がある。また国司館には建物配置や主殿前面の広場の有無、周辺・背後の附属建物の在り方や、また築地・塀・溝などの区画施設の有無などの違いがあり、主殿の型式以外はあまり一定のパターンは無いようにみえる。また、主殿の建替えの状況も遺跡ごとに異なる。この点、柳原区画の主殿が9世紀から11世紀までの長期にわたり、同一の場所で同一の規模・形式を保つのは全国的にみても特徴的といえるが、一方で主殿の規模は国司館の事例と比較すると規模が小さく、9世紀段階にはしばしば伊勢国司を兼任した斎宮寮頭の館とは断定しがたい。さらに介以下（官位四位以下）の館に一町規模の占地の事例はない。そもそも斎宮の方格地割は都城での京域にあたるものではなく、「内院」の他、斎宮寮や各司の施設が設置される宮域に相当するものと考えられているため、全国の国衙と国司館の位置関係から見てもこれは当たらないものと考えられる。

同様に時期的に平行する長岡京や平安京内の邸宅と比較してみても、長岡京左京二条三坊十五町、平安京右京六条一坊五町、平安京右京一条三坊九町、平安京右京三条二坊十六町等で、一町規模の宅地の様子が分かっている事例と比較すると、主殿と脇殿・対屋の位置関係や、大型の建物を配した「ハレ」の場と小型建物の後背的な場を分けるなど、柳原区画の第二段階（B 期）に共通する建物配置を見出すことができる。しかしその一方、主殿が同一形式・規模で建替えられた事例は無く、柳原区画の中に生活空間的な遺構や遺物が見られないことから、やはり国司館との比較と同様、柳原区画は「邸宅」「居館」として位置付けるのには躊躇され、斎宮寮頭らの日常的な生活の場としての「寮頭館」や「頭宿館」とは考えにくいと思われる。

次に「御勅使房」と「駅館院」について検討すると、この名称が史料に現れるのは11世紀以降だが、『春記』に現れる「御勅使房」は、群行の末斎宮に到着した良子斎王の一行に対して、伊勢守より日次が悪いため、斎王に一旦「御勅使房」に入ってもらい、翌日御本宮(内院)に入るよう申し入れられていることから[3]、緊急の措置とはいえ「御勅使房」は常置されており、斎王が仮にも坐するための最低限の格式はあったことがうかがわれる。

「駅館院」については、『太神宮諸雑事記』に斎王の神宮参宮にあたって神宮禰宜等の起こした「乱行」について、勅使左少弁藤原泰憲らが斎宮「駅館院」において神宮の祭主・宮司・神主を召喚して事情聴取を行った記事がみられる[4]。

一方『更級日記』には、万寿二(1025)年に御裳着の勅使として斎宮を訪れた源資通が、「内院」に程近い場所に滞在しているとうかがえる記事があり[5]、フィクションの可能性はあるものの、9世紀後半に成立する『伊勢物語』にも狩の使(勅使)が、斎王のいる「内院」に近い場所に滞在しているイメージが描かれている[6]。しかし「御勅使房」「駅館院」のいずれにしても、一町規模の方形区画を占地するものではないため、あるいは柳原区画内の一部の建物やエリアがそれに充てられたりする可能性が考えられるにとどまる。

四面庇付建物を中心とした特異な構成や「内院」に北接し、方格地割内でも平安時代後期には衰退してほとんど遺構がみられなくなる区画があることと鑑みて、斎宮内における一般的な司が設置された場とも考えがたい。柳原区画で第二段階から第三段階(あるいは第四段階まで)、区画の中央に寮頭クラスの格式を持つ建物とその前面の空間の維持に重要性を持つ施設であったことを考えると、柳原区画は斎宮寮の実務行政的な性格や「寮頭館」というよりは、寮頭の管轄下に置かれ、主殿と前面の「ニワ」的な空間による寮の政治的･儀礼的な空間として機能した「寮庁」の施設と考えるのが最も妥当と考えられる。柳原区画は第二段階以降、正殿たる四面庇付建物とその前面の空間「ニワ」は維持され続けていることや、区画の南面道路を意識した建物配置を続けている事などは、「内院」に次いで斎宮にとっての本質的な意義を持った空間であった証左であると考えられる。

註

(1)『第15回古代官衙・集落研究会報告書　四面廂建物を考える』独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所2012

(2)田中宏明『国司の館』学生社2006

(3)『春記』長暦二(1038)年九月廿八日

(4)『太神宮諸雑事記』永承四(1049)年九月

(5)『更級日記』六十八の中

(6)『伊勢物語』第六十九段

第３節　四面庇付建物を中心とした建物配置の成立背景

（１）９世紀の斎宮を取り巻く状況～桓武朝の政治と斎宮寮

八世紀中盤、孝謙・淳仁朝の斎宮寮についてはわからない点が多く、称徳朝には斎王は置かれなかった可能性が高い。斎宮跡の発掘調査においても、史跡東部での斎宮整備の端緒は、光仁朝の宝亀二(771)年、気太王による斎宮造営以降であったことが明らかになっている[1]。この時の

斎王は光仁と皇后井上内親王の娘である酒人内親王で、その次世代、桓武天皇の段階でこの斎宮を踏まえつつ、方格地割が造営されたと考えられている。では、この段階で斎宮に方格地割が造営されることにはどのような意味があったのだろうか。

光仁段階の斎宮の調査を踏まえて考えれば、この頃の斎宮は内院部分が飛び抜けて充実しており、付属施設はその周辺にそれほどの企画性を持たずに配備されていたと考えられている。それを再整理したのが方格地割であり、それは、言葉を換えて言えば、斎宮寮のハードの整備だということになる。本来、斎王の家産管理組織的な存在だった斎宮寮が、なぜこの段階でこのような整然としてレイアウトを持つようになるのか、その状況分析は、方格地割のもうひとつの中心ともいえる柳原区画の意味づけと深い関わりを持つことになる。

この時期の斎宮寮にとって大きな契機は、延暦二十二(803)年の史生四人の配置だったと考えられる[(2)]。『延喜式部省式』試補史生条によると、史生は諸司の番上、この場合は省寮司の使部的な人たちの中から、「律令格式・維城典訓(唐の則天武后が編纂させた教訓書)を読み、書算に工みなる者」から式部省で考試して採用されたという。いわば伴部・使部とは全く異なる性格の、文書行政のエキスパートである。その史生が「始めて」置かれたということは、この段階で斎宮の文書行政機能が著しく整備され、逆に言えば、それまでは極めて貧弱であったことを示唆するものであろう。斎宮寮には神亀段階で使部が十人宛てられており、『延喜式部式』「諸司使部条」によるとこれは多くの寮と同数である[(3)]。つまり実務レベルの下働きは他の寮と同様なのに、文書行政専門の下働きがいなかった、ということになる。これは奈良時代段階の斎宮の大きな特徴といえよう。そしてこのことは、財政的には自立していた斎宮が、行政事務的には大きく立ち後れていたことを示唆している。

同じく「諸司史生条」によると、斎宮の史生は五人(うち一人は権任)とされる。史生五人というのは、大炊寮、主殿寮、掃部寮などの寮と同規模で、京の寮と同程度の文書行政を行えるようになったことを意味している。一方伊勢国は上国であるので、史生は四人宛てられている。つまり延暦段階での斎宮は、伊勢国と同等の文書行政が行える体制になったと考えられる。この段階で史生がいる組織は、伊勢国では斎宮と伊勢国府だけである。このことは、斎宮がこれまでは行政事務的には伊勢国に多くを拠っていた可能性を示唆する。実際、延暦十一(792)年に、斎王禊料の負担が、神郡から斎宮寮に変更になった時も、その予算は正税から出されることになっており、また神郡から斎宮への乾薬を輸すことの負担を軽減した時は、斎宮寮が正税から食料を充てて神戸に苅らせるという措置を取っている[(4)]。実務的には伊勢国への依存が高そうである。

そしてこの措置の前年の延暦十(791)年には、斎宮頭賀茂人麿が伊勢守を兼ねるという人事が行われている[(5)]。斎宮頭の伊勢守の兼任は、八世紀初頭に若干見られるのみで、国司制が本格的に整備されてからでははじめてのことである。これは斎宮と伊勢国府を一体化することで、斎宮の事業を神郡依存から引き上げ、伊勢国府が代行する、という形で対応したことと連動しているだろう。同時に斎宮頭との兼任は、八世紀後半に、神郡司や太神宮司などの神宮勢力の、神郡の一円支配を目指す動きと直接対峙していた伊勢国が、神郡への行政介入を行う大きな足がかりになったものとも考えられる。

さて、朝原が帰京し、布勢が来勢したのは、斎宮の歴史上見逃せない変化である。朝原には特に明確な帰京理由がない。しかしその乳母である朝原忌寸氏は前年に帰京していたことは確実

で、この帰京が何らかの政治的要請によるものであった可能性を示唆している[6]。それは井上内親王以来続いてきた聖武天皇系の斎王に関わる措置だった可能性がある。朝原は帰京の後、安殿皇太子と婚姻しており、母の酒人同様の位置づけとしての帰京だった可能性がある。つまり、もしも朝原が女子を産んでいれば聖武系の斎王が再生産された可能性もあった。しかし一方、桓武の構想の中では、布勢にも独自の意味を持たせようとしていたのではないかと見られる節がある。布勢の段階で、斎宮と伊勢神宮の関係には大きな変化が見られているようなのである。

延暦十七(798)年には、諸国神宮司の任用規制が行われた[7]。伊勢でも太神宮司の任用が恣に行いにくくなったものと考えられる。次に、延暦十八(799)年に、斎宮新嘗祭の初出記事がある[8]。これは、新嘗祭の停止と、歌舞伎のみを行うという記事で、この段階での創始を意味するものではないが、『延喜斎宮式』によると、斎宮新嘗祭は斎宮祈年祭と対応し、多気・度会二郡の官社を対象として行われたとみられる、すなわち斎宮が神郡の再生産に関与していたことを意味する。布勢の群行が行われたのはこの年である。

延暦十九(800)年には、斎宮主神司が神祇官直属になる[9]。このことは逆に言えば、斎宮寮本体が神祇官ではなく、太政官により接近したことと理解できないだろうか。延暦二十(801)年には、伊勢国が多気・度会二郡司の神事によせての欠怠に対して神郡外で決罰を申請して許可されている[10]。神郡への規制は確実に強められつつあった。そして翌、延暦二十二(803)年に初めて伊勢斎宮寮に史生四人が置かれた。斎宮に史生が置かれたのは、こうした状況下だったのである。延暦二十三(804)年、神宮儀式帳が編纂された。伊勢神宮の祭祀や経済の実態についての報告書であり、中央で規定されていた神宮行政と、現地で行われている神宮実務の照合が可能になったのである。桓武末年に神宮への統制は確実に強められていた。

そして布勢について見逃せないのは、彼女の段階で後に東寺領大国荘となる、おそらく櫛田川流域の未開墾地が囲い込まれ、開発の手が及んでいたことである。この時期の内親王に多くの荘園が宛てられていたことは、例えば朝原内親王に同様の記録があることからもわかる。しかし、朝原の場合、越前・美濃など斎宮と無関係の荘園であり、少なくとも斎宮とは無関係に、おそらく帰京後に与えられたと見られるのに対して、布勢は帰京後わずか六年後に逝去しており、在勢時にこうした囲い込みが行われていたと考えるべきだろう。そうした荘園立券の実務作業は、おそらく斎宮寮の事務の一環として行われていたものと考えられる。これまでの斎宮では見られなかったものである。

そして大同元(807)年には斎宮頭中臣丸朝臣豊国が、弘仁五(815)年には安倍朝臣寛麻呂、伊勢権介を兼務するようになる。このような斎宮の行政組織化と伊勢国との一体性の強化を背景に認可されたのが、弘仁八(817)年の神郡雑務の大神宮司への移譲であったと考えられる[11]。神郡内では国司の入部が難しく、決罰を行えないための措置とされるが[12]、延暦二十(801)年には本来決罰権を在地で行使する責任者であるべき神郡司の決罰が問題になっていたことを想起すれば、伊勢国と神郡の関係は十五年をかけて一応の安定を見たものと理解できるだろう。それは伊勢国から見ると一定の譲歩ではあったが、それを可能にしたのが、斎宮の行政組織化による監督強化ではなかったかと考えられる。つまり九世紀初頭には、斎宮寮は、斎王の家政機関だけではなく、独自の行政権を持つ地方機関として、いわば監督官庁のように神郡や太神宮司に対峙する存在となったのではないか、と考えられる。

斎宮の方格地割は、そうした存在に転化していく斎宮を象徴するものとして設計されたのではないか、と考えられるのである。その目的は、斎宮寮の機能強化であり、斎宮北路・斎宮内院の北側の道路に正対する柳原地区中央の四面庇付建物は、行政機能を併せ持つ存在となった斎宮寮頭の権力を象徴する建物として造られたのではないか、と考えられる。

（2）斎宮寮の行政と儀式

方格地割が斎宮寮の行政機関化を象徴する区画として造営された、とするならば、その中心区画の一角と考えられる柳原区画にはどのような意味が認められるだろうか。すでに調査報告で指摘されているように、柳原区画の建物の配置には居宅に通じる部分もあり、官衙的な性格の濃い遺物や祭祀的な遺物の出土は極めて少ない。その意味で9世紀の柳原区画が「斎宮寮の行政的な施設というより、四面庇付建物と「ニワ」的空間による斎宮寮頭ら寮官による政治的・儀礼的な空間であった」とする指摘は概ね納得できる。

では、行政機関として自立した斎宮寮においてこうした政治的・儀礼的行為にどのようなものがあるのか、『延喜斎宮式』から考えてみたい。

○斎宮寮（庁）で行った可能性のある儀式

①斎宮祈年祭・新嘗祭における多気・度会二郡の98カ所の神社の祝（はふり、神主のこと）への班幣儀式（『延喜斎宮式61条』）

斎宮寮が直接行う儀式ではないが、斎宮祈年祭は斎宮の地域支配の拠点的性格を考える上で重要な祭祀である。祈年祭は年頭にあたり、全国の主要な神社3132座に幣帛を分かつもので、予祝祭、つまりあらかじめ豊作を感謝する形で祈願を行う祭と理解されている。朝廷では神祇官が、斎宮では主神司が主催していたと考えられ、宮内では神祇官西院で行うとしているが、その実施場所については議論がある。斎宮では西加座南地区が主神司の可能性の高い所だが、平安初期にはそこには広場はなく、別の場所で班幣儀式は行われたと考えられる。

斎宮の祈年祭の対象社は多気度会郡の神社115社であり、これは神宮やその別宮を除いたすべての神社、ということができる。これだけの神社の祝が斎宮に集まり、祭料を分かたれる儀式を行っていたことになる。そして斎宮の大きな特徴は、新嘗祭もまた115社を対象にしていたことである。宮廷の新嘗祭の祭神は198社304座に過ぎない。これは全国の「大社」とされた神社のみであり、もともとの祈年祭の対象神社であったと考えられる。しかし斎宮祈年祭と新嘗祭の対象社は同等規模で行われており班幣対象社はいずれも「小社」である。斎宮の祭祀は、地域の社の農耕儀礼と関係が深かったことを示唆するのだが、こうした儀式が斎宮寮発足段階から行われていたかどうかは甚だしく疑問である。なぜなら、度会郡の神社のほとんどは神宮末社で、神宮からも祈年祭班幣を受けていたからである。斎宮祈年祭は、これら神宮末社と神宮本体との関係に後発的に割り込んだ可能性が高い。

また、『儀式』によれば、神祇官で行われる祈年祭でも、南面するのは大臣であり、神祇官は西殿で東面している。つまり主催は太政官ということになる。ならば、柳原区画でも、四面庇付建物には斎宮で太政官に当たる、行政の主催者である寮頭が就き、三面庇の建物に主神司が就いて、庭に待機した祝たちに幣物を賜う儀式を行う、と考えることができる。幣物を置くのにも三面庇付建物の大きさは有効である。

つまり、祈年祭、そして新嘗祭は、斎宮においては、地域の祝に対して、斎宮の権威を、そし

て直接的には、儀礼を監臨する斎宮頭の権力を示す儀礼としての役割を果たしていた可能性が高い。その意味では、斎宮が地域行政機関となって以降、その役割が重要になった儀礼と考えられるのである。

②斎宮官人の月料、節料、春秋の禄を下賜する儀式(『延喜斎宮式72条』)

延喜式には斎宮の男女官人の月料、節料は都に準じて賜る規程がある。これらは現物支給であり、斎宮寮という組織とその構成員との人格的関係を象徴するものなので、事務的に貰うのではなく、月に一度賜る儀式が行われていたと見るべきである。斎宮は斎王の家政機関的性格が強いので、本来そうした賜与儀礼は斎王の名の下に行われるものであるが、その時には、こうした場所で寮頭が四面庇付建物で、いわば家令のような立場で監臨して、三面庇付建物を使って支給儀式が行われたと思われる。三面庇の建物の広さは、支給品を置くのにも有効である。

③一月三日の太神宮司の拝賀にともなう饗(『延喜斎宮式73条』)

一月三日の太神宮司や神郡司の拝賀自体は内院で行われるが、『神宮雑例集』には、斎王拝賀の後、「饗禄」という文言がある。賜禄は内院で行われたと思われるが、饗については寮頭を主催者に行われたと考えることもできる。とすれば、四面庇の建物は寮頭が坐する主催者側の席で、三面庇の建物では神宮関係者のための宴会場に使われたということができる。

④夏冬の服を賜う儀式(『延喜斎宮式76条』)

『源氏物語』「玉鬘」帖に見られる新年の衣装配りの様子や、天皇から臣下への賜り物が衣装であることが多かったことからもわかるように、衣装を分かつことには大きな意味があった。斎宮において夏冬の服は「寮家」から支給されるものとされ、斎宮寮が支給の儀式を行っていたと見られる。そうした支給儀式もまた、このような施設で行われていた可能性が高い。その場合、寮頭から例えば女官には四面庇で、男官には三面庇で、とか、有位者は四面庇で、仕丁など無位は三面庇で、などという身分差の想定も可能であろう。

⑤供田、墾田の収穫の確認儀式(『延喜斎宮式77条』)

斎宮では多気郡・度会郡に供田・墾田と呼ばれる私営田を置き、その収入は寮家に納めるとしている。この寮家に納めることだが、斎宮十二司には米の管理を行うことを専業とする司(主税司のようなもの)はなく、寮家は、寮庁そのもののことだと考えられる。とすれば、寮家に収穫の米(あるいはその初穂など代表するもの)を納める儀礼も、この区画で行われた可能性がある。

⑥斎宮に納める調庸雑物を受け取り、返抄を与える儀式(『延喜斎宮式78条』『延喜主計式下17条』『主税式23条』)

毎年諸国から斎宮に送られる調庸は、都に準じて配送される。具体的には、国司など責任ある立場の国庁官人が脚夫(運搬人)を引率して、帳簿とともに斎宮に到り、斎宮寮で帳簿と実物を勘会(突き合わせ確認)して、返抄(受け取り通知)を発給するという手順で事務手続きが行われた。未進の調庸は斎宮寮から京に報告し、その内容に応じて国司の公廨(報酬)を没収することになっているので、このやりとりは各国司と斎宮頭の間で行われ、斎宮の返抄は当然斎宮頭名で発給されたものと考えられる。とすればそれぞれの国からの調庸納品の際や返抄の発行の際には寮頭が立ち会う形式で儀礼が行われ、この区画が使われた可能性が高いといえるだろう。その場合、寮頭は四面庇の建物に坐し、庭で勘会が行われ、事務手続きが三面庇建物で行われた、という理解もできるだろう。

⑦新嘗の解斎(『延喜斎宮式93条』)

斎宮新嘗祭の祭が終わってからの宴会を解斎というが、これは斎宮官人の他に大神宮司、禰宜、内人、御厨の案主(大神宮司の事務官)、神郡司、神部、歌人らが参加するもので、寮官たちにも賜禄があった。こうした大規模で広い範囲の人々が一同に介する宴会が、斎王のいる内院で行われるとは考えがたく、宴については斎宮頭を主催者として行われたのではないかと考えられる。とすればこの区画を利用して行われた可能性が高い。例えば、寮の関係者は四面庇、神宮関係者は三面庇、身分の低い者は庭などという使い方も想定できる。

また、このほかに、11世紀に事例の出てくる「勅使房」のように、臨時の接遇のための施設としても使用された可能性は高い。生活感の乏しさに対して11世紀頃から多量の白磁類が出土する状況からも想定され得る。

⑧斎宮寮から朝廷への公文使の派遣に関わる儀式

斎宮に史生が置かれるようになって以後、朝廷と斎宮との間の文書のやりとりは頻繁に行われるようになったと考えられる。地方国府であれば、朝集使、大帳使(計帳使)、貢調使、正税帳使の四度使が送られるが、斎宮の場合、大帳使、貢調使、正税帳使の地域支配に関わる使は必要ない。しかし、官人の人事や考課(勤務評定)に関わる資料や、斎王の生活に関わる文書、斎宮財政についての予算・決算文書などは毎年当然必要なはずである。そしてこれらの文書の収受についても一定の儀式が行われていたことが『延喜式部式(下)』から明らかになっている。例えば「諸司申送朔日見参人数条」には、毎月一日に諸司の初位以上の長上(常勤者)、番上(非常勤者)の出勤簿を式部省に提出する儀礼が記されているが、斎宮においても、そうした上日帳(出勤簿)は各司から寮へと提出され、それはさらに式部省に送られたはずであり、それに伴う儀礼があったことが想定される。こうした使は、斎宮寮の四等官や史生から任命されたと見られるが、例えばその派遣にあたり、寮頭から提出書類を受け取ることにも儀礼は伴ったと考えられる。そうした儀式もこの区画の庭と建物を使って行われた可能性が高いものであり、それは命令主体である寮頭の権威を明確にする役割を果たすものであったと考えられる。

以上見てきたように、柳原地区の四面庇建物を中心としたレイアウト、特にその草創期の区画は、この区画での様々な儀式を想定した設計されたものであり、それは斎宮寮が、単なる皇女の家政機関ではなく、南伊勢地域の支配にも関与し、多量の情報を都とやりとりするようになる、いわば公的な行政機関として自立したことを示していると考えられる。『大和物語』では、斎宮は「たけのみやこ」と謳われ、『伊勢物語』では、「人目繁ければ」と、その繁華な様が描写される。その行政の中心である斎宮寮の中心区画は、全国に広がる貢納体制や、都との情報交換を維持していく、いわば斎宮の都市的機能の中核にあたる施設であり、斎宮の権威を象徴するものだったと理解できる。

註

(1)『続日本紀』宝亀二年十一月庚子条

(2)『日本紀略』延暦二十二年一月丁巳条

(3)『類聚三代格』神亀五年七月二十一日官符(東北大学狩野文庫本)

(4)『類聚三代格』延暦十一年七月三日官符

(5)『続日本紀』延暦十年一月癸未条

(6)『類聚国史』巻三十二　帝王十二　天皇遊宴記事中の延暦十三年十二月二日記事(『日本後紀』逸文)によると、斎宮寮が物を献じて曲宴を行い、斎王乳母の朝原忌寸大刀自が従五位下を受けている。朝原内親王は伊勢から帰京する前年である。

(7)『類聚三代格』延暦十七年正月廿四日官符。なお『類聚国史』 巻十九　神祇十九　神宮司の延暦十七年正月廿四日記事(『日本後紀逸文』)には、この時から神祇官の神封物を以て伊勢太神宮司に季禄が与えられるようになったとする。

(8)『日本後紀』延暦十八年七月己酉条

(9)『類聚三代格』延暦十九年十一月三日官符

(10)『類聚三代格』延暦廿年十月十九日官符

(11)『類聚三代格』弘仁八年十二月二十五日官符

(12)『類聚国史』巻四　神祇四　伊勢神郡　弘仁八年十二月庚辰記事(『日本後紀』逸文)

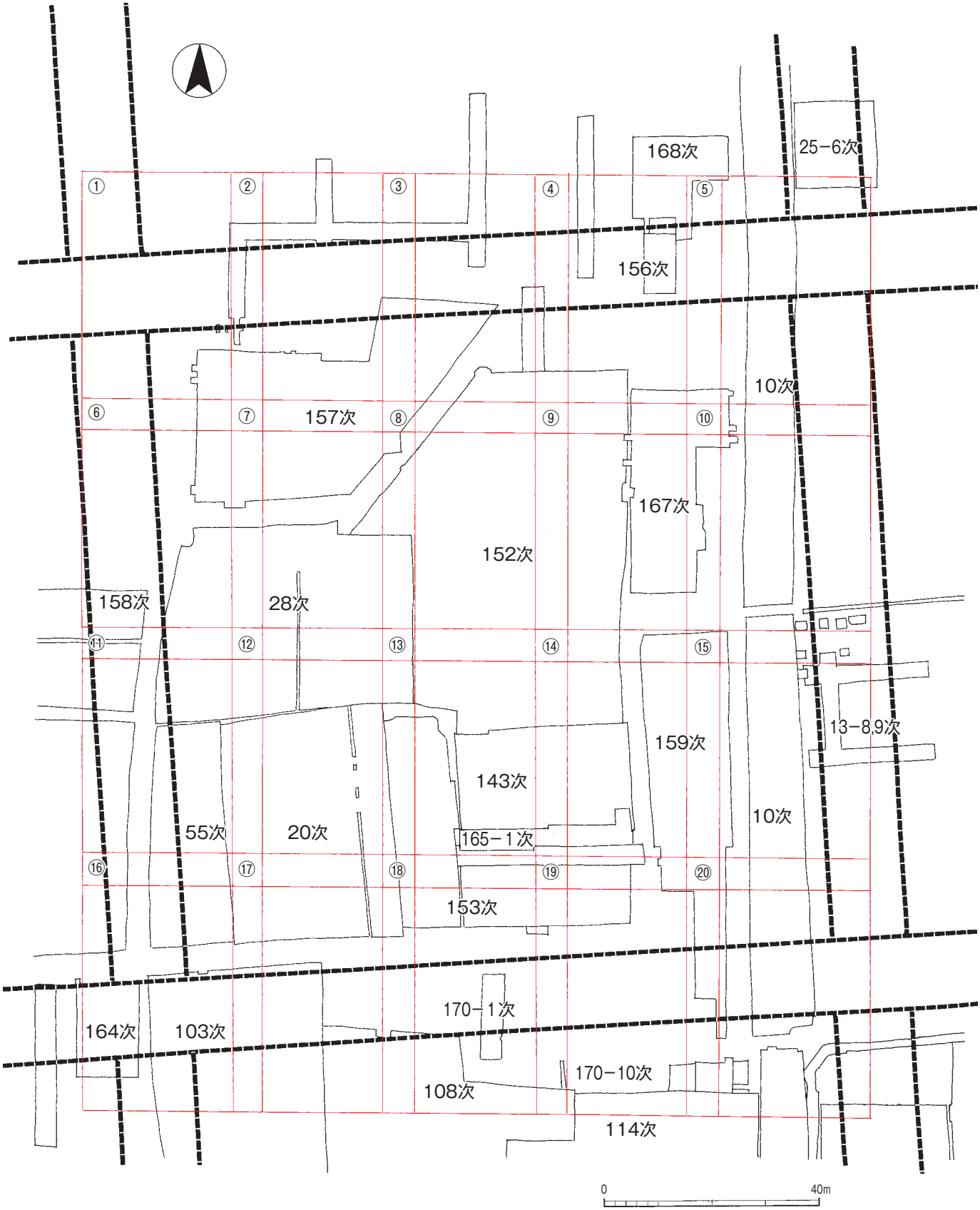
第5節　平安時代斎宮における柳原区画の意義～まとめにかえて～

本章では柳原区画の遺構の分析と、文献史学の成果から読み取れる9世紀の斎宮の変質とそれに伴う整備の意義についてみてきた。特に、第二段階以降の柳原区画における四面庇付建物を中心とする建物配置は、8世紀の斎宮にはなかった行政組織としての機能強化や、伊勢国府との一体性の強化、神郡への規制強化という時代背景に基づき、斎宮の権威の向上を体現するものであったと考えることができるだろう。方格地割の他の区画にはみられない、正殿(四面庇付建物)と前面の空間(ニワ)を中心とした形式や空間構成の連続性も、それが斎宮寮頭の権威の象徴として維持され続けられるべきものであったからであると理解できるだろう。斎宮を維持する上で不可欠な儀礼や、それを執り行うことによる政治的な表象「寮庁」として柳原区画は平安時代のほぼ全時代を通じて機能したとみられる。

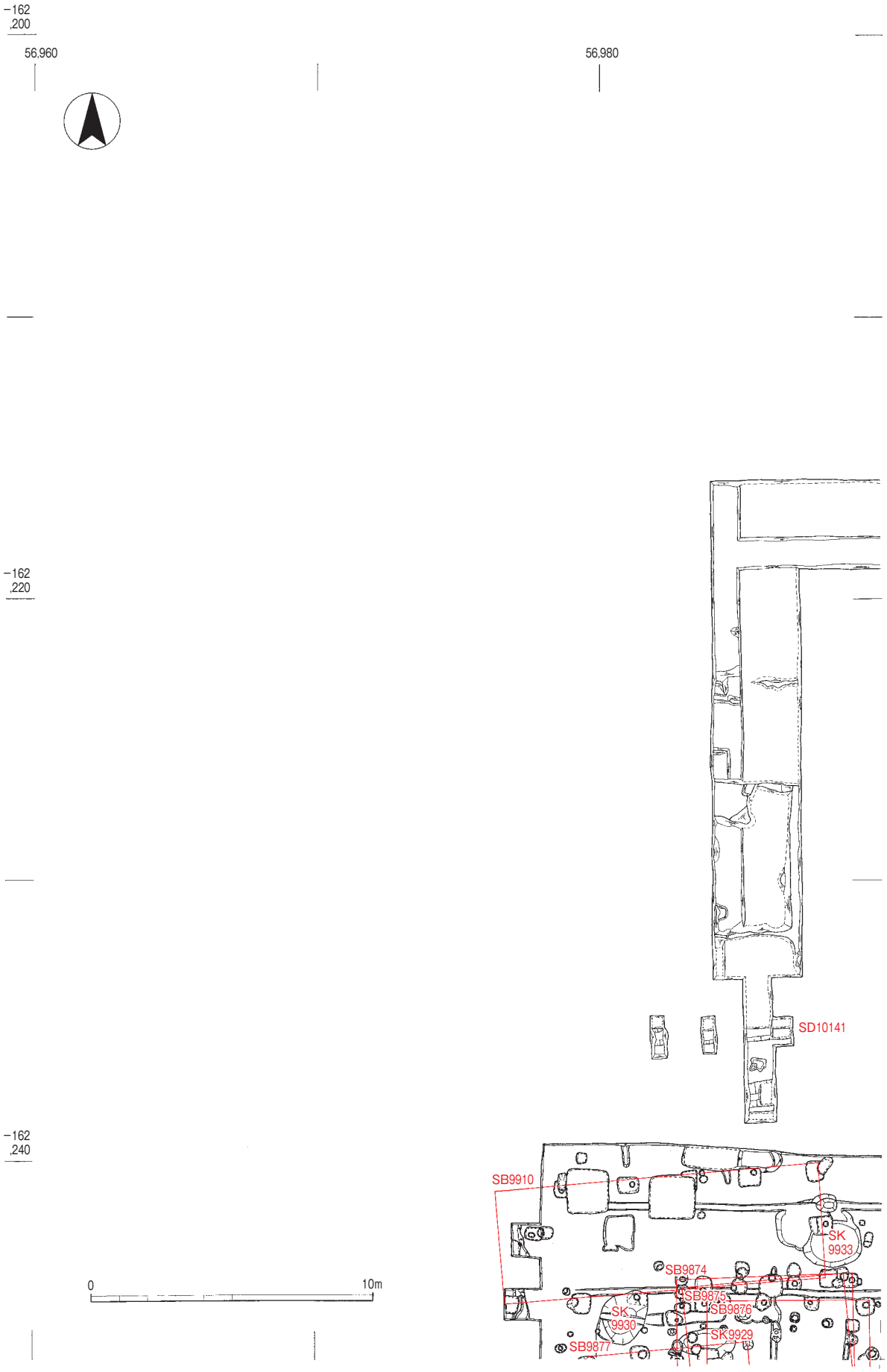
また、平安時代の後半には方格地割内の各所で、斎宮の権威のひとつの現われであった区画道路が縮小したり廃絶していったとみられる中、「内院」牛葉東区画の「北路」として機能し続けたとみられる柳原区画南辺道路側において、常に意識的な建物配置がとられ続けたことも、実務機能のみならず、正殿とともに「見せる」ための演出的機能も持ち合わせていたのではないかと考えられる。そうした柳原区画の役割もまた、鎌倉時代に入る直前まで維持されていたことになる。

柳原区画の考古学的調査と、文献史学による解釈により、当該区画のみならず、平安時代の斎宮に対する見識は飛躍的に向上した。柳原区画ではこれからさらに建築史学の成果も活かして復元建物を中心とした史跡公園の整備が行われる。柳原区画は現代の斎宮においても「象徴」として、全国でも他に例をみない特殊な史跡である斎宮の理解を、可視的に高める拠点としての機能をこれからも持ち続けることになるだろう。

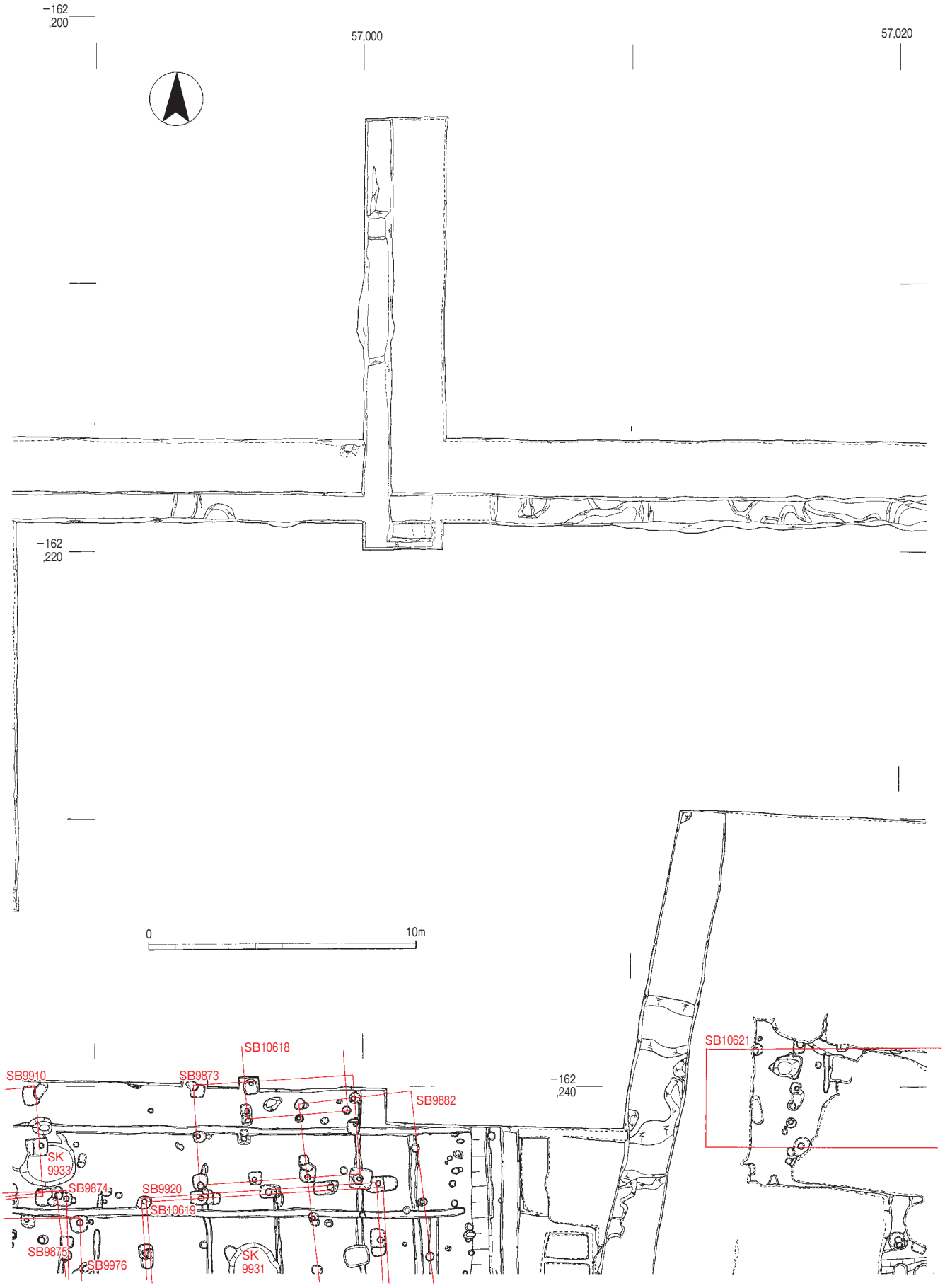
遺　構　図　版



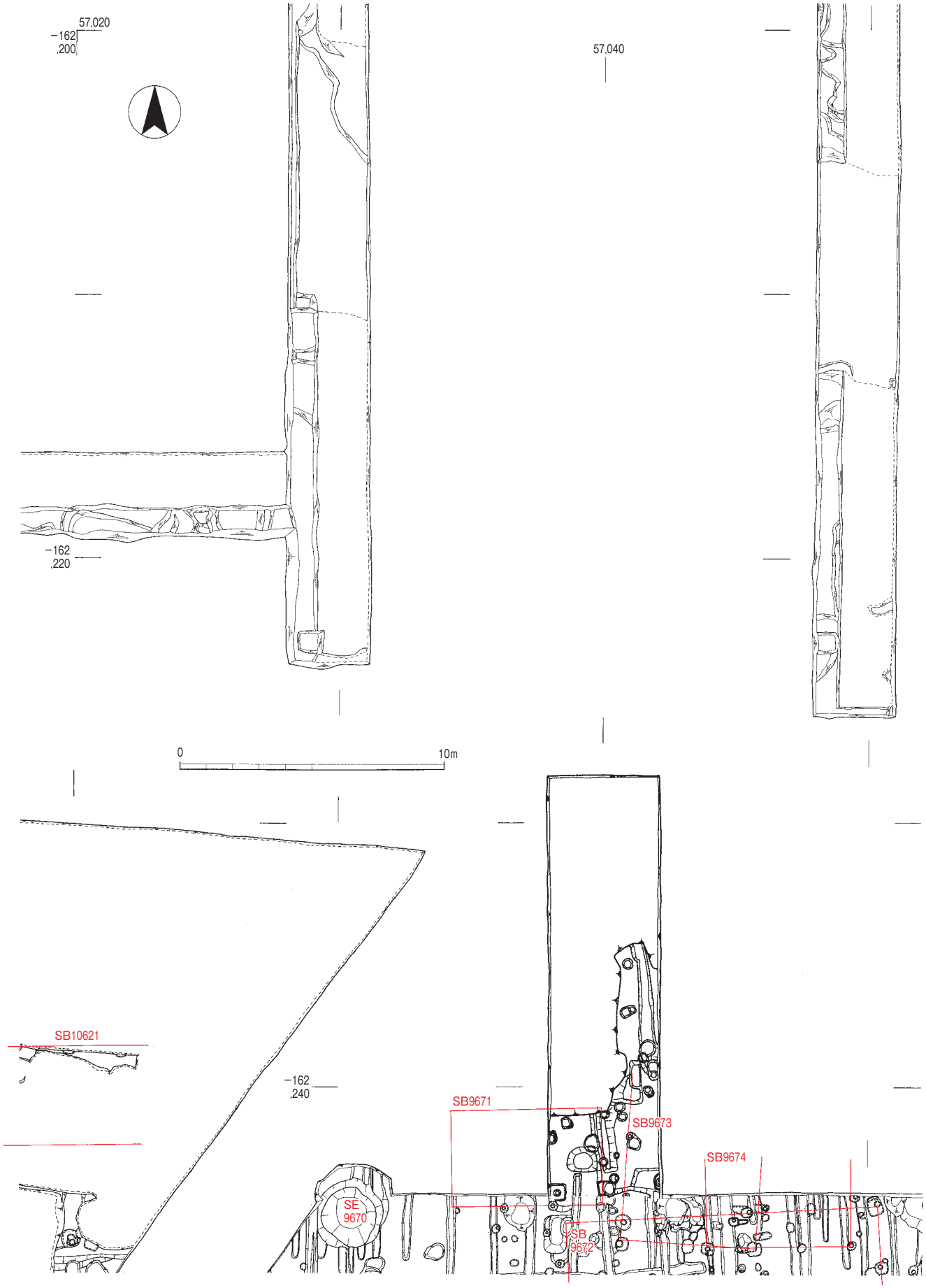
第 47 図　遺構図版索引図



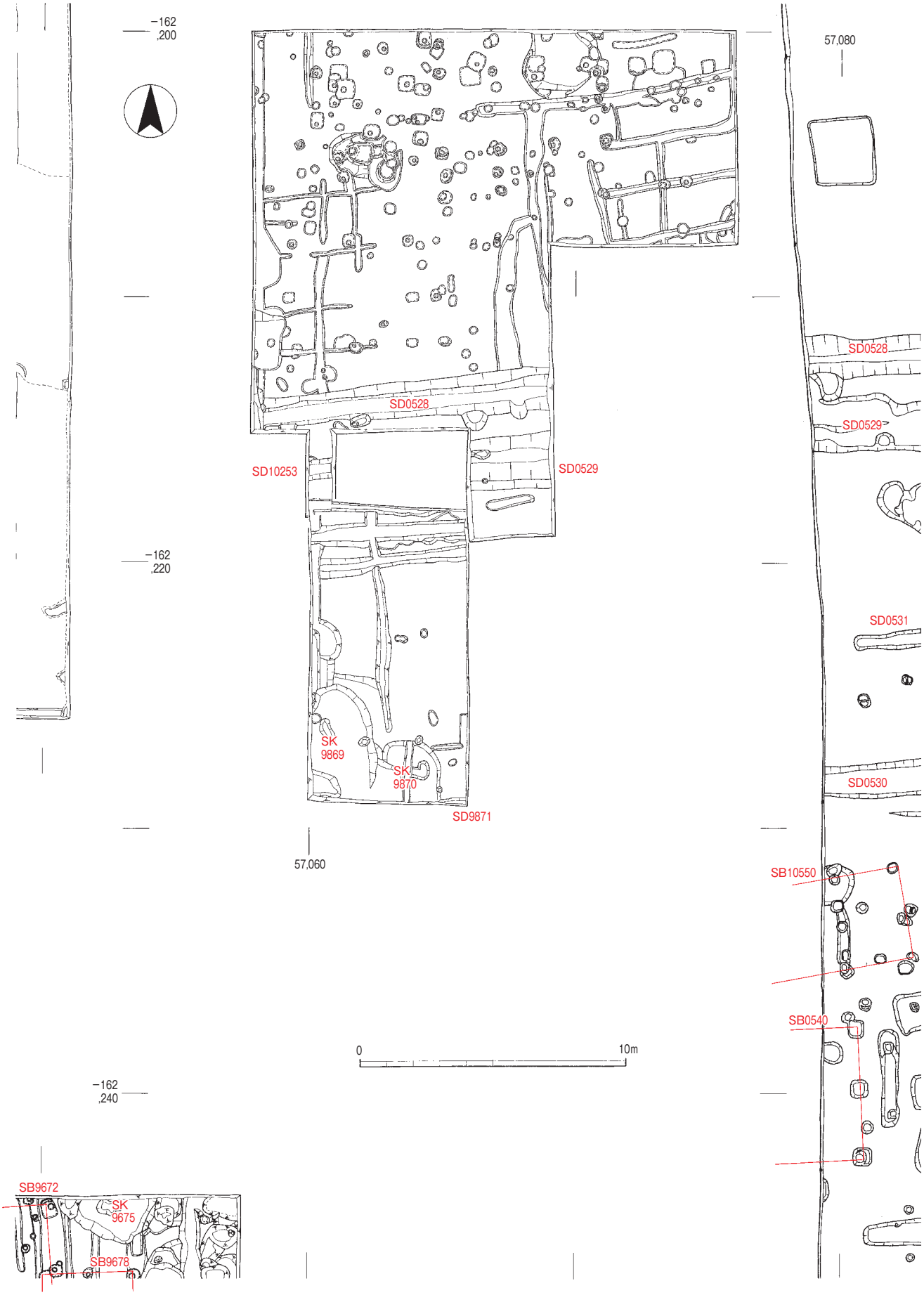
第 48 図　柳原区画遺構図 1（第 157 次・第 166 次　1：200）



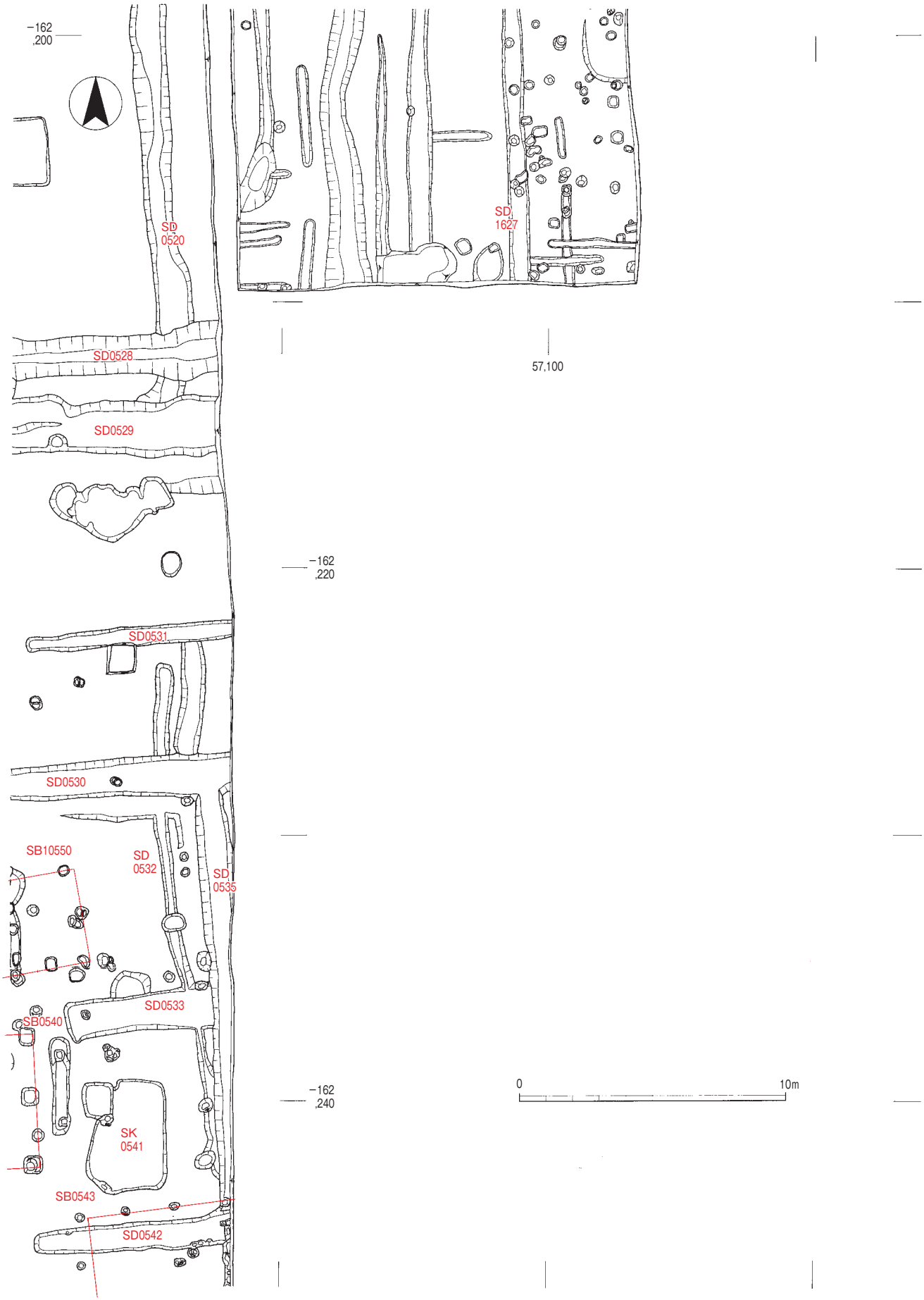
第 49 図　柳原区画遺構図２（第 157 次・第 166 次　１：200）



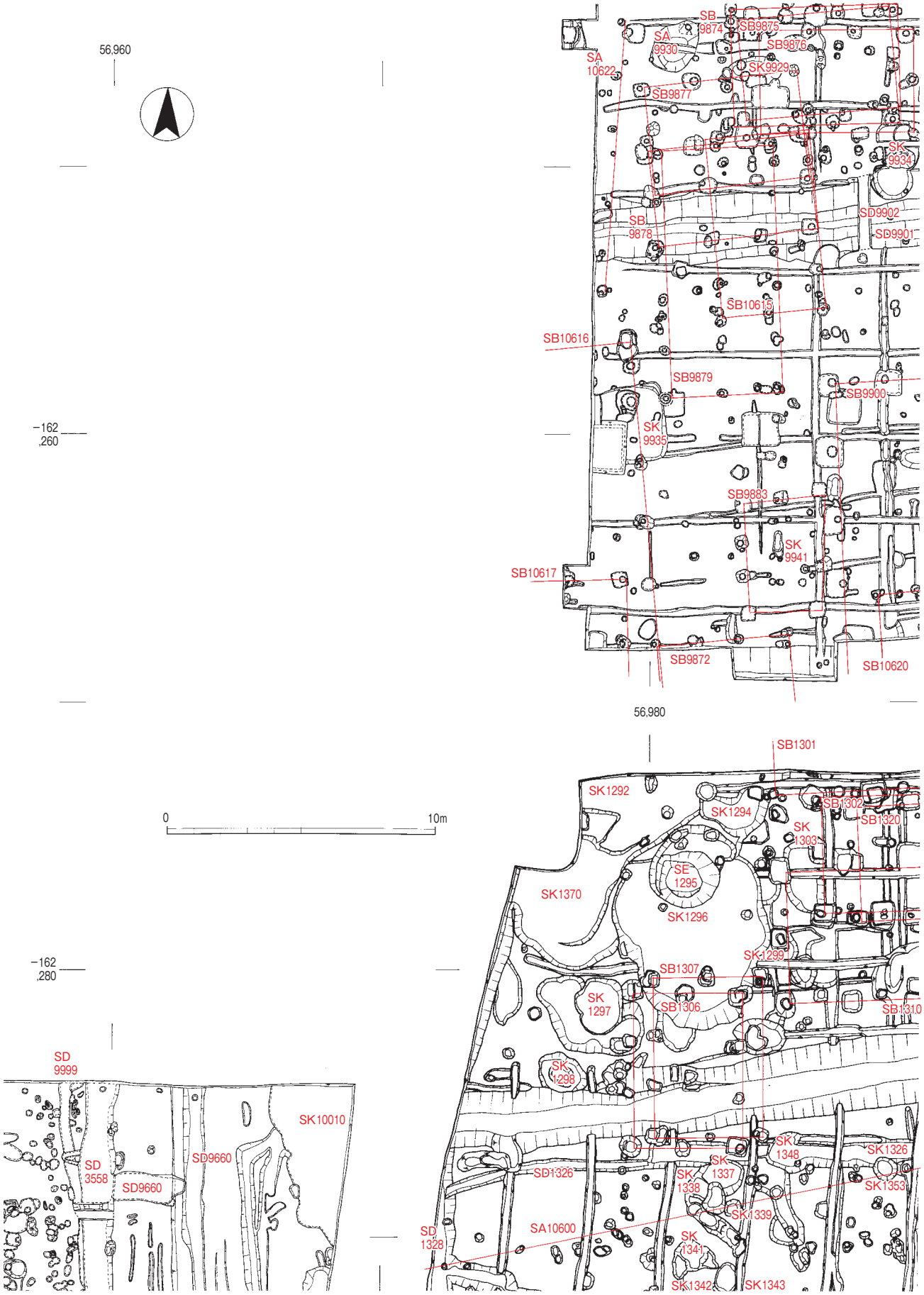
第 50 図　柳原区画遺構図３（第８－10 次・第 152 次・第 157 次・第 166 次　1：200）



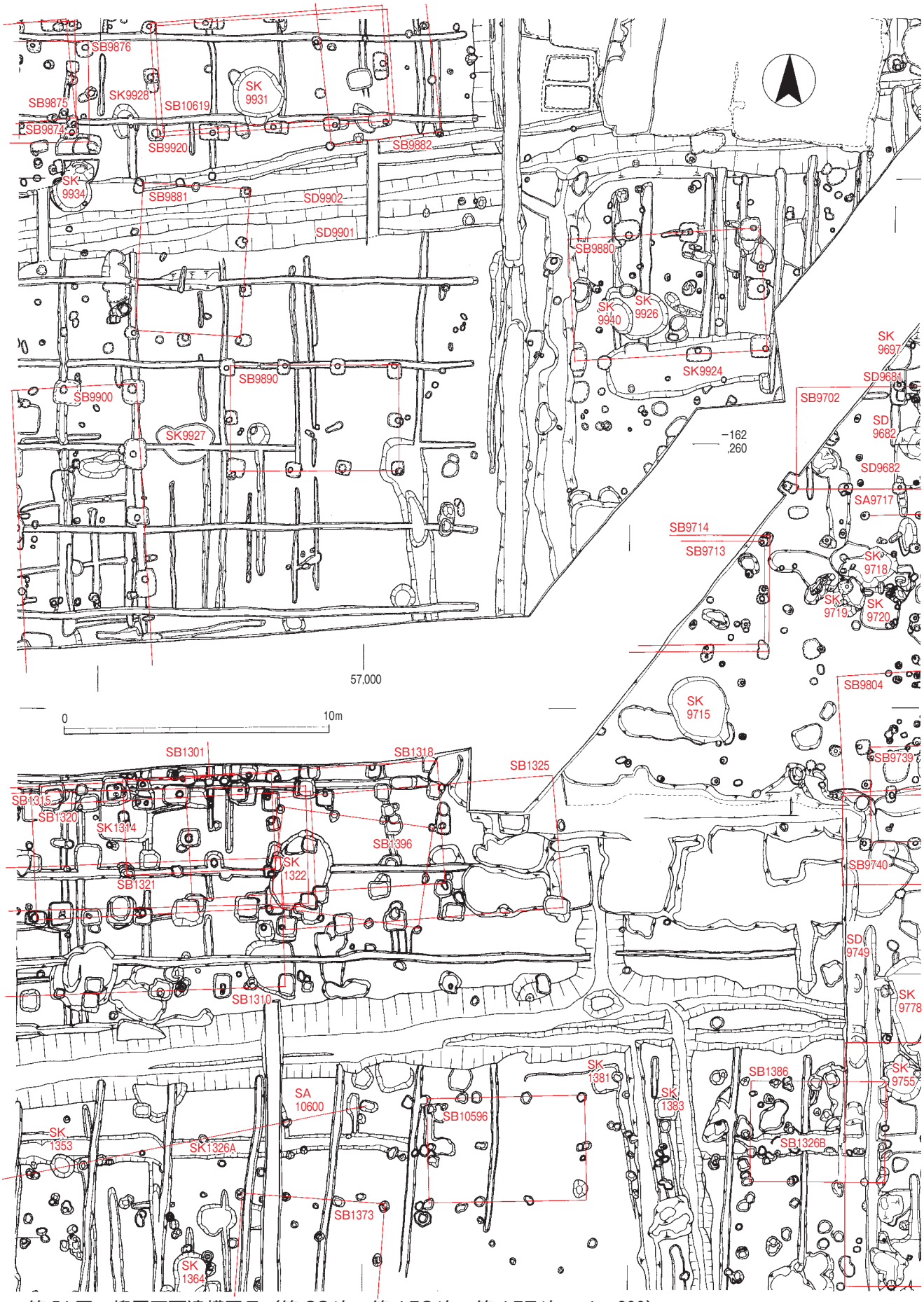
第 51 図　柳原区画遺構図４（第 10 次・第 152 次・第 156 次・第 166 次・第 168 次　1：200）



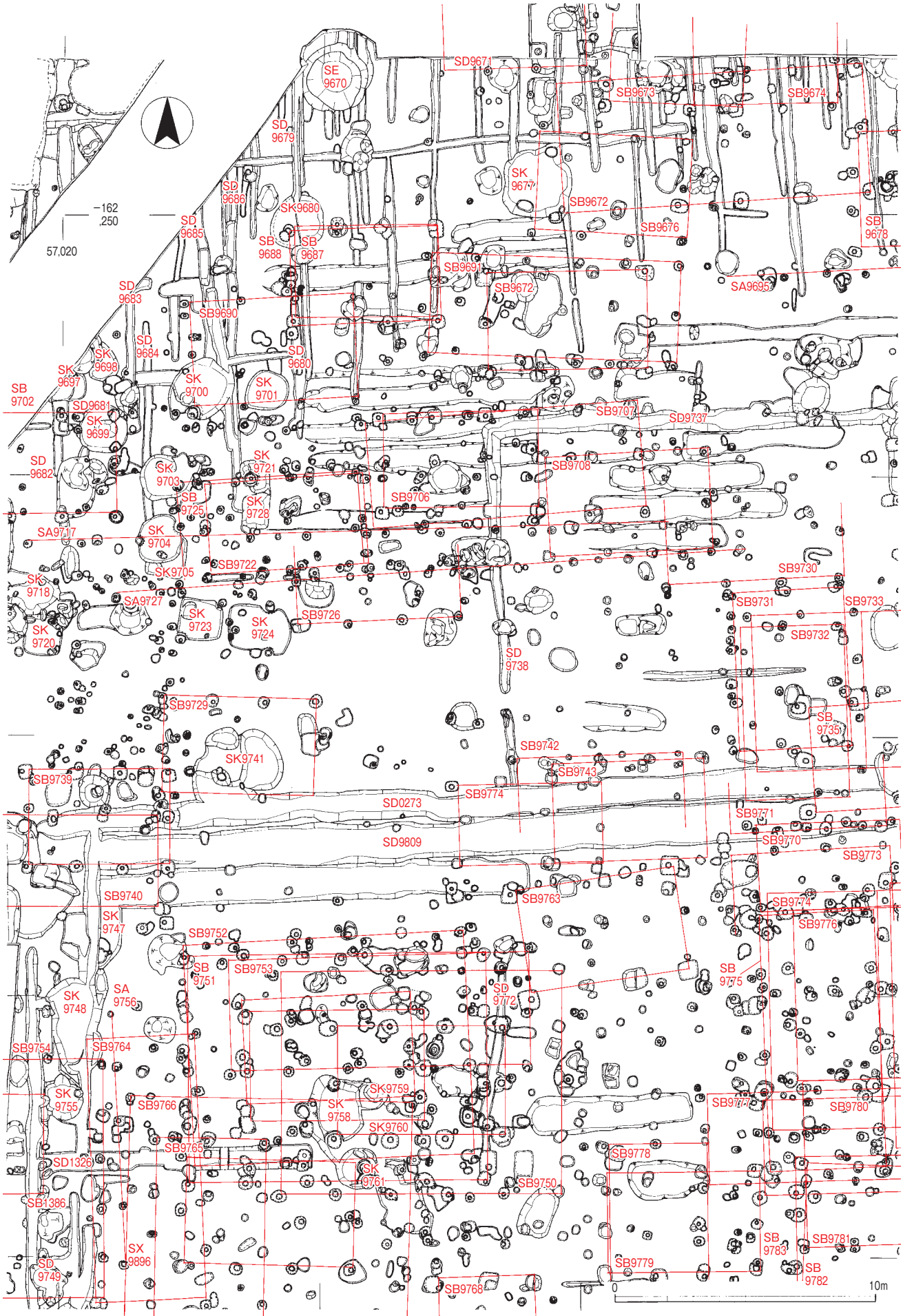
第 52 図　柳原区画遺構図５（第 10 次・第 25 − 6 次　1：200）



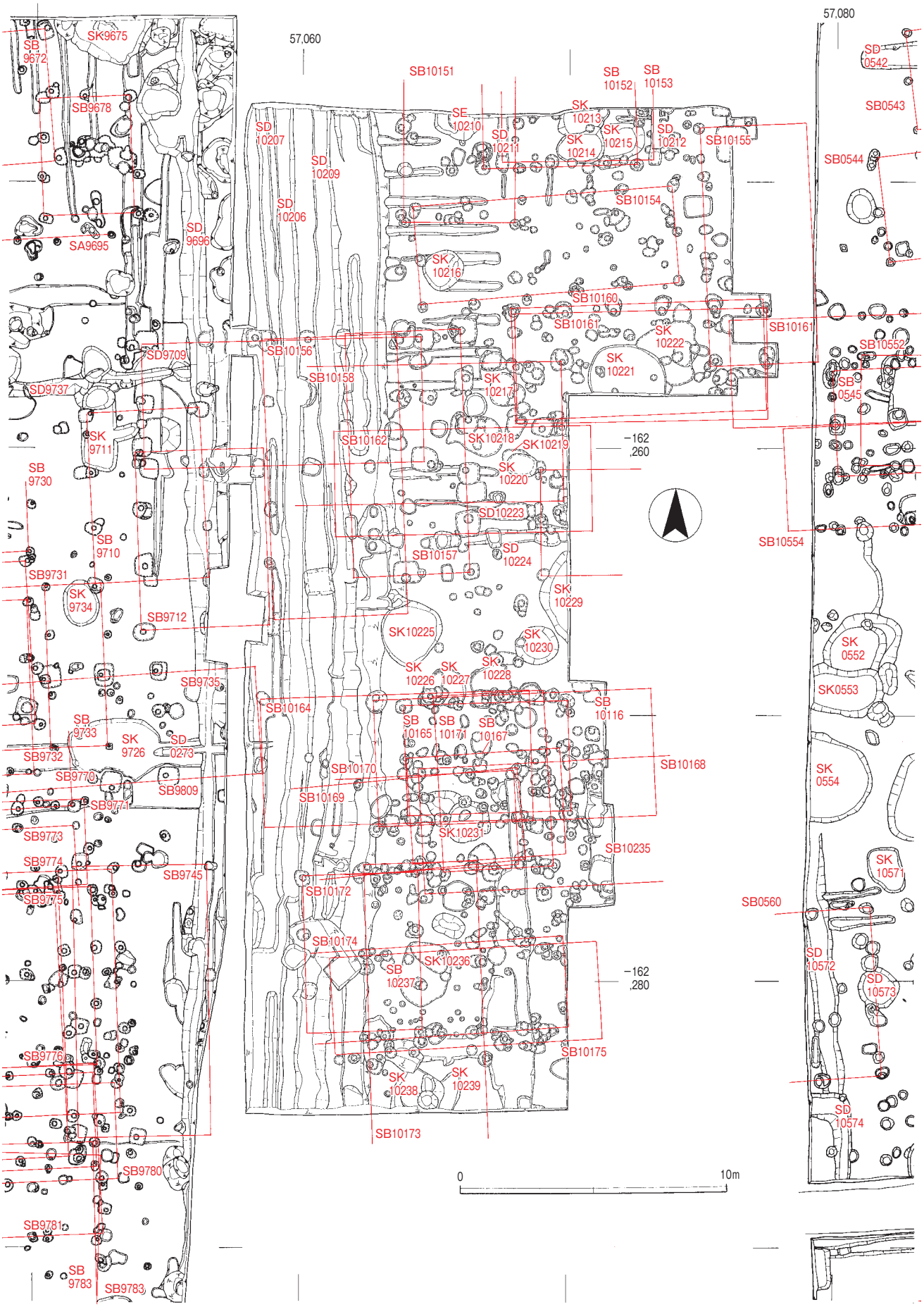
第 53 図　柳原区画遺構図６（第 28 次・第 157 次・第 158 次　1：200）



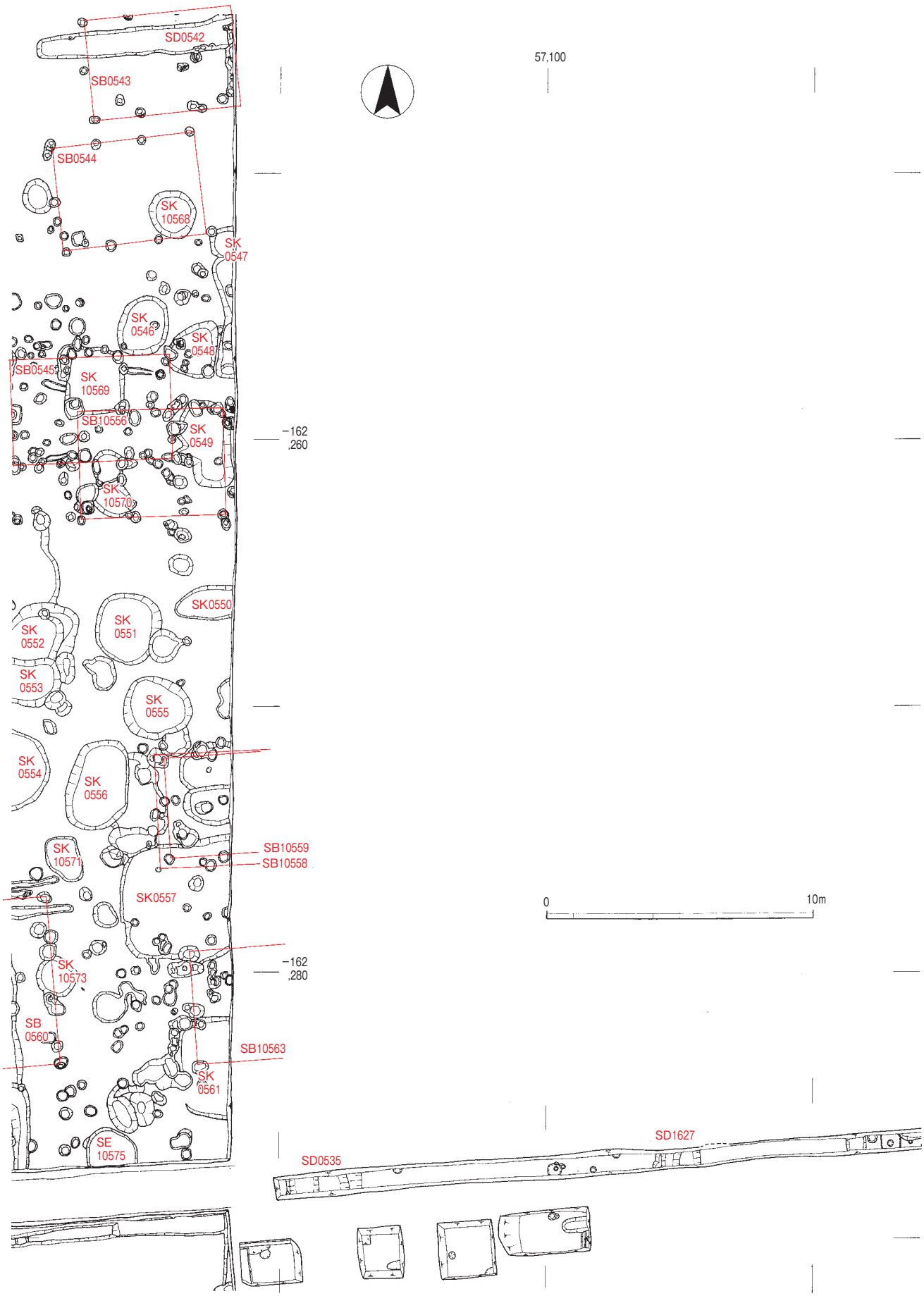
第 54 図　柳原区画遺構図７（第 28 次・第 152 次・第 157 次　1：200）



第 55 図　柳原区画遺構図８（第 152 次・第 157 次　1：200）

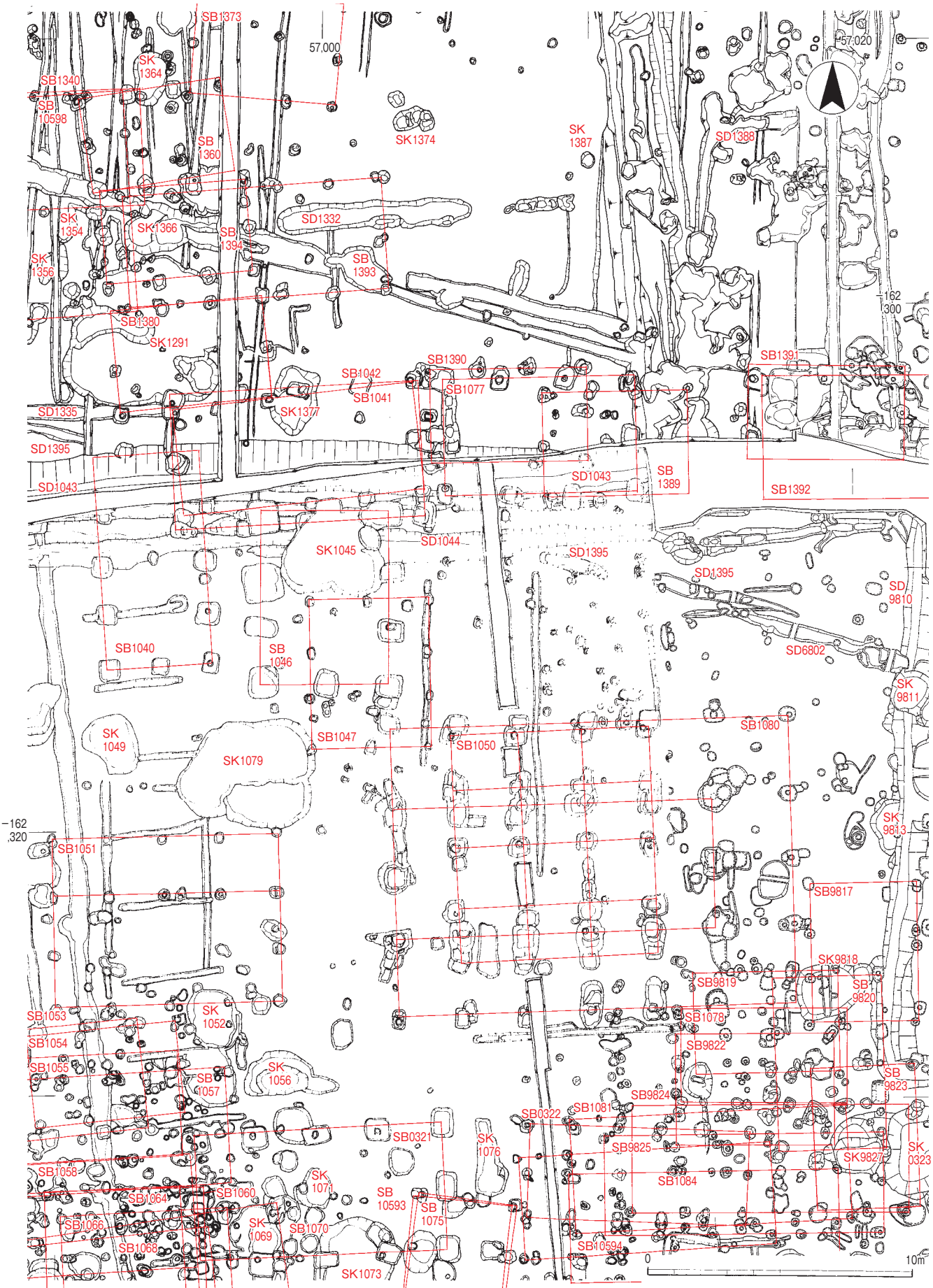


第 56 図　柳原区画遺構図９（第 10 次・第 152 次・第 167 次　1：200）

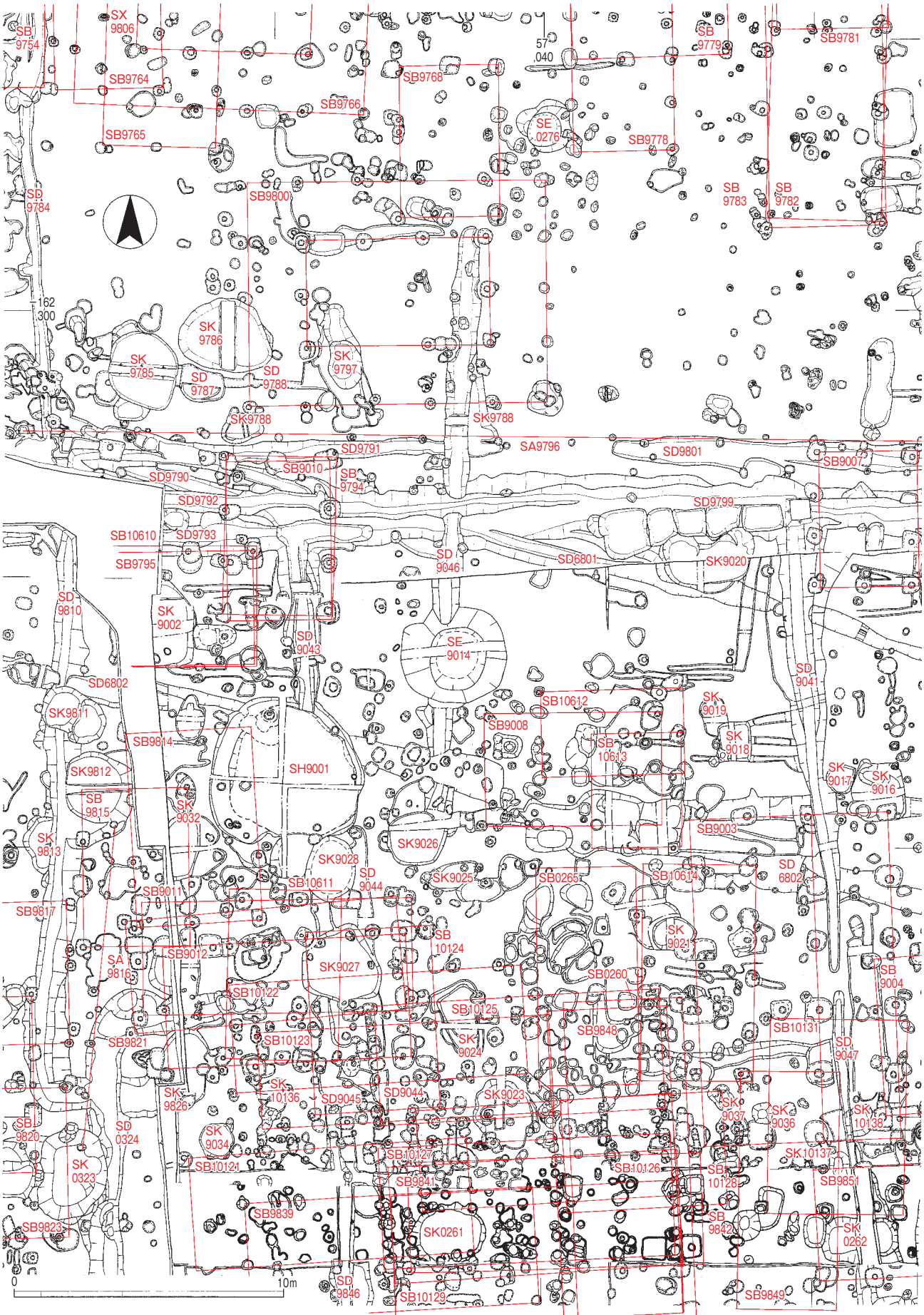


第 57 図　柳原区画遺構図 10（第 10 次・第 162 − 3 次　1：200）

第 58 図　柳原区画遺構図 11（第 20 次・第 28 次・第 55 次・第 158 次　1：200）

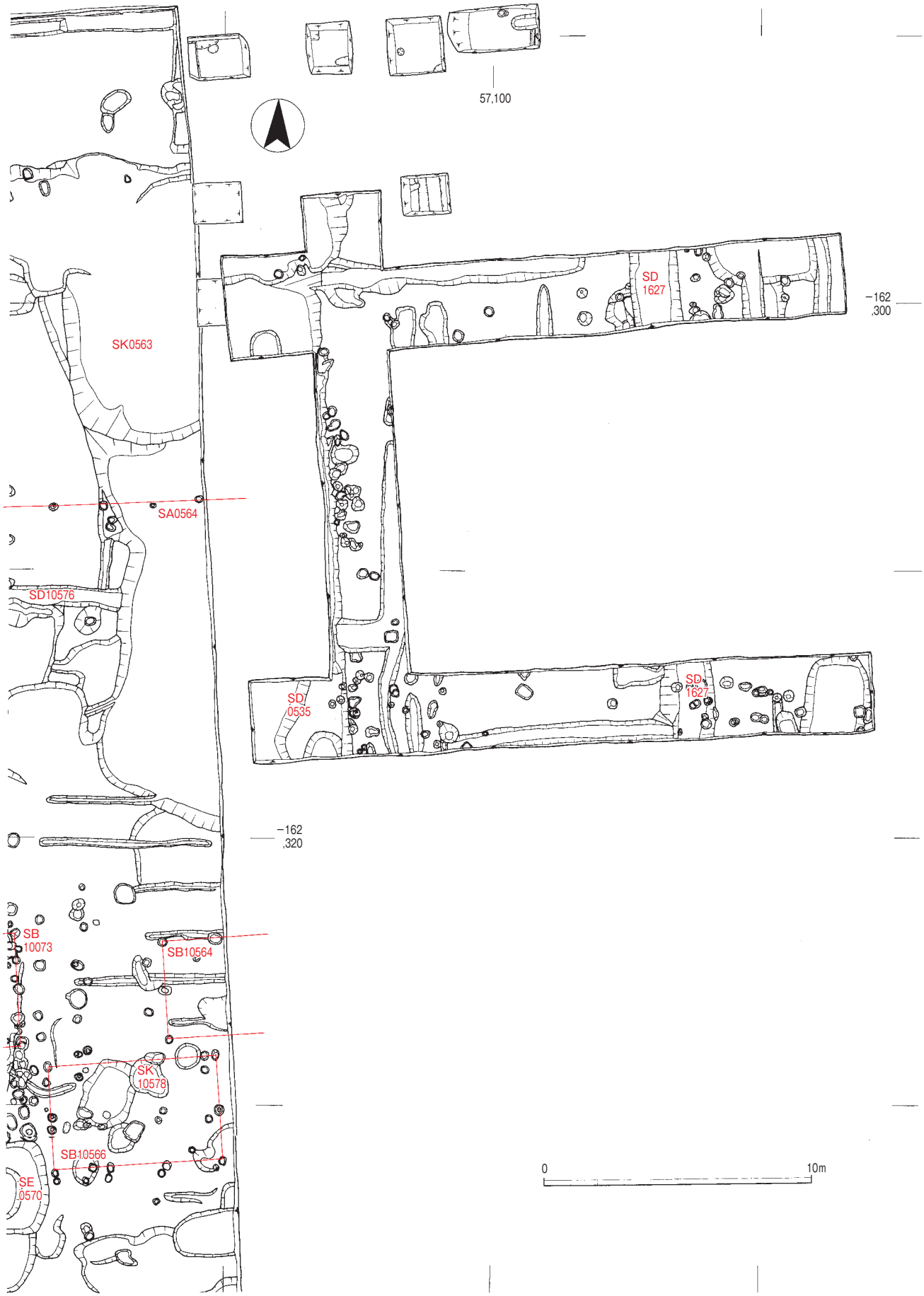


第 59 図　柳原区画遺構図 12（第 20 次・第 28 次・第 152 次・第 153 次　1：200）

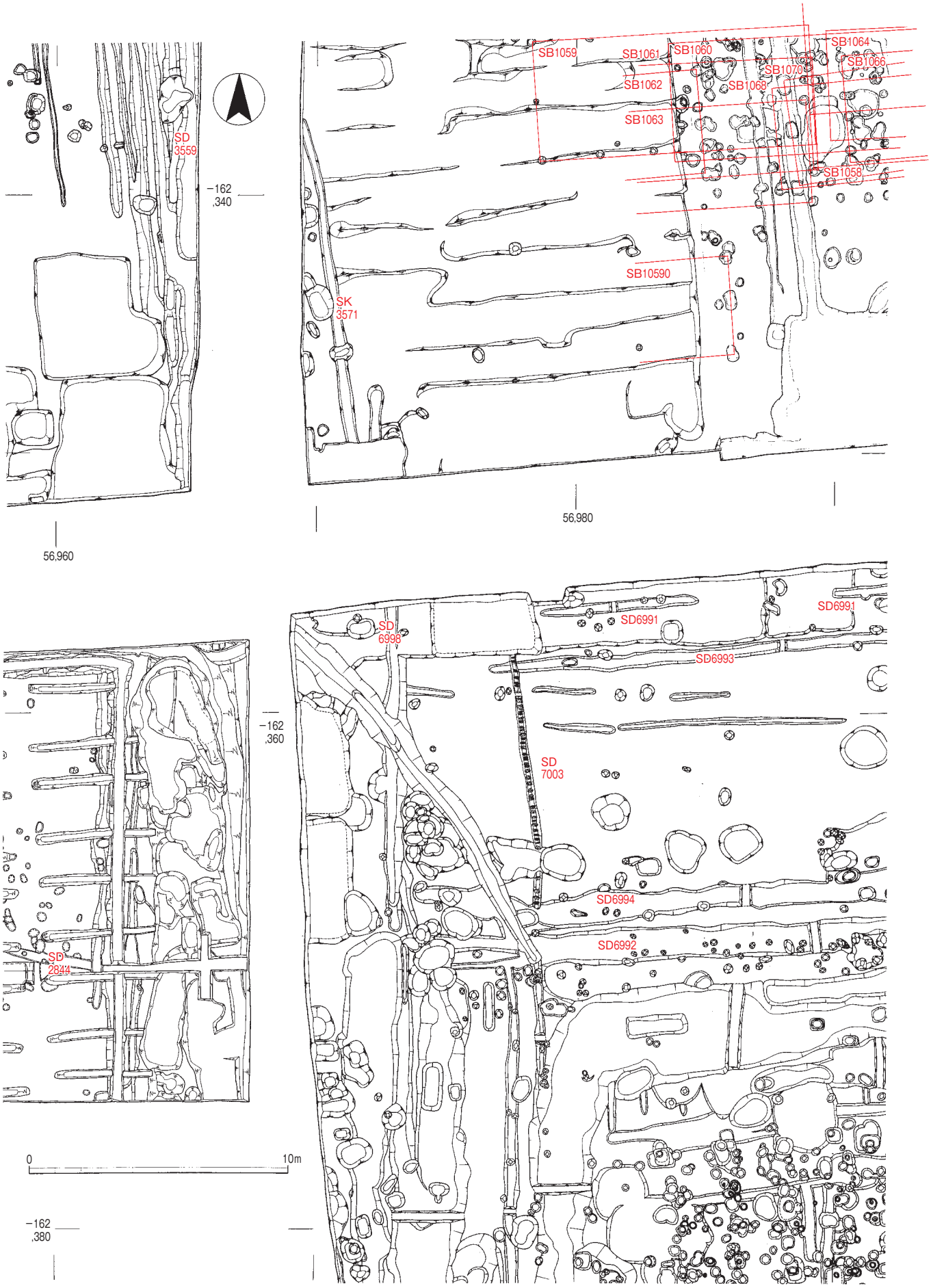


第 60 図　柳原区画遺構図 13（第 8-9 次・第 143 次・第 152 次・第 153 次・第 165 − 1 次　1：200）

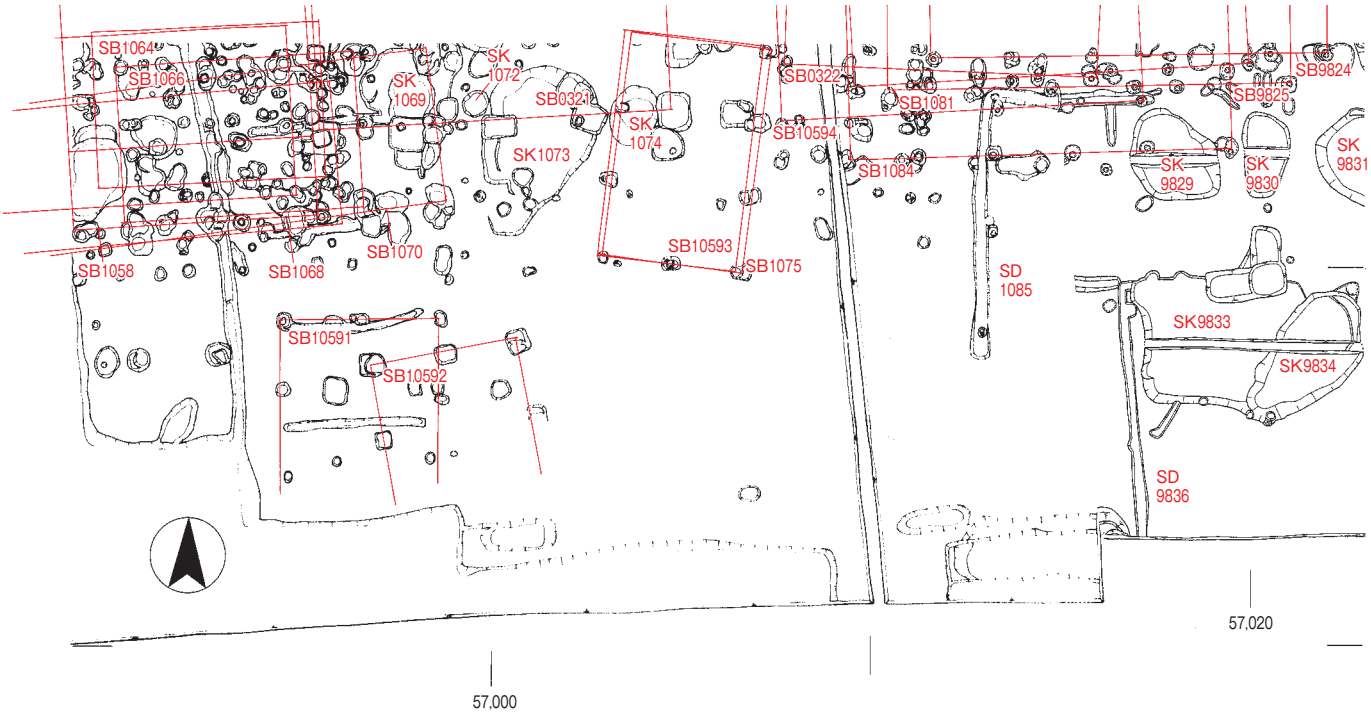
第 61 図　柳原区画遺構図 14（第 8 − 9 次・第 10 次・第 143 次・第 152 次・第 159 次・第 165 − 1 次　1：200）

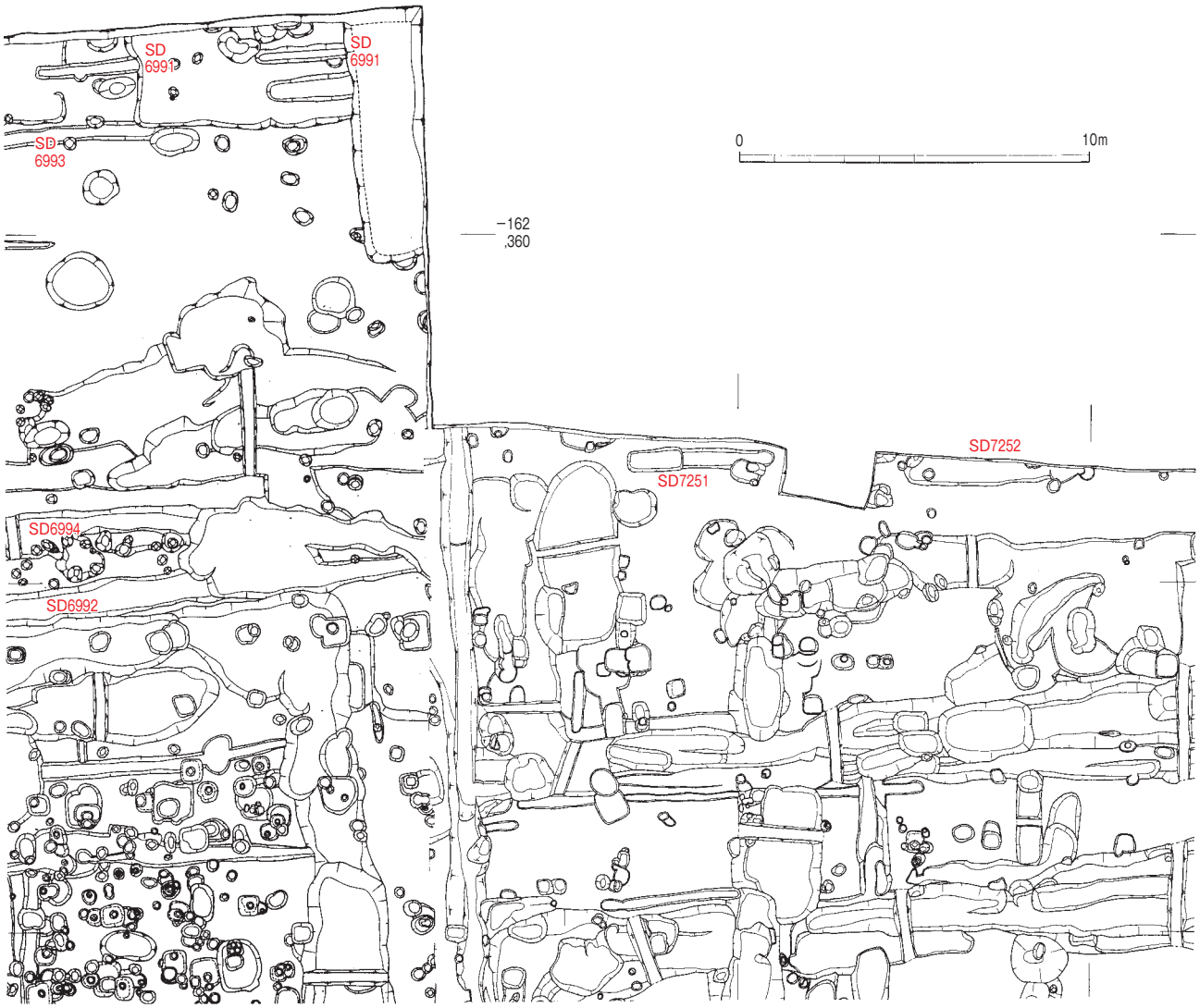


第 62 図　柳原区画遺構図 15（第 10 次・第 13 − 8・9 次　1：200）

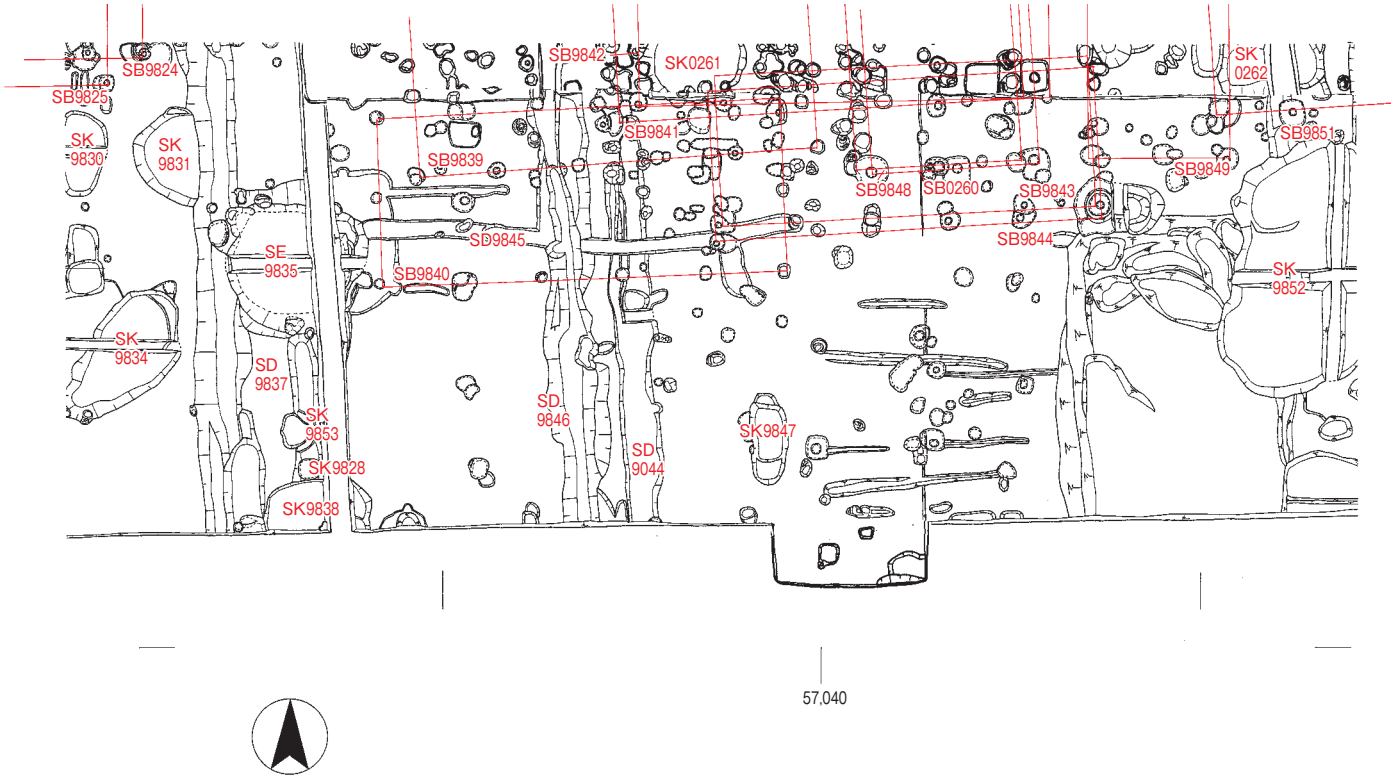


第 63 図　柳原区画遺構図 16（第 20 次・第 55 次・第 103 次・第 164 次　1：200）

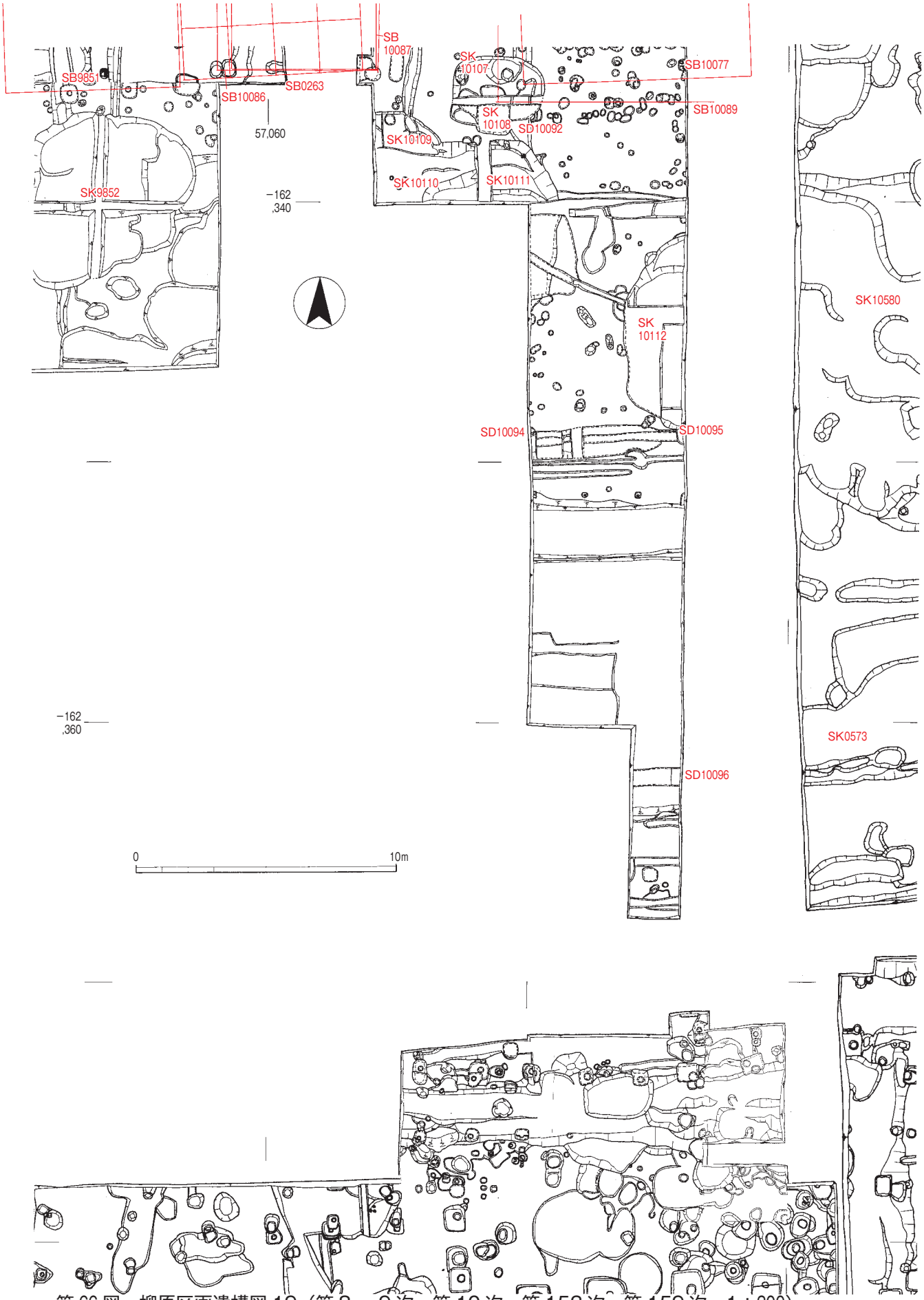




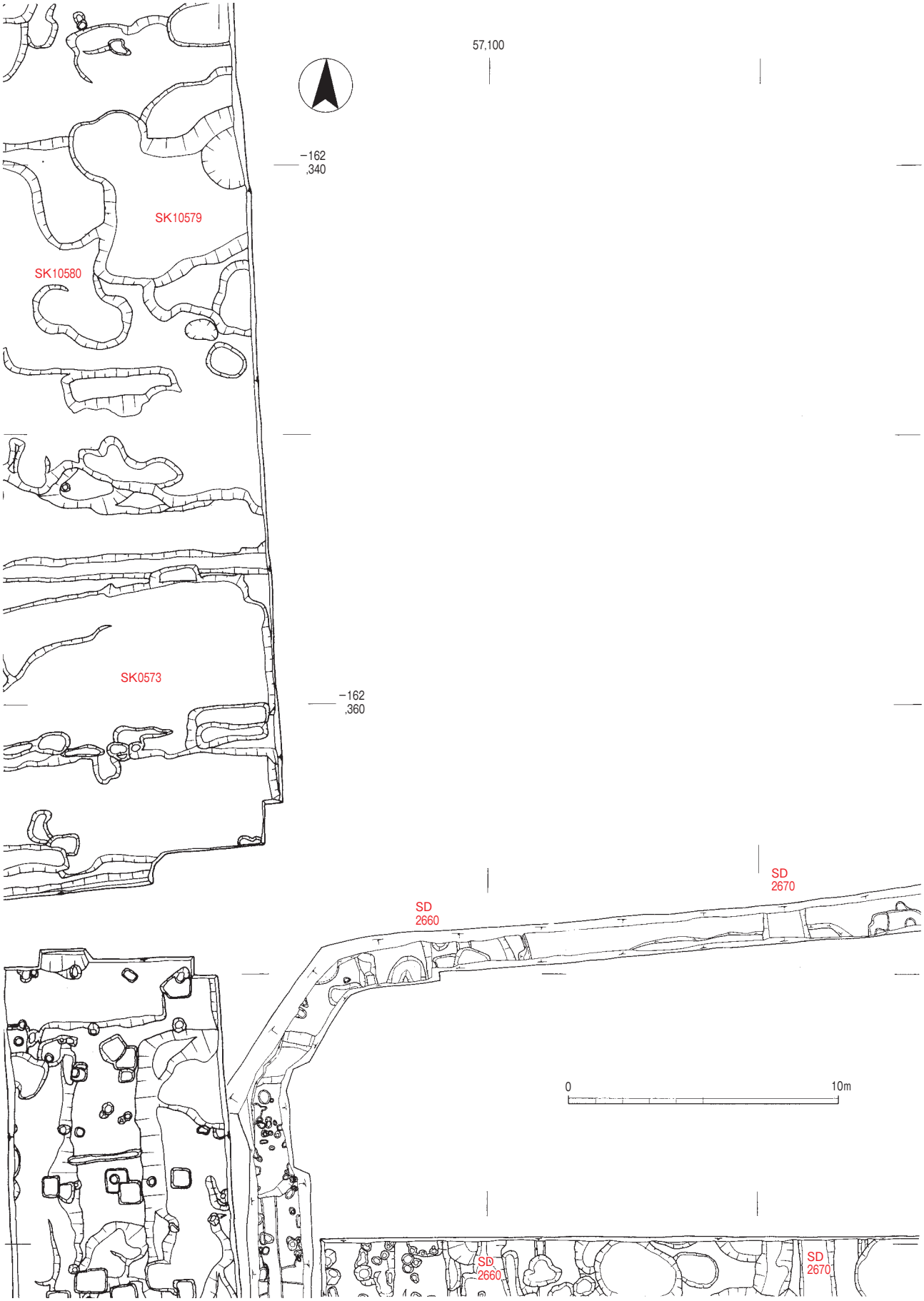
第 64 図　柳原区画遺構図 17（第 20 次・第 103 次・第 108 次・第 153 次　1：200）



第 65 図　柳原区画遺構図 18（第 8 − 9 次・第 108 次・第 153 次・第 170 − 1 次・第 170 − 11 次　1：200）



第 66 図　柳原区画遺構図 19（第 8 － 9 次・第 10 次・第 153 次・第 159 次　1：200）



第 67 図　柳原区画遺構図 20（第 10 次・第 106 − 2 次　1：200）

写　真　図　版

第８－９次調査区全景（東から）

第８－９次調査区全景（西から）

PL.2

第８－９・10 次調査　SB0260（東から）

第８－９次調査　SB0263（東から）

第８－９次調査　SB0263（北から）

第８－10次調査区全景（北から）

PL.4

第 10 次調査区全景（北から）

第 10 次調査　SB0560 付近（南から）

第 10 次調査　SD0530・0535（北から）

第 10 次調査　SB0540（南から）

PL.6

第 10 次調査　SK0541 付近（北から）

第 10 次調査　SB0543（北から）

第 10 次調査　SB0544 付近（北から）

第 10 次調査　SB0545（北から）

PL.8

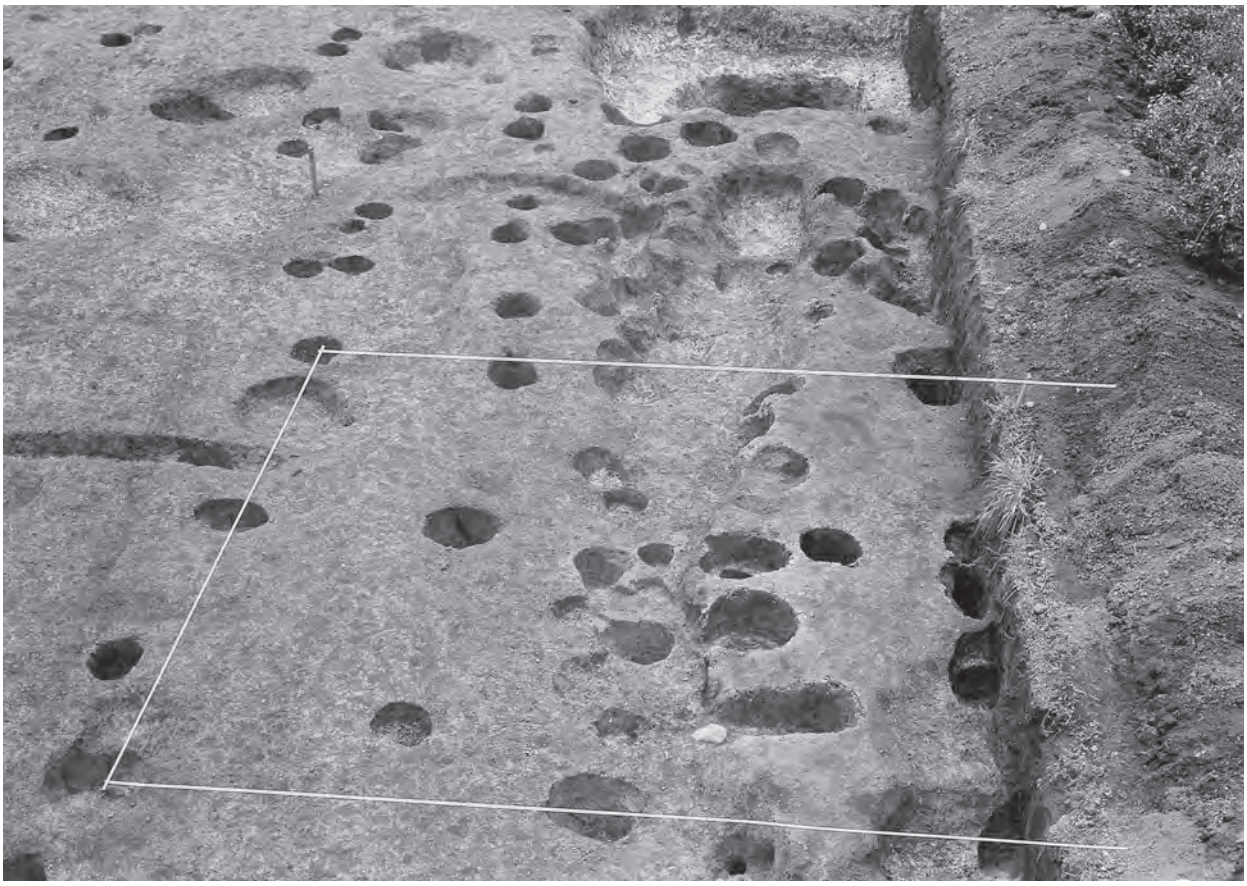
第 10 次調査　SK0555・0556・0559（北から）

第 10 次調査　SK0556・0557・SB0558（北から）

第 10 次調査　SK0563 以北（南から）

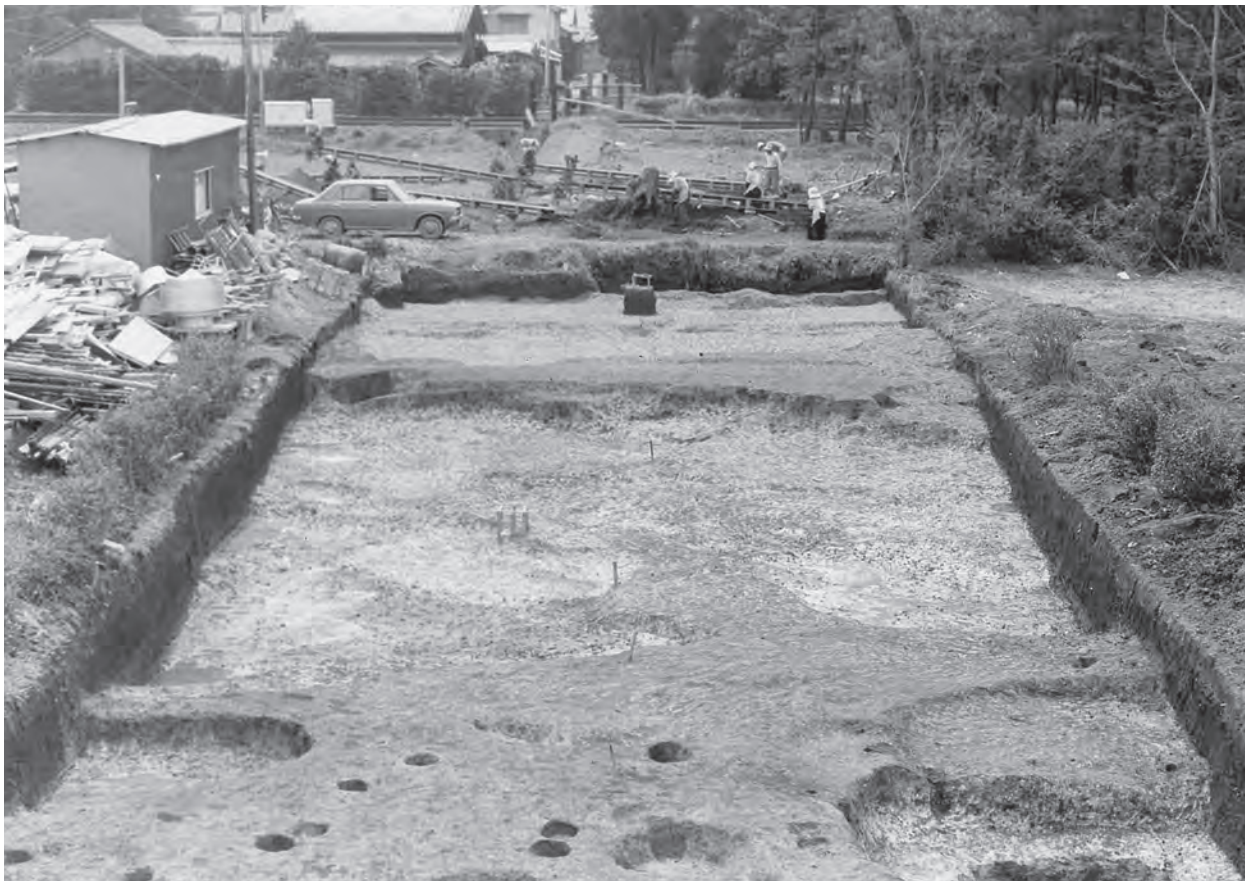
第 10 次調査　SK0563 以南（北から）

PL.10



第 10 次調査　SB10563（北から）

第 10 次調査　SB0566・0567（北から）

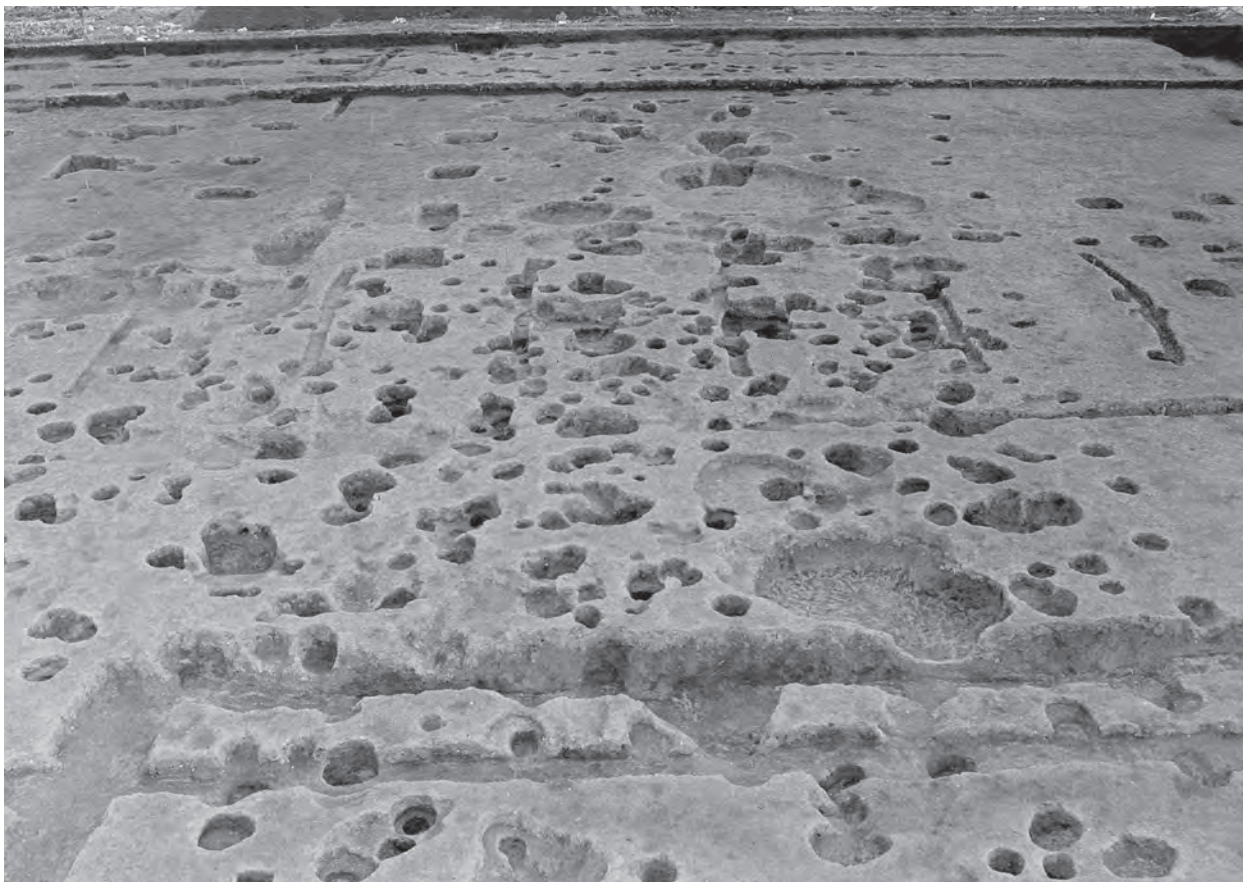


第 10 次調査　SE0570 以南（北から）

第 10 次調査　SK0573 以北（南から）

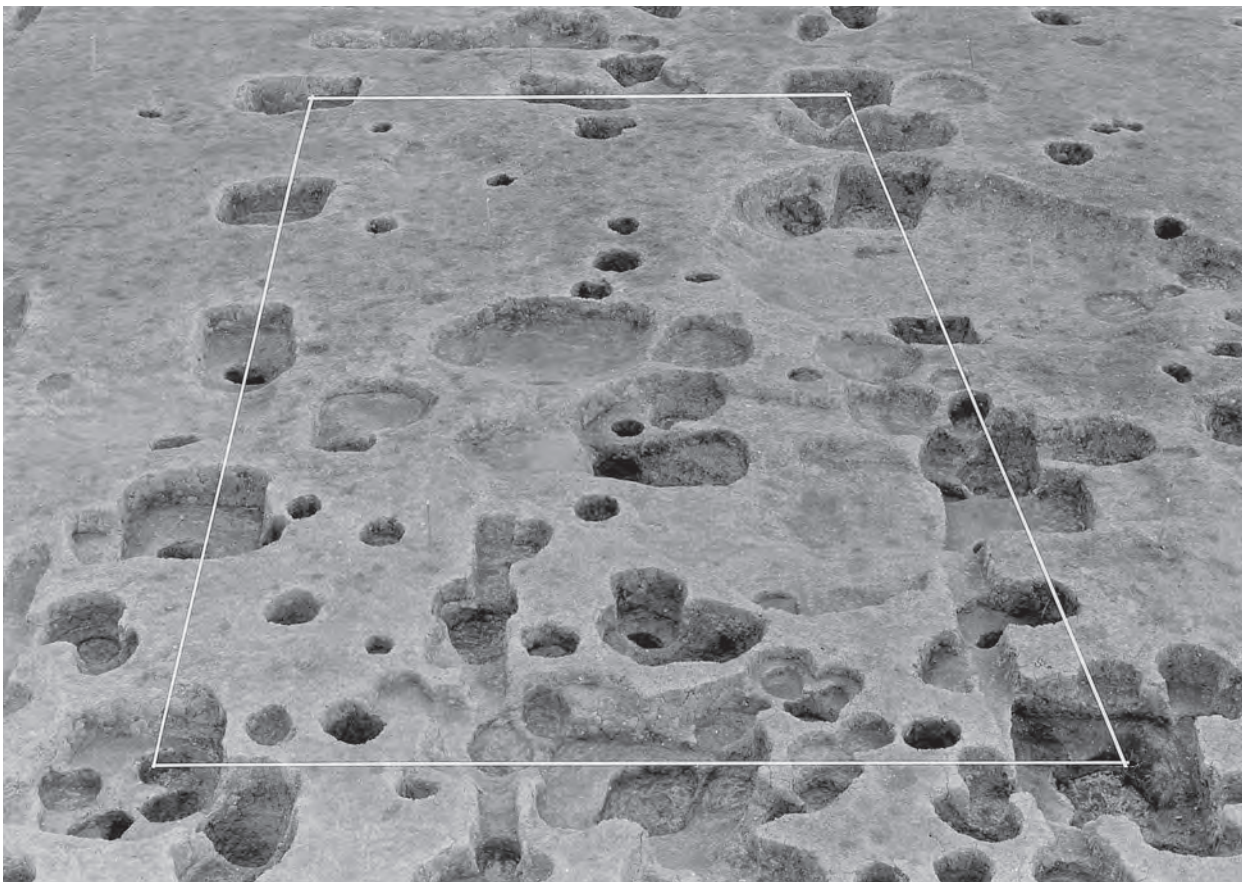
PL.12

第 20 次調査区全景（北から）



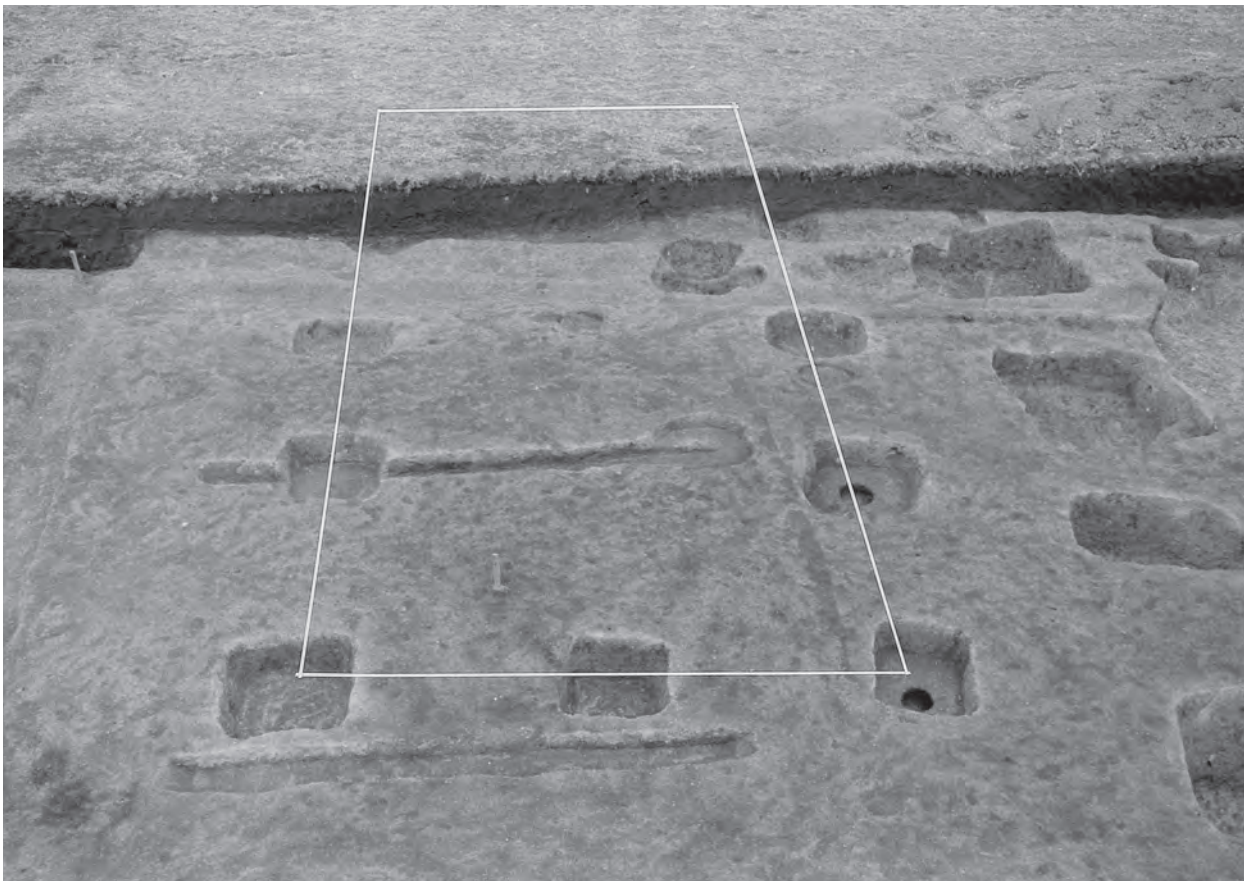
第 20 次調査　調査区南西部掘立柱建物群（西から）

第 20 次調査　SB0321・1075（西から）

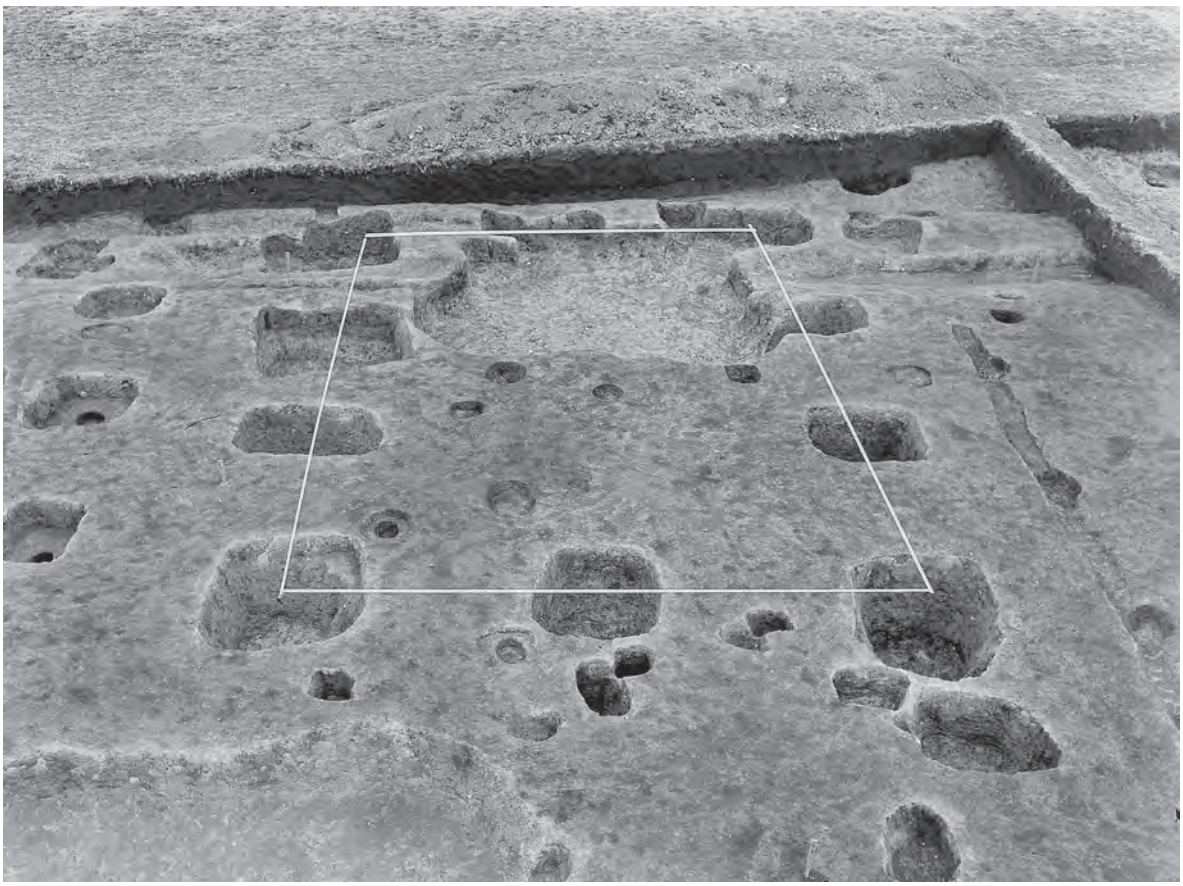


第 20 次調査　SB0321（西から）

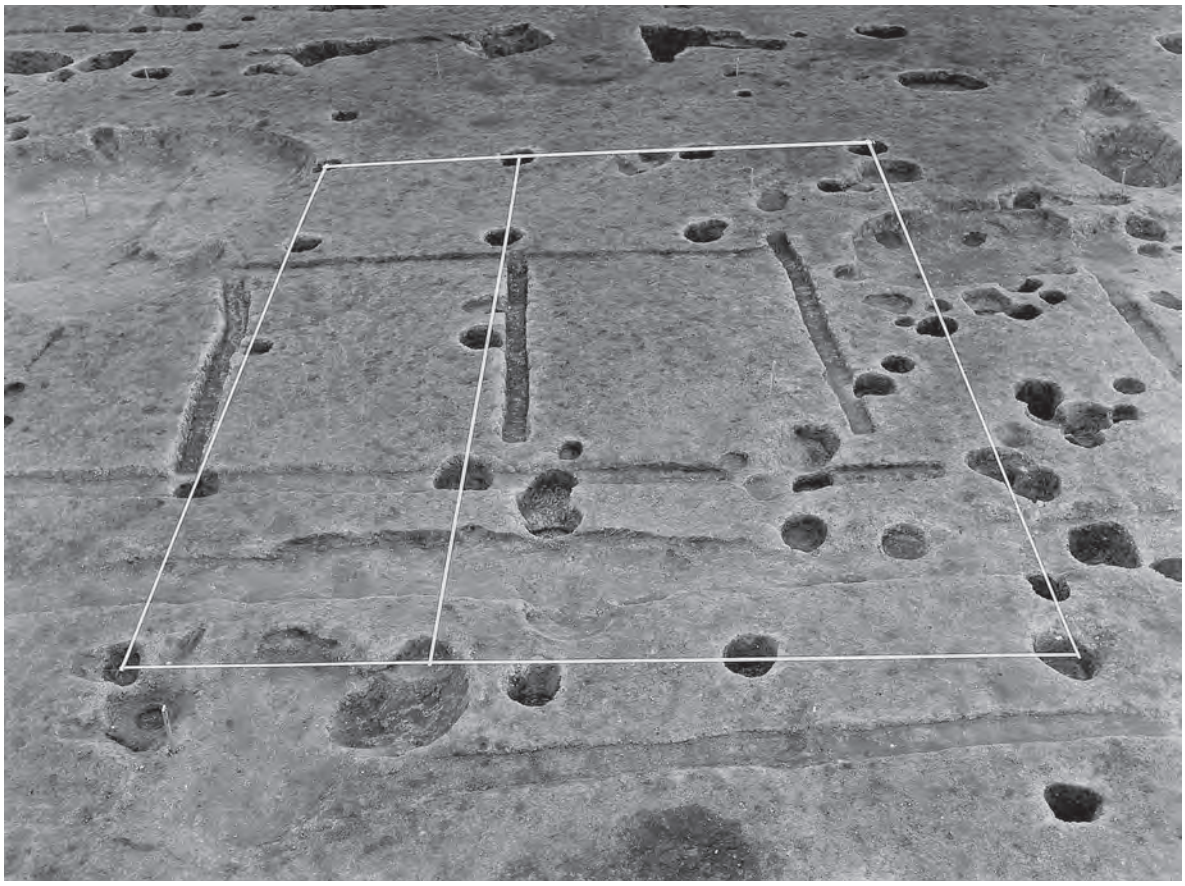
PL.14



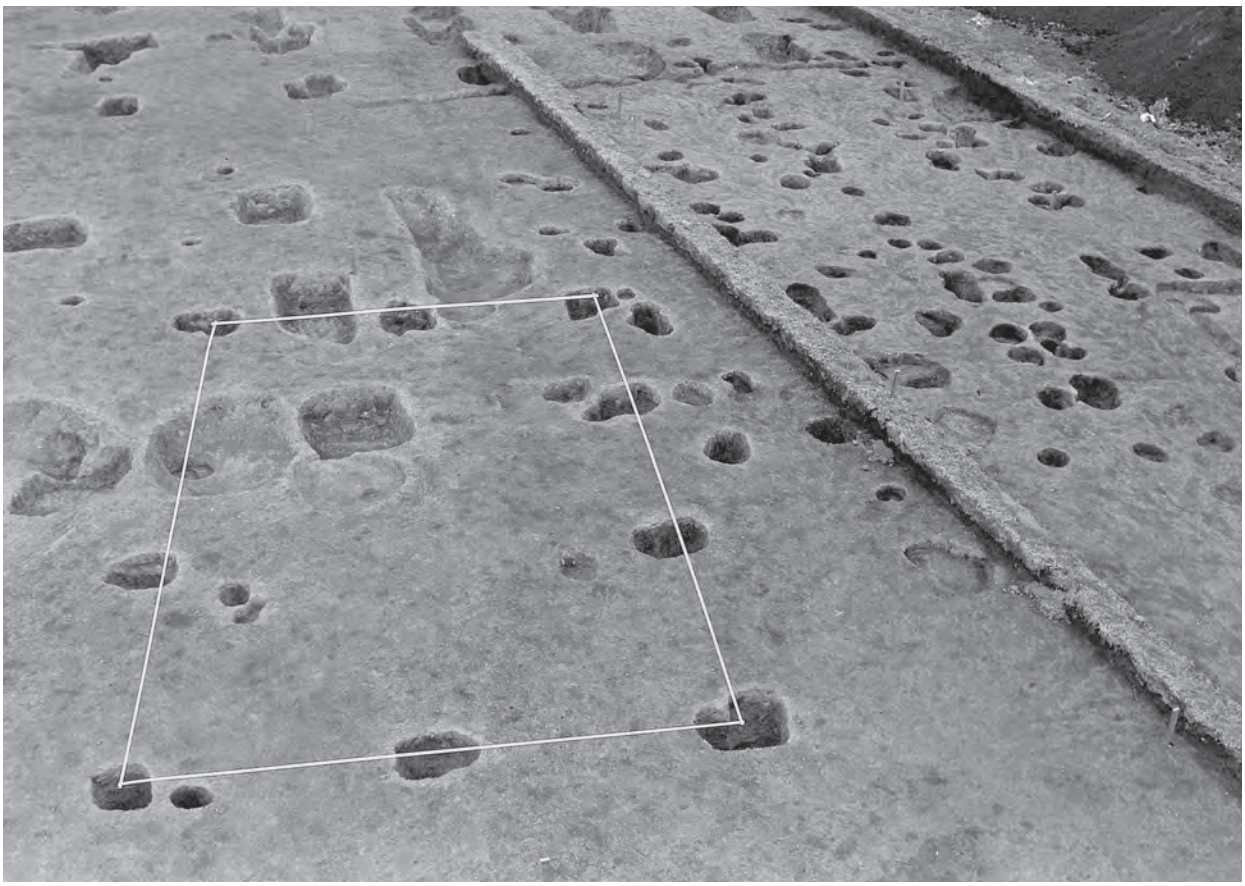
第 20 次調査　SB1040（南から）



第 20 次調査　SB1046・SK1045（南から）

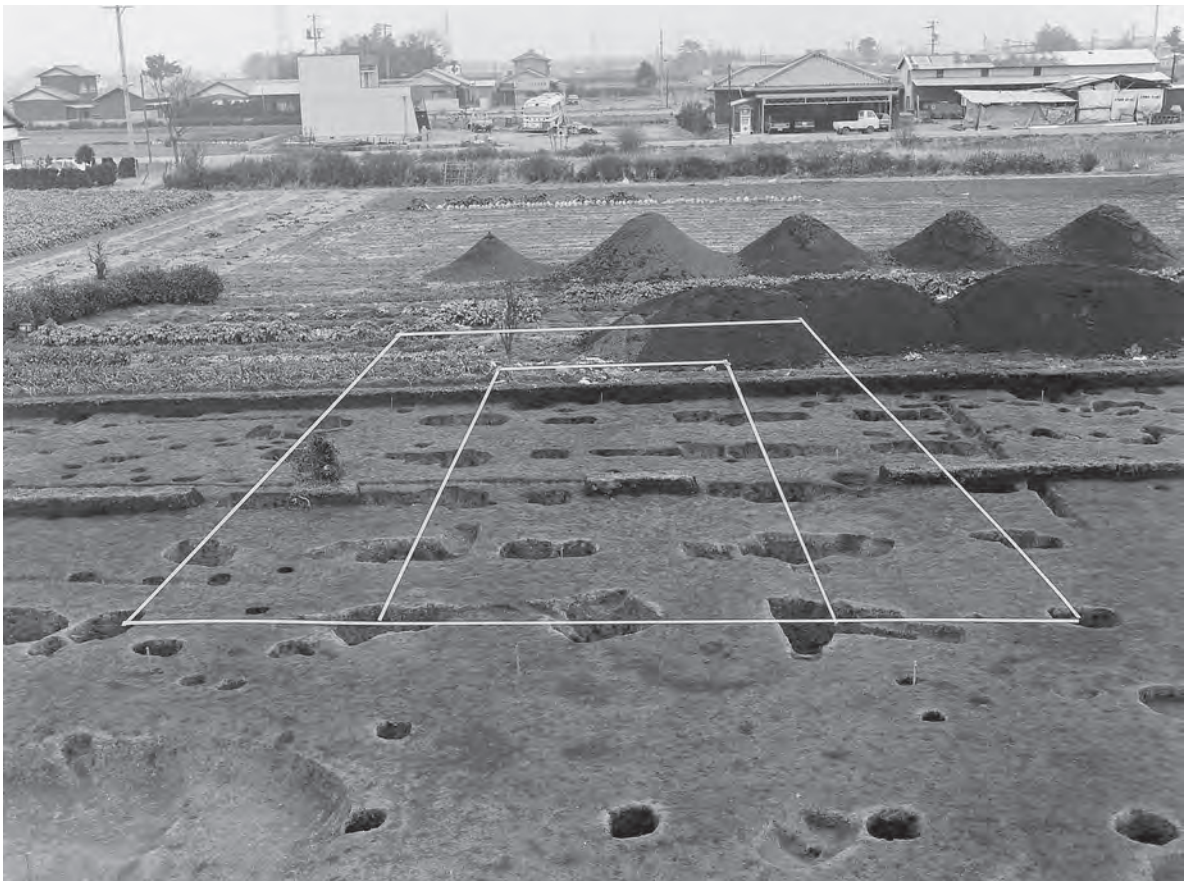


第 20 次調査　SB1051（西から）



第 20 次調査　SB1075（南から）

PL.16



第 20 次調査　SB1080（西から）

第 20 次調査　SB1050・1080・1086（北から）

第 28 次調査区全景（西から）

第 28 次調査区全景（北から）

PL.18

第 28 次調査　調査区西半（南から）

第 28 次調査　調査区東半（南から）

第 28 次調査　調査区西部（北から）

第 28 次調査　SB1306・1307（北から）

PL.20

第 28 次調査　SE1295 付近（南東から）

第 28 次調査　SE1295（南から）

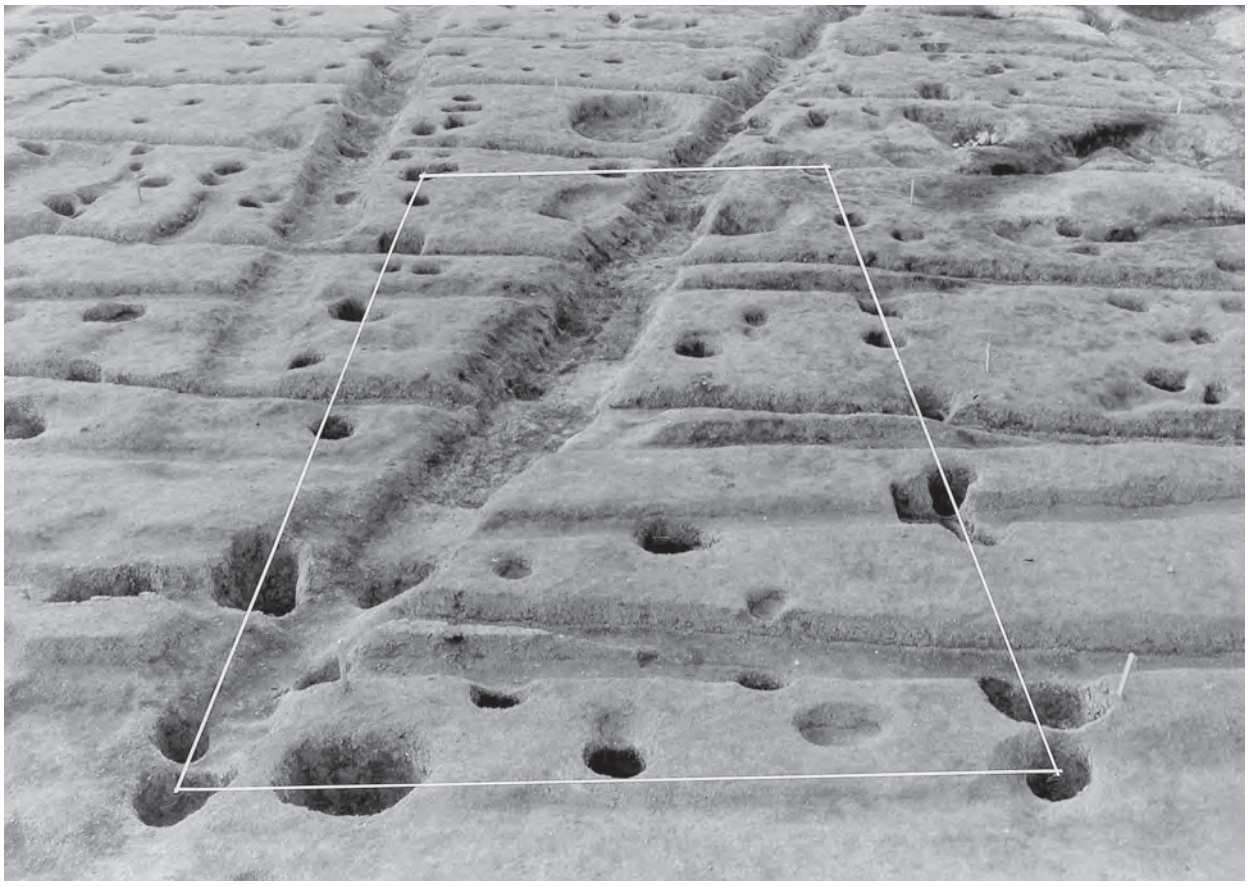
第 28 次調査　SB1315・1320 ほか（西から）

第 28 次調査　SB1315・1320（西から）

PL.22

第 28 次調査　SB1315・1318・1322（東から）

第 28 次調査　SB1326・1327（東から）

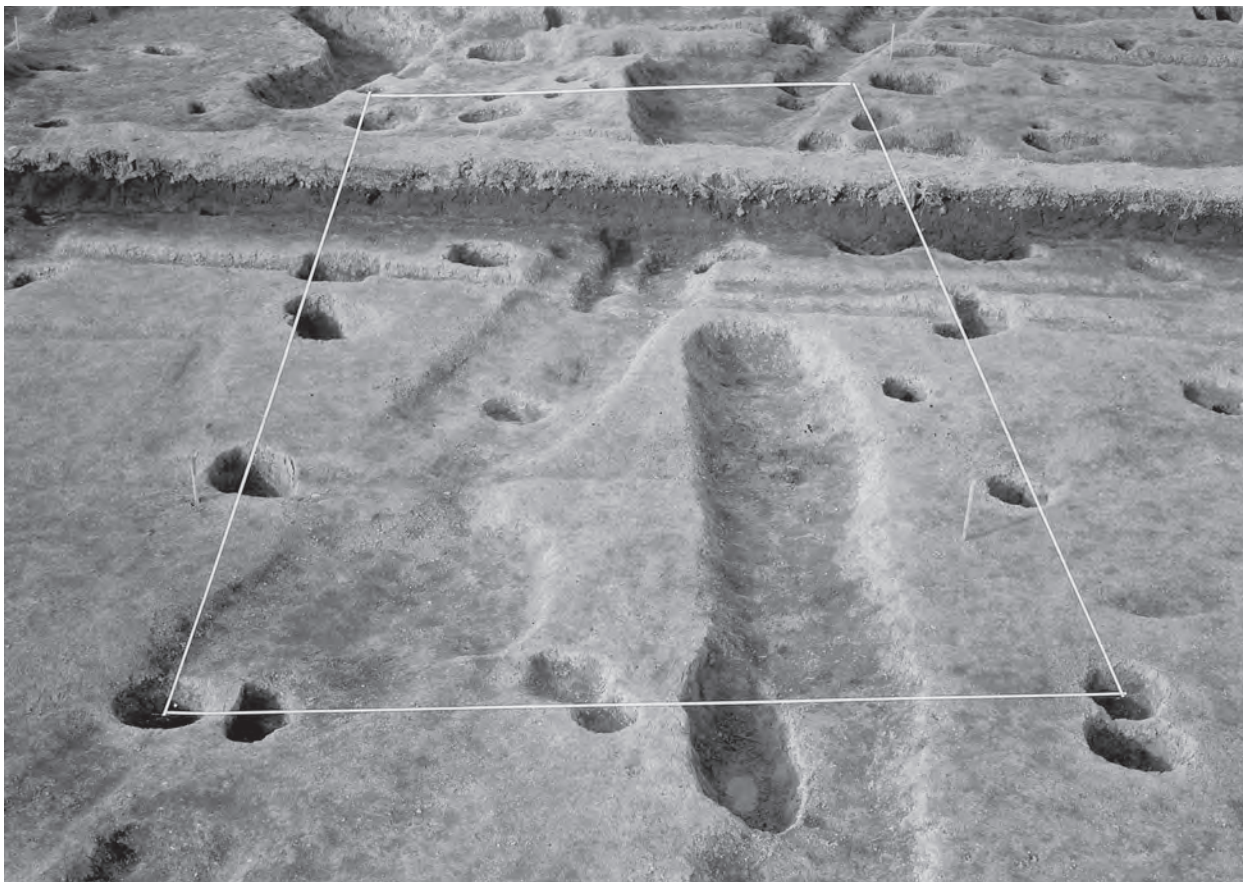


第 28 次調査　SB1340（東から）

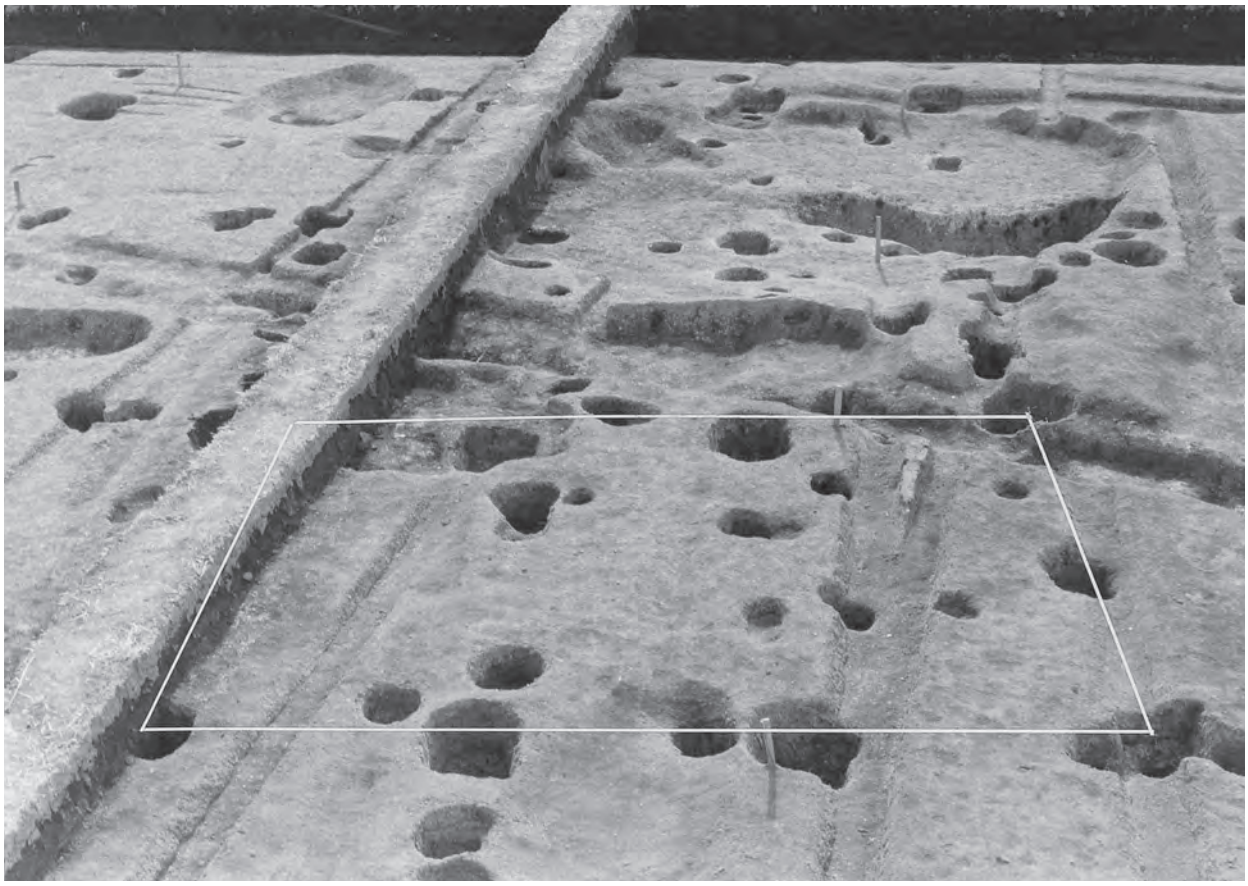
第 28 次調査　SB1330（東から）

PL.24

第 28 次調査　SB1333・1334・SK1345（東から）



第 28 次調査　SD1332・SB1393（東から）



第 28 次調査　SB1360（北から）

第 28 次調査　SB1077・1390（北から）

PL.26

第 55 次調査東調査区全景（南から）

第 55 次調査　SB1059（東から）

第 55 次調査　東調査区北半（南東から）

第 55 次調査　東調査区南半（北東から）

PL.28

第 103 次調査　柳原区画南西隅交差点（西から）

第 103 次調査　SD7003（南から）

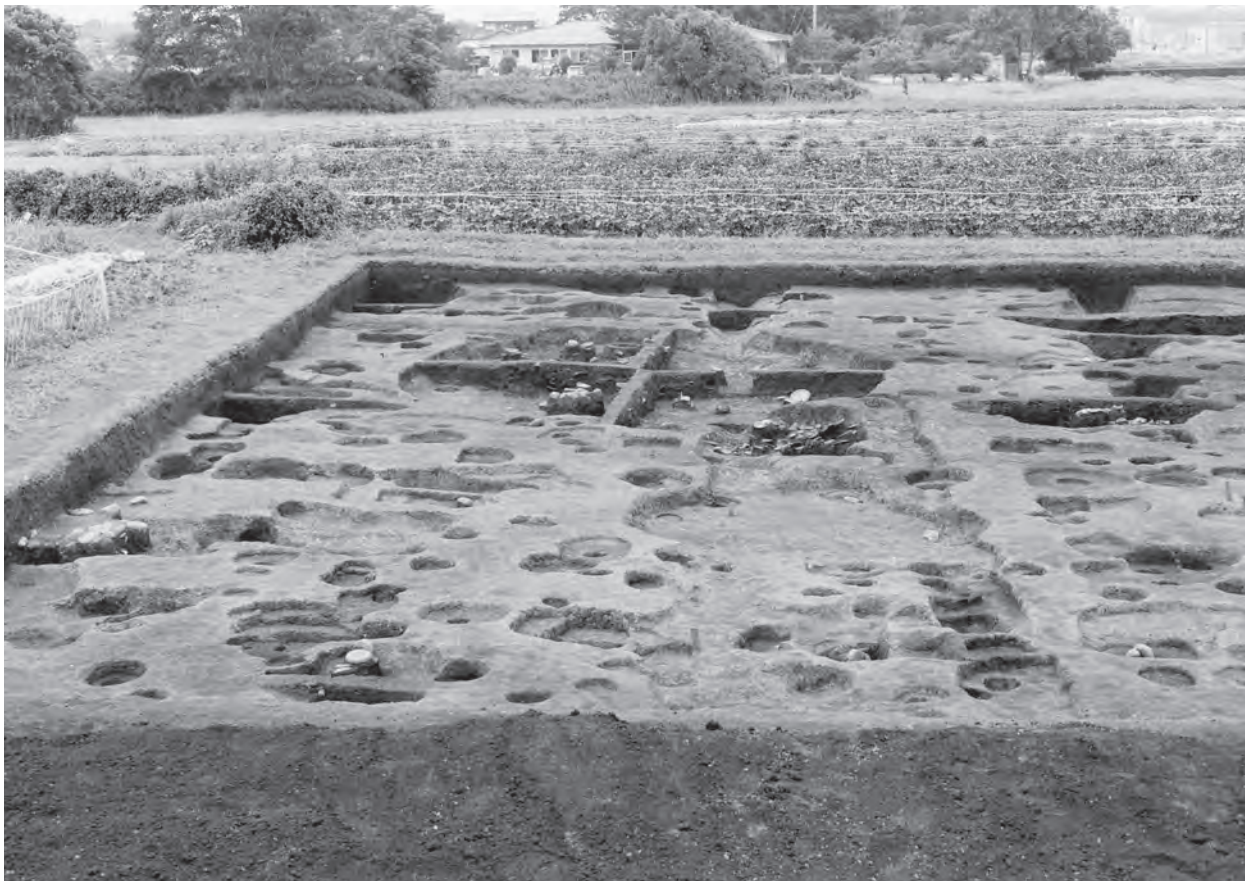
第 143 次調査区全景（南から）

第 143 次調査区全景（西から）

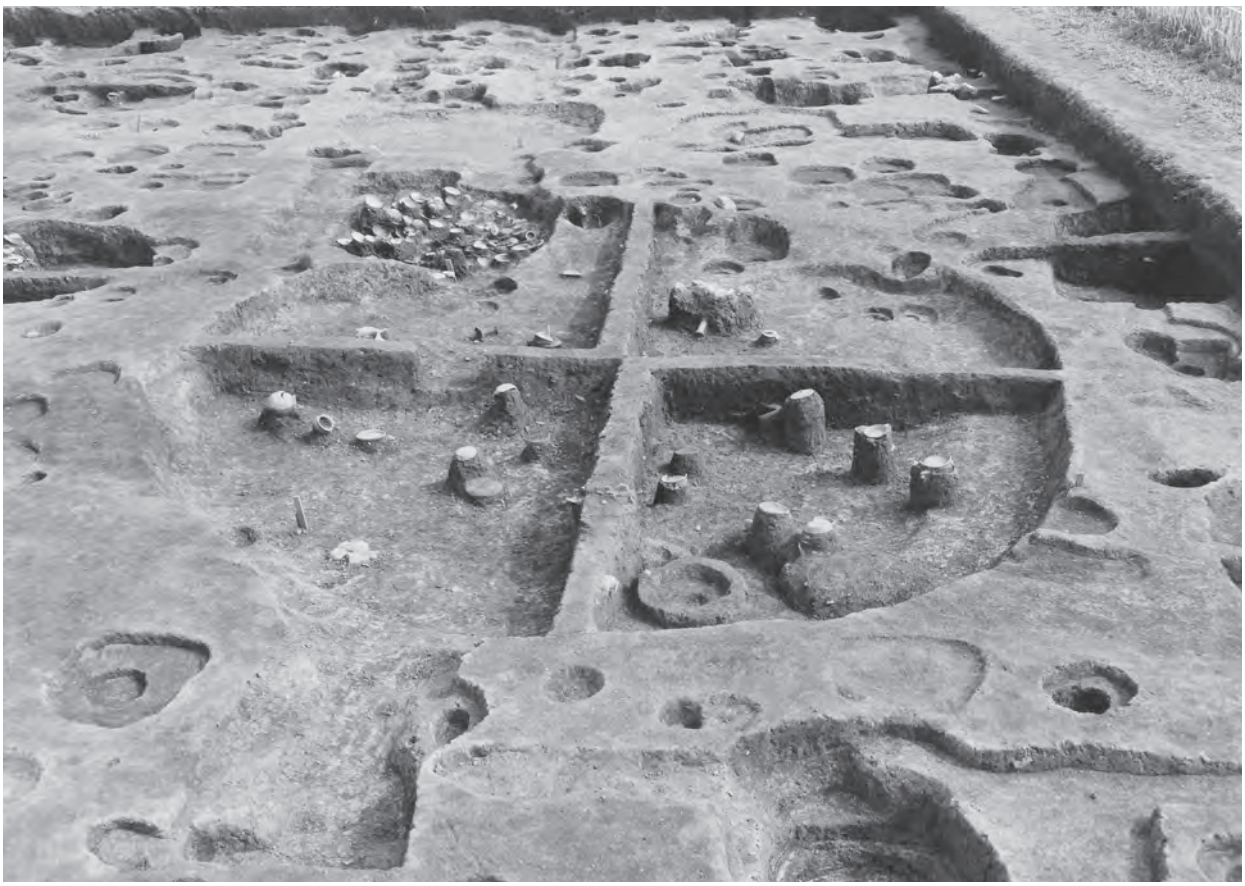
PL.30

第 143 次調査　古代伊勢道および調査区北半（東から）

第 143 次調査　SB9003（北から）



第 143 次調査　調査区西半（南から）



第 143 次調査　SH9001（北から）

PL.32

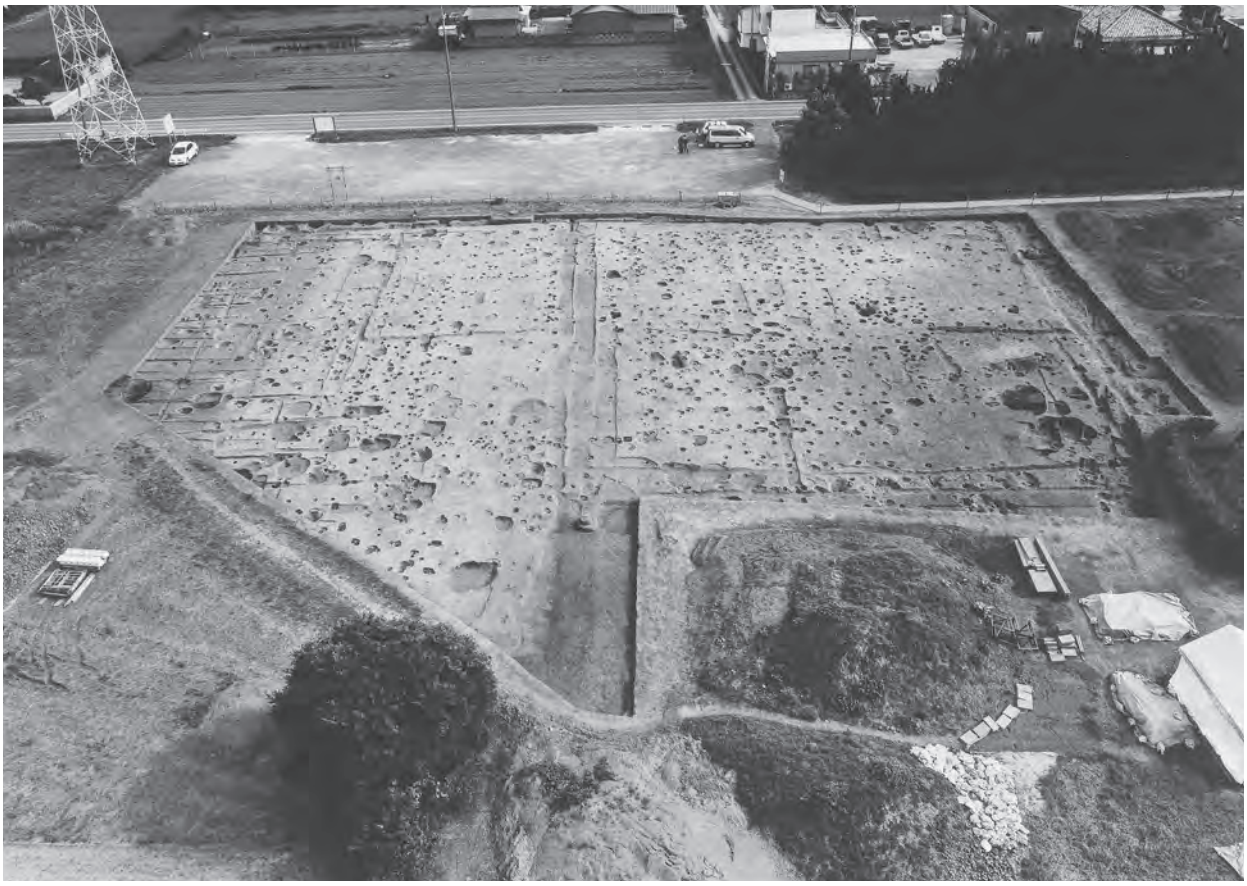
第 143 次調査　SH9001（南から）

第 143 次調査　SK9026（南東から）

第 143 次調査　SE9014（東から）

第 152 次調査区全景（北から）

PL.34



第 152 次調査区全景（西から）

第 152 次調査 調査区北半（東から）

第 152 次調査　調査区南半（北から）

第 152 次調査　調査区南半（北から）

PL.36

第 152 次調査　調査区南半（西から）

第 152 次調査　SB9750・9800（北から）

第 152 次調査　SB9672（西から）

第 152 次調査　SB9702（東から）

PL.38

第 152 次調査　SB9687・9688（東から）

第 152 次調査　SB9706・9707（東から）

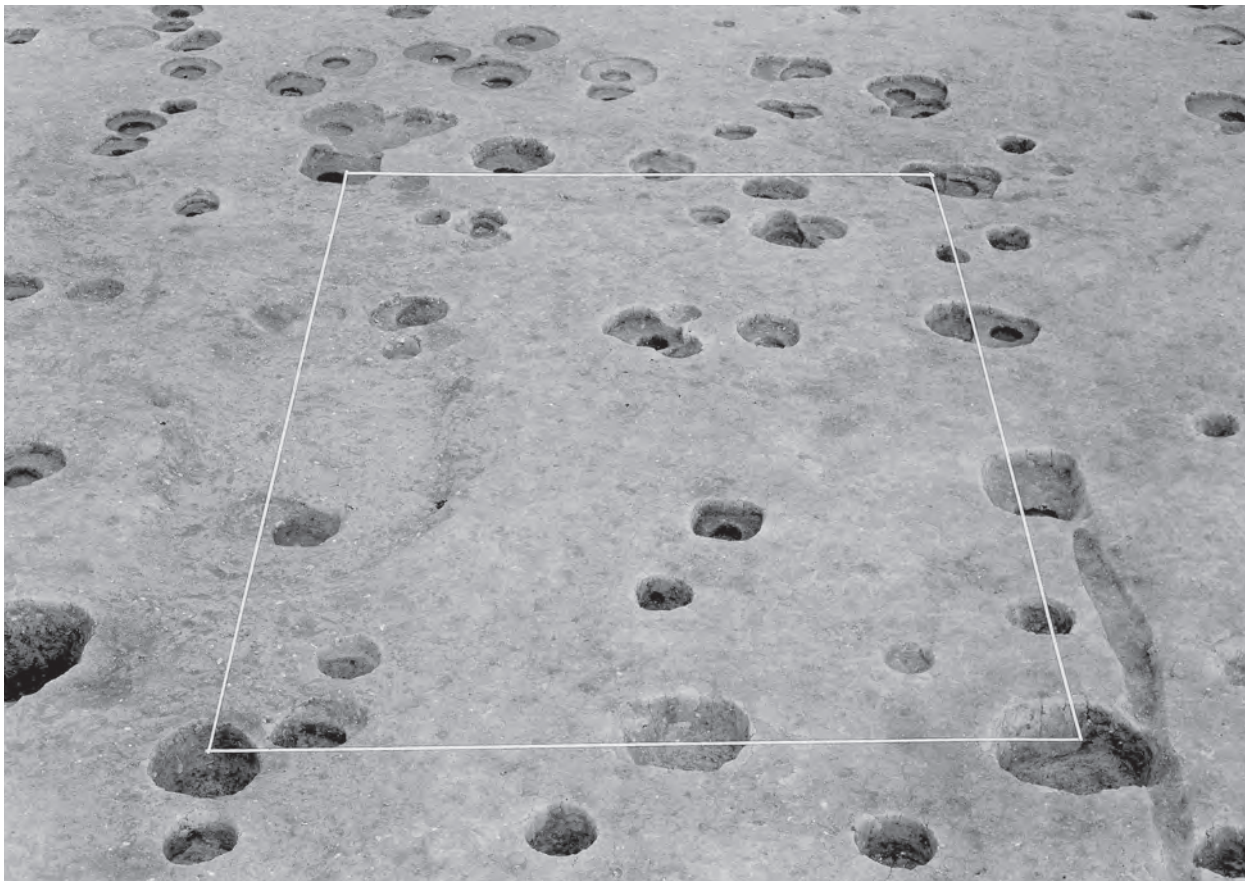
第 152 次調査　SB9706・9707（北から）

第 152 次調査　SB9709・9710（北から）

PL.40

第 152 次調査　SB9735（西から）

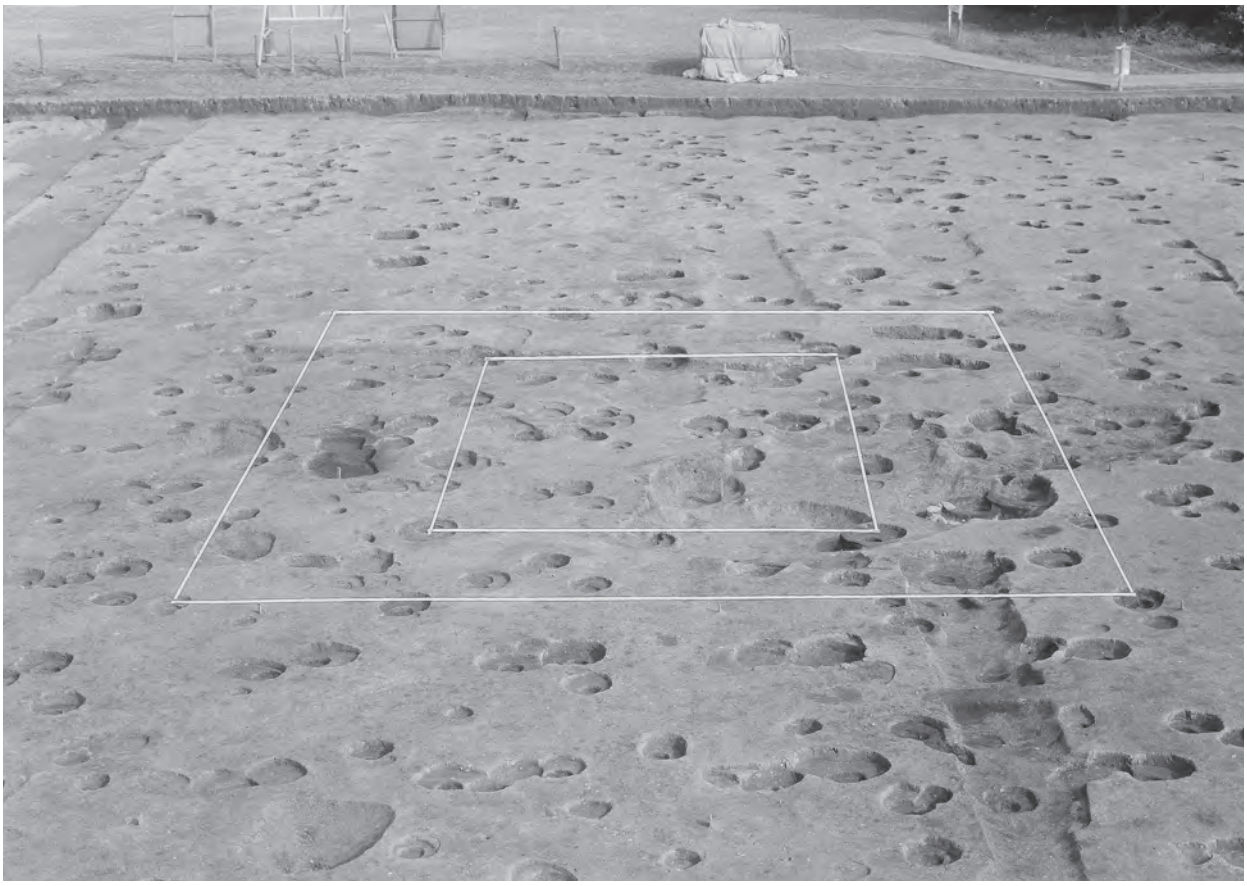
第 152 次調査　SB9739・9740（北から）



第 152 次調査　SB9779（西から）

第 152 次調査　SB9764・9765（北から）

PL.42



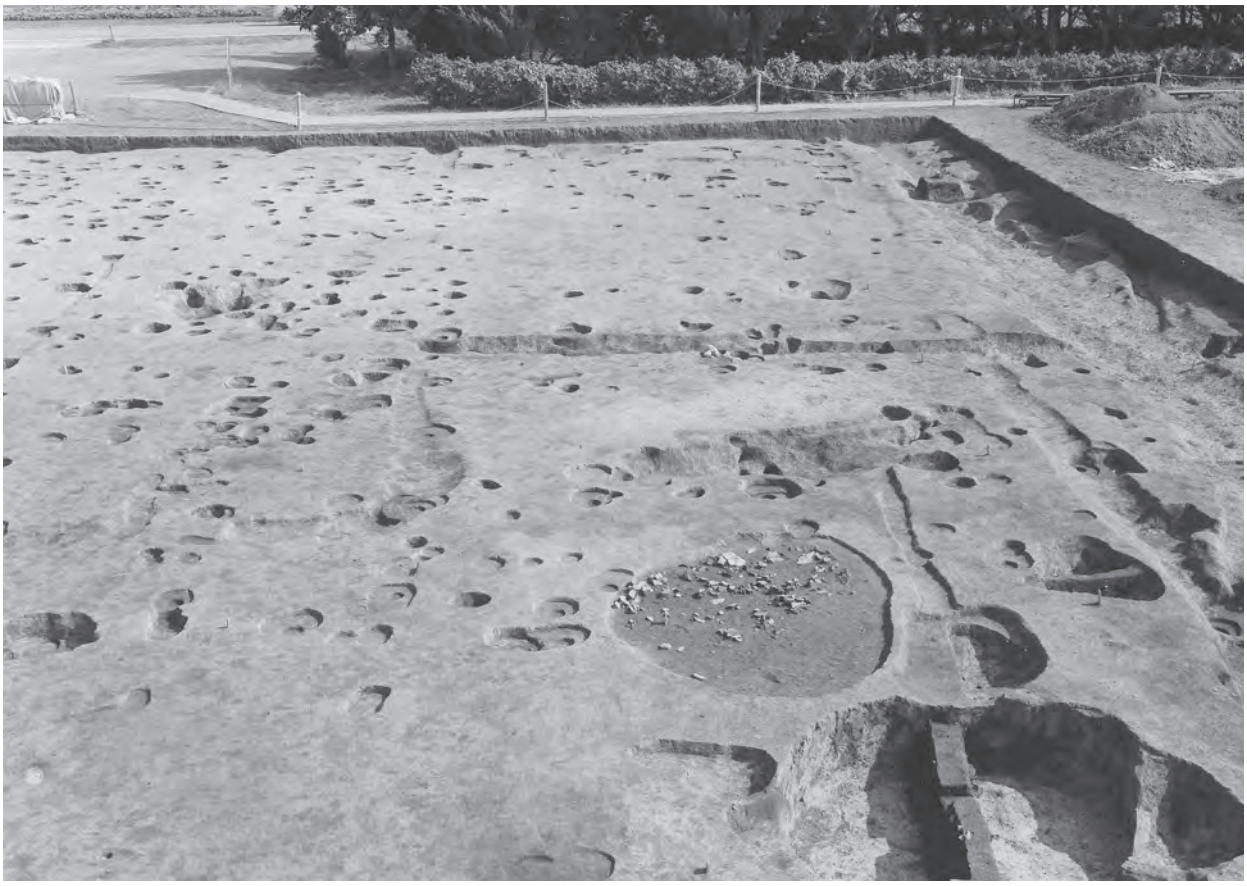
第 152 次調査　SB9750 付近（西から）

第 152 次調査　SB9745・9774 ～ 9776（北から）

第 152 次調査　SB9782・9783（北から）

第 152 次調査　SB9007（北から）

PL.44



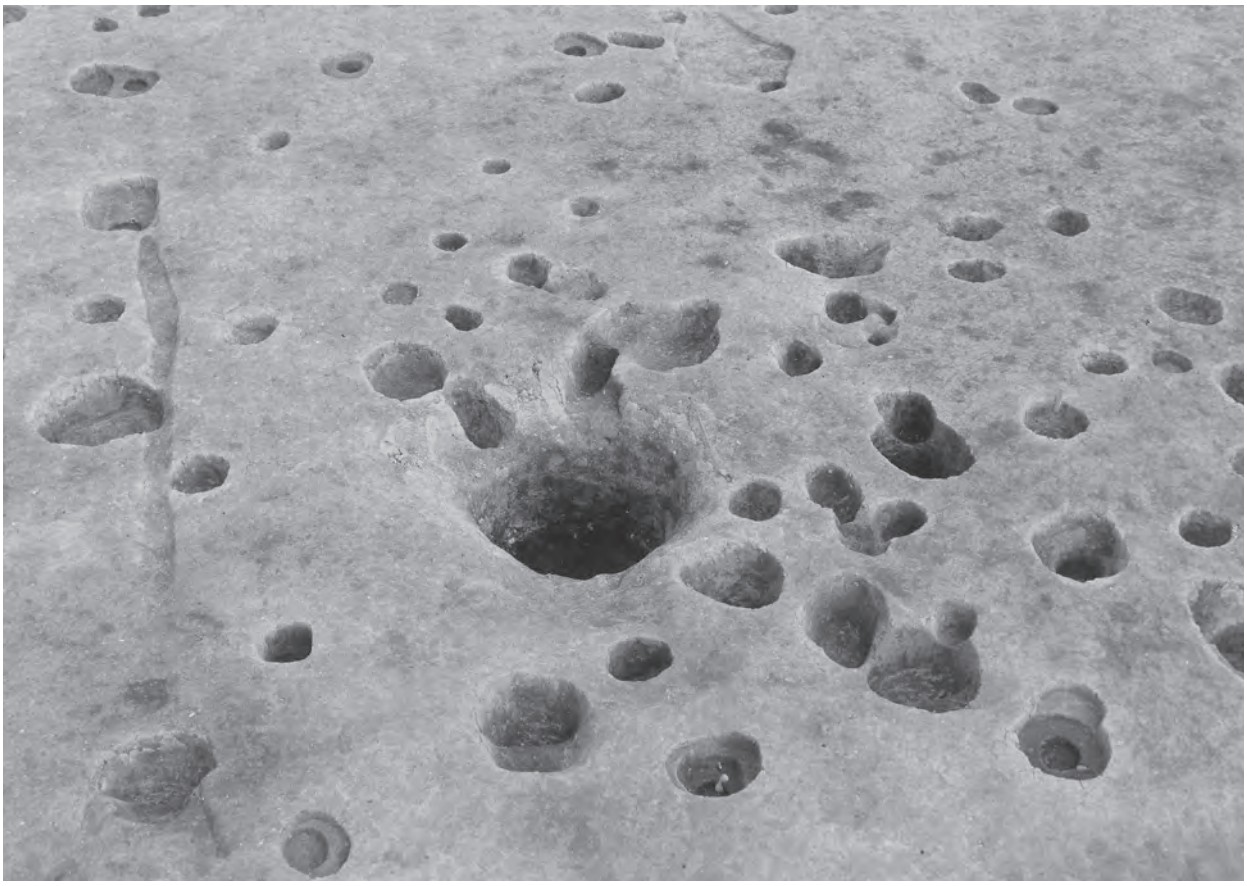
第 152 次調査　SB9800（西から）

第 152 次調査　SB9800（西から）

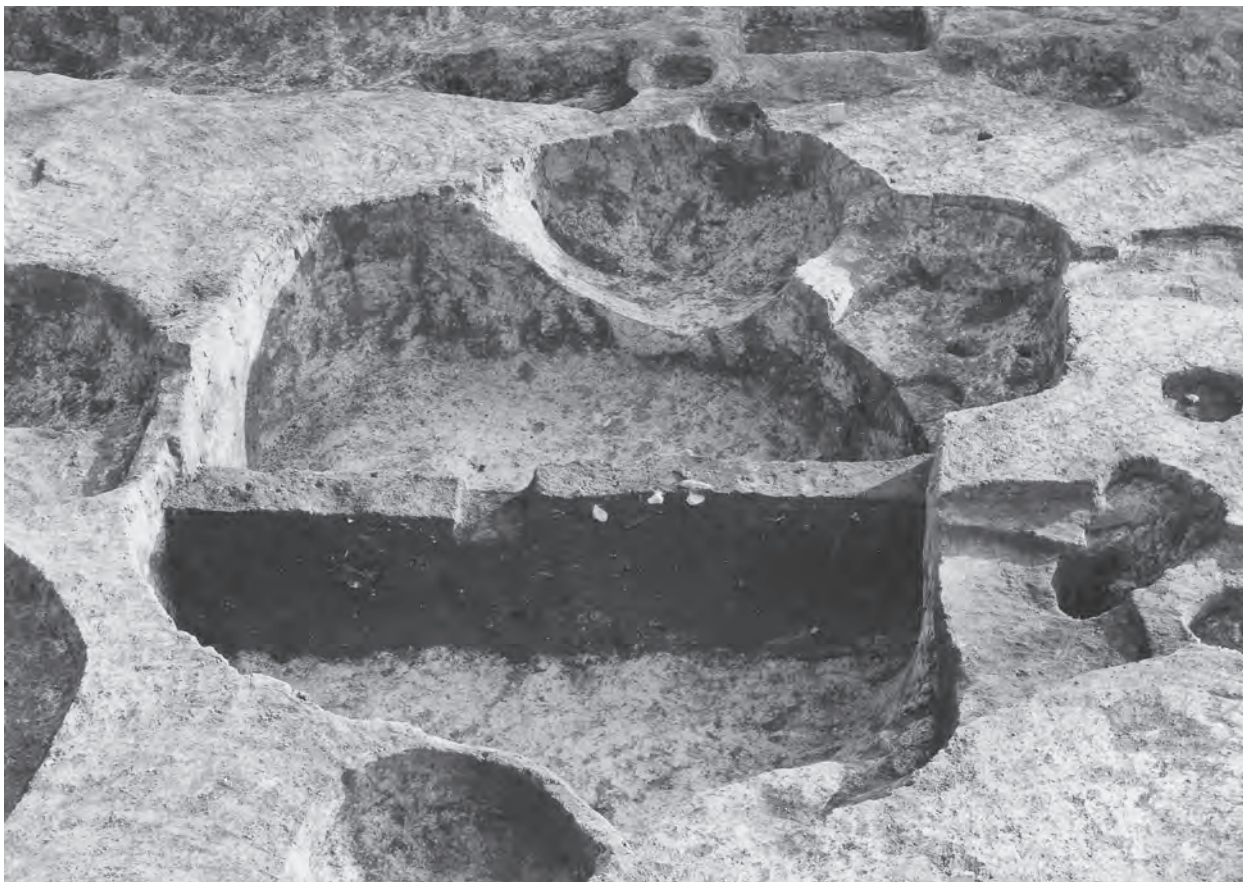
第 152 次調査　SB9800（北から）

第 152 次調査　SD1326（西から）

PL.46



第 152 次調査　SE0276（西から）



第 152 次調査　SK9785（北から）

第 153 次調査区全景（北から）

第 153 次調査区全景（東から）

PL.48

第 153 次調査　西調査区全景（北東から）

第 153 次調査　西調査区全景（北から）

第 153 次調査　SD1395・6802（西から）

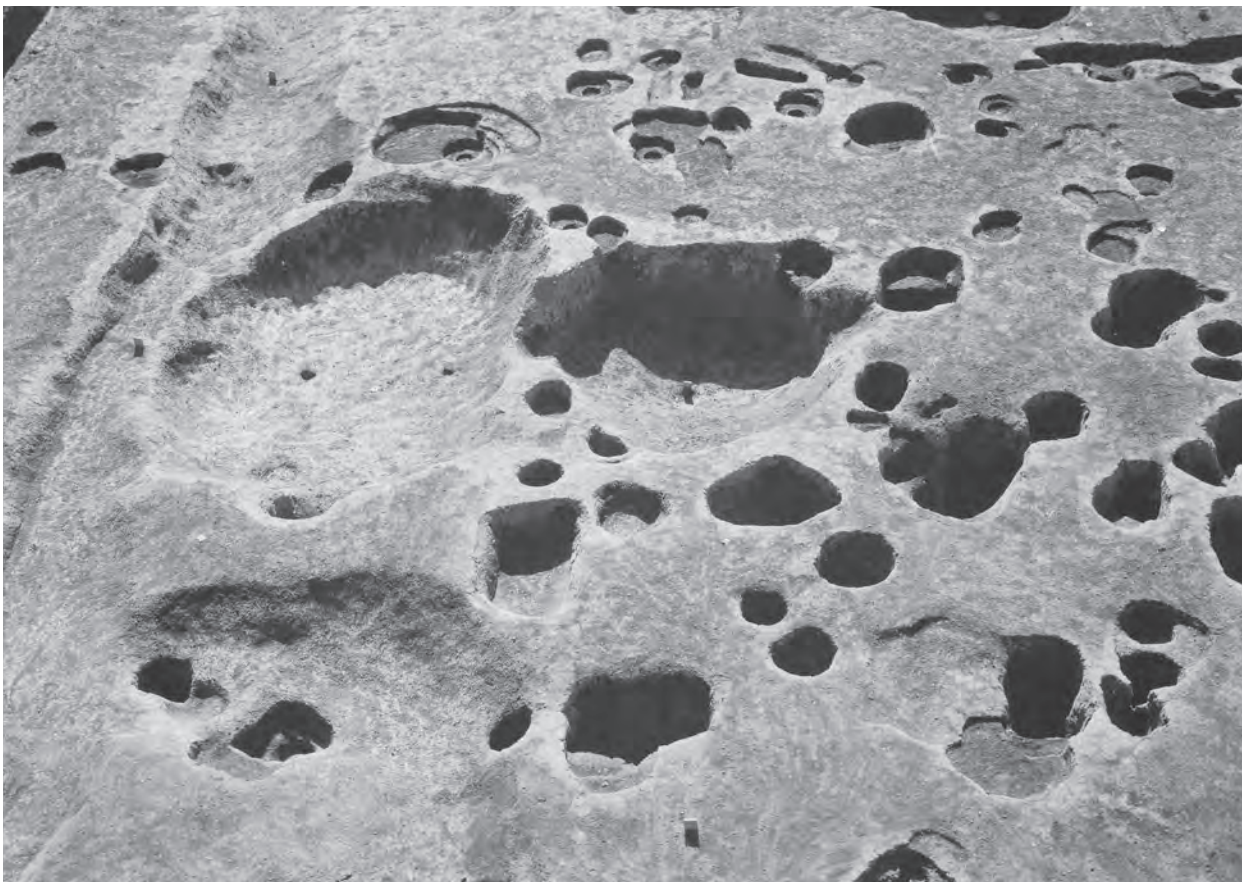
第 153 次調査　西調査区中央部（東から）

PL.50

第 153 次調査　SB1080（北から）

第 153 次調査　SB1080 第 20 次調査発掘の身舎柱穴（東から）

第 153 次調査　SB9817（北から）



第 153 次調査　SK0323・9827（北から）

PL.52

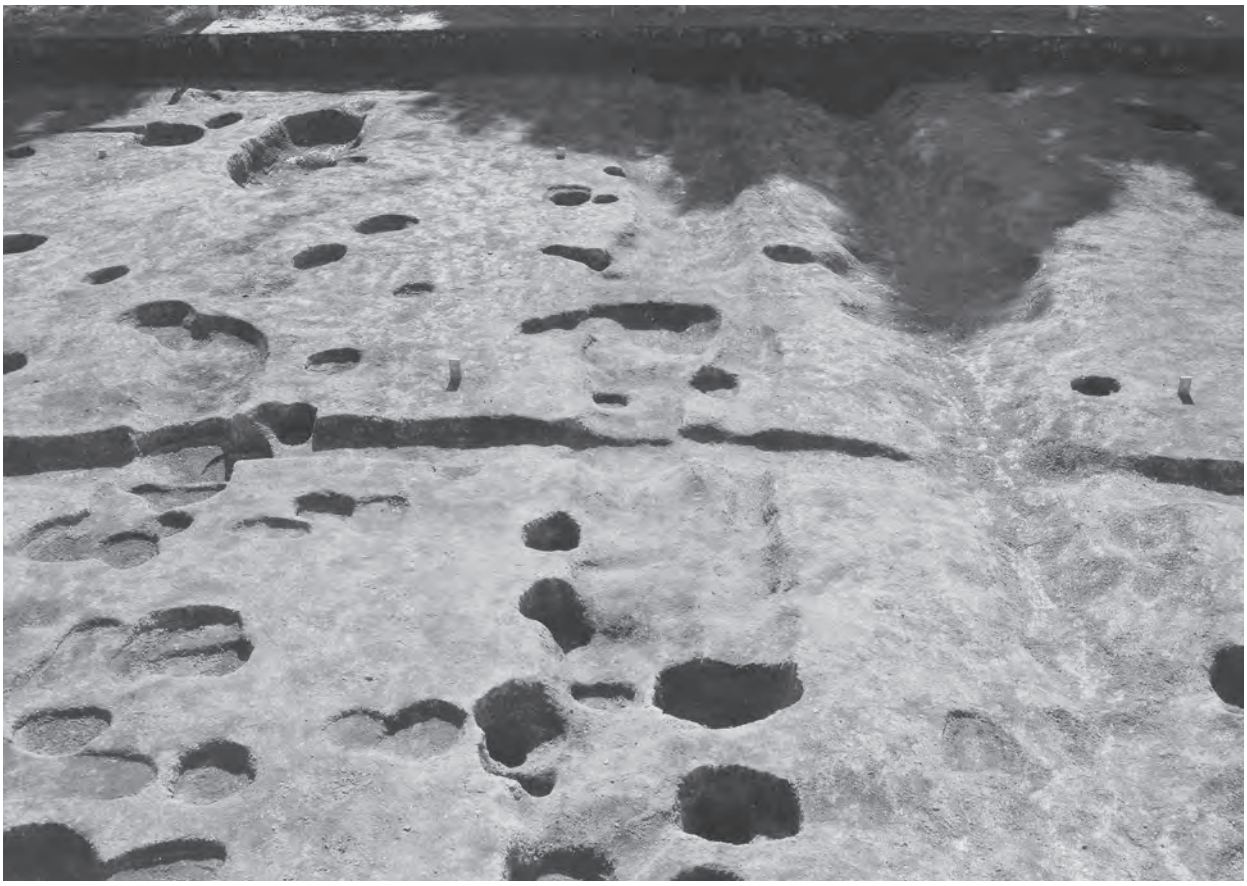
第 153 次調査　SE9835（北から）

第 153 次調査　東調査区全景（東から）

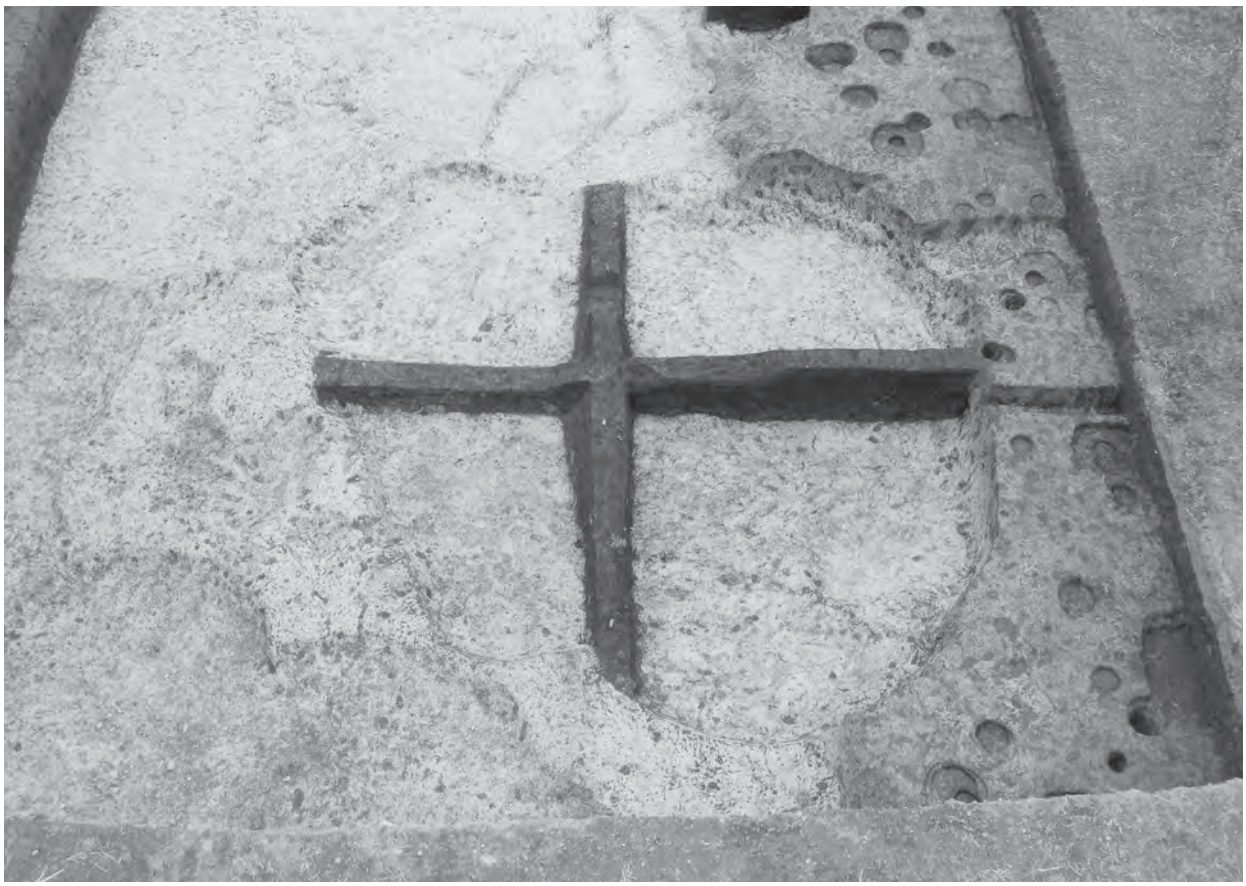
第 153 次調査　東調査区中央部（北から）

第 153 次調査　SB0260（西から）

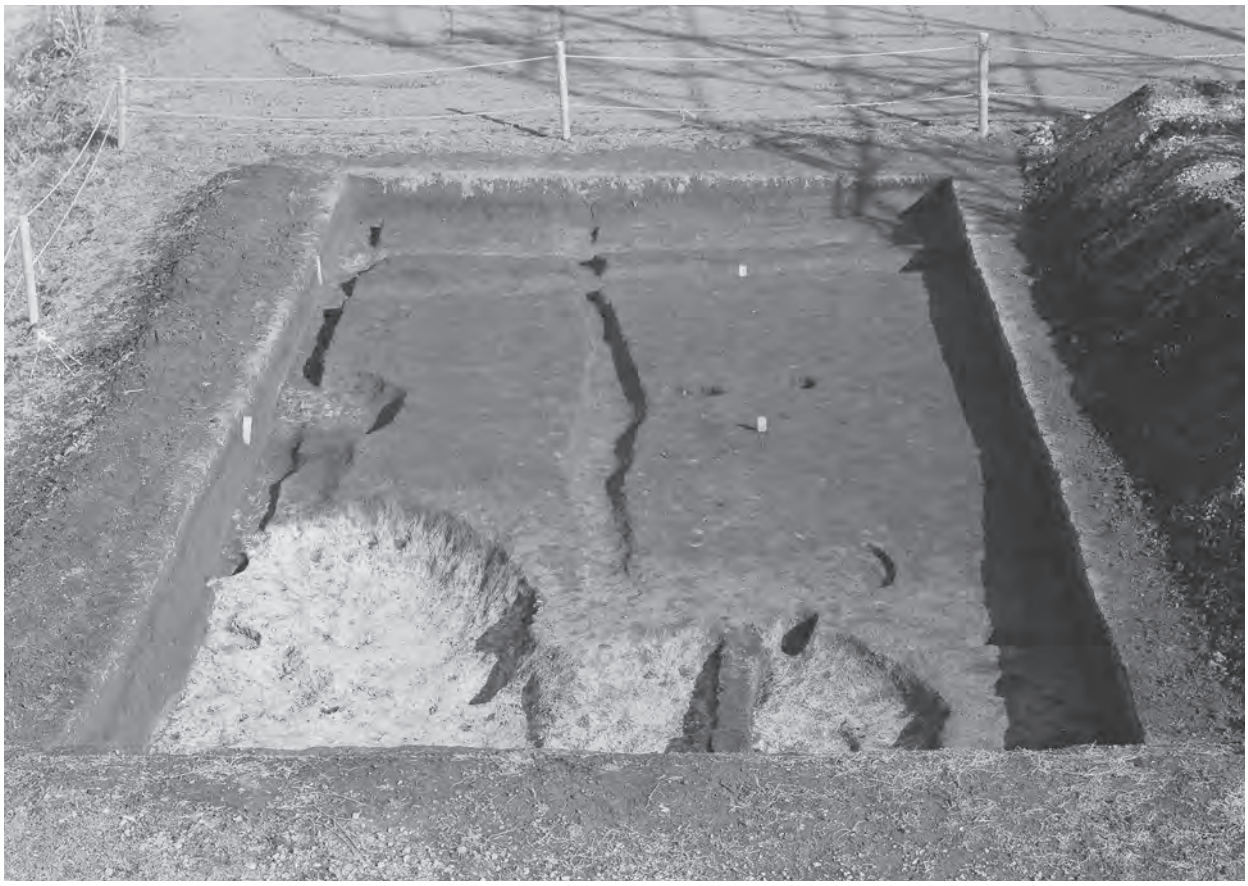
PL.54



第 153 次調査　SD9044（北から）



第 153 次調査　SK9852（東から）



第 156 次調査区全景（南から）

第 156 次調査　SD9871（西から）

PL.56

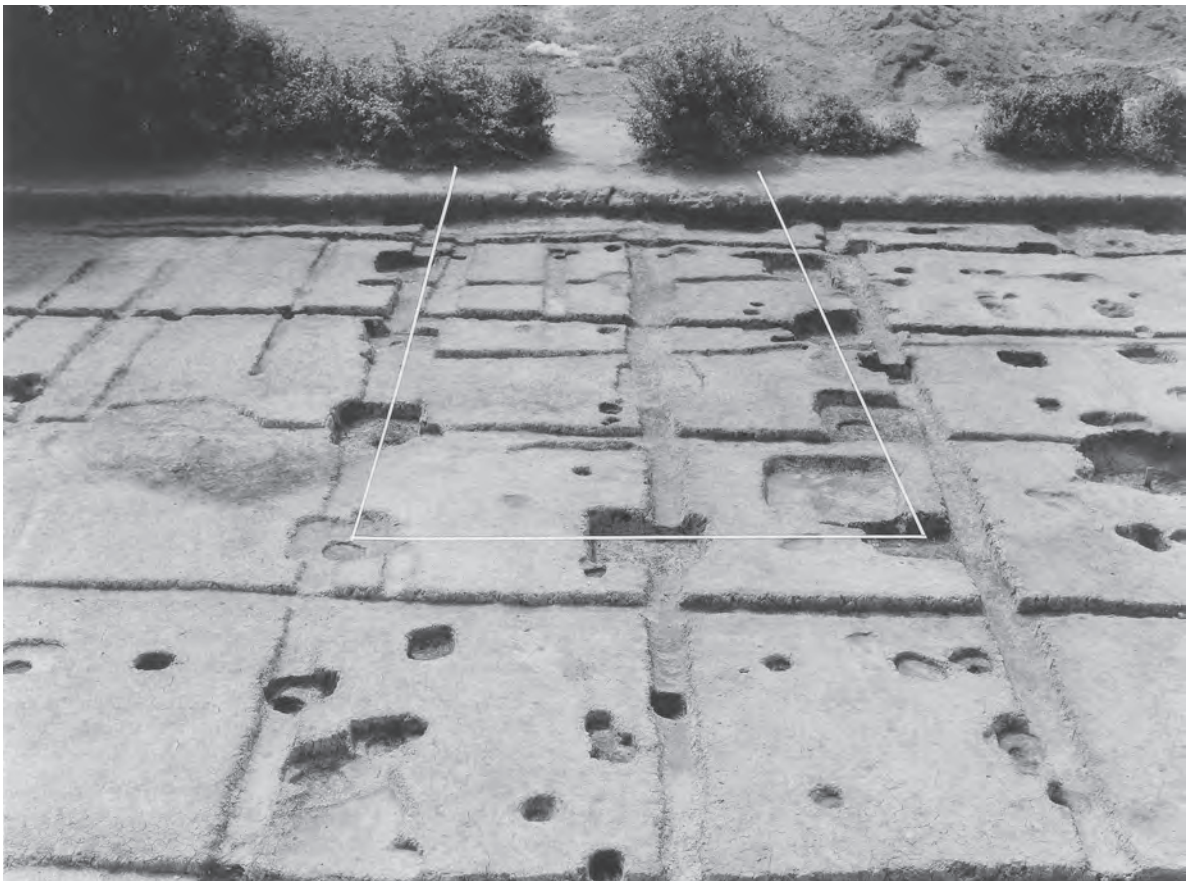
第 157 次調査区全景（南から）

第 157 次調査区全景（西から）

第 157 次調査　調査区西端（南から）

第 157 次調査　SB9890（東から）

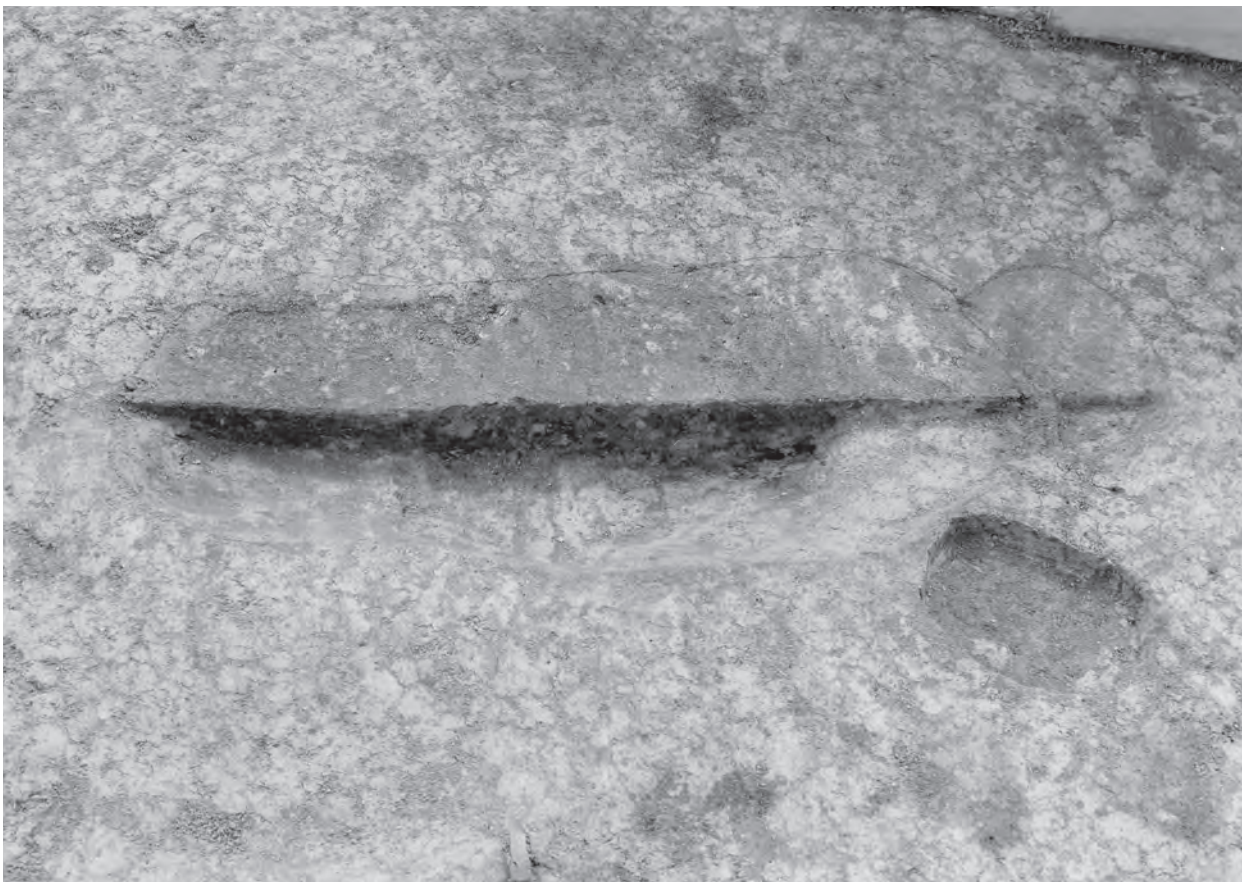
PL.58



第 157 次調査　SB9900（北から）

第 157 次調査　SB9920（西から）

第 157 次調査　SB9873・9882・9920（東から）



第 157 次調査　SK9941 検出状況（西から）

PL.60

第 157 次調査　SB9910（東から）

第 157 次調査　SB9880（東から）

第 158 次調査　古代伊勢道（東から）

第 158・159 次調査区遠景（東南東から）

PL.62

第 159 次調査区北半全景（北から）

第 159 次調査　SB10060・10061（東から）

第 159 次調査　SB10062 付近（南西から）

第 159 次調査　古代伊勢道・SB9005（北西から）

PL.64

第 159 次調査　SB9005・10064・10065（東から）

第 159 次調査区南半全景（北から）

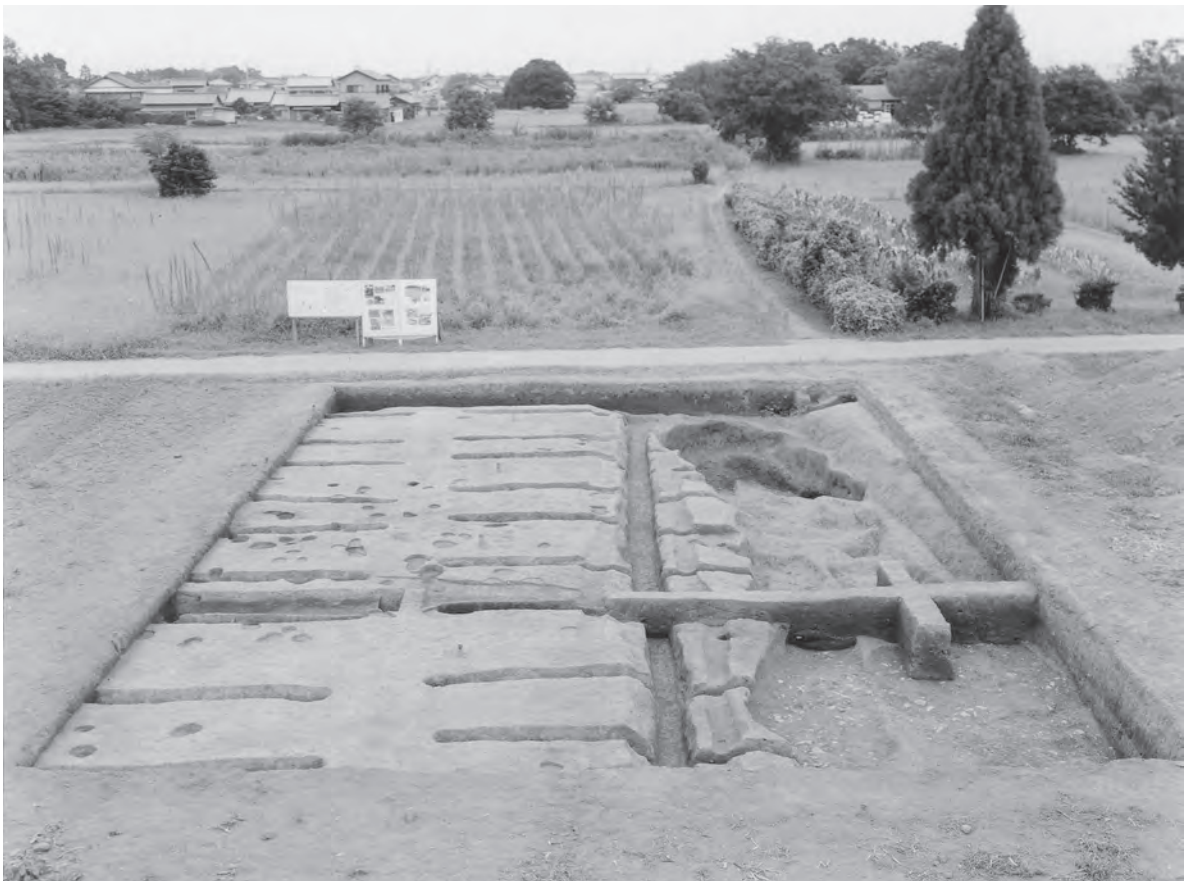
第 159 次調査　SD10094・10095（北から）

第 159 次調査　調査区南端部（南から）

PL.66

第 159 次調査　SB10083 付近（南から）

第 159 次調査　SD6802 付近（西から）



第 164 次調査区全景（南から）

第 164 次調査　SD2844（東から）

PL.68

第 165 － 1 次調査区全景（西から）

第 165 － 1 次調査　調査区東部（東から）

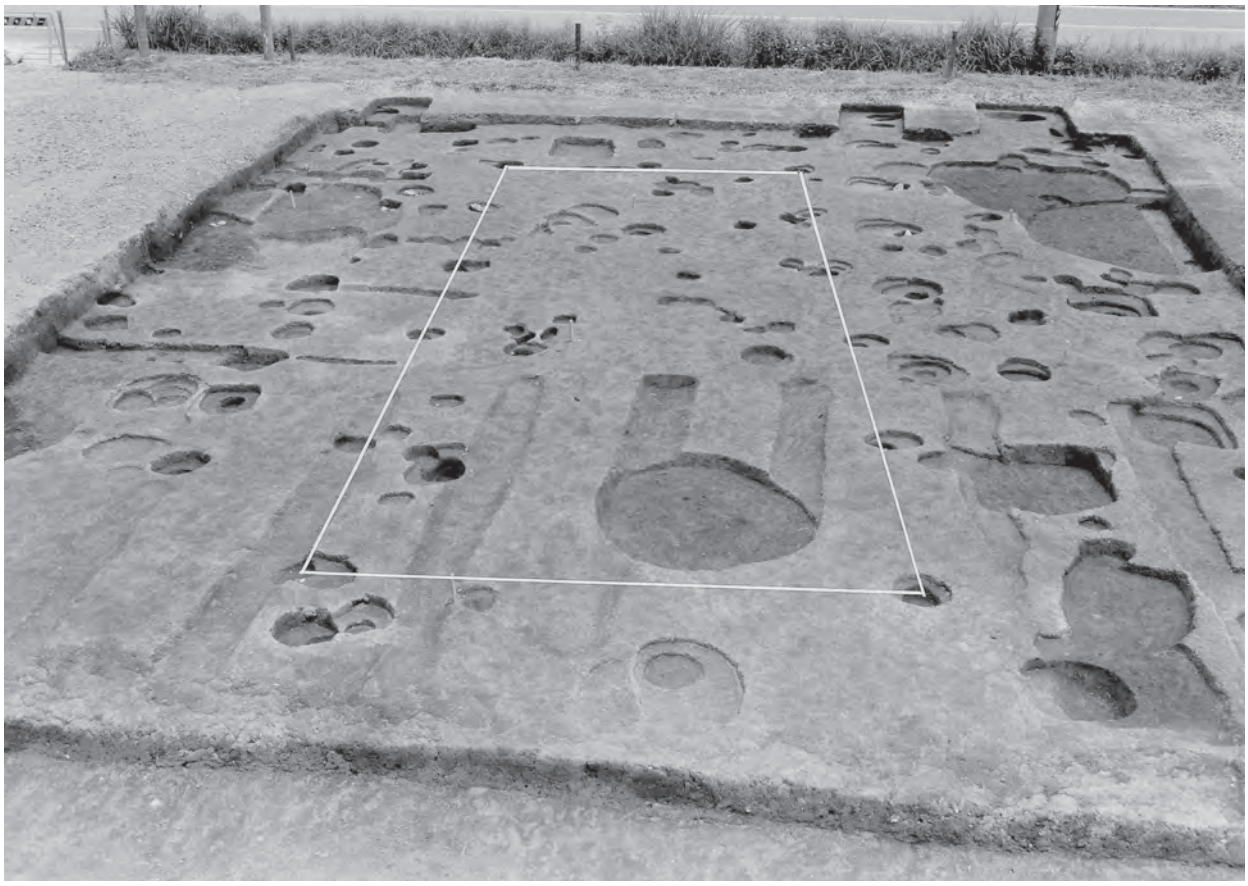
第 165 － 2 次調査区全景（南から）

第 166 次調査　SD10141（北西から）

PL.70

第 167 次調査区全景（北から）

第 167 次調査区全景（南南西から）



第 167 次調査　SB10154（西から）

第 167 次調査　SB9709（東から）

PL.72

第 167 次調査　SB10157（北から）

第 167 次調査　SB10165 付近（南から）

第 167 次調査　SB10164・10165 付近（西から）

第 167 次調査　SB10175 付近（南から）

PL.74

第 167 次調査　SB10175（東から）

第 167 次調査　SE10210（南から）

第 168 次調査　SD0529（西から）

第 168 次調査　SD10253（東から）

PL.76

第 170 － 1 次調査区全景（北から）

第 170 － 1 次調査　SD7252（南西から）

附　編

附編　牛葉東区画の土塁状遺構について

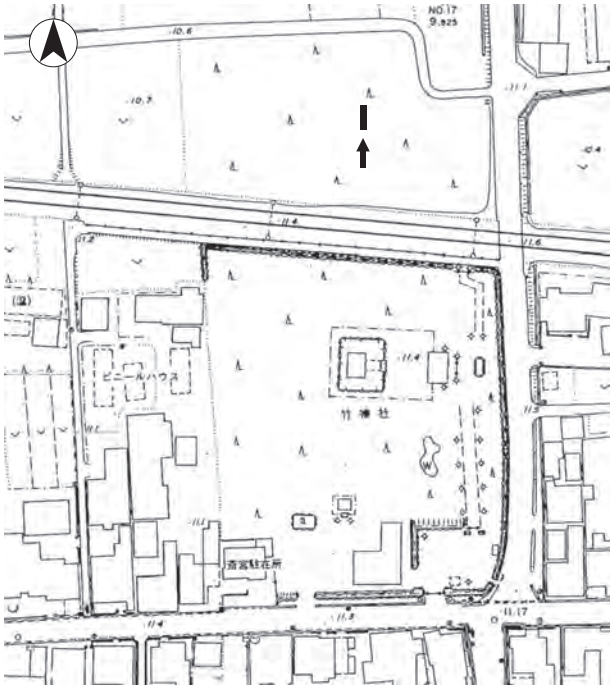
1　はじめに

今回の史跡斎宮跡東部整備事業に伴い、牛葉東区画北部に広がる雑木を伐採撤去したところ、長さ約30m×幅約４ｍの範囲にわたり、0.5m程度の高まりが認められた。牛葉東区画では、現在でも竹神社境内西端で土塁状の高まりが確認できる。また、第108次調査では、平面形は不明であるものの、土層断面において土塁状遺構が確認されており、牛葉東区画を細分する土塁の存在が指摘されていた。今回確認した土塁状遺構については、地形測量を行うとともに第174－11次調査として発掘調査を実施した。離宮院跡でも土塁状遺構が現存し、斎宮との類似性が指摘されている[(1)]が、ここでは今回の調査結果を踏まえて、土塁状遺構の性格について再検討したい。

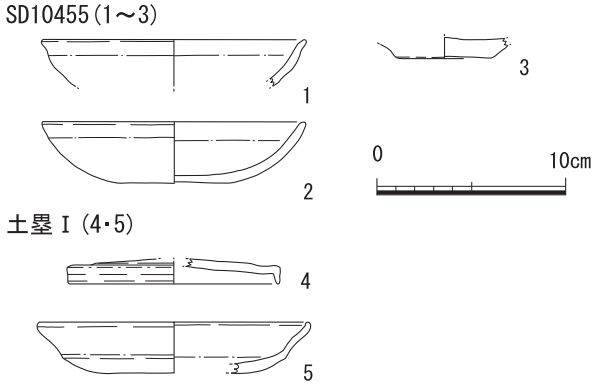
2　174－11次調査概要

調査地は明和町斎宮字柳原2779・2880番地に位置する。トレンチは土塁状遺構に直交する方向で、幅0.8m×長さ６ｍの範囲で設定した。調査期間は平成23年12月19・20日である。

調査の結果、土塁状遺構のほか、溝２条、土坑１基、ピットを確認した。基本層序は、表土下に黄橙色や黄褐色砂質土が堆積し、表土下0.6～0.8mで地山面である橙色粘土層を確認した。溝ＳＤ10453は土塁状遺構の北裾部を削平する溝で、時期は不明。溝ＳＤ10455は土塁状遺構の南側に位置し、幅0.9m×深さ0.15mを測る。土師器皿（１）・杯（２）、陶器皿（３）が出土しており、溝の西側延長上にある第108次調査ＳＤ7307･7309の出土遺物を合わせて考えると、ＳＤ10455は斎宮Ⅲ－１期に属するものと考えられる。土塁状遺構は、大きく２時期に分かれる。Ⅰ期は幅約1.6ｍ・高さ0.5mで南側にＳＤ10455を伴う。Ⅱ期になると南側の溝は埋没し、土塁状遺構は幅約３ｍに拡張される。ともに版築や築地などの痕跡は確認出来なかった。盛土からは土師器皿（５）・高杯、須恵器甕、灰釉陶器蓋（４）などが出土しており、斎宮Ⅲ期以降の遺物は含まれなかった。また、土塁状遺構の底部からは土坑ＳＫ10454やピットなどを確認しているが、出土遺物からい



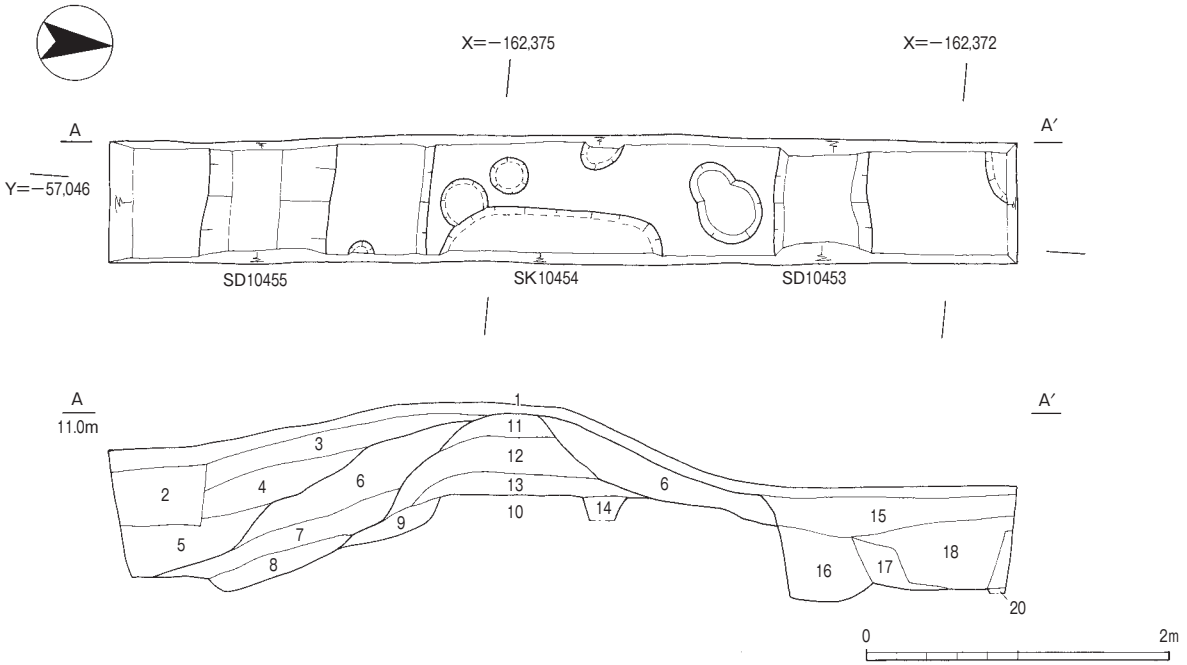
第68図　第174－11次調査区位置図（1：2,000）



第69図　第174－11次調査遺物実測図（1：4）

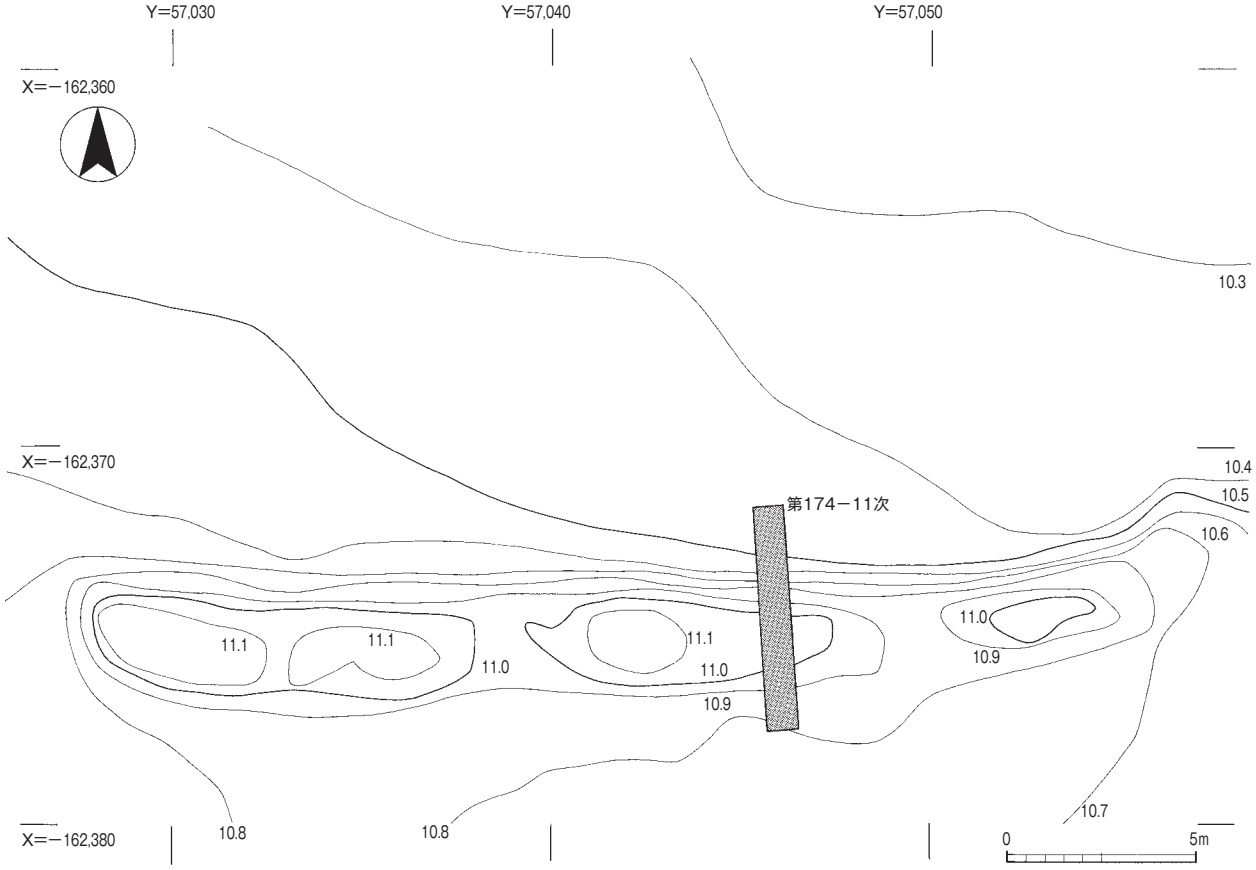
番号	器種	器形	地区	法量(cm)		調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	登録番号
1	土師器	皿	SD 10455	口径 残高	13.8 2.1	外面:ナデ、オサエ 内面:ナデ	密	良	浅黄橙	口縁部 1/2	006-01
2	陶器	皿	SD 10455	口径 残高	4.9 1.1	外面:ナデ、底部糸切 内面:ナデ	密	良	灰黄	底部 完形	006-02
3	土師器	杯	SD 10455	口径 器高	13.9 3.3	外面:ナデ、オサエ 内面:ナデ	密	良	浅黄橙	口縁部 7/12	006-03
4	灰釉陶器	蓋	土塁Ⅰ	口径 器高	10.9 1.3	外面:ナデ、上面施釉 内面:ナデ	密	良	にぶい黄	口縁部 1/12	006-05
5	土師器	皿	土塁Ⅰ基底部	口径 器高	14.2 2.7	外面:ナデ、オサエ 内面:ナデ	密	良	橙	口縁部 1/12	006-04

第11表　第174－11次調査遺物観察表



1 にぶい黄橙色砂質土(10YR6/2)〔表土〕
2 灰黄褐色砂質土(10YR6/2)〔114次調査埋土〕
3 にぶい黄橙色砂質土(10YR6/4)
4 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3)
5 にぶい黄褐色砂質土(10YR4/3)
6 暗灰黄色砂質土(2.5Y5/2)〔土塁Ⅱ〕
7 黄褐色砂質土(2.5Y5/3)に地山ブロック含む〔土塁Ⅱ〕
8 黄灰色砂質土(2.5Y4/1)〔SD10455〕
9 黄灰色砂質土(2.5Y5/4)
10 橙色粘土(7.5YR6/8)〔地山〕
11 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/4)〔土塁Ⅰ〕
12 褐色砂質土(10YR4/4)〔土塁Ⅰ〕
13 褐灰砂質土(10YR4/1)〔土塁Ⅰ〕
14 褐灰砂質土(10YR5/1)
15 灰黄褐色砂質土(10YR5/2)
16 褐灰砂質土(10YR4/1)
17 橙色シルト(10YR4/3)〔攪乱溝〕
18 暗灰黄色シルト(2.5Y5/2)〔攪乱溝〕
19 灰黄褐色砂質土(10YR5/2)
20 灰黄褐色砂質土(10YR4/2)

第 70 図　第 174－11 次調査　遺構平面図・土層断面図（1：50）



第 71 図　土塁周辺部地形測量図（1：200）

ずれも斎宮Ⅱ期に納まる遺構と考えられる。

調査区西側の第108次調査や第114次調査では、土塁部分を挟むように斎宮Ⅲ－１期に属する東西方向の溝が確認されており、土塁はこれらの溝に伴う可能性が高い。従って、土塁状遺構の時期については出土遺物や溝との関係より、Ⅰ期はＳＤ10455が埋没する以前の斎宮Ⅲ－１期に築造され、Ⅱ期はＳＤ10455埋没後に再度盛土が行われたものであろう。

３　牛葉東区画の状況

斎宮Ⅲ－１～２期は、鍛冶山西区画で建物が見られなくなり、内院の機能は牛葉東区画に集約されると考えられる。この時期の牛葉東区画は、溝によって囲まれた複数の小区画が出現し、これら区画内に配置された建物も確認されている。今回確認された土塁状遺構は、南側区画溝（ＳＤ7307・7309・10455）と北側区画溝（ＳＤ7254）の間に位置する。また、第108次調査区ではＳＤ7269とＳＤ7307の間で土塁状遺構の断面が確認され、溝の時期から斎宮Ⅲ－１期に比定されている。これらの土塁状遺構は、ともに版築などの構造は確認されず、２時期の盛土が確認出来るなど、共通した特徴を持つことから、一連の遺構と考えられよう。一方、竹神社境内の西側境界には、現在も長さ70ｍ以上にわたって高さ0.6ｍ程の土塁状の高まりが残る。発掘調査が行われていないため詳しい時期は不明であるが、この高まりが第103次調査で確認されている小区画溝SD7007・7012間の延長に位置していることを考えると、小区画に伴う土塁状遺構の可能性が高いと考えられる。

４　離宮院跡で確認された土塁状遺構

離宮院跡は伊勢市小俣町に所在し、斎王の離宮および伊勢神宮・大神宮司の政庁、度会駅家跡にあたる。また、824～839年の間は斎宮がこの地に移転し、多数の官舎が存在していた記録が残る。離宮院跡では現在も土塁で囲まれた方形区画が残るほか、昭和54年に行われた発掘調査では八脚門や柵列、掘立柱建物とともに土塁状遺構が確認されている(2)。

土塁状遺構は、弥生時代中期中葉以降に堆積した黒色土上に幅約２ｍの範囲で盛土が行われる。上部は攪乱を受けるが、基底部は厚さ0.1ｍ程度の礫・焼土・粘質土等を含む叩きしめられた層が３層確認でき、版築が行われた可能性も考えられる。土塁状遺構は八脚門上に直交する方向で構築され、調査区南側には現在も高まりが続く。こうしたことから、土塁状遺構は、八脚門焼失後の平安時代中～後期頃に、離宮院の区画改編に伴い築造されたものと考えられる。

５　小結

斎宮跡ではこれまで地表面に現存する明確な遺構は確認されていなかったが、今回の調査により部分的に土塁状遺構が残ることが判明し、平安時代後期に遡ることが確認できた。版築などの遺構は確認出来なかったが、築地であった可能性も考えられよう。また、この土塁状遺構は牛葉東区画では最大の区画に伴うものであることから、斎王の居所を囲っていた可能性が考えられる。

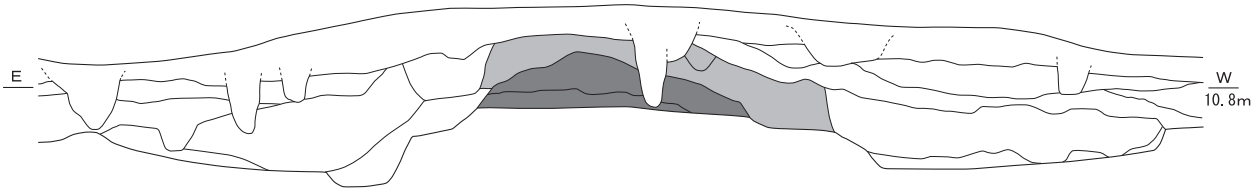
今回の調査により、斎宮跡と離宮院跡に残る土塁状遺構は近い時期に築造され、ともに施設の大きな改編に伴うものである可能性が高まった。こうした動きは、単に各組織の改編にとどまるものではなく、斎王制度自身の大きな変革に伴うものであった可能性も考えられよう。

【註】

(1)大川勝宏「第108次調査」『史跡斎宮跡 平成6年度 発掘調査概報』斎宮歴史博物館、1995

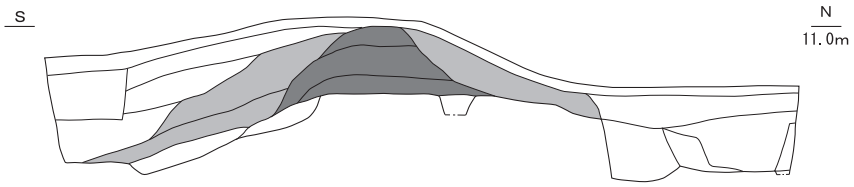
(2)御村精治・榎本義譲ほか『離宮院跡発掘調査報告』小俣町教育委員会、1980

斎宮跡第108次調査



土塁Ⅰ期
土塁Ⅱ期

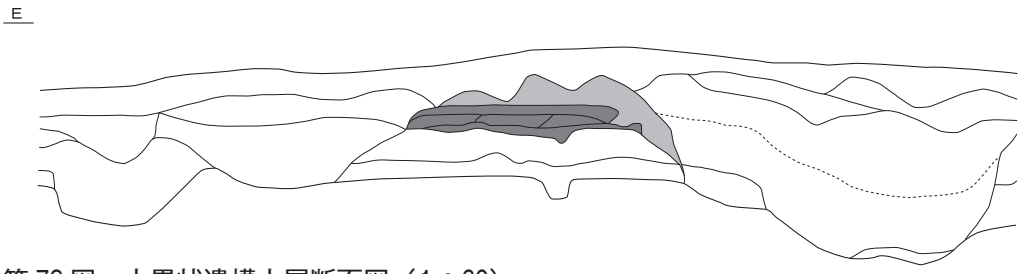
斎宮跡第174-11次調査



土塁Ⅰ期
土塁Ⅱ期

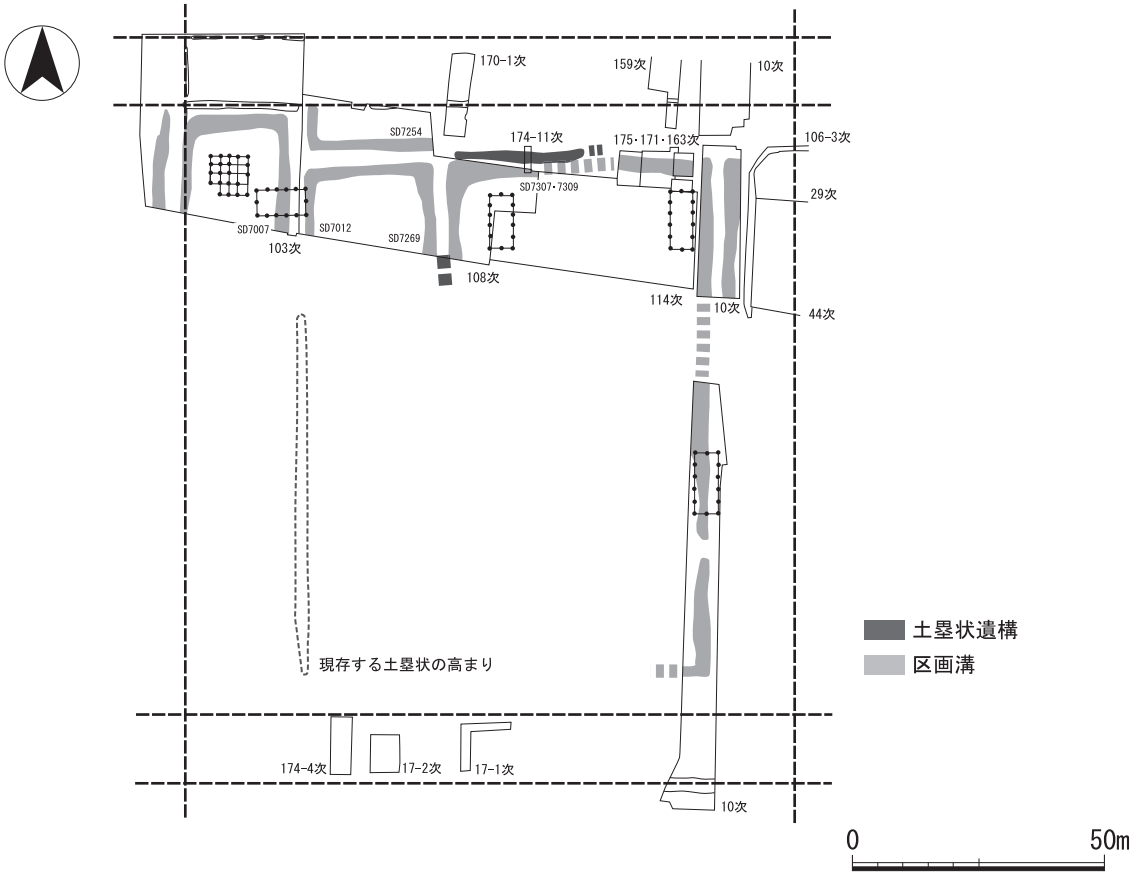
0　3m

離宮院跡



版築状遺構
褐色土層
（盛土？）

第 72 図　土塁状遺構土層断面図（1：60）



第 73 図　牛葉東区画主要遺構図（Ⅲ－１～２期）（1：1,500）

第 174 － 11 次調査　土塁遠景（西から）

第 174 － 11 次調査区全景（北東から）

PL.78

第 174 － 11 次調査区全景（北から）

第 174 － 11 次調査区全景（南から）

第 174 － 11 次調査　土塁部分（東から）

報　告　書　抄　録

ふりがな	さいくうあとはっくつちょうさほうこく　に
書名	斎宮跡発掘調査報告Ⅱ
副書名	柳原区画の調査　遺構・遺構総括編
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	倉田直純・榎村寛之・大川勝宏・新名強
編集機関	斎宮歴史博物館
所在地	〒515-0325　三重県多気郡明和町竹川503　TEL0596-52-7027
発行年月日	西暦　2014年　3月27日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
斎宮跡（さいくうあと）	多気郡（たきぐん）明和町（めいわちょう） 斎宮（さいくう）・竹川（たけがわ）	24442	210	34°31′55″ ～ 34°32′30″	136°36′16″ ～ 136°37′37″	197403 ～ 20100909	約12,200㎡	学術調査ほか

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
斎宮跡 柳原区画	官衙	奈良～平安	掘立柱建物 土坑・溝 道路跡	土師器　須恵器 緑釉陶器　灰釉陶器	方格地割中央部の柳原区画の総括

要約	史跡整備事業の実施にあたり、事業計画地である史跡東部方格地割の柳原区画で実施した昭和49年度から平成22年度までの調査成果（遺構）の総括を行った。 柳原区画は、平安時代に入り、区画中央に四面庇付建物が何度も建替えられており、前面の空閑地（「ニワ」）とあわせて、平安時代を通した斎宮の政治的・儀礼的空間であったと考えられ、「寮庁」の一画であったと判断されるようになった。

斎宮跡発掘調査報告Ⅱ

柳原区画の調査
遺構・遺構総括編

2014年3月27日
編集・発行　斎宮歴史博物館
印　　刷　アイブレーン